

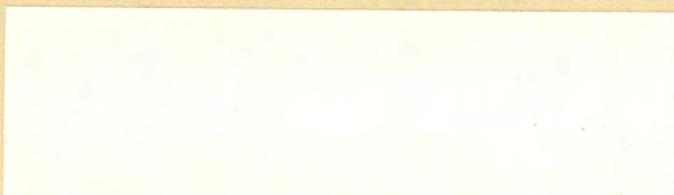
茨城県教育財団文化財調査報告第98集

主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平出久保遺跡

平成6年9月

茨城県土木部道路建設課  
財団法人 茨城県教育財団



茨城県教育財団文化財調査報告第98集

# 主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良 工事地内埋蔵文化財調査報告書

ひらでくぼ  
平出久保遺跡

平成6年9月

茨城県土木部道路建設課  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、産業・経済の発展に伴う広域流通機構の整備と、県土の普遍的な発展を図るために、県内の交通体系の整備を進めております。

主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事もその一環として計画されたものですが、その予定地内には、多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されています。財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、第1次調査として昭和62年11月から昭和63年3月にかけて、第2次調査として平成5年4月から平成5年6月にかけて主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、平出久保遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料としてはもとより、教育、文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理に当たり、委託者である茨城県からいただいた御協力に対し、感謝申し上げます。また、茨城県教育委員会、鉾田町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導・御協力いただいたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成6年9月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 礒田 勇

# 例 言

1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が昭和62年度と平成5年度に発掘調査を実施した平出久保遺跡の発掘調査報告書である。遺跡の所在地は、茨城県鹿島郡銚田町飯名484-5番地ほかである。

2 平出久保遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

平成2年度の組織改正により、従来の調査課（企画管理班，調査第一・二・三班，整理班）は埋蔵文化財部となり、その下に企画管理課，調査課，整理課がおかれた。平成4年度の組織改正により、従来の企画管理課は企画管理課と経理課の二課に分かれることになった。

理 事 長	川 又 友 三 郎	昭和61年4月～昭和63年5月	
	磯 田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	磯 田 勇	昭和61年4月～昭和63年3月	
	小 林 元	昭和63年4月～平成3年7月	
	角 田 芳 夫	平成3年7月～平成6年3月	
	小 林 秀 文	平成6年4月～	
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～	
常 務 理 事	滑 川 貞 雄	昭和61年4月～平成元年3月	
	小 林 洋	平成元年4月～平成3年3月	
	本 田 三 郎	平成3年4月～平成5年3月	
事 務 局 長	坂 場 庸 克	昭和62年4月～平成元年3月	
	一 木 邦 彦	平成元年4月～平成4年3月	
	藤 枝 宣 一	平成4年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石 井 毅	平成2年4月～平成5年3月	
	安 藏 幸 重	平成5年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北 沢 勝 行	平成2年4月～
		水 飼 敏 夫	平成4年4月～
	課 長 代 理	水 飼 敏 夫	平成2年4月～平成4年3月(昭和62年4月～平成2年3月企画管理班長)
	係 長	根 本 達 夫	平成6年4月～
		山 本 静 男	(昭和61年4月～平成元年4月企画管理班)
		根 本 康 弘	平成3年4月～平成5年3月
		川 井 正 一	平成5年4月～平成6年3月
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔	平成6年4月～
		山 崎 初 雄	(昭和60年4月～平成元年4月企画管理班)
		大 部 章	(昭和61年4月～平成2年3月企画管理班)
	主 事	吉 井 正 明	平成元年4月～平成4年3月
杉 山 秀 一		平成4年4月～平成6年3月	

経理課	課長	小幡弘明	平成5年4月～
	課長代理	鈴木三郎	平成5年4月～
	係長	大高春夫	平成6年4月～
	主任	飯島康司	平成4年4月～平成6年3月(平成3年4月～平成4年3月企画管理課)
	主事	大貫吉成	平成4年4月～平成5年3月(平成2年4月～平成4年3月企画管理課)
軍司浩作		平成5年4月～	
調査課	課長	青木義夫	昭和59年4月～平成元年3月
	課長(部長兼務)	石井毅	平成元年4月～平成5年3月(昭和62年度調査第三班長)
		安藏幸重	平成5年4月～
	調査第四班長	和田雄次	平成5年4月～平成6年3月
	主任調査員	鈴木美治	昭和62年11月～昭和63年3月調査(第1次)
	調査員	小松崎猛彦	昭和62年11月～昭和63年3月調査(第1次)
	主任調査員	小高五十二	平成5年4月～平成5年6月調査(第2次)
調査員	池田晃一	平成5年4月～平成5年6月調査(第2次)	
整理課	課長	沼田文夫	平成2年4月～平成5年3月
		阿久津久	平成5年4月～
	主任調査員	小松崎猛彦	平成3年4月～平成4年3月 整理・執筆(第1次)
	調査員	吹野富美夫	平成6年7月～平成6年9月 整理・執筆(第2次)・編集

- 3 本書の編集は吹野が行い、第1章から第4章は小松崎が第5章と第6章は吹野が執筆し、吹野が補筆訂正を加えた。
- 4 炭化材の樹種同定については、バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。分析結果は付章として報告する。
- 5 本書に使用した記号等については、第3章第1節の3「遺構・遺物の記載方法」の項を参照されたい。
- 6 本書の作成にあたり、遺構・遺物について茨城県立太田第一高等学校教諭浅井哲也氏、勝田市文化スポーツ振興公社鈴木素行氏・佐々木義則氏・白石真理氏・稲田健一氏に御指導いただいた。
- 7 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

## 8 遺跡の概要

フリガナ	シュヨウチホウドウミトホコタサワラセン ドウロカイリョウコウジチナイマイゾウブンカザイチョウサホウコクショ						
書名	主要地方道水戸銚田佐原線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	平出久保遺跡						
巻次							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第98集						
編著者名	小松崎 猛彦 吹野 富美夫						
編集機関	茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地2号 ☎ 0292-25-6587						
発行年月日	西暦 1994(平成6)年 9月 30日						
フリガナ 所有遺跡	フリガナ 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
ひらでくぼいせき 平出久保遺跡	かしまぐんほこたまち 鹿島郡銚田町 おおあざいなあざひら 大字飯名字平 でくぼ 出久保486-6外	08402 —	36度  9分  32秒	140度  30分  32秒	19871101 ～ 19880331 19930401 ～ 19930631	6080   1842	主要地方道 水戸銚田佐原 線道路改良工 事に伴う発掘 調査
所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
平出久保遺跡  (第1次)	集落跡 古墳	縄文時代	住居跡 5軒 土坑 4基		縄文式土器 石器		関山式土器
		古墳時代	住居跡 29軒 土坑 1基 古墳 3基		土師器 須恵器 鉄器		初期竈 坏・蓋 鉄鎌
	奈良時代	住居跡 2軒		土師器			
	中世	地下式壙 1基 井戸 1基					
	時期不明	土坑 21基 溝 5条					
平出久保遺跡  (第2次)	集落跡	古墳時代 現代 時期不明	住居跡 1件 防空壕跡 1基 土坑 1基 溝 1条		土師器		

# 目 次

序	
例言	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 遺跡（第1次）	8
第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法	8
1 地区設定	8
2 基本層序	9
3 遺構・遺物の記載方法	9
第2節 遺跡の概要	10
第3節 遺構と遺物	10
1 縄文時代の遺構と遺物	10
(1) 竪穴住居跡	11
2 古墳時代の遺構と遺物	21
(1) 竪穴住居跡	21
(2) 古墳	95
3 奈良時代の遺構と遺物	99
(1) 竪穴住居跡	99
4 その他の遺構と遺物	105
(1) 土坑	105
(2) 地下式壙	110
(3) 井戸	111
(4) 溝	112
(5) 遺構外出土遺物	115
第4章 考察（第1次）	122
第1節 遺構と遺物	122
1 土器の様相	122
2 住居跡の形態	125
第5章 遺跡（第2次）	129
第1節 遺跡の概要	129
第2節 遺構と遺物	129

1	竪穴住居跡	129
2	土坑	131
3	防空壕跡	132
4	溝	133
5	遺構外出土遺物	133
第6章	まとめ	135
付章	自然科学分析	137
	平出久保遺跡第38号住居跡出土炭化材の樹種同定について	137
	付図 平出久保遺跡遺構位置図	

## 挿 図 目 次

第1図	平出久保遺跡地形図	5	第27図	第18・25号住居跡実測図(1)	33
第2図	周辺遺跡分布図	6	第28図	第18号住居跡竈実測図	34
第3図	調査区呼称方法概念図	8	第29図	第25号住居跡出土遺物実測図	34
第4図	平出久保遺跡調査区設定図	8	第30図	第29号住居跡実測図	35
第5図	基本土層図I	9	第31図	第29号住居跡出土遺物実測図	36
第6図	基本土層図II	9	第32図	第33号住居跡実測図	37
第7図	第12号住居跡実測図	11	第33図	第33号住居跡出土遺物実測図	37
第8図	第12号住居跡出土遺物実測・拓影図	12	第34図	第34号住居跡実測図	38
第9図	第26号住居跡出土遺物実測・拓影図	14	第35図	第34号住居跡出土遺物実測図	39
第10図	第13・14・15・16・17・26・36号住居跡・炉・貯蔵穴 実測図	15・16	第36図	第3号住居跡実測図	40
第11図	第27号住居跡実測図	17	第37図	第3号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)	41
第12図	第27号住居跡出土遺物・拓影図	17	第38図	第3号住居跡出土遺物実測図(2)	41
第13図	第36号住居跡出土遺物拓影図	18	第39図	第7号住居跡実測図(1)	43
第14図	第37号住居跡実測図	19	第40図	第7号住居跡・竈実測図(2)	44
第15図	第37号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)	20	第41図	第7号住居跡出土遺物実測図(1)	45
第16図	第37号住居跡出土遺物実測図(2)	21	第42図	第7号住居跡出土遺物実測図(2)	46
第17図	第4号住居跡実測図	22	第43図	第7号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)	47
第18図	第4号住居跡出土遺物実測図	23	第44図	第7号住居跡出土遺物実測図(4)	48
第19図	第5号住居跡実測図	24	第45図	第7号住居跡出土遺物実測図(5)	48
第20図	第13号住居跡出土遺物実測図	25	第46図	第8号住居跡実測図	51
第21図	第17号住居跡出土遺物実測図(1)	27	第47図	第8号住居跡出土遺物実測図(1)	52
第22図	第17号住居跡出土遺物実測図(2)	27	第48図	第8号住居跡出土遺物実測図(2)	52
第23図	第21・22・23号住居跡実測図	28	第49図	第9号住居跡実測図	53
第24図	第21号住居跡出土遺物実測図	29	第50図	第9号住居跡出土遺物実測図(1)	54
第25図	第24号住居跡実測図	30	第51図	第9号住居跡出土遺物実測図(2)	55
第26図	第24号住居跡出土遺物実測図	31	第52図	第9号住居跡出土遺物実測図(3)	55
			第53図	第16号住居跡竈実測図	58

第54图	第14·16号住居跡遺物出土位置图	58	第87图	第1号墳実測图(1)	93·94
第55图	第14号住居跡出土遺物実測图(1)	59	第88图	第32号住居跡出土遺物実測图	95
第56图	第14号住居跡出土遺物実測·拓影图(2)	60	第89图	第1号墳出土遺物実測图	95
第57图	第14号住居跡出土遺物実測图(3)	61	第90图	第1号墳実測图(2)	96
第58图	第14号住居跡出土遺物実測图(4)	61	第91图	第2号墳実測图	98
第59图	第15号住居跡出土遺物実測图(1)	62	第92图	第3号墳実測图	99
第60图	第15号住居跡出土遺物実測图(2)	62	第93图	第1号住居跡実測图	100
第61图	第18号住居跡出土遺物実測图(1)	64	第94图	第1号住居跡出土遺物実測图	101
第62图	第18号住居跡出土遺物実測图(2)	65	第95图	第6号住居跡·竈実測图	102
第63图	第18号住居跡出土遺物実測图(3)	66	第96图	第6号住居跡出土遺物実測图(1)	103
第64图	第18号住居跡出土遺物実測图(4)	68	第97图	第6号住居跡出土遺物実測·拓影图(2)	104
第65图	第23号住居跡出土遺物実測图	68	第98图	第6号土坑出土遺物実測图	106
第66图	第30号住居跡出土遺物実測·拓影图	69	第99图	第25号土坑出土遺物拓影图	107
第67图	第30号住居跡実測图	70	第100图	土坑実測图(1)	108
第68图	第2号住居跡·竈実測图	71	第101图	土坑実測图(2)	109
第69图	第2号住居跡出土遺物拓影图	72	第102图	第1号地下式壙実測图	111
第70图	第10号住居跡実測图	72	第103图	第1号井戸実測图	112
第71图	第10号住居跡出土遺物実測图	72	第104图	第1号溝実測图	113
第72图	第11号住居跡実測图	73	第105图	第2号溝実測图	113
第73图	第11号住居跡出土遺物実測图	74	第106图	第3号溝実測图	114
第74图	第16号住居跡出土遺物実測图	75	第107图	第4号溝実測图	114
第75图	第20号住居跡·竈実測图	78	第108图	第5号溝実測图	115
第76图	第20号住居跡出土遺物実測图(1)	79	第109图	遺構外出土遺物拓影图(1)	116
第77图	第20号住居跡出土遺物実測图(2)	80	第110图	遺構外出土遺物拓影图(2)	117
第78图	第22号住居跡遺物出土位置图·竈実測图	81	第111图	遺構外出土遺物拓影图(3)	118
第79图	第22号住居跡出土遺物実測图(1)	82	第112图	遺構外出土遺物実測·拓影图(4)	119
第80图	第22号住居跡出土遺物実測图(2)	83	第113图	遺構外出土遺物実測图(5)	121
第81图	第22号住居跡出土遺物実測·拓影图(3)	84	第114图	遺構外出土遺物実測图(6)	121
第82图	第22号住居跡出土遺物実測图(4)	84	第115图	第38号住居跡実測·遺物出土位置图	130
第83图	第28号住居跡·竈実測图	88	第116图	第38号住居跡出土遺物実測图	131
第84图	第28号住居跡出土遺物実測图(1)	89	第117图	第28号土坑·出土遺物実測图	132
第85图	第28号住居跡出土遺物実測图(2)	90	第118图	第1号防空壕·第6号溝実測图	132
第86图	第32号住居跡·竈実測图	92	第119图	遺構外出土遺物実測图	134

## 表 目 次

表 1 平出久保遺跡周辺遺跡一覧表

表 2 土坑一覧表

## 写真図版目次

P L 1	平出久保遺跡全景	P L 17	上第28号土坑全景，下第1号防空壕全景
P L 2	上遺跡遠景（東から），下遺跡遠景（西から）	P L 18	第12号住居跡出土土器
P L 3	上調査区東部全景，下調査区中央部全景	P L 19	第4・13・24号住居跡出土土器
P L 4	上調査区西部全景，下第1号墳全景	P L 20	第3・7・24号住居跡出土土器
P L 5	上第12号住居跡全景，下第37号住居跡全景	P L 21	第7号住居跡出土土器
P L 6	上第4号住居跡全景，下第5号住居跡全景	P L 22	第8・9・14号住居跡出土土器
P L 7	上第24号住居跡全景，下第29号住居跡全景	P L 23	第14・18号住居跡出土土器
P L 8	上第7号住居跡全景，下第7号住居跡遺物出土状況	P L 24	第18号住居跡出土土器
P L 9	上第8号住居跡全景，下第9号住居跡全景	P L 25	第18号住居跡出土土器
P L 10	上第15号住居跡全景，下第18・25号住居跡全景	P L 26	第14・16・18・20・23号住居跡出土土器
P L 11	上第30号住居跡全景，下第2号住居跡全景	P L 27	第20・22号住居跡出土土器
P L 12	上第20号住居跡全景，下第22・23号住居跡全景	P L 28	第22号住居跡出土土器
P L 13	上第28号住居跡全景，下第32・33号住居跡全景	P L 29	第22号住居跡出土土器，各遺構出土遺物（石器・石製品）
P L 14	上第1号住居跡全景，下第6号住居跡全景	P L 30	各遺構出土遺物（土器・石器・石製模造品）
P L 15	上調査区全景（第2次），下第38号住居跡全景	P L 31	遺構外出土土器
P L 16	上・中第38号住居跡遺物出土状況，下第38号住居跡炉全景		



上 作業風景(第1次), 下 作業風景(第2次)

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

主要地方道水戸鉾田佐原線は、鉾田町内を通過して県央と鹿行地区を結ぶ重要な役割を果たす道路である。幅員が狭く急カーブが多いため、近年の交通量の増加に対応が難しくなっている。特に鉾田町内においては、道路沿いに人家が密集し、幅員を拡張することは極めて困難なため、茨城県は、交通量の緩和と道路網の整備を図るため鉾田町申挽を起点として、<sup>かまた</sup> 畑田塔ヶ崎を結ぶ約6.1kmの環状線道路の建設を計画した。

工事に先立ち、昭和61年9月1日、茨城県は、茨城県教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これに対し、茨城県教育委員会は分布調査を実施し、工事予定地内に平出久保遺跡の存在を確認し、同年9月22日、遺跡の取り扱いについて茨城県教育委員会と協議されたい旨回答した。そこで、昭和61年10月20日、茨城県教育委員会と茨城県は、文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねた結果、現状保存が困難であることから記録保存の処置を講ずることとなり、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務の委託契約を締結し、昭和62年11月1日から昭和63年3月まで平出久保遺跡(7,922㎡)の調査を実施する予定であったが、昭和63年2月18日、茨城県は、茨城県教育財団に台地西側の竹林部が未買地であるため調査面積の変更について通知をし、平出久保遺跡の調査面積を(6,080㎡)と変更され調査(第1次)を実施した。残り(1,842㎡)の調査(第2次)については、平成5年4月1日から平成5年6月30日に実施した。

## 第2節 調査経過

### 第1次調査

平出久保遺跡の第1次調査は、昭和62年11月1日から昭和63年3月31日までの4か月にわたって実施した。以下、調査の経過について、その概要を月ごとに記述する。

11月前半 発掘調査に必要な現場倉庫の設置、調査器材搬入を行う。早速、遺跡のエリア確認・エリア境界杭打ちを実施し、調査前全景写真を撮影した。遺跡の一部にある山林の伐開作業を行い、13日から基本杭打ちを行った。

11月後半 17日から試掘調査を行った。試掘は、4m四方のグリッドを調査面積の16分の1に相当する割合で設定し、遺構確認作業を試みた。牛蒡や山芋耕作によるトレンチャーがローム面を掘り下げているため、遺構確認作業は困難であった。西側斜面部には遺構は確認されなかった。

12月前半 遺構確認作業は、4分の1まで拡張をした。試掘調査の結果、調査区の西側には、古墳と思われる板石が散在し、調査区の中央から東側にかけて縄文式土器片や土師器・須恵器の破片、住居跡や溝及び土坑の落ち込みが確認できた。

12月後半 15日から調査の能率を上げるため遺跡の東側から重機による表土除去を行って遺構確認作業を実施した。遺構確認の結果、縦穴住居跡34軒、土坑27基、古墳3か所、地下式壙1基、井戸1基、溝5条を確認した。遺構確認状況写真撮影を行った。年末年始の休業期間中の事故に備えて安全対策を施し、26日を以って現場を閉鎖した。

1月前半 5日に現場を再開し、住居跡を中心として調査を進めた。6日に調査計画を再検討し、遺構の完

掘平面図作成については写真実測を導入して実施することになった。

- 1月後半 引き続き遺構調査を実施したが、住居跡や土坑の掘り込みが中心となった。B8区の住居跡は7軒の住居跡の切り合いがあり難行した。30日には住居跡18軒、土坑9基の掘り込みが終了した。
- 2月前半 3日には住居跡7軒の記録作業を行った。15日には住居跡33軒、土坑21基の掘り込みが終了した。
- 2月後半 住居跡の調査を継続して実施した。18日には古墳3基の周溝の掘り込みを開始した。22日には住居跡と土坑などの掘り込みが終了した。24日から写真実測作業を開始した。
- 3月前半 3日から第1号墳の主体部や集石部の調査を実施した。平面図や完掘写真撮影等の仕上げの調査にかかった。それと並行して現地説明会の準備作業を始めた。
- 3月後半 16日には航空写真撮影を実施し、補足調査も終了した。19日に現地説明会を開催し、122名の参加者のもと、平出久保遺跡発掘調査の成果を広く一般に公開した。22日から撤去作業を開始し、26日には、安全対策をも含めた一切の現地調査を完了した。

## 第2次調査

平出久保遺跡の第2次調査は、平成5年4月1日から平成5年6月30日までの3か月にわたって調査された。以下、調査の経過について、その概略を月ごとに記述する。

- 4月前半 発掘調査に必要な現場倉庫の設置、調査器材搬入を行う。遺跡の現況は竹林及び雑種林であるため、人力による伐開作業を実施する。
- 4月後半 伐開焼却作業が終了した27日から、試掘調査を行った。試掘は幅1mのトレンチを設定し、遺構確認作業を試みた。竹根が密集しており、調査の支障となった。
- 5月前半 11日から重機による表土除去を開始し、それと並行して遺構の範囲確認作業を行った。
- 5月後半 遺構確認調査の結果、住居跡1軒、土坑1基、溝1条、防空壕跡1基を確認する。25日には基準点の測量杭打ちを委託して実施する。27日から遺構調査を開始した。
- 6月前半 遺構調査と並行して、1日から旧石器の試掘調査を開始する。旧石器の試掘は、4m四方のグリットをA地区（C1f5・C1f6区）とB地区（C2c1～C2c4区）に設定し実施した。それぞれ約45cm掘り下げたが、遺物等の出土はなかった。
- 6月後半 15日には遺構調査が終了し、16日から撤収作業の準備を開始する。事務所では諸帳簿や諸記録の点検、調査区的安全対策を行い、30日に現場事務所を閉鎖した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

平出久保遺跡は、鹿島郡銚田町飯名484-5番地ほかに所在している。銚田町は、太平洋に面する茨城県の南東部に位置し、町域は東西16km・南北13km、面積は約170km<sup>2</sup>である。北は東茨城郡茨城町、鹿島郡旭村、東は太平洋、南は鹿島郡大洋村、行方郡北浦村、西は行方郡玉造町、東茨城郡小川町に接している。市街地は北浦の湖頭に形成され、古くから水陸交通の要衝の地である。

銚田町の地形は、南西部が標高19～35mの行方台地であり、台地の北東部を巴川が町の北西から南東に流下し北浦に流入している。町のほぼ中央には銚田川が北から南に流下し、巴川と北浦湖頭の沖積低地で合流している。その銚田川を境に町の北から南東部にかけては、標高20～44mの鹿島台地が点在している。行方台地と鹿島台地は、南側の北浦村・大洋村の方面へ伸びている。また両台地は上位台地と中位段丘からなり、巴川と銚田川の支流が開析谷を発達させ、樹枝状に入り込み複雑な地形を形成している。

平出久保遺跡は、銚田町役場からほぼ北西へ1.0kmほどの地点にあり、南に流下する銚田川と南東に流下する巴川に挟まれた行方台地の南東端に所在し、標高10～44mの舌状台地の縁辺部に位置している。当遺跡は、中位段丘から上位台地にかけて立地し、現在では畑地や山林として利用されている。東側は沖積低地が開け、主に水田となっている。台地と水田の比高差は3～17mである。

### 第2節 歴史的環境

北浦、巴川及び銚田川（七瀬川）を望む台地には、貝塚や古墳及び集落跡などが数多く分布し、古代から多くの人々の生活の場であったことを示している。

銚田町には、「茨城県遺跡地図」によると、縄文時代35遺跡、弥生時代8遺跡、古墳時代57遺跡、奈良・平安時代2遺跡、鎌倉・室町時代21遺跡及び江戸時代1遺跡の計124遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡は確認されていないが、遺物として銚田川流域にある徳宿遺跡<1>から出土した尖頭器が報告されている。梨ノ子木久保遺跡<9>からは、縄文時代の巨大な柳葉形尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡には貝塚が多く、35遺跡のうち14遺跡が貝塚である。各貝塚とも発掘調査はほとんど実施されていないのが現状である。この時代の遺跡は巴川と銚田川流域の台地縁辺部に広く分布している。

巴川流域には、早期～前期に形成された串挽貝塚<2>があり、ハイガイ、マガキ、オキシジミ、ハマグリ等の貝類と胎土に繊維を含む土器片が出土している。中期では、ハマグリ等の貝類や加曽利E式土器片が出土した畑田貝塚<3>、ハマグリ・ウミニナ等の貝類と阿玉台式土器片、加曽利E式土器片が出土した権現平貝塚<4>、早期の沈線文系から中期の加曽利E式にかけての縄文式土器片が出土した梨ノ子木久保遺跡、その他、坂戸遺跡<5>、青柳貝塚<6>、中の宮遺跡<7>、鳥栖遺跡<8>が存在する。

銚田川流域には、中期に形成された銚田貝塚<10>・飯名貝塚<11>・秋山遺跡<12>、後期の石崎台遺跡<13>、晩期の徳宿遺跡<15>・鎌田遺跡<14>等が存在する。

弥生時代の遺跡は、銚田川またはその支流に近い台地縁辺部に徳宿遺跡、埴遺跡<16>、安塚遺跡<17>、畑田遺跡が確認されている。出土遺物を見ると、徳宿遺跡と埴遺跡から中期の足洗式土器が、安塚遺跡からは

足洗式土器と後期の土器が、烟田遺跡からは後期の十王台式土器が出土している。

古墳時代の遺跡は、古墳(群)及び集落跡が57遺跡と比較的多く確認されている。古墳は、不二内古墳群<20>から高さ53cmの「跪座する男」や高さ68.5cmの「壺をささげる女」などの人物埴輪が出土している。野友権現峯古墳群<21>、富士峯古墳群<22>、当間二ツ塚古墳<23>及び氷川古墳<24>からは埴輪がそれぞれ出土し、二ツ塚古墳<25>からは直刀・勾玉が出土している。安房古墳群<26>からは、7世紀中葉から8世紀初頭に位置づけられる須恵器・鉄鍬が出土している。集落跡は、銚田川流域に中期から後期にかけて埴輪遺跡、烟田川波遺跡<18>、沢三木台遺跡<37>及び西台遺跡<27>が存在している。

中世になると城館跡が中心となり、21遺跡が確認されている。平安から戦国時代にかけて常陸大掾氏の支族である鹿島氏一族の徳宿親幹が築いた徳宿城跡<29>、鎌倉から戦国時代にかけて安房又太郎の築いた三階城跡<30>、同じく大掾氏一族の烟田幹秀が築いた烟田城跡<31>、そして烟田氏の家臣の館と伝えられている富士山館<32>をはじめとする埴八館や砦跡が残っている。巴川流域には、武田通信の築いた野友城跡<33>や、郷土砦跡<34>、蕨砦跡<35>及び掘の内砦跡<36>が存在している。

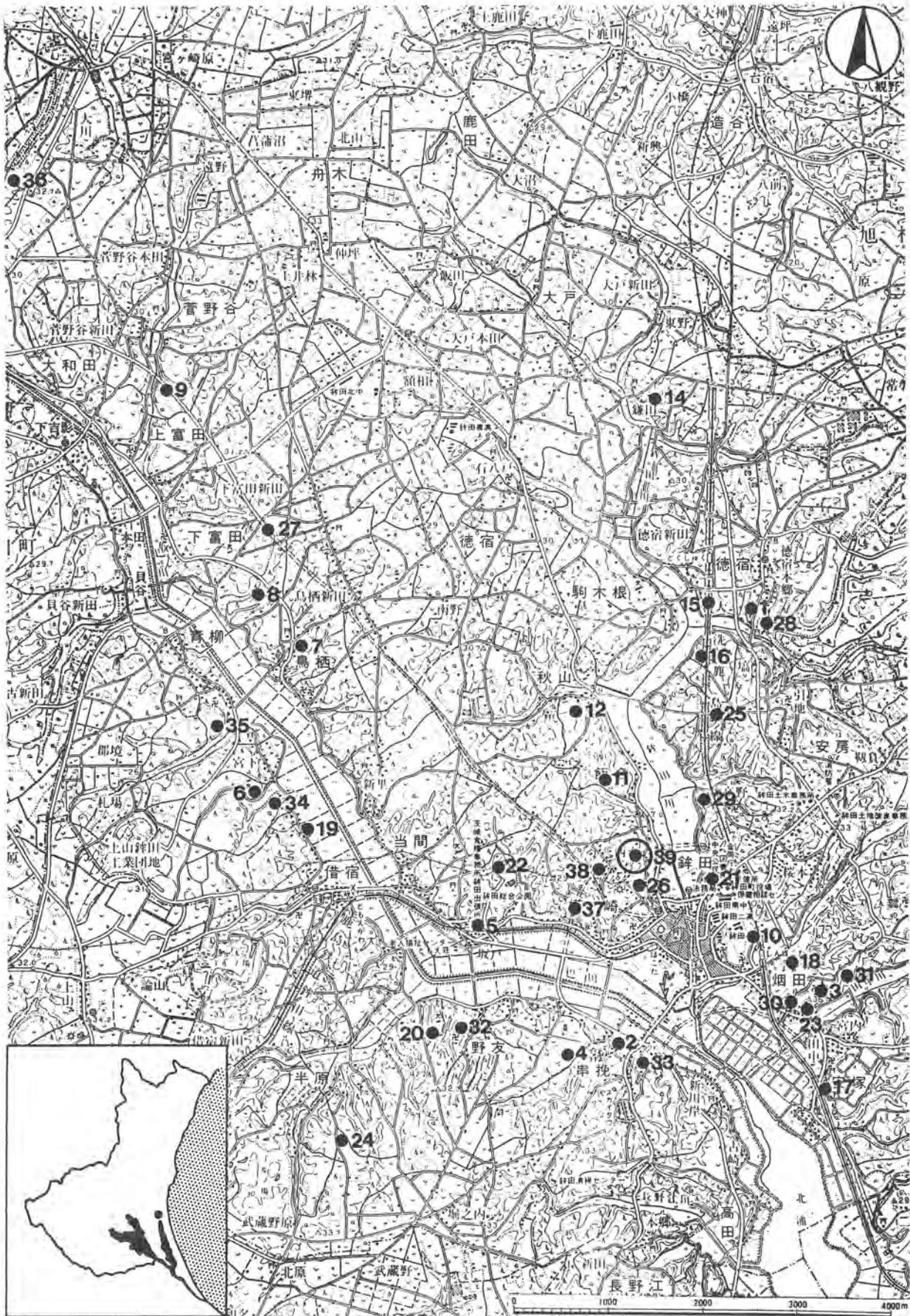
近世の遺跡としては、町北部の大川・紅葉地区に紅葉の勘十郎堀<37>が存在している。1706年、水戸藩は大規模な藩営工事に着手し、松波勘十郎を中心として涸沼川から巴川流域の紅葉に至る堀割工事をしたものである。これは、涸沼と北浦、巴川の水運を利用して奥州諸藩の物資を江戸に運ぶための中継地であったものと考えられる。

#### 参考文献

- (1) 茨城県農地部農地計画課 『土地分類基本調査 磯浜・銚田』 1989年
- (2) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1987年
- (3) 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年
- (4) 茨城県教育財団 「梨ノ子木久保遺跡・割り塚古墳」 『茨城県教育財団文化財調査報告第47集』 1988年
- (5) 斎藤弘道 「県内貝塚における動物遺存体の研究3」 『学術調査概報3』 茨城県歴史館 1979年
- (6) 茨城県教育財団 「烟田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告VI』 1980年
- (7) 鈴木正博 「十王台式理解のために(1),(2)」 『常総台地』7,8 1976年
- (8) 茨城県 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 1974年
- (9) 茨城県教育財団 「烟田川波遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第68集』 1990年
- (10) 茨城県教育財団 「沢三木台遺跡・餓鬼塚」 『茨城県教育財団文化財調査報告第70集』 1991年
- (11) 今瀬文也 『日本城郭大系 第4巻』 新人物往来社 1979年
- (12) 茨城県 『茨城県史 近世編』 1985年
- (13) 銚田町教育委員会 『阿巳の山遺跡』 1986年



第1次 第2次  
 第1図 平出久保遺跡地形図



第2図 周辺遺跡分布図

表1 平出久保遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺 跡 名	県遺跡 番 号	時 代					番号	遺 跡 名	県遺跡 番 号	時 代				
			旧	縄	弥	古	歴				旧	縄	弥	古	歴
1	徳宿遺跡	1136	○	○	○			21	富士峰古墳群	1079				○	
2	串挽貝塚	1129		○				22	当間二ツ塚古墳	4964				○	
3	畑田貝塚	4967		○				23	氷川古墳	1107				○	
4	権現平貝塚	1128		○				24	二ツ塚古墳	1085				○	
5	坂戸遺跡	1146		○				25	安房古墳群	1111				○	
6	青柳貝塚	1144		○				26	西台遺跡	2773				○	
7	中の宮遺跡	1142		○				27	割り塚古墳	1096				○	
8	鳥栖遺跡	1149		○				28	徳宿城跡	1119					○
9	梨ノ子木久保遺跡			○				29	三階城跡	1117					○
10	鉾田貝塚	1148		○				30	畑田城跡	1113					○
11	飯名貝塚	1147		○				31	富士山館	1114					○
12	秋山遺跡	1141		○				32	野友城跡	1120					○
13	石崎台遺跡	1138		○				33	郷土砦跡	1121					○
14	鎌田遺跡	1093		○				34	蕨砦跡	4959					○
15	徳宿遺跡	4989		○				35	堀の内砦跡	4958					○
16	埜遺跡	4114			○	○		36	紅葉の勘十郎堀	1123					○
17	安塚遺跡				○			37	沢三木台遺跡					○	○
18	畑田遺跡	4949			○			38	餓鬼塚						○
19	不二内古墳群	4952			○			39	平出久保遺跡			○		○	○
20	野友権現峰古墳	1078			○										

# 第3章 遺 跡 (第1次)

## 第1節 調査方法と遺構・遺物の記載方法

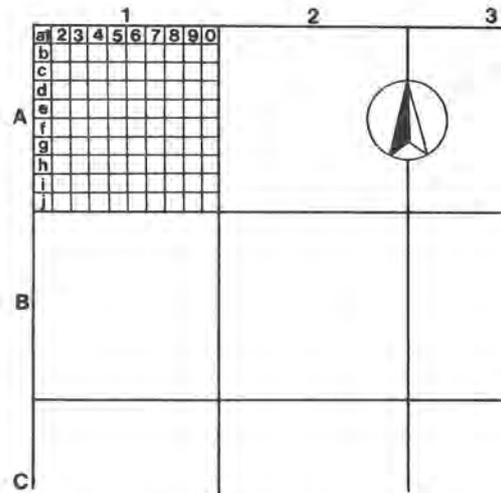
### 1 地区設定

平出久保遺跡の発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。調査区は日本平面直角座標第IX系座標を用いて区画し、X軸(南北)+17,920m、Y軸(東西)60,960mの交点を基準とし、この基準点から東西・南北にそれぞれ40m平行移動して一辺40mの大調査区を設定した。さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m方眼の小調査区を設定した。

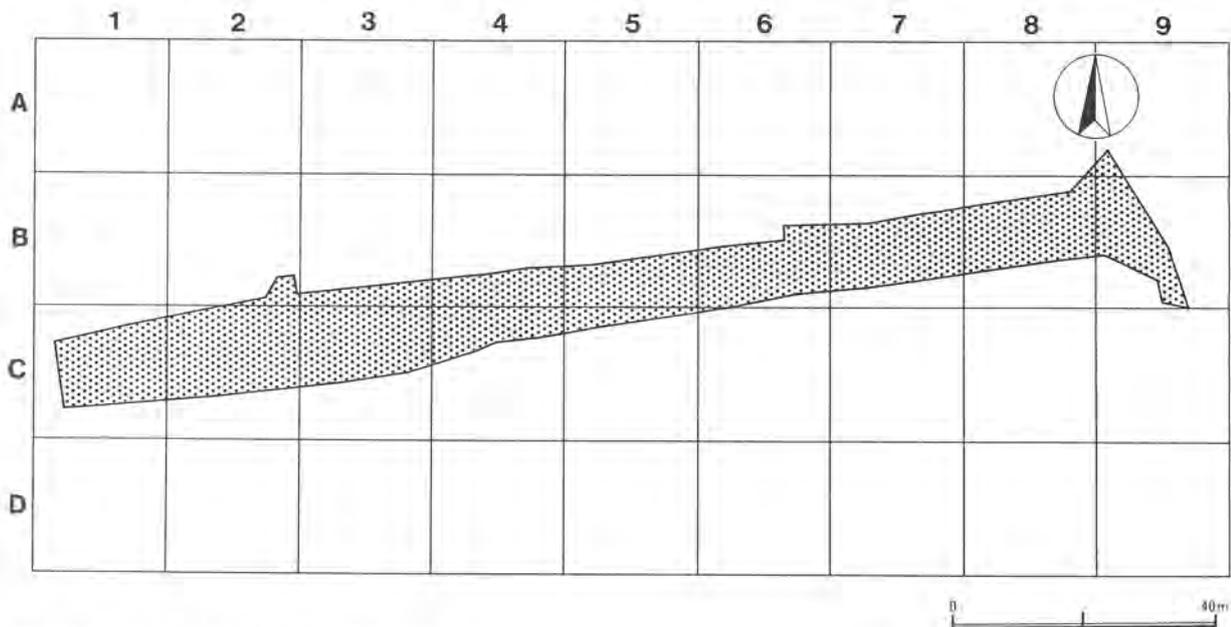
大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C……、西から東へ1、2、3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。

小調査区も同様に北から南へa、b、c……j、西から東へ1、2、3……0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

なお、基準点の杭打ち測量は、財団法人茨城県建設技術公社に委託して実施した。



第3図 調査区呼称方法概念図



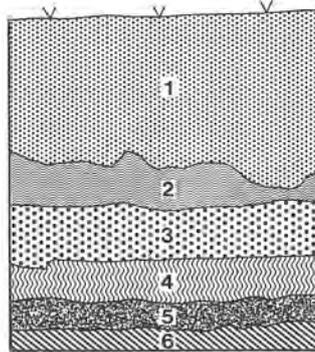
第4図 平出久保遺跡調査区設定図

## 2 基本層序

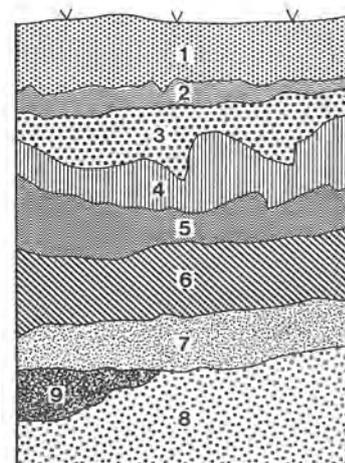
平出久保遺跡の東側中位段丘平坦部（B7g8区）と西側上位台地平坦部（C2e0区）にテストピットを設け、前者（テストピット1と呼称）は深さ約2.5mまで、後者（テストピット2と呼称）は深さ約2.0mまで掘り下げ、土層の堆積状況を確認した。

テストピット1は6層に分かれ、第1層は畑の耕作土で表土層、第2層はソフトローム層、3・4層はハードローム層、第5・6層は粘土層である。第1層は厚さ1m程の暗褐色土である。この層は、牛蒡や山芋耕作によるトレンチャーの攪乱を受けている。第2層はソフトローム層で、20~25cm程の厚さを有し、ローム粒子を極少量含む締めりのある褐色土である。第3層はハードローム層で、40cm程の厚さを有し、黄褐色粒子・小礫を極少量含む明褐色土である。第4層は、30cm程の厚さを有する明褐色土で、粘土粒子・砂粒を少量含む粘性が強い。第5・6層は色相により分層した。第5層は、15cm程の厚さで、砂粒を少量含む明褐色粘土層である。極めて粘性・締めりがある。第6層は、灰褐色で10cm以上の厚さを有する粘土層である。

テストピット2は第9層に分かれ、第1層が表土層、第2~4層がソフトローム層、第5~7・9層がハードローム層、8層が鹿沼層である。第1層は、厚さ30~40cmの黒褐色土層である。第2~4層はロームで褐色の同一層ととらえられるが、ローム粒子の含有量により分層した。第2層はローム粒子を多量に含み、厚さ12~15cmを有している。第3層はローム粒子を中量に含み、厚さ20~40cmを有している。第4層はローム粒子を多量に含み、厚さ20~40cmを有している。第5層は褐色粒子を少量含み、厚さ15~40cmを有する褐色土層である。第6層は黄褐色粒子を少量含み、厚さ30cm程を有するにぶい褐色土層である。第8層は、橙色のパミスを中量含む鹿沼層である。第9層は砂粒を少量含み、厚さ30~60cmを有する明褐色土層である。



第5図 基本土層図I



第6図 基本土層図II

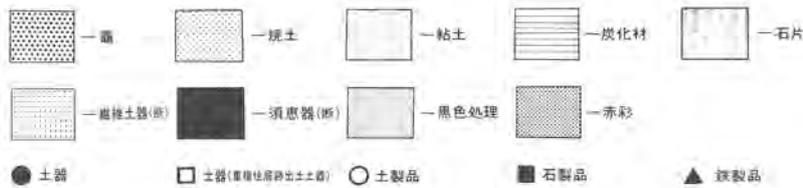
## 3 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、以下の通りである。

### (1) 使用記号

遺構 住居跡-S I 土坑-SK 溝-SD 井戸-SE 古墳-TM その他-SX ピット-P<sub>1</sub>~  
遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 金属製品-M 拓本土器-T P

## (2) 遺構・遺物の実測図中の表示



## (3) 土層の分類

土層観察における色調の判定は、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄 日本色研事業株式会社)を使用した。

## (4) 遺構・遺物実測図の作成方法と掲載方法

- ① 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
- ② 遺物は原則として3分の1の縮尺にした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々に $S = a/b$ 等と表示した。
- ③ 「主軸方向」は、炉をとおり軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。  
(例 N-10°-E, N-10°-W) なお、[ ]を付したものは推定である。
- ④ 計測値は、A-口径 B-器高 C-底径 D-脚部径 E-脚部高 単位はcmである。なお、現存値は( )で、推定値は[ ]を付して示した。

## 第2節 遺跡の概要

平久保遺跡は、巴川と鉾田川にはさまれた標高10~24mの行方台地の東側縁辺部に立地する、縄文時代から中世にかけての集落跡及び古墳群である。今回の調査区は、南北20~34m、東西約320m、面積7,922m<sup>2</sup>である。現況は、西側の上位台地が竹林、中央から東側の中位段丘が畑である。当調査区の東側の低地は、水田となっており、水田との比高は約5~18mとなっている。

今回の調査によって確認された遺構は、縄文時代前期の竪穴住居跡5軒、古墳時代が前期の竪穴住居跡10軒、中期の竪穴住居跡9軒、後期の竪穴住居跡8軒の計27軒、奈良時代の竪穴住居跡2軒、土坑26基、地下式壙1基、井戸1基、溝5条、古墳3基である。竪穴住居跡は、調査区内の東部と中央部の中位段丘に確認され、古墳は上位台地に造られている。

出土遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)で48箱出土している。縄文時代の遺物は、深鉢や片口鉢、石鏃、磨製石斧が出土している。古墳時代から奈良時代の遺物は、甕、坏、甌、高坏、紡錘車、球状土錘、管状土錘、刀子、鎌、鉄斧等が出土している。

## 第3節 遺構と遺物

### 1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査により、縄文時代前期の竪穴住居跡が5軒確認された。いずれも調査区の東側の中位段丘に位置している。以下、確認した住居跡や出土遺物の特徴について記載する。

# (1) 竖穴住居跡

## 第12号住居跡 (第7図)

位置 調査区の東端部, B9g5区。

規模と平面形 長軸3.8m・短軸3.1mの隅丸長方形。

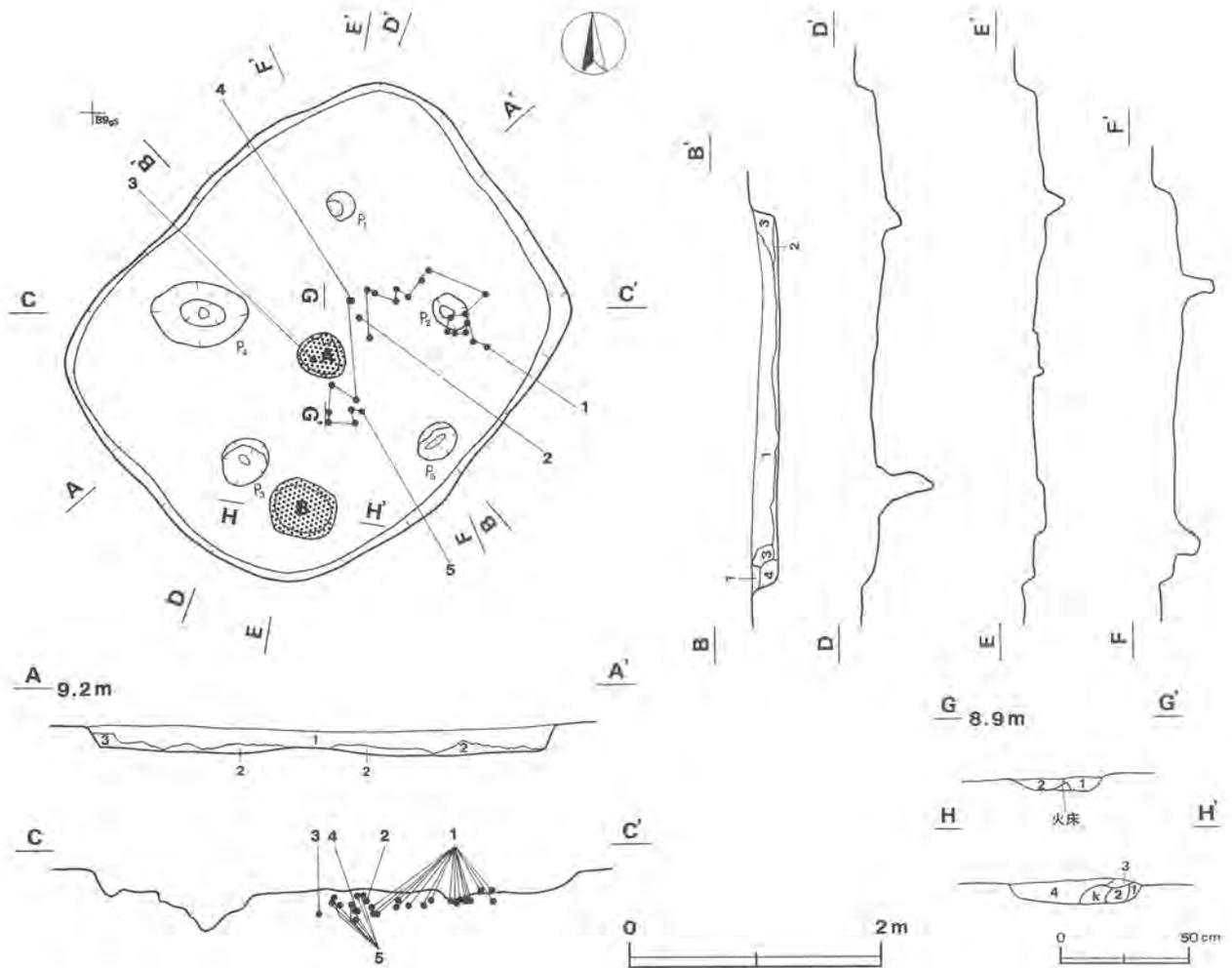
主軸方向 N-50°-E

壁 壁高は10~17cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

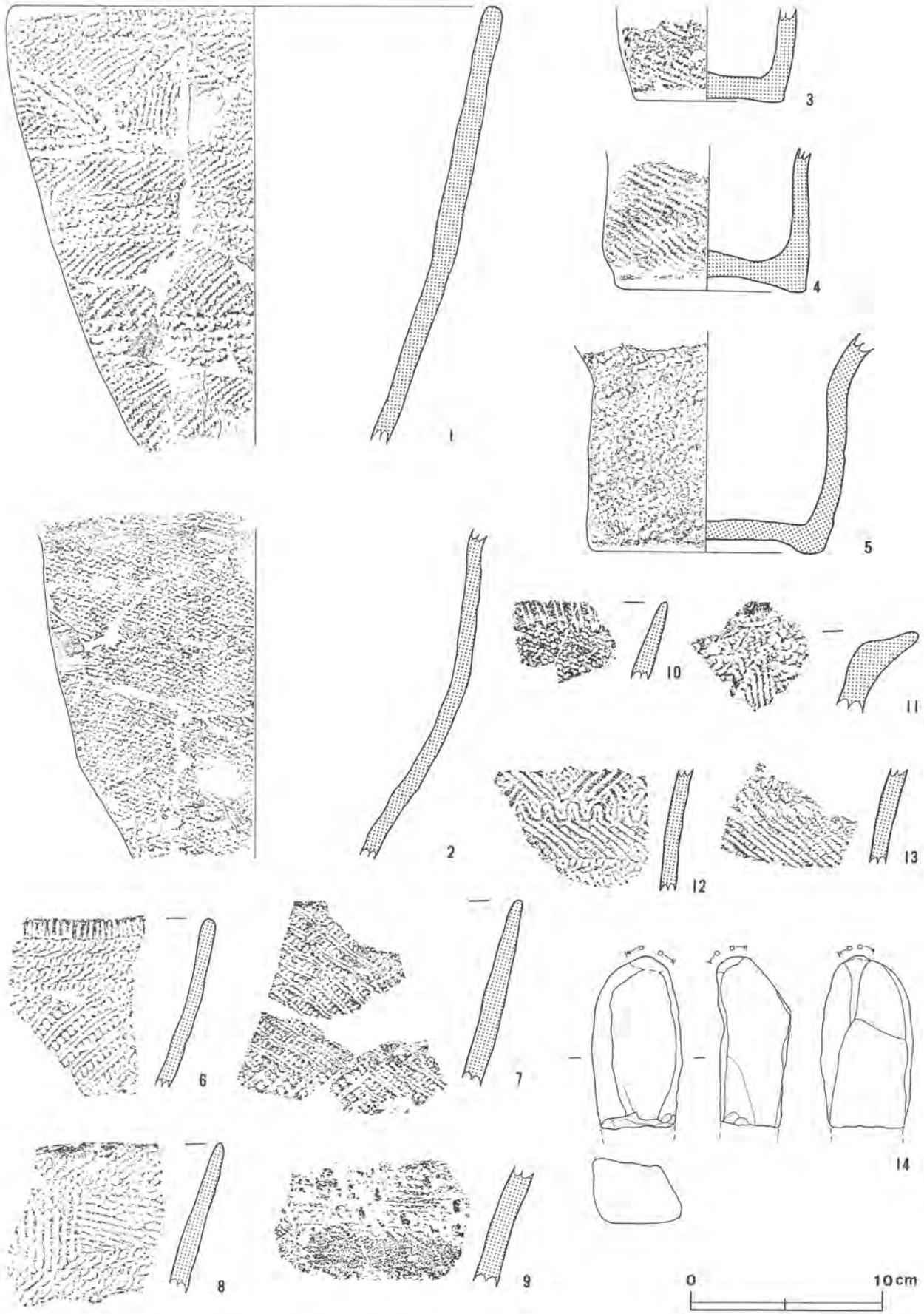
床 平坦であり、炉の周辺が特に堅く踏み固められている。

ピット 5カ所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径24~78cmの円形または楕円形で、深さ8cmである。P<sub>5</sub>は、径36cmの円形で深さ19cmである。いずれも柱穴と考えられる。

炉 2カ所あり、床中央部に炉A、南コーナー付近に炉Bを確認した。炉Aは、径38~40cmのほぼ円形で、深さ10cmほどの地床炉である。覆土は2層からなり、第1層はローム中ブロックを中量含んだ褐色土、第2層はローム小ブロックを少量、焼土小ブロック・炭化物を極少量含んだ暗褐色土である。炉Bは、長径54cm・短径48cmの楕円形で、深さ10cmほどの地床炉である。覆土は4層からなる。第1層はローム粒子を多量に含むにふい褐色土、第2層はローム粒子を多量、焼土粒子を極少量含んだにふい褐色土、第3層はローム粒子を中量、焼土粒子・炭化物を極少量含んだ褐色土、第4層はローム粒子を少量、炭化物を極少量含んだにふい赤褐色焼土である。炉床はともに熱を受け赤変硬化している。



第7図 第12号住居跡実測図



第 8 图 第 12 号住居跡出土遺物実測・拓影図

覆土 4層からなる。第1層はローム小・中ブロックを中量、炭化物を極少量含む暗褐色土、第2層はローム小・中ブロックを中量含む褐色土、第3層はローム粒子を多量に含む褐色土、第4層はローム粒子を多量に含む褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物 中央部覆土下層から縄文式土器と敲石が出土している。第8図1の深鉢は中央部床面から、2の深鉢は炉内から出土している。土器の地文には、単節縄文・組紐文・直前段合捺糸文・ループ文が施されている。

所見 本跡は、縄文時代前期（関山式期）の住居跡である。

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徵	胎土・色調・焼成	備考
第8図 1	深鉢 縄文式土器	A 26.0 B (23.5)	底部欠損。胴部は、やや外傾して立ち上がる。文様構成は、ループ文により横位に4段に区画し、上位の区画間には鋸歯状のループ文を加えている。地文には単節LRの縄文を施している。内面は、横位の丁寧なナデが施されている。胴下半がよく焼けている。	砂粒, 繊維, パミス 明赤褐色 普通	P-87 70% 中央部床面
2	深鉢 縄文式土器	B (17.7)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がる。器面全体に、組紐文が施文されている。	砂粒, 繊維, 長石 にふい褐色 普通	P-88 40% 中央部床面
3	深鉢 縄文式土器	B (5.0) C 7.7	底部片。やや上げ底状で、胴部は直立して立ち上がる。地文に、単節RLが施文されている。	砂粒, 繊維, 長石 橙色 普通	P-91 10% 中央部床面
4	深鉢 縄文式土器	B (7.7) C 10.2	底部片。上げ底を呈し、胴部は直立して立ち上がる。単節RLが施文されている。底面に放射状のナデ整形。	砂粒, 繊維, パミス 橙色 普通	P-90 15% 中央部床面
5	深鉢 縄文式土器	B (11.8) C 12.0	底部片。上げ底を呈し、胴部はほぼ直立するが、上半部で外反する。器面全体に組紐文が施される。	砂粒, 繊維, 長石 赤褐色 普通	P-89 20% 炉内

#### 第26号住居跡（第10図）

位置 調査区の東部，B9d<sub>2</sub>区。

重複関係 本跡は、第36号住居跡と重複している。本跡の南東部が第36号住居跡に掘り込まれており、本跡のほうが古い。

規模と平面形 長軸6.3m・短軸(5.0)mで、長方形と推定される。

主軸方向 N-40°-W

壁 壁高は22~32cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であるが、踏み締まりは弱い。

ピット 7カ所（P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>）。P<sub>1</sub>とP<sub>2</sub>は、径23~26cmの円形で深さ14~29cmあり、規模と配列から主柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>~P<sub>7</sub>は、径16~23cmの円形で深さ15~49cmあり、位置等から補助柱穴と考えられる。

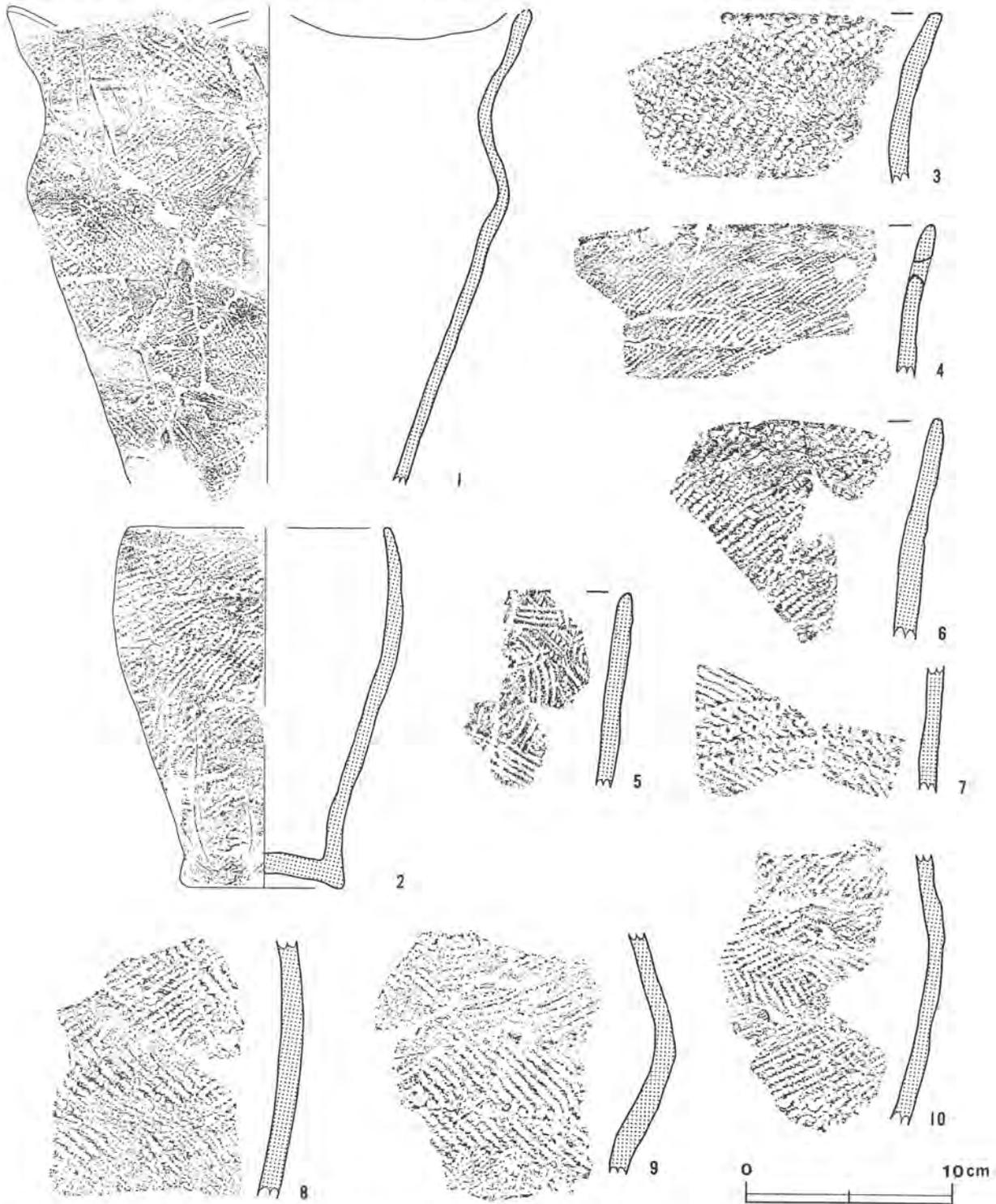
炉 1カ所。床中央から北壁寄りに位置し、長径101cm・短径39cmの長楕円形で、深さ12cmの地床炉である。

覆土は3層からなり、第1層はローム粒子を極少量含むにふい赤褐色焼土、第2層はローム粒子を中量、焼土小ブロックを少量含むにふい褐色土、第3層はローム粒子を少量、焼土小ブロックを極少量含む褐色土である。炉床は、あまり焼けてはいない。

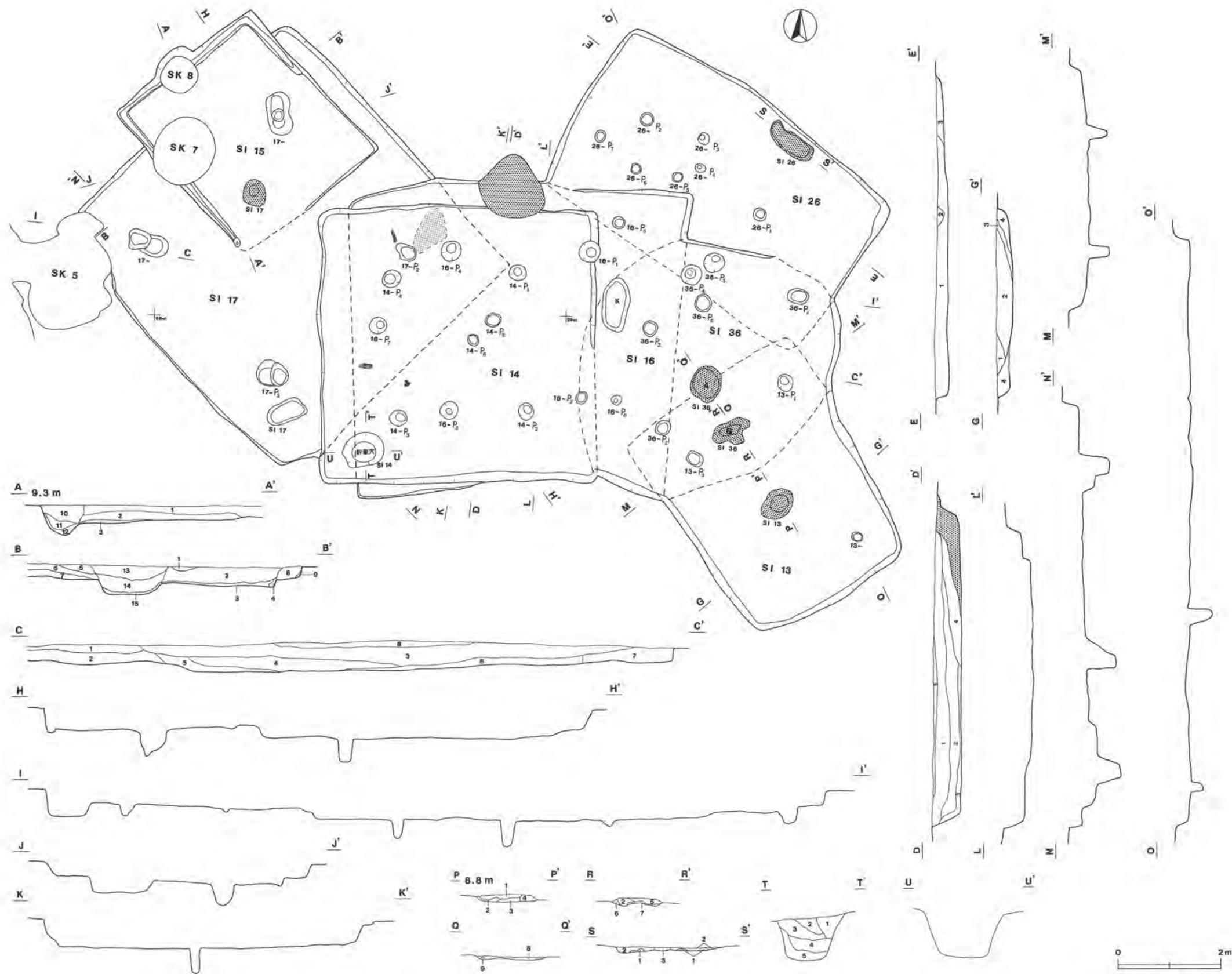
覆土 3層からなる。第1層はローム粒子を中量、焼土小ブロックを極少量を含む褐色土、第2層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第3層はローム粒子を中量、焼土粒子を極少量含む褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物 中央部覆土中・下層から少量の縄文式土器が出土している。第9図1の深鉢は北コーナー下層から、2の深鉢は北東壁際覆土下層から出土している。土器の地文には単節縄文・直前段合燃縄文・ループ文が施されている。

所見 本跡は、縄文時代前期（関山式期）の住居跡である。



第9図 第26号住居跡出土遺物実測・拓影図



第10图 第13·14·15·16·17·26·36号住居跡・炉・貯藏穴実測図

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図 1	深鉢 縄文式土器	A [25.2] B (23.2)	底部欠損。底部からは外傾して立ち上がり、胴部上半に最大径を有し、頸部がくびれ、頸部から口縁にかけて開いている。撚りの異なる直前段合燃縄文により羽状に施文している。4単位の波状口縁。口唇部から口縁にかけて、部分的にキザミ。	砂粒, 繊維 明褐色 普通	P-213 30% 北コーナー覆土 下層
2	深鉢 縄文式土器	A [12.4] B 17.6 C 7.6	底部は上げ底を呈し、胴部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。地文に、単節LRが横位で施文されている。	砂粒, 繊維, 礫 明赤褐色 普通	P-212 60% 北東壁際覆土下層

第27号住居跡 (第11図)

位置 調査区の東部, B803区。

重複関係 本跡の東部は、調査区外に延びている。本跡の中央部を第2号溝が掘り込んでおり、本跡の方が古い。

規模と平面形 長径 [6.2] m, 短径 [6.0] mほどの楕円形と推定される。

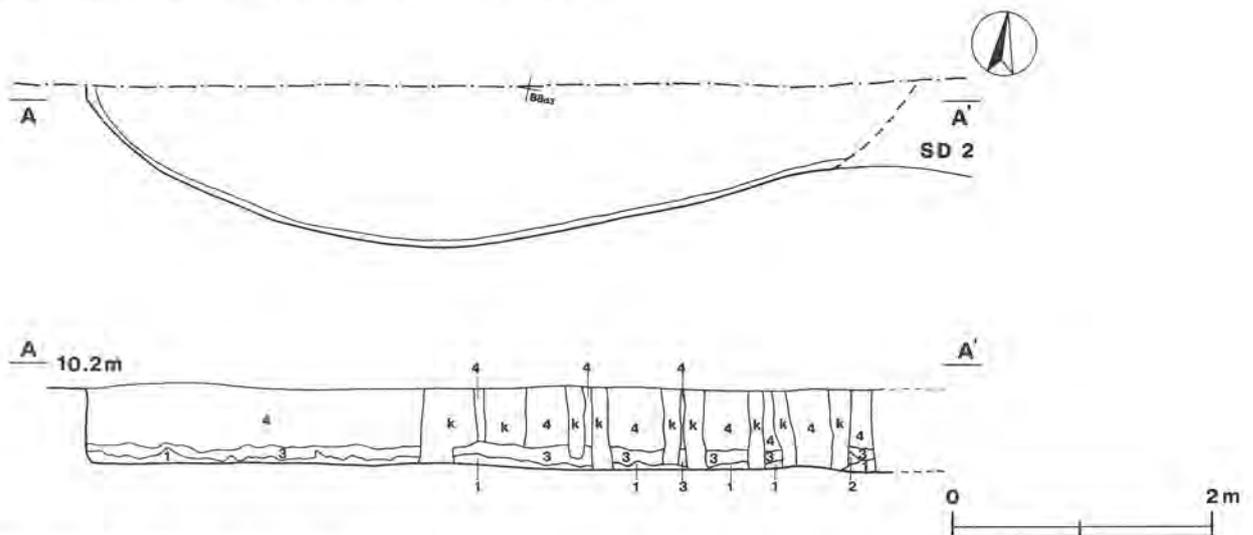
壁 壁高は27~30cmあり、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦で、踏み締まりは弱い。

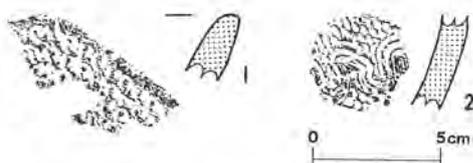
覆土 4層からなる。第1層はローム粒子を多量に含む褐色土、第2層はローム粒子を少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子を極少量含む暗褐色土、第4層はローム粒子を少量、炭化物・焼土粒子を極少量含む黒褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物 西部覆土中・下層から縄文土器片が極少量出土している。1にはループ文を、2にはRLの地文上にコンパス文を施している。

所見 本跡は、縄文時代前期(関山式期)の住居跡である。



第11図 第27号住居跡実測図



第12図 第27号住居跡出土遺物・拓影図

### 第36号住居跡（第10図）

位置 調査区の東部，B9e2区。

重複関係 本跡は，第13・16・26号住居跡と重複している。本跡は南東部を第13号，西部を第16号住居跡に掘り込まれており，本跡の方が古い。北部は第26号住居跡を掘り込んでいるので，本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径5.2m・短径〔4.8〕mであるが，平面形は不明である。

壁 壁高は24～28cmあり，ほぼ垂直に立ち上がる。

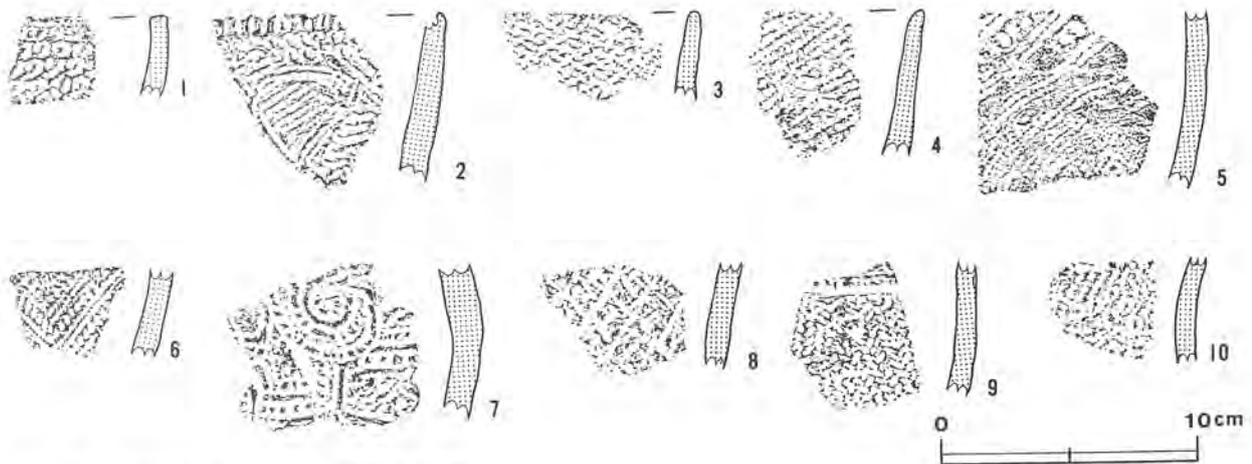
床 全体的に平坦で，よく締まっている。

ピット 6カ所（P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は径22～43cmの円形で，深さ27～66cmあり柱穴と考えられる。

炉 2カ所あり，中央部に炉A，中央から東寄りに炉Bを確認した。炉Aは，長径68cm・短径60cmの楕円形で，深さ5cmの地床炉である。覆土は2層（第8・9層）で，第8層はローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含む褐色土，第9層は赤褐色焼土である。炉Bは，長径68cm・短径49cmの不整形円で，深さ10cmの地床炉である。覆土は4層（第2・5・6・7層）で，第2層はローム粒子・焼土粒子を少量含む褐色土，第5層はローム粒子・焼土粒子を少量，ローム小ブロックを極少量含む褐色土，第6層はローム粒子を極少量含む褐色土，第7層はローム小ブロックを少量含む暗褐色土である。炉床は，ともに赤変硬化している。

遺物 中央部覆土中・下層から極少量の縄文土器片が出土している。土器の地文には，単節縄文・組紐文・直前段合撚糸文・ループ文が施されている。

所見 本跡は，縄文時代前期（関山式期）の住居跡である。



第13図 第36号住居跡出土遺物拓影図

### 第37号住居跡（第14図）

位置 調査区の中央部，B8d6区。

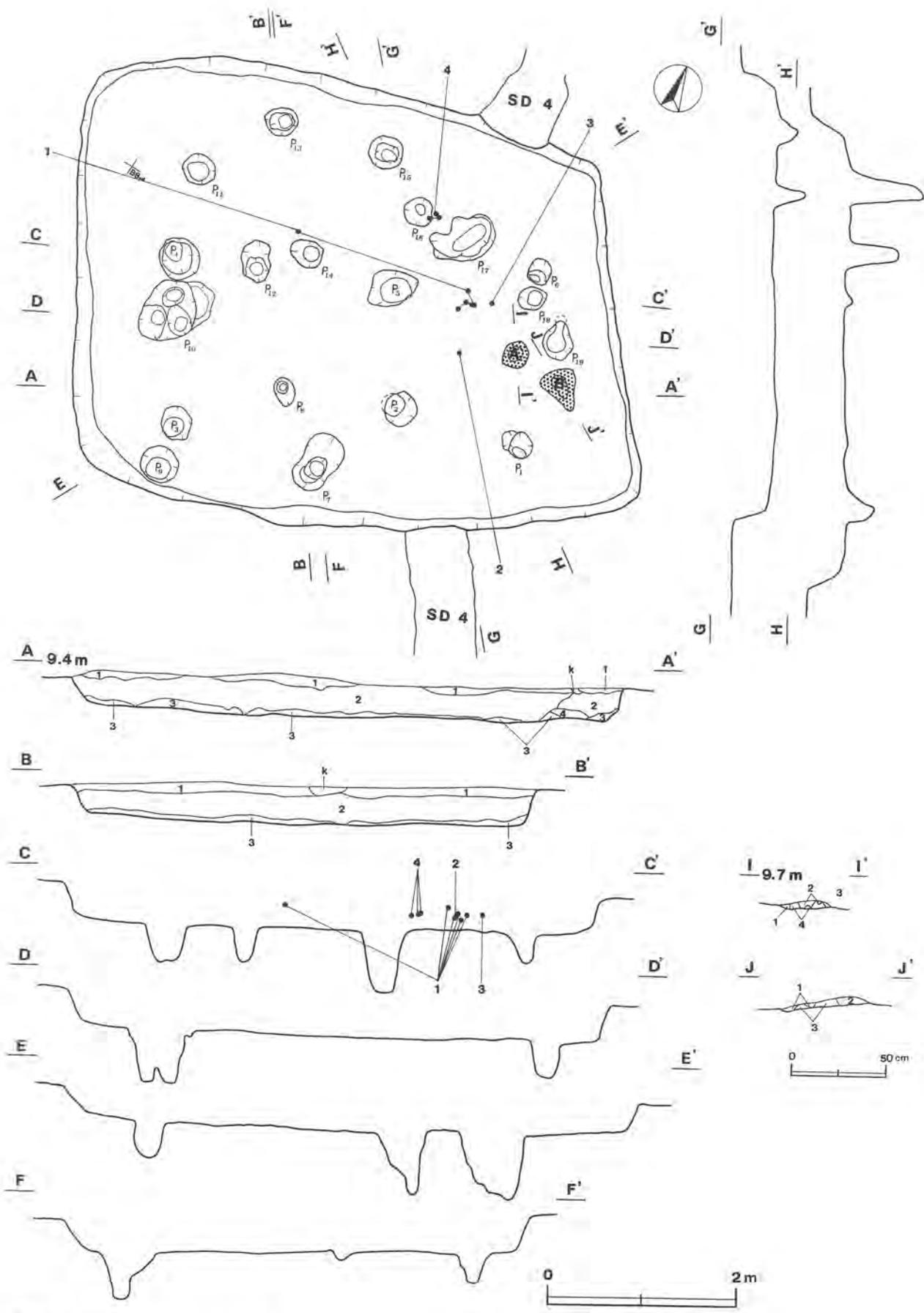
重複関係 本跡は，第4号溝に北壁と南壁の一部を浅く掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長軸5.9m・短軸4.9mの隅丸長方形である。

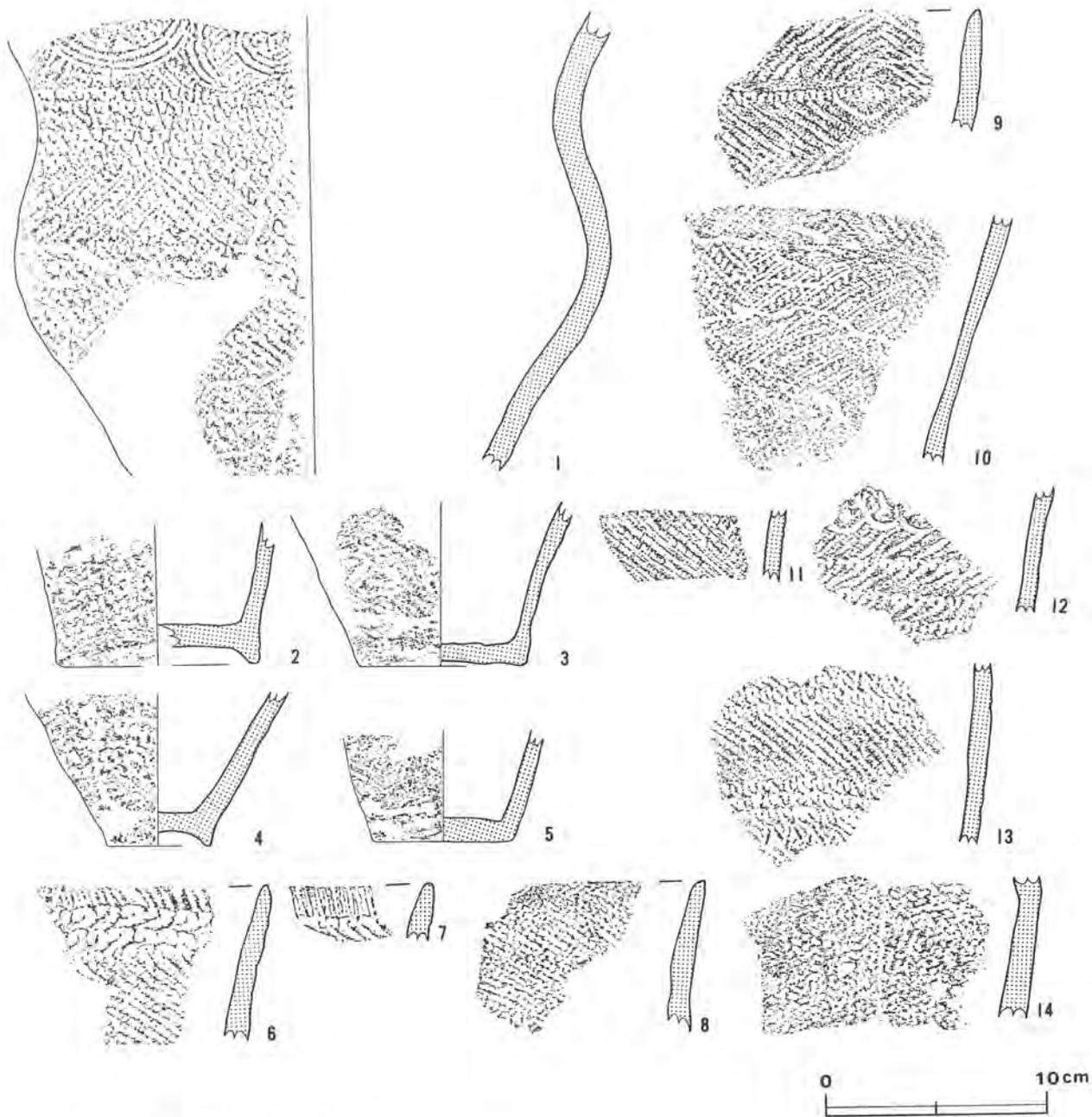
壁 壁高は28cm～40cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 全体的に，ほぼ平坦で堅く締まっている。

ピット 19カ所（P<sub>1</sub>～P<sub>19</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>は，長軸28～78cm・短軸22～40cmの楕円形で，深さは30～71cmあり主柱穴と考えられる。P<sub>7</sub>～P<sub>19</sub>は，長軸34～89cm・短軸30～62cmの楕円形で，深さは14～80cmあり補助柱穴と考えられる。



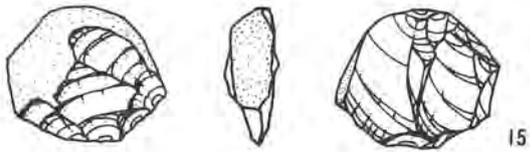
第14图 第37号住居跡実測图



第15図 第37号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)

炉 2カ所あり、床面中央から東壁寄りに炉Aと炉Bを確認した。炉Aは、長軸30cm・短軸26cmの楕円形で、深さ3cmほどの地床炉である。覆土は4層からなり、第1層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第2層は焼土粒子を中量、ローム粒子を少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子を少量含む褐色土、第4層は赤褐色焼土である。炉Bは、長軸44cm・短軸38cmの不整円形で、深さ2cmほどの地床炉である。覆土は3層からなり、第1層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第2層はローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子を少量含む暗褐色土、第3層は焼土粒子を多量に含むにふい褐色土である。炉床は、ともに赤変硬化している。

覆土 4層からなる。第1層はローム粒子を少量、ローム小ブロックを極少量含む褐色土、第2層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、第2層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量含む暗褐色土、第4層はローム粒子・焼土



小ブロックを中量含む暗褐色土で、自然堆積と考えられる。遺物 中央部覆土中・下層から多量の縄文式土器と楔形石器が出土している。第15図1・2・3の深鉢は、炉の西側の覆土下層から出土している。土器の地文には、単節縄文・組紐文・直前段合燃縄文・ループ文が施されている。15の楔形石器は自然面を有する剝片を素材とし、表面には裏面の打点と反対方向からの調整を加えている。

$s = \frac{2}{3}$

第16図 第37号住居跡出土跡遺物実測図(2)

所見 本跡は、縄文時代前期(関山式期)の住居跡である。

第37号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第15図 1	深鉢 縄文式土器	B(20.9)	胴部片。胴部は内彎して立ち上がり、胴部上位に最大径を有する。文様構成は、ループにより、横位に3段に区画し、胴部上位に、半截竹管の凹面を利用して文様を施している。地文として、燃りの異なる直前段合燃縄文を羽状に施文している。	砂粒、繊維、長石 明赤褐色 普通	P-239 20% 中央部覆土中層
2	深鉢 縄文式土器	B(6.4) C[9.0]	底部片。上げ底を呈し、胴部はほぼ外傾して立ち上がる。原体は、単節LRを施している。	砂粒、繊維、雲母 にふい赤褐色 普通	P-240 10% 中央部覆土中層
3	深鉢 縄文式土器	B(7.5) C 7.5	底部片。やや上げ底を呈し、胴部は外反して立ち上がる。原体は、単節RLと思われる。	砂粒、繊維、長石 にふい黄褐色 不良	P-241 10% 中央部覆土中層
4	深鉢 縄文式土器	B(6.5) C[4.7]	底部片。上げ底を呈し、胴部は外傾して立ち上がる。胴部下端にループ文2条が施されている。	砂粒、長石、パミス にふい黄褐色 普通	P-242 10% 中央 北側覆土中層
5	深鉢 縄文式土器	B(5.2) C 6.3	底部片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。器面は摩滅しているが、縄文を施している。縄文の原体は不明である。	砂粒、パミス にふい赤褐色 不良	P-243 5% 覆土中層

## 2 古墳時代の遺構と遺物

当調査区からは、古墳時代の竪穴住居跡が27軒、古墳が3基確認された。竪穴住居跡は、調査区中央から東側にかけての中位段丘に位置している。竪穴住居跡を時期別にみると、古墳時代のものは前期が10軒、中期が9軒、後期が8軒である。古墳は、調査区西側の上位台地に位置し、古墳時代後期のものである。以下、検出した遺構や遺物の特徴について時期別に記載する。

### (1) 竪穴住居跡

#### 第4号住居跡(第17図)

位置 調査区の東部、B7e9区。

重複関係 本跡は第1号土坑を切っているため、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸4.5m・短軸4.2mの方形。

主軸方向 N-49°-E

壁 壁高は10~20cmで、ほぼ外傾して立ち上がる。

床 床全体がトレンチャーによる攪乱を受けているが、床面東部は比較的遺存状態が良く、平坦で硬い。

ピット 5カ所(P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は各コーナー付近に位置し、径17~32cmの円形で、深さ10~26cmである。

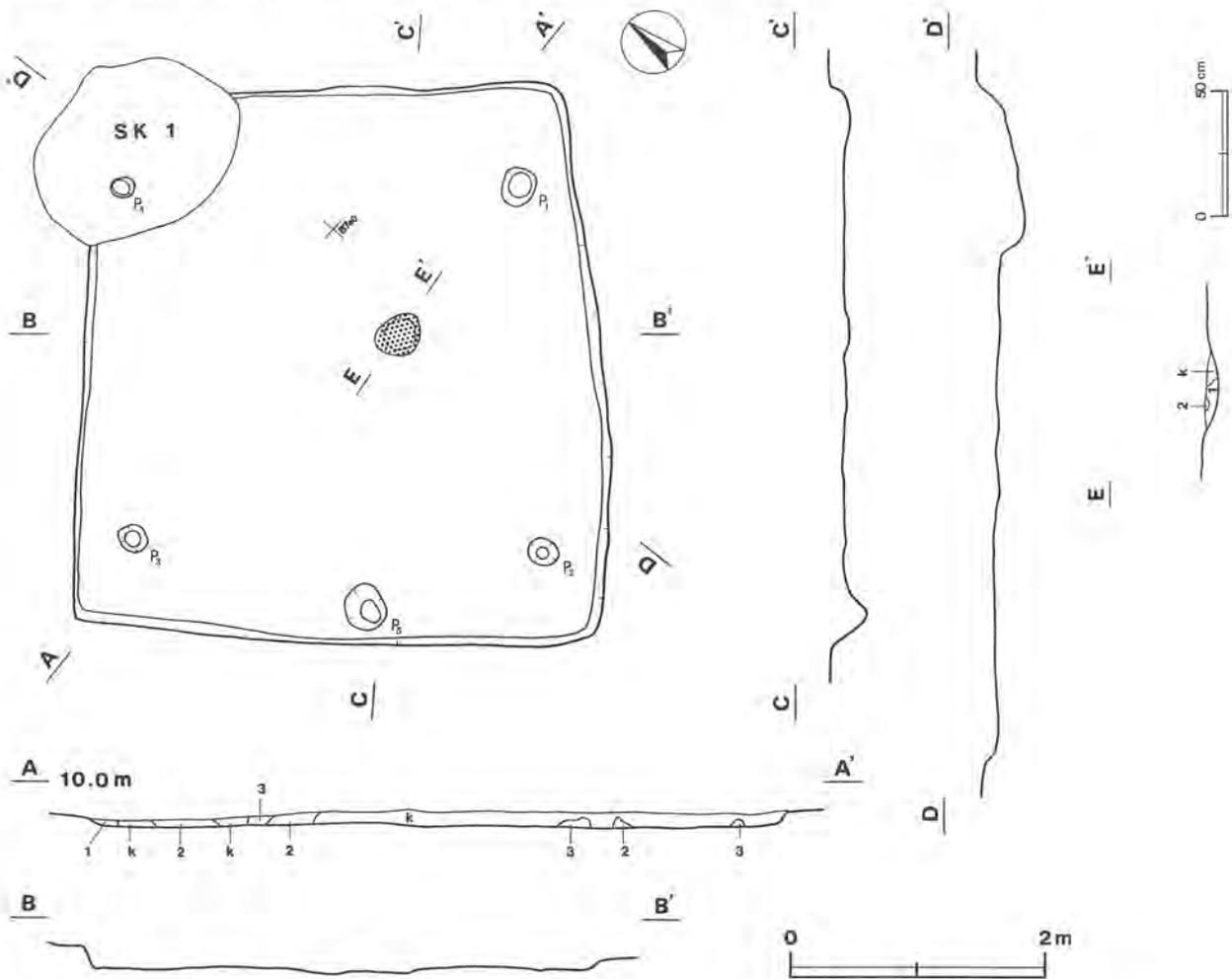
P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は南西壁際に位置し、長径37cm・短径31cmの楕円形で、深さ16cmである。位置等から出入り口に伴うピットと考えられる。

炉 床面中央やや東壁寄りに検出する。長径42cm・短径34cmの楕円形で、深さ5cmである。覆土は2層からなり、第1層は赤褐色焼土、第2層はローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土である。遺存状態は悪いが、炉床は赤変硬化している。

覆土 3層からなるが、攪乱により不明確である。第1層は、ローム小ブロックを少量含む暗褐色土、第2層は、ローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土、第3層は、ローム粒子を多量に含むにぶい褐色土である。

遺物 北部覆土下層から土師器と砥石が出土している。第18図6の埴は中央北東寄りの覆土下層から逆位で、4の壺は東コーナー付近の床面から横位で出土している。

所見 本跡は、古墳時代前期の住居跡である。

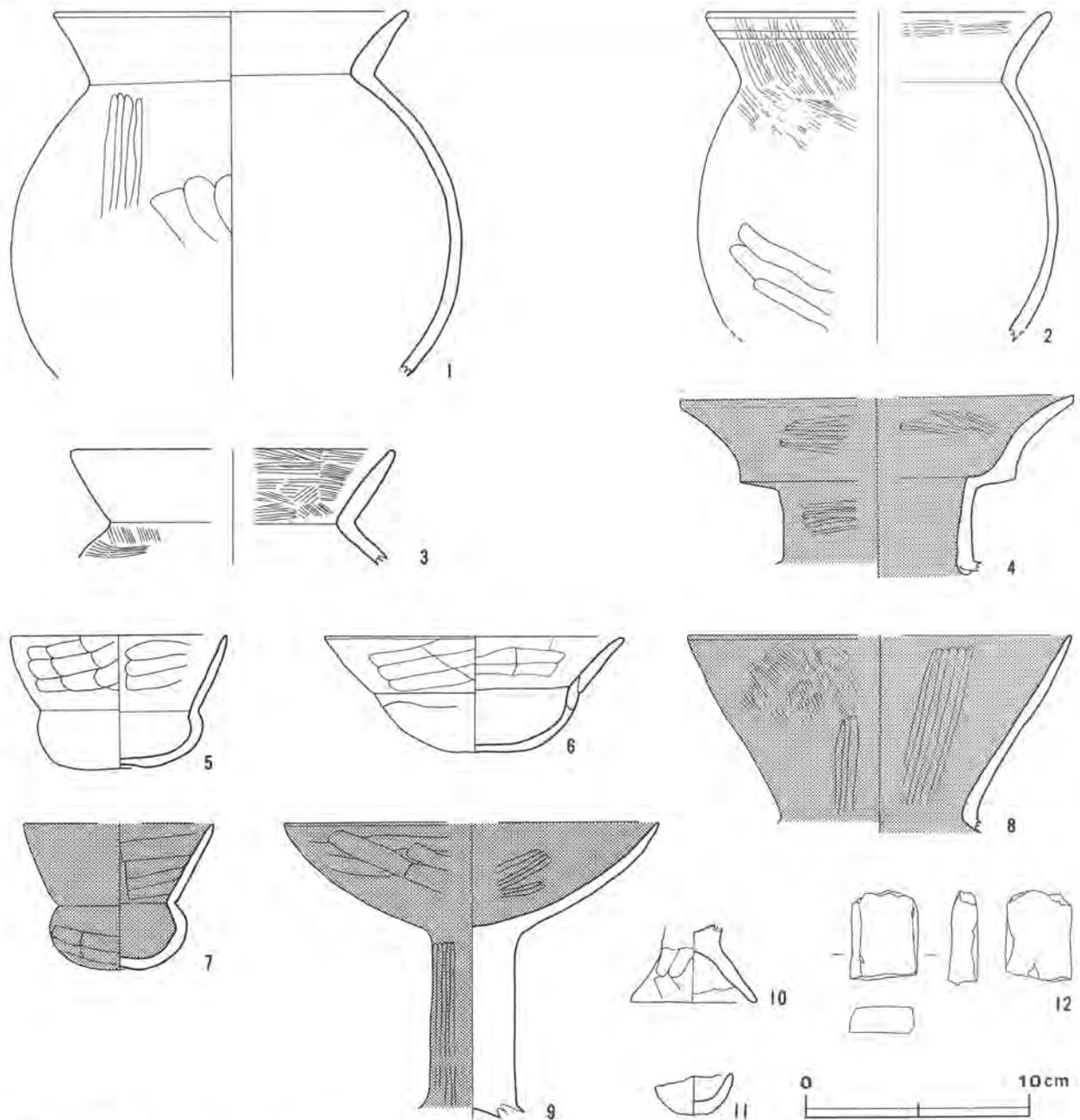


第17図 第4号住居跡実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	甕 土師器	A 16.0 B (16.8)	底部欠損。胴部は内彎し最大径を中位にもつ。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラ磨き。	砂粒、長石、パミス 橙色 普通	P-7 40% 中央部覆土中層
2	甕 土師器	B (15.4) C [15.2]	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾する。	口縁部内面・口縁部から胴上半部外面ハケ目整形。	砂粒、長石、パミス 橙色 普通	P-8 10% 中央部覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	甕 土師器	B (14.8) C [ 5.3]	口縁部片。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾する。	口縁部内面・頸部外面ハケ目整形。口縁部外面剥離著しく調整不明。	砂粒、雲母、パミス 橙色 普通	P-9 5% 中央部床面
4	壺 土師器	A [17.8] B ( 8.2)	口縁部片。頸部は、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は段を持ち、外反する。	口縁部内・外面赤彩後へラ磨き。	砂粒、長石、雲母 赤色 普通	P-15 10% 東コーナー付近 床面
5	埴 土師器	A 9.7 B 6.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面ナデ。	砂粒、パミス 浅黄橙色 普通	P-10 90% 中央部覆土中層
6	小型埴 土師器	A 13.4 B 5.3 C 3.3	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、長石、スコリア 橙色 普通	P-11 80% 中央部覆土下層
7	埴 土師器	A [ 8.6] B 6.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下端へラナデ。内外面赤彩。	砂粒、長石、雲母 明褐色 普通	P-12 70% 中央部覆土中層



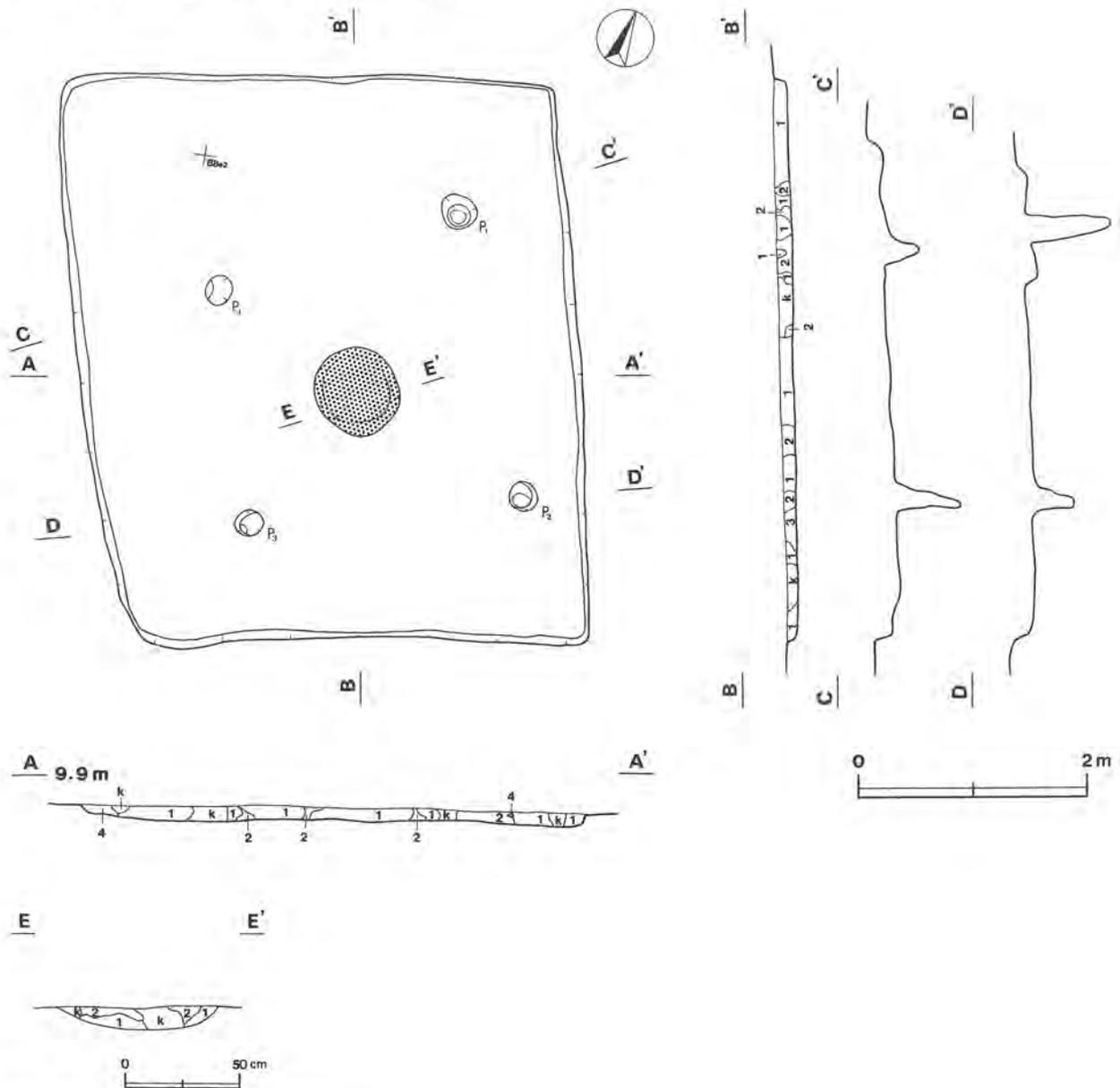
第18図 第4号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	大型埴土師器	A [17.2] B (9.1)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面赤彩痕。外面ハケ目整形後へラ磨き。内面ハケ目整形。	砂粒,長石,スコリア 赤色 普通	P-13 20% 北コーナー付近覆土下層
9	高坏土師器	A [17.0] B (13.6)	裾部欠損。脚部は円柱状を呈し、杯部は内彎してそのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面赤彩痕。坏部外面ハケ目整形。脚部外面・坏部内面へラ磨き。	砂粒,長石,パミス 赤色 普通	P-14 35% 中央部覆土中層
10	器台土師器	B (3.6) D 5.7	坏部欠損。脚部は直線的に開く。	脚部外面ハケ目整形。	砂粒,パミスにふい 橙色 普通	P-16 40% 中央部覆土中層
11	手捏土器土師器	A 3.4 B 1.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	内面軽いナデ。	砂粒,パミス 明褐色 普通	P-17 95% 中央部覆土中層

第5号住居跡 (第19図)

位置 調査区の東部, B8e<sub>2</sub>区。

規模と平面形 長軸5.0m・短軸4.4mの方形。



第19図 第5号住居跡実測図

主軸方向 N-22°-W

壁 壁高は12~22cmで、ほぼ外傾して立ち上がる。

床 トレンチャーによる攪乱を受けているが、残存部は硬く平坦である。

ピット 4カ所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径23~37cmの円形で、深さ30~75cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。

炉 床中央部にあり、長径78cm・短径74cmの円形で、深さ10cmである。覆土は2層からなり、第1層はローム粒子を中量、焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土、第2層はローム粒子を少量、焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土である。炉床はあまり焼けてはいない。

覆土 4層からなるが、攪乱を受け不明確である。第1層はローム粒子・ローム小ブロックを少量、焼土粒子・炭化物を極少量含む暗褐色土、第2層はローム粒子・焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土、第3層はローム粒子を中量含む褐色土、第4層はローム粒子を多量に含む褐色土である。

遺物 中央部覆土下層から極少量の土師器が出土している。埴の破片が中央部床面から出土している。

所見 本跡は、古墳時代前期の住居跡である。

### 第13号住居跡 (第10図)

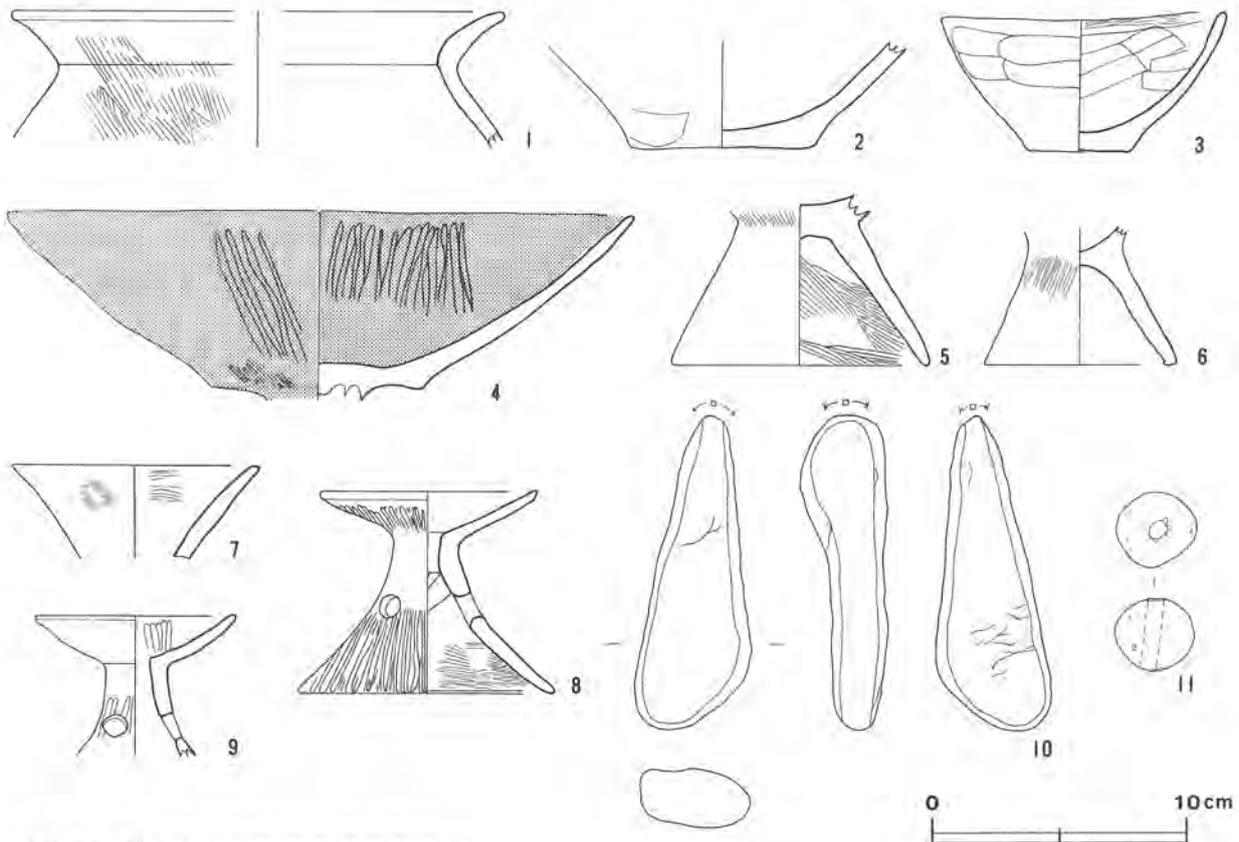
位置 調査区の東部、B9f<sub>3</sub>区。

重複関係 本跡は、第36号住居跡の南東部を掘りこんでいるため、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸 [5.0]m・短軸3.7mの隅丸長方形と推定される。

主軸方向 N-28°-W

壁 北西壁を除いて、遺存状態は良好である。壁高は25~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。



第20図 第13号住居跡出土遺物実測図

床 床面は平坦で、炉周辺が堅緻である。

ピット 3カ所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、径18~35cmの円形で、深さ23~47cmの主柱穴である。

炉 床中央部にあり、長径72cm・短径54cmの楕円形で、深さ7cmである。覆土は3層(第1・3・4層)からなり、第1層はローム粒子・焼土小ブロックを中量含む暗褐色土、第3層はローム粒子・焼土小ブロックを少量含む暗褐色土、第4層はローム粒子・焼土粒子を少量含む褐色土である。炉床は赤変硬化している。炉の周囲には、長径3.6m・短径0.8mの楕円形状の焼土が薄く堆積している。

覆土 覆土は2層からなり、第1層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土、2層はローム粒子を少量、焼土粒子を少量含む褐色土で、自然堆積と考えられる。

遺物 住居跡の南部や炉の周辺の覆土上層から多量の土師器・敲石・土玉が出土している。第20図4の高坏・9の器台は、中央部覆土上層から出土している。

所見 本跡は、古墳時代前期の住居跡である。

### 第13号住居跡出土遺物観察表

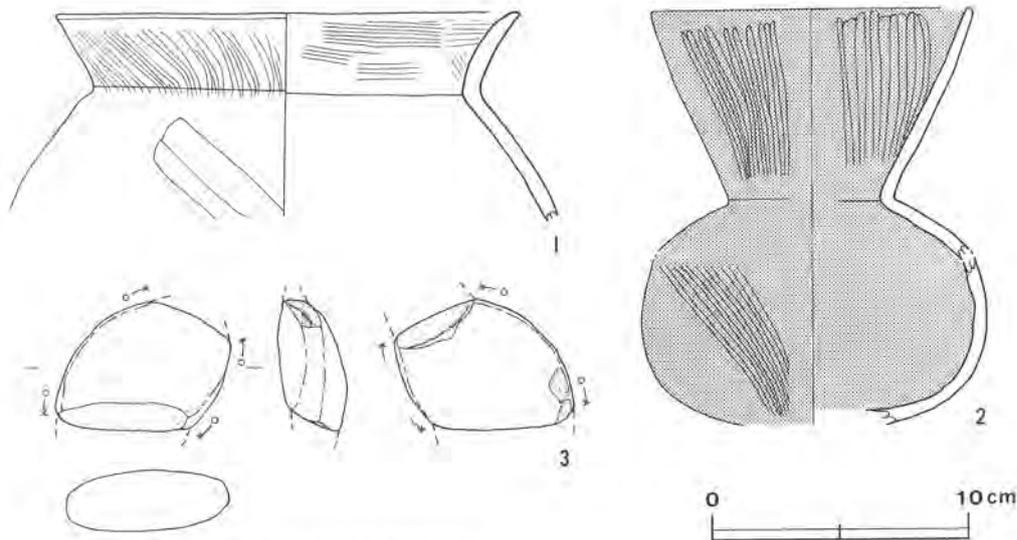
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第20図 1	甕 土師器	A [19.2] B ( 5.4)	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	胴部外面ハケ目整形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒,スコリア,雲母 明赤褐色 良	P-92 5% 中央部覆土上層
2	甕 土師器	B ( 4.3) C 7.2	底部片。平底。胴部は外傾する。	胴下半部ヘラナデ。	砂粒,パミス 橙色 普通	P-93 5% 中央部覆土中層
3	鉢 土師器	A 11.2 B 5.6 C 4.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は、わずかに外傾する。	口縁部内面ハケ目痕。体部外面ヘラナデ。	砂粒,パミス,長石 にふい橙色 普通	P-94 98% 中央部覆土上層
4	高坏 土師器	A 24.6 B ( 7.3)	脚部欠損。坏底部に段を持ち内彎して立ち上がり、そのまま口縁部にいたる。	坏部外面ハケ目整形後ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。内・外面赤彩痕。	砂粒,雲母,長石 赤色 良	P-95 50% 中央部覆土中層
5	台付甕 土師器	B ( 6.8) D 10.1	台部片。台部は直線的に開く。	脚部内・外面ハケ目整形。	砂粒,パミス,長石 にふい橙色 普通	P-98 35% 中央部覆土中層
6	台付甕 土師器	B ( 5.5) C 7.6	台部片。台部は直線的に開く。	脚部外面ハケ目整形。	砂粒,パミス,長石 橙色 普通	P-97 50% 中央部覆土中層
7	埴 土師器	B ( 5.5) C 7.6	口縁部片。頸部から口縁部にかけて外傾する。	口縁部内・外面ハケ目整形。	砂粒,パミス,長石 橙色 普通	P-96 40% 中央部覆土中層
8	器台 土師器	A 8.5 B 8.0 D 10.0 E 6.1	脚部は、緩やかに外反して開く。脚部上位に3孔、坏部は外傾して口縁部に至る。器受部中央に1孔。	脚部外面ヘラ磨き。内面ハケ目整形。器受部外面ヘラ磨き。	砂粒,パミス,雲母 赤褐色 良	P-99 95% 中央部覆土中層
9	器台 土師器	A 7.8 B ( 5.5) E [ 3.5]	裾部欠損。脚部は緩やかに外反する。脚部上位に3孔、坏部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	脚部外面・器受部内面ヘラ磨き。	砂粒,礫 赤褐色 普通	P-100 90% 中央部覆土中層

### 第17号住居跡 (第10図)

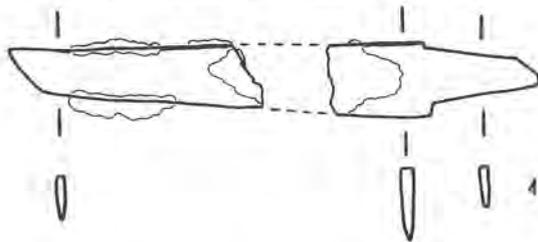
位置 調査区の東部、B8d0区。

重複関係 本跡は、北部を第15号住居跡に、西コーナー付近を第1号地下式墳に、南東部を第14・15号住居跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 長軸6.6m・短軸6.2mの方形。



第21図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



$s = \frac{2}{3}$

第22図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は14~39cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であり、中央部が堅緻である。

ピット 4カ所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、長径44~85cm・短径32~50cmの楕円形で、深さ47~58cmである。支柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>については、柱穴が2基ずつあり、柱の立て替えが考えられる。

貯蔵穴 南コーナーに付設されている。規模は、長径76cm・短径40cmの不整長方形で、深さ20cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

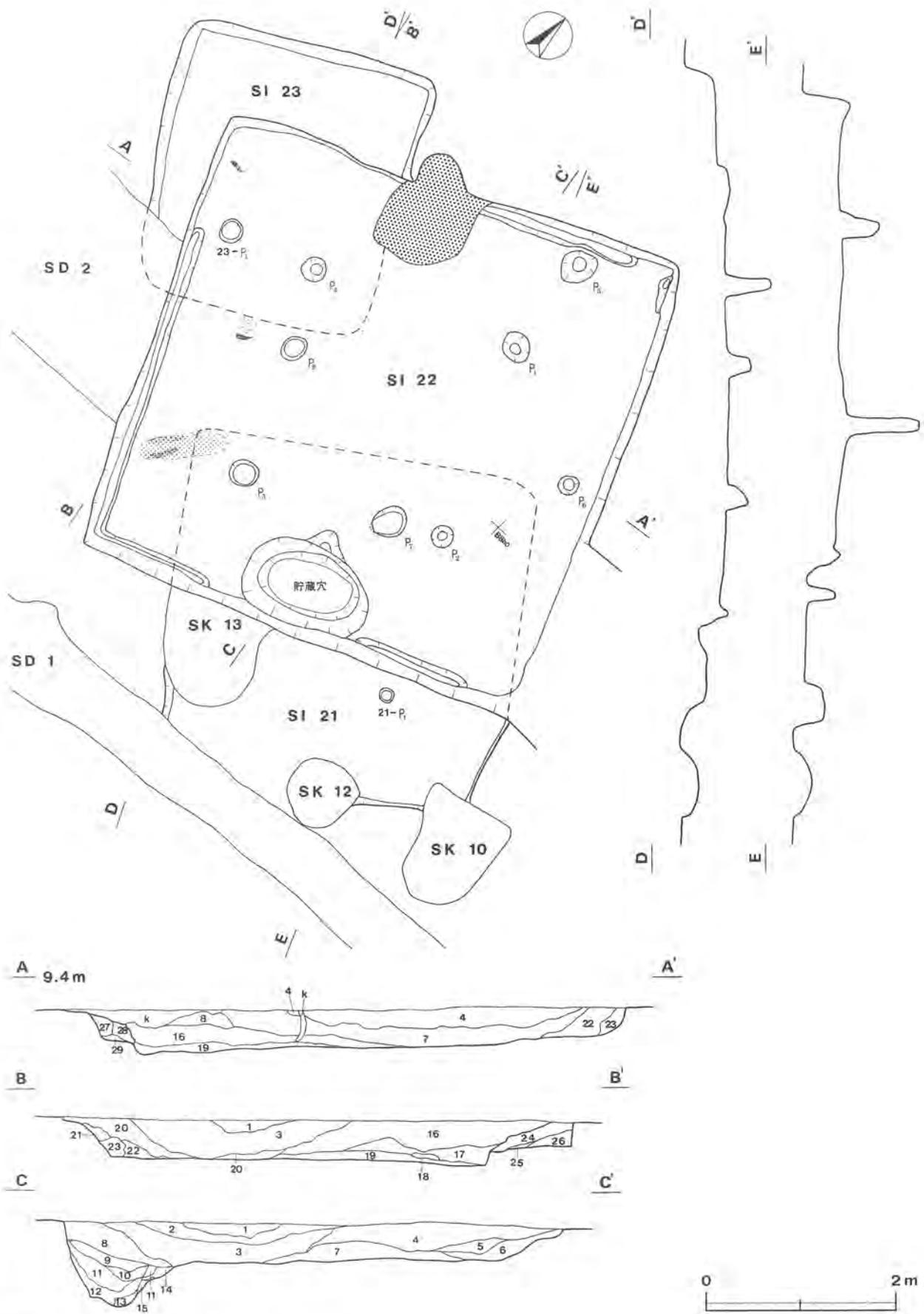
覆土 2層からなる。第1層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、炭化粒子を極少量含む暗褐色土、第2層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土である。

遺物 中央部覆土下層から少量の土師器・磨石・刀子が出土している。第21図1の甕と2の埴は、中央部覆土下層から出土している。

所見 本跡は、古墳時代前期の住居跡である。

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第21図 1	甕 土師器	A 18.0 B (8.2)	胴上半部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目整形。	砂粒・雲母・礫 橙色 普通	P-127 20% 中央部覆土中層
2	大型埴 土師器	A 12.4 B (9.9)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面、胴部外面へラ磨き。胴部内面へラナデ。内外面赤彩痕。	砂粒・雲母・バミス 赤色 良	P-128A・B 70% 中央部覆土下層



第23図 第21・22・23号住居跡実測図

第21号住居跡（第23図）

位置 調査区の東部，B8b9区。

重複関係 本跡は，第22号住居跡に北西部半分を掘り込まれているため，本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸3.7m・短軸（3.6）mの方形。

長軸方向 N-37°-W

壁 壁高は10～34cmで，ほぼ外傾して立ち上がる。

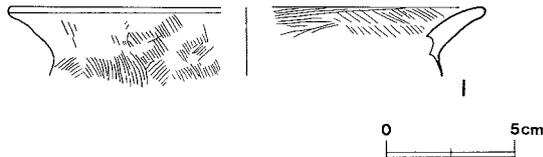
床 残存部は，平坦で堅く締まっている。

ピット 1カ所（P<sub>1</sub>）。P<sub>1</sub>は，径16cmの円形で，深さが30cmである。主柱穴と考えられる。

覆土 自然堆積と思われる。

遺物 中央部の覆土中層から，極少量の土師器が出土している。第24図1の甕は，中央部覆土中層から出土している。

所見 本跡は，古墳時代前期の住居跡である。



第24図 第21号住居跡出土遺物実測図

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 1	甕 土師器	A [18.8] B (2.2)	口縁部片。頸部はくびれ，口縁部は大きく外反する。	口縁部から頸部外面にかけて，斜位ハケ目整形。口縁部内面横位のハケ目整形。	砂粒，長石，パミスにふい橙色普通	P-251 5% 中央部覆土上層

第24号住居跡（第25図）

位置 調査区の東部，B8c7区。

重複関係 本跡は，北コーナー付近を第1号溝に，南東壁及び北西壁の一部を第2号溝に掘り込まれており，本跡が古い。また，本跡は第2号土坑を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸（5.3）m・短軸（5.3）mの方形と推定される。本跡の北西側は調査区外のため，調査はできなかった。

主軸方向 N-40°-W

壁 壁高は，13～48cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であり，炉周辺の中央部が堅緻である。

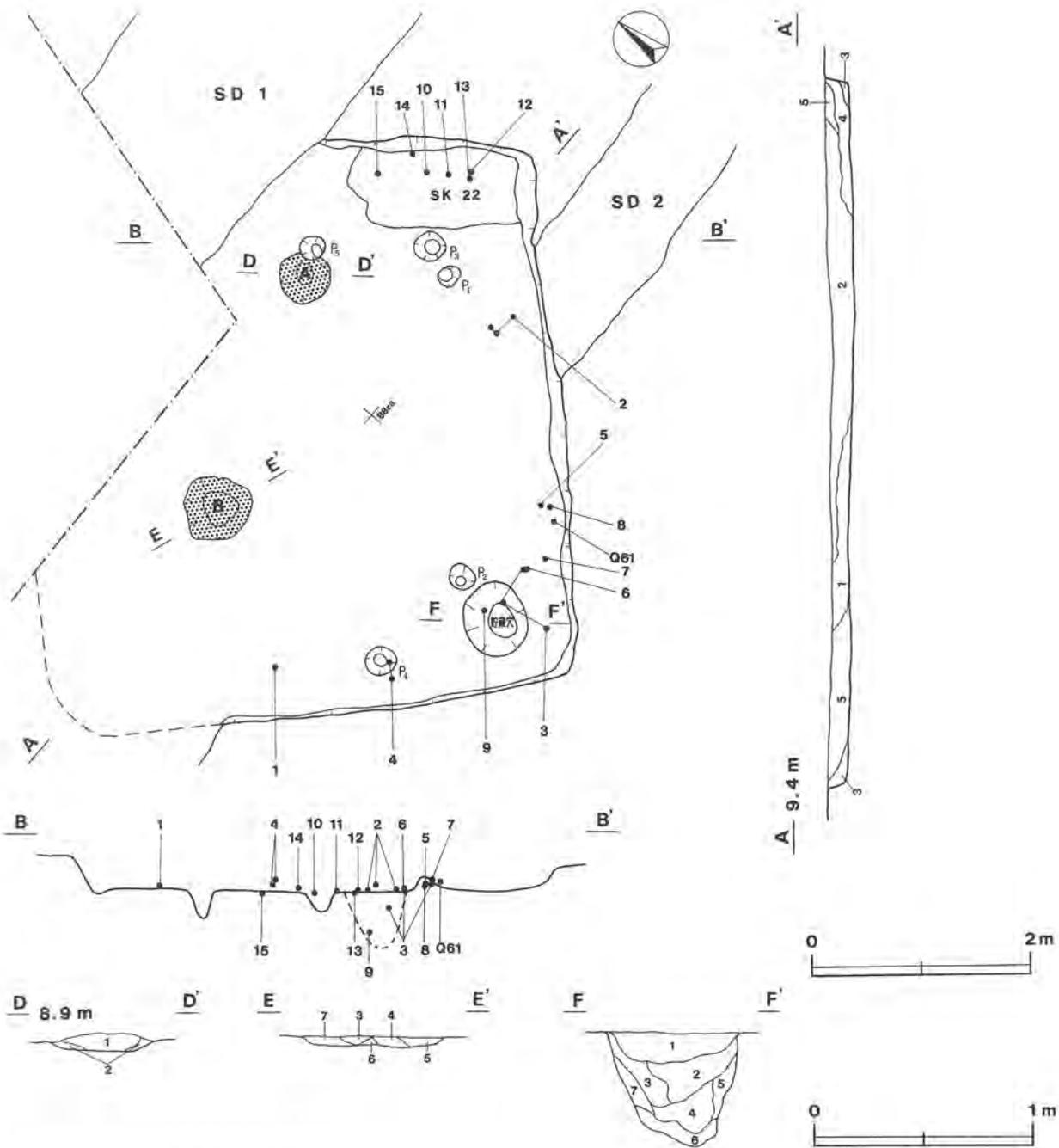
ピット 5カ所（P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>2</sub>は，径18～24cmの円形で，深さ28～36cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>～P<sub>5</sub>は径22～29cmの円形で，深さ7～42cmである。位置等から補助柱穴と考えられる。

炉 炉は，住居跡の中央からやや北よりに炉A，東よりに炉Bが確認されている。炉Aは，径47cm程の円形で，床面をわずかに掘り窪めている。覆土は2層からなる。第1層は焼土粒子・焼土小ブロックを多量，ローム粒子・ローム小ブロックを少量含む褐色土である。第2層は焼土粒子を多量，ローム小ブロックを極少量含む赤褐色土である。炉Bは，径64cm程の円形で，床面を13cm程掘り窪めている。炉Bの炉床は，赤変硬化している。

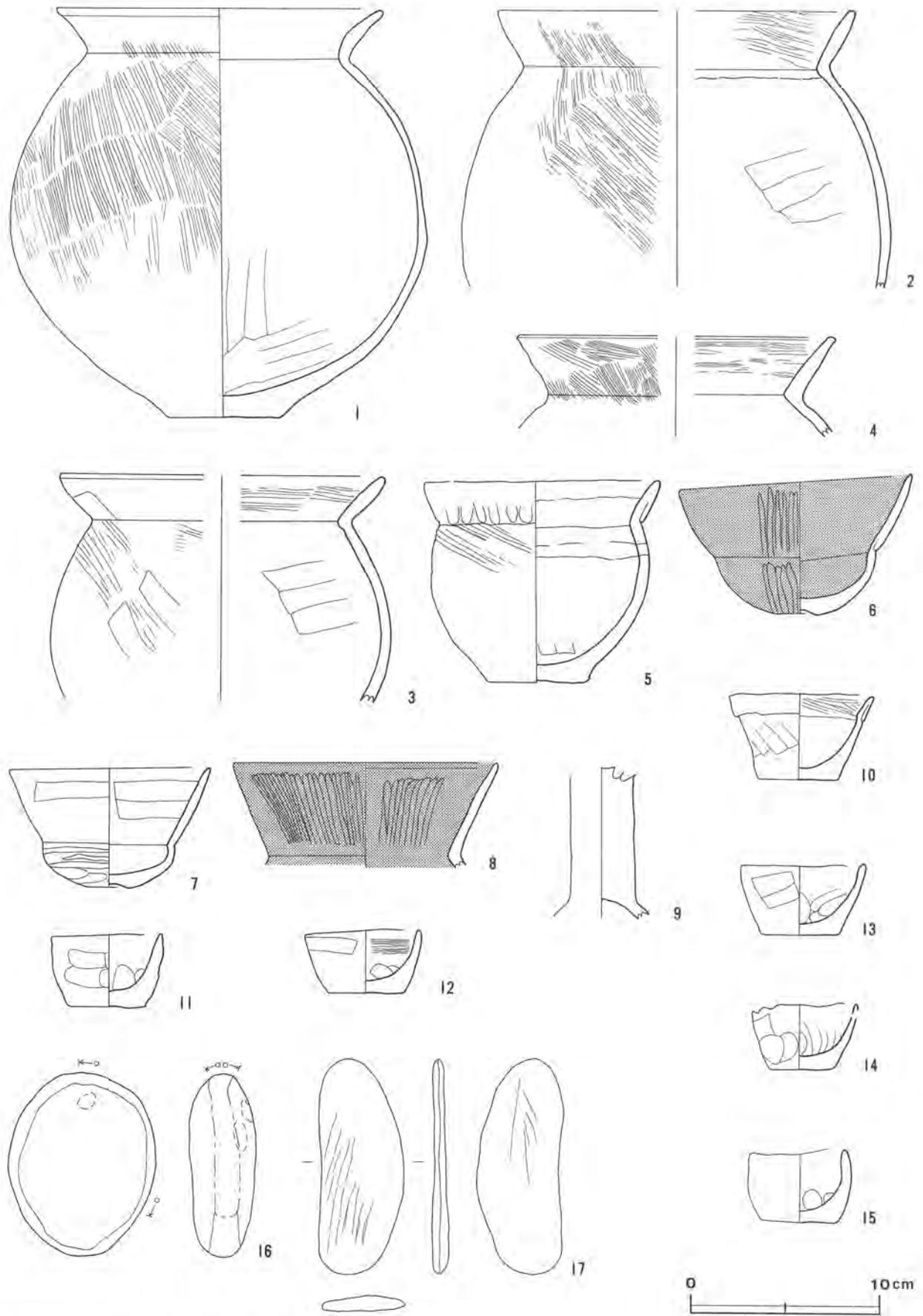
覆土は5層（第3層～第7層）からなる。第3層はローム粒子を多量，焼土粒子を少量含む橙色，第4層はローム粒子・焼土粒子を少量含む明褐色土，第5層はローム粒子を少量，焼土粒子を極少量含む褐色土，第6層は

焼土ブロックを多量含む赤褐色土，第7層は焼土粒子を少量含む褐色土である。

貯蔵穴 西コーナー付近に付設されている。長径70cm・短径58cmの楕円形で，深さ43cmである。底面は凹凸し，壁はほぼ外傾して立ち上がる。覆土は7層からなる。第1層はローム粒子を少量含む暗褐色土，第2層はローム粒子を少量含む黒褐色土，第3層はローム粒子を中量，焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土，第4層はローム粒子を少量，焼土粒子を極少量含む黒褐色土，第5層はローム粒子を少量含む褐色土，第6層はローム粒子を少量，焼土粒子を極少量含む暗褐色土，第7層はローム粒子を中量，ローム小ブロックを少量含む暗褐色土である。



第25図 第24号住居跡実測図



第26图 第24号住居跡出土遺物実測図

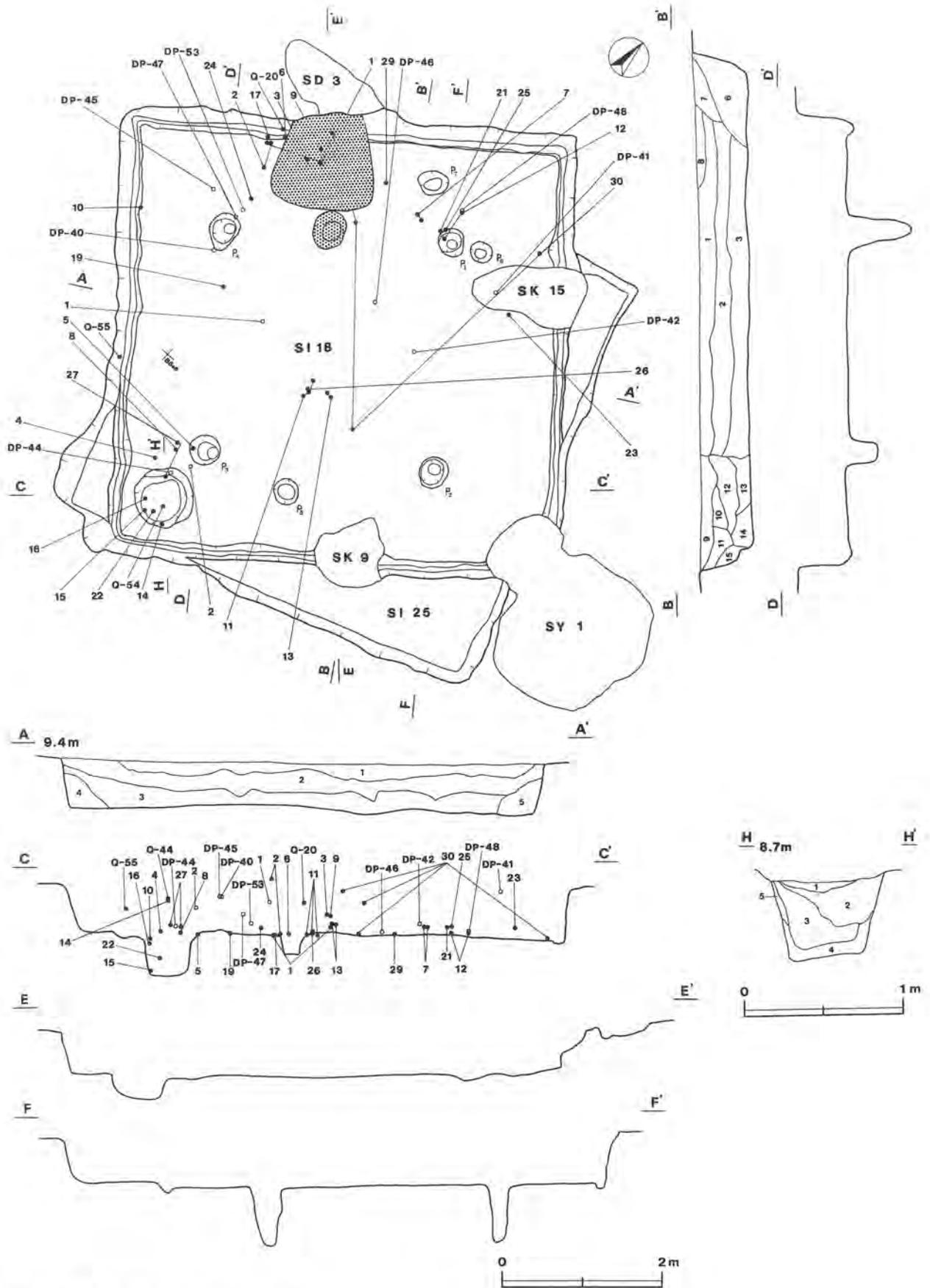
覆土 自然堆積と思われる。覆土は5層からなる。第1層はローム粒子を中量、焼土小ブロック・炭化物を極少量含む褐色土、第2層はローム小・中ブロックを少量、焼土粒子・炭化物を極少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子を中量、焼土小ブロックを極少量含む褐色土、第4層はローム小・中ブロックを少量、焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土、第5層はローム小・中ブロックを少量含む褐色土である。

遺物 南西壁及び南コーナー付近床面から土師器・磨石・礫器が出土している。第26図1の甕は南西壁際床面から、6・7の埴は南コーナーの床面から、10～15の手捏土器が東コーナー付近床面から出土している。

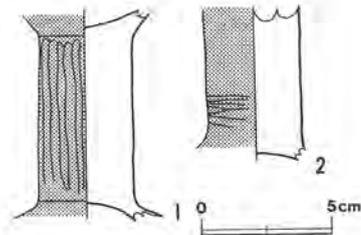
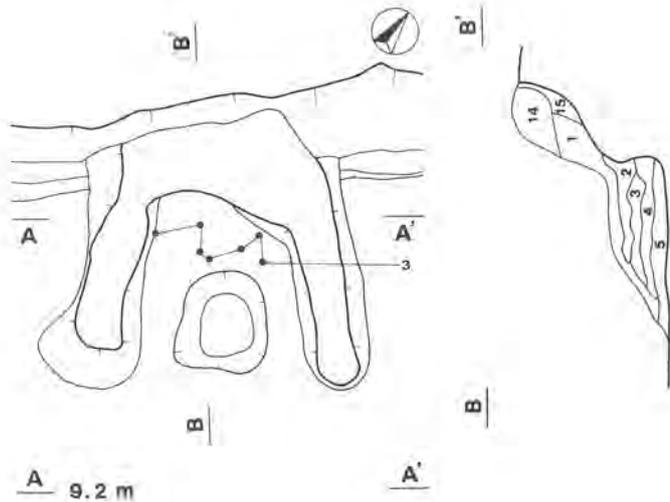
所見 本跡は、古墳時代前期の住居跡である。

第24号住居跡出土遺物観察表

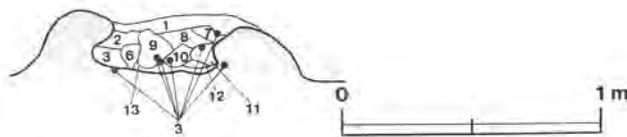
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第26図 1	甕 土師器	A 17.2 B 21.7 C 5.9	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面ハケ目整形後横ナデ。胴部外面斜位のハケ目整形。内面ヘラナデ。	砂粒、長石、パミス 橙色 普通	P-197 90% 南西壁際床面
2	甕 土師器	A [19.0] B (14.6)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾。	口縁部内・外面斜位のハケ目整形。胴部外面斜位のハケ目整形。内面ヘラナデ。	砂粒、雲母、パミス 橙色 普通	P-198 30% 北東壁際床面
3	甕 土師器	A [17.0] B (12.1)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面斜位のハケ目整形。胴部外面斜位のハケ目整形。内面ヘラナデ。	砂粒、パミス、礫 橙色 普通	P-199 25% 東コー ナー付近床面
4	甕 土師器	A [16.6] B ( 5.3)	口縁部片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面斜位のハケ目整形。内面横位のハケ目整形。	砂粒、パミス 橙色 普通	P-200 10% 南東 壁際覆土下層
5	小形甕 土師器	A 12.4 B 10.7 C 5.2	平底。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ハケ目整形。内面ヘラナデ。	砂粒、雲母、礫 橙色 普通	P-201 100% 南東 壁際床面直上
6	埴 土師器	A 12.4 B 7.4 C 2.0	丸底。底部中央に窪み。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部外面ハケ目整形。胴部外面ヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒、パミス、スコ リア 赤褐色 普通	P-202 90% 南コーナー付近 床面
7	小型埴 土師器	A 10.7 B 6.5 C 2.1	丸底。底部中央に窪み。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部・胴部外面ヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ。	砂粒、雲母、パミス 橙色 普通	P-203 98%南コーナー 付近床面
8	埴 土師器	A 13.9 B 5.7	口縁部は外傾する。	口縁部内・外面ヘラ磨き。内・外面赤彩痕。	砂粒、パミス 暗赤色 良	P-204 40% 南東壁際床面
9	高坏 土師器	B ( 8.1)	脚部片。脚部は中実で、ほぼ直立する。	磨滅著しく調整不明。	砂粒、雲母、スコ リア 黄橙色 不良	P-205 20% 貯蔵穴内
10	手捏土器 土師器	A 7.6 B 4.6 C 4.2	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部外面横ナデ。内面ハケ目整形。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒、雲母、パミス 橙色 普通	P-206 100% 北東壁際床面
11	手捏土器 土師器	A 5.9 B 3.9 C 4.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。底部内面に指頭圧痕。	砂粒、雲母、スコ リア 黄橙色 普通	P-207 100% 北東コーナー付 近床面
12	手捏土器 土師器	A 6.1 B 3.4 C 4.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	体部内・外面ハケ目整形。底部内面指頭圧痕。	砂粒、雲母、パミス にぶい橙色 普通	P-208 100%北東コー ナー付近床面
13	手捏土器 土師器	A 6.5 B 3.8 C 4.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	体部内・外面わずかにハケ目整形。底部内面指頭圧痕。	砂粒、長石、パミス 橙色 普通	P-209 100%北東コー ナー付近床面
14	手捏土器 土師器	A 5.5 B 3.6 C 3.2	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	体部内・外面軽いナデ。底部指頭圧痕。	砂粒、パミス 浅黄橙色 普通	P-210 100%北東コー ナー付近床面
15	手捏土器 土師器	A 5.0 B 3.8 C 4.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面に指頭圧痕。	砂粒、雲母、長石 橙色 普通	P-211 100%北東コー ナー付近床面



第27图 第18・25号住居跡実測図(1)



第29図 第25号住居跡出土遺物実測図



第28図 第18号住居跡竈実測図

第25号住居跡 (第27図)

位置 調査区の東部, B8d9区。

重複関係 本跡は, その大半が第18号住居跡, 第9・15号土坑, 第1号地下式壙によって掘り込まれており, 本跡が古い。

規模と平面形 長軸 [6.0] m・短軸 [5.6] m の方形と推定される。

主軸方向 N-70°-E

壁 壁高は53~73cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 遺存部は, 平坦である。

覆土 7層 (第9層~第15層) からなる。第9層はローム小・中ブロックを少量, 砂粒を極少量含む暗褐色土, 第10層はローム小・中ブロックを中量含む極暗褐色土, 第11層はローム小・中ブロックを中量含む暗褐色土, 第12層はローム小・中ブロックを少量, 焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土, 第13層はローム小・中ブロックを少量含む黒褐色土, 第14層はローム小・中ブロックを少量含む褐色土, 第15層はローム粒子を少量, 焼土小ブロックを極少量含む灰褐色土である。自然堆積である。

遺物 中央部覆土上層から極少量の土師器が出土している。第29図1・2の高坏脚部は中央部覆土上層から出土している。

所見 本跡は, 古墳時代前期の住居跡である。

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第29図 1	高坏 土師器	B ( 8.3)	脚部片。中実柱状を呈し, 脚部は直線的である。	脚部外面へラ磨き。脚部外面赤彩。	砂粒, 雲母, 礫 赤色 普通	P-158 20% 中央部覆土上層
2	高坏 土師器	B ( 6.0)	脚部片。中実柱状を呈し, 脚部は直線的である。	脚部外面横位のへラ磨き。脚部外面赤彩。	砂粒, バミス, 礫 赤色 普通	P-159 15% 中央部覆土上層

第29号住居跡 (第30図)

位置 調査区の中央部, B5i7区。

規模と平面形 長軸4.2m・短軸4.1mの方形。

主軸方向 N-21°-W

壁 トレンチャーによる攪乱を受け、大半が破壊されている。残存する壁は、比較的硬く締まっている。壁高は10~24cmで、外傾して立ち上がる。

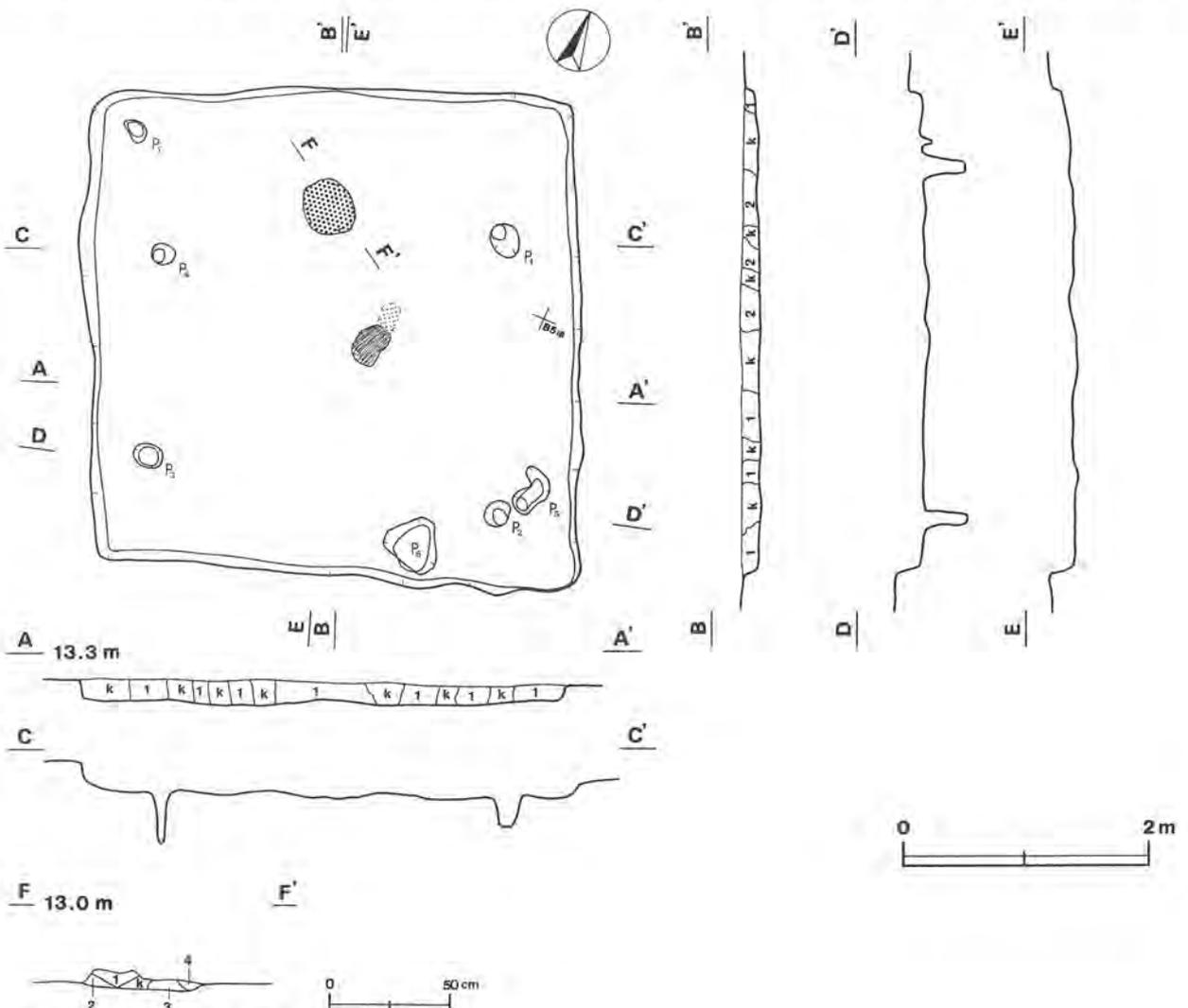
床 残存する床面は、中央部付近が硬く締まっている。

ピット 7カ所(P<sub>1</sub>~P<sub>7</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径18~30cmの円形で、深さ59~84cmである。主柱穴と考えられる。

P<sub>5</sub>~P<sub>7</sub>は、径15~47cmの円形で、深さ30~46cmである。補助柱穴と考えられる。

炉 床中央より北寄りにあり、長径54cm・短径40cmの楕円形で、深さは3cmである。覆土は4層からなり、第1層はローム粒子・焼土粒子・砂粒を少量含む褐色土、第2層はローム粒子を中量、焼土粒子・炭化物を極少量含む褐色土、第3層はローム粒子を中量、砂粒・焼土粒子を極少量含む褐色土、第4層はローム粒子を少量、砂粒・焼土粒子を極少量含む褐色土である。炉床は、あまり焼けてはいない。

覆土 2層からなるが、攪乱のため遺存状態は不良である。第1層はローム粒子を中量含むにぶい褐色土、第2層はローム粒子を中量、焼土粒子を極少量含む褐色土である。炉の南側の覆土下層には、焼土が堆積している。

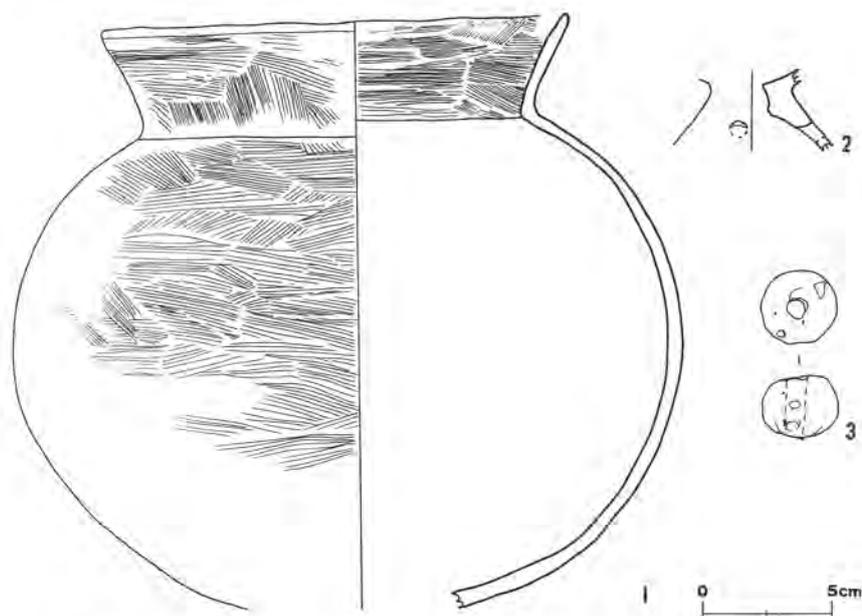


第30図 第29号住居跡実測図

る。自然堆積と考えられる。

遺物 中央部覆土中層から少量の土師器・土玉が出土している。第31図1の甕と2の器台は、炉の東側から出土している。

所見 本跡は、古墳時代前期の住居跡である。



第31図 第29号住居跡出土遺物実測図

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	甕 土師器	A 17.9 B (23.3)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面斜位のハケ目整形。 胴部外面斜位のハケ目整形。	砂粒, 雲母, パミス 橙色 普通	P-229 70% 炉東部覆土下層
2	器台 土師器	B (3.2)	脚部片。脚部は外傾する。	脚部外面へラ削り。	砂粒, パミス 明赤褐色 普通	P-230 30% 炉東部覆土下層

### 第33号住居跡 (第32図)

位置 調査区の西部, C5a2区。

規模と平面形 長軸3.3m・短軸2.8mの方形。

主軸方向 N-6°-E

壁 壁高は8~25cmで、ほぼ外傾して立ち上がる。

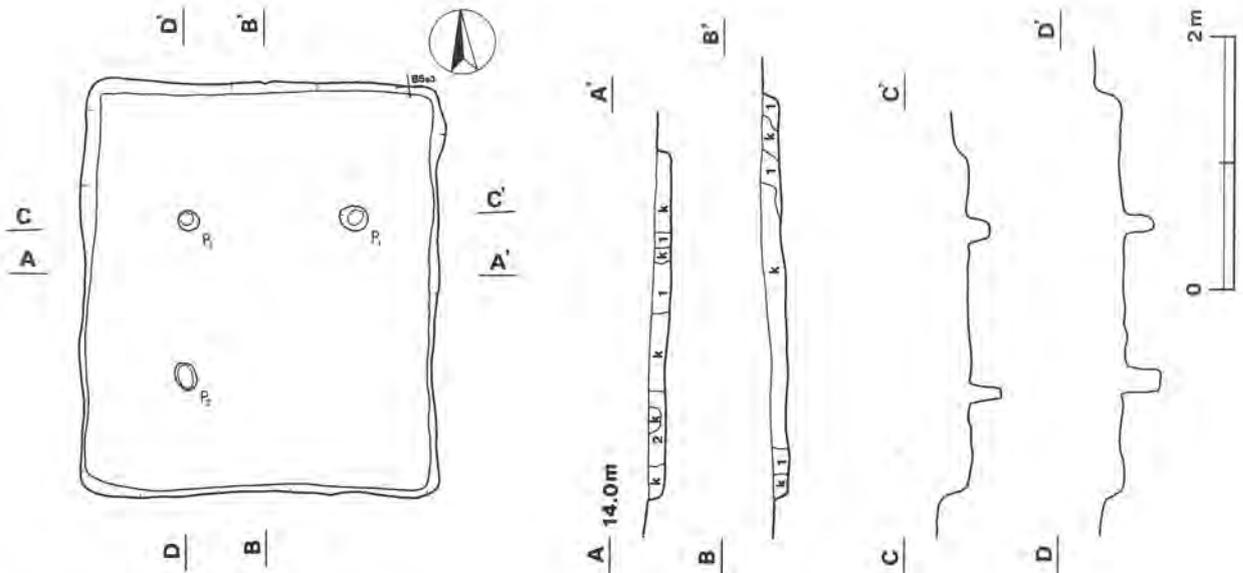
床 トレンチャーによる攪乱を受けている。残在部は平坦であり、特に中央部が硬く締まっている。

ピット 3か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>) P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は、径17~22cmの方形で、深さ17~31cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。他の1か所はトレンチャーにより破壊されてしまったものと考えられる。

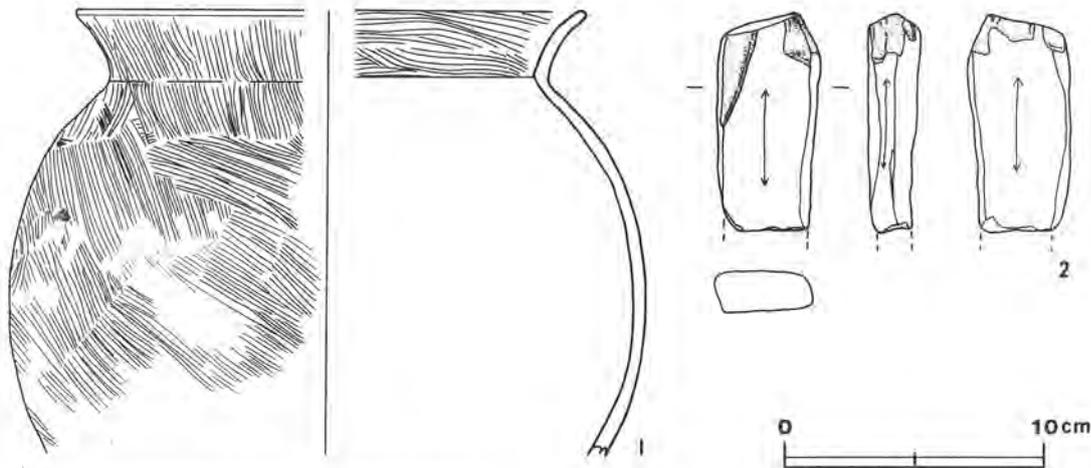
覆土 2層からなる。第1層はローム粒子を少量、炭化物を極少量含む暗褐色土、第2層はローム中ブロックを中量含む暗褐色土である。耕作による攪乱を受けているため、堆積状況は不明である。

遺物 南壁際床面から極少量の土師器・砥石が出土している。第33図1の甕は南壁際中央床面から出土している。

所見 本跡は、古墳時代前期の住居跡である。



第32図 第33号住居跡実測図



第33図 第33号住居跡出土遺物実測図

第33号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第33図 1	甕 土師器	A [14.6] B (17.5)	胴下半部以下欠損。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ口縁部は外反する。	口縁部胴部外面斜位のハケ目整形。 口縁部内面横位のハケ目整形。	砂粒、雲母、バミス 明赤褐色 普通	P-244 5% 中央部床面

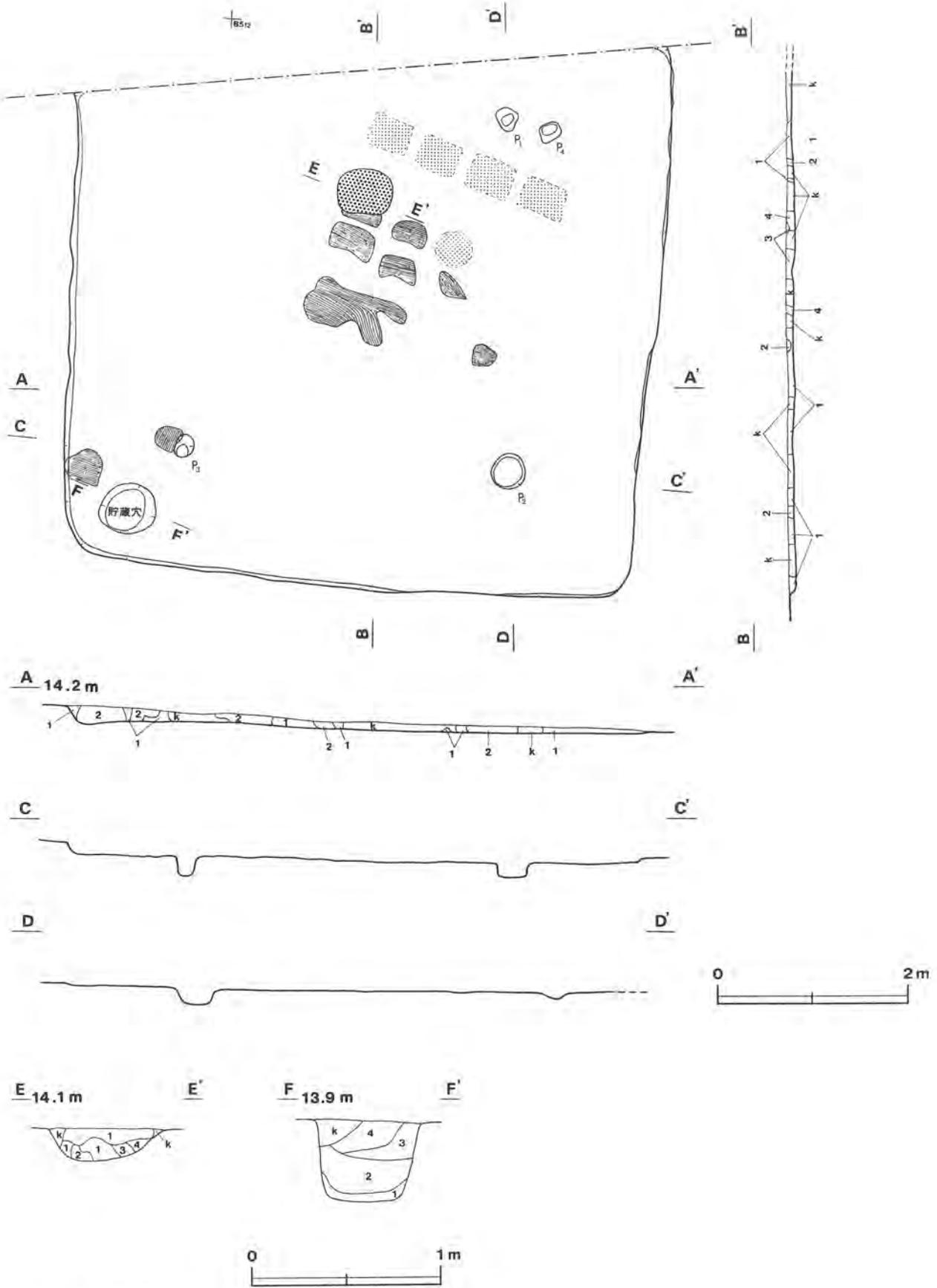
第34号住居跡 (第34図)

位置 調査区の西部, B5f<sub>2</sub>区。

規模と平面形 長軸(7.0)m・短軸5.7mの方形と推定される。本跡の北側は調査区外のため、完掘できなかった。

主軸方向 N-1°-E

壁 壁高は4~13cmで、北・南壁は外傾、西・東壁は垂直に立ち上がる。



第34图 第34号住居跡実測図

床 残存部は、炉周辺が硬く、平坦である。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は、径21~39cmの楕円形で、深さ18~21cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は、径21~25cmの円形で、位置から補助柱穴と考えられる。

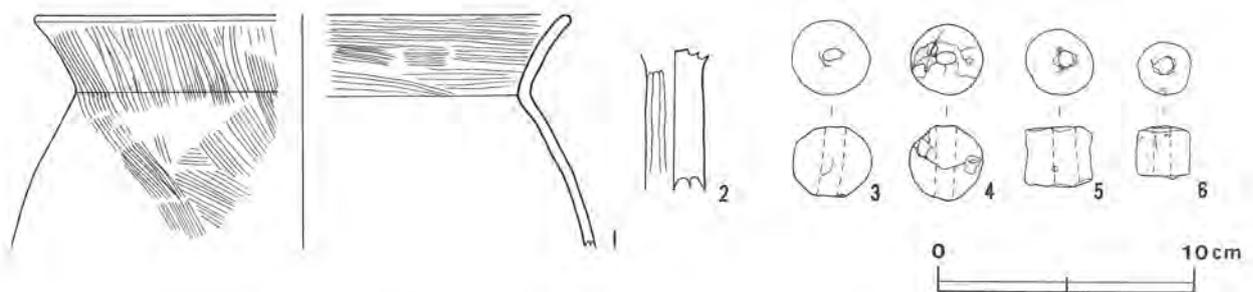
炉 中央やや北寄りに確認され、平面形は楕円形である。規模は、長径50cm、短径40cm、深さ40cmである。炉床は、熱を受け赤変硬化している。覆土は4層からなる。第1層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土、第2層はローム粒子を中量、焼土粒子を極少量含む灰褐色土、第3層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土、第4層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土である。

貯蔵穴 南東コーナー付近に付設される。平面形は円形で、規模は、長さ59cm、幅56cm、深さ43cmである。底面は凹凸していて、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は4層からなる。第1層はローム粒子を中量、焼土粒子・炭化物を極少量含む褐色土、第2層はローム粒子を少量、焼土粒子・炭化物を極少量含む暗褐色土、第3層はローム小・中ブロックを少量、炭化物を極少量含む褐色土、第4層はローム小・中ブロックを中量、炭化物を極少量含む暗褐色土である。

覆土 4層からなる。第1層はローム小・中ブロックを中量、炭化物・焼土小ブロックを極少量含む灰褐色土、第2層はローム小・中ブロックを少量、炭化物を極少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第4層はローム粒子・焼土小ブロックを少量含む褐色土である。耕作による攪乱を受けているため堆積状況は不明である。

遺物 中央部覆土下層から極少量の土師器・土玉が出土している。第35図1の甕は炉内から、2の高坏の脚部片は貯蔵穴内の覆土下層から出土している。本跡の炉の周辺から炭化材・焼土が多量に確認されている。

所見 本跡は、焼失家屋と考えられる。本跡は、古墳時代前期の住居跡である。



第35図 第34号住居跡出土遺物実測図

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第35図 1	甕 土師器	A [20.6] B (9.2)	口縁部片。胴部は内彎して、頸部はくびれ、口縁部は僅かに外反する。	口縁部。胴部外面斜位のハケ目整形。口縁部内面横位のナデ。	砂粒、パミス 橙色 普通	P-237 5% 炉内
2	高坏 土師器	B (5.5)	脚部片。脚部は柱状で直線的。	脚部外面へラ磨き。	砂粒、パミス 明赤褐色 普通	P-238 5% 貯蔵穴内 覆土下層

第3号住居跡（第39図）

位置 調査区の東部，B7g7区。

規模と平面形 長軸6.3m・短軸6.1mの方形。

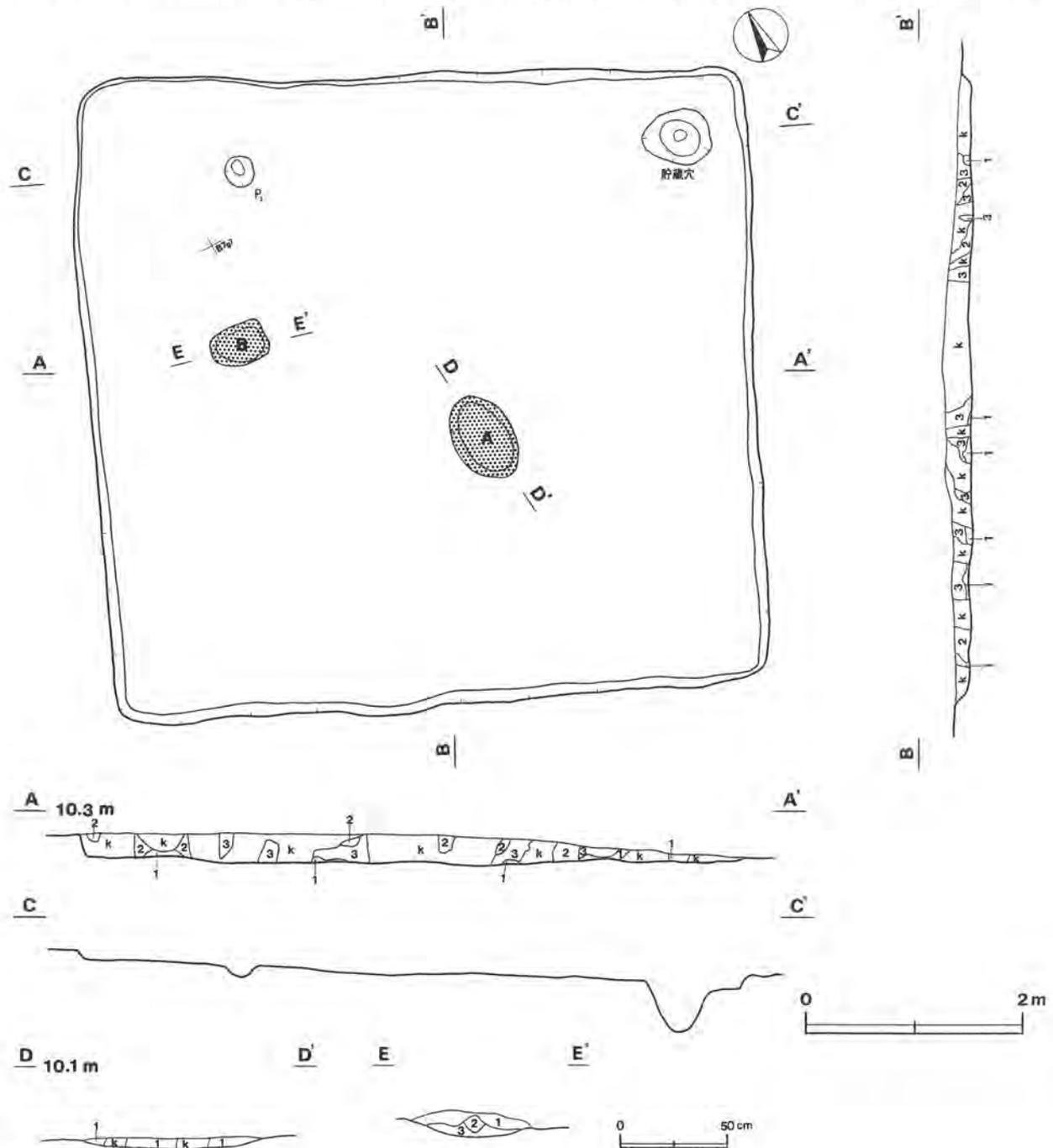
主軸方向 N-63°-W

壁 壁高は7~32cmで，ほぼ外傾して立ち上がる。

床 トレンチャーによる攪乱を受けているが，残存部は平坦であり，南側の壁際の一部が堅くしまっている。

ピット 1カ所。P<sub>1</sub>は，径30cmの円形で，深さ12cmである。P<sub>2</sub>は，規模や位置から支柱穴と考えられる。

炉 2カ所。床面中央よりやや南に炉Aが，やや北西に炉Bが確認された。炉Aは，長軸84cm・短軸56cmの楕円形で，深さ5cmの地床炉である。覆土は1層で，ローム粒子を多量，焼土小ブロックを極少量含むにぶい褐色



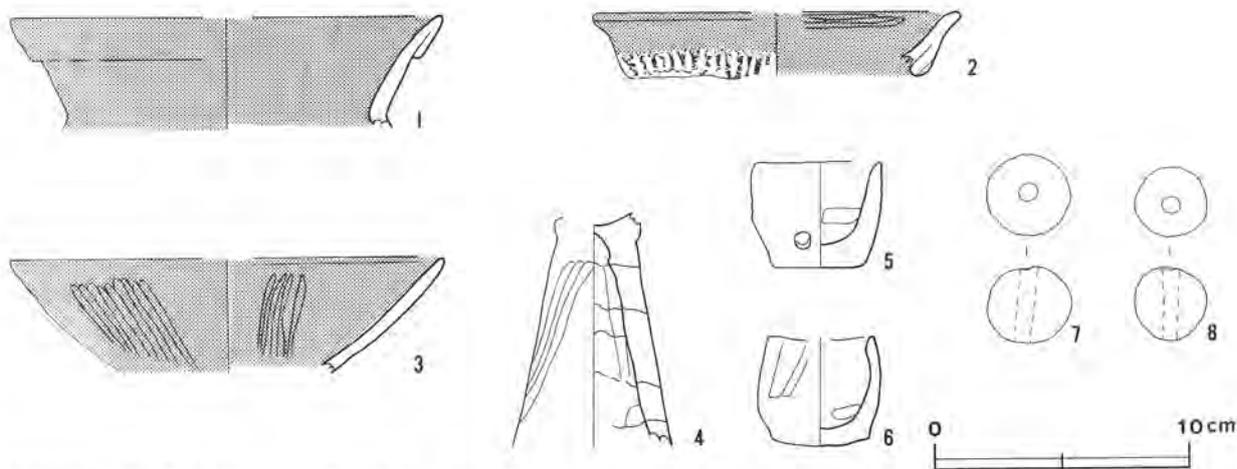
第36図 第3号住居跡実測図

土である。炉Bは、長軸56cm・短軸40cmの楕円形で、深さ10cmの地床炉である。覆土は3層で、第1層はローム粒子・焼土粒子を多量に含む黒褐色土、第2層は焼土粒子を中量含む橙色土、第3層は焼土粒子を多量、ローム粒子を中量、黒褐色土を少量含む橙色土である。ともに遺存状態は悪いが、炉床は赤変硬化している。貯蔵穴 東コーナーに付設されている。長径64cm・短径53cmの楕円形で、深さ48cmである。底面は掃鉢状で、壁は外傾して立ち上がる。

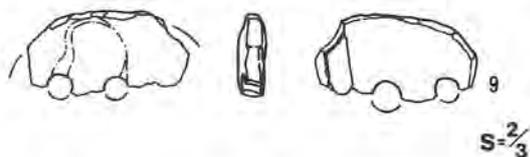
覆土 3層からなるが、攪乱が多く遺存状態は悪い。第1層はローム粒子を多量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第2層はローム粒子・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子・ローム小ブロックを少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土である。

遺物 北部覆土中・下層から、少量の土師器と土玉が出土している。第37図1の壺の口縁部片は北コーナー付近覆土中層から出土している。3の高坏の坏部は北西壁際下層から出土している。

所見 本跡は、古墳時代中期の住居跡である。



第37図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第38図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第37図 1	壺 土師器	A [16.9] B (4.4)	口縁部片。口縁部は外反する。 複合口縁。	口縁部内・外面赤彩痕。	砂粒,長石,スコリア 赤色 普通	P-1 10% 北コーナ ー付近覆土中層
2	壺 土師器	A [14.4] B (2.5)	口縁部片。口縁部は外反する。 複合口縁。	口縁部内・外面赤彩痕。内面へラ磨 き。口縁部直下に刻み。	砂粒,長石,パミス 赤色 普通	P-3 5% 貯蔵穴内
3	高坏 土師器	A [17.0] B (4.5)	坏底部以下欠損。坏部は外傾する。	坏部内・外面赤彩痕。内・外面へラ 磨き。	砂粒,長石,パミス 赤色 普通	P-2 10% 北東壁際下層
4	高坏 土師器	A [3.4] B (9.3)	坏部・裾部欠損。脚部は中空で緩く 外反して開く。	脚部外面へラ磨き。内面に輪積痕が 残る。	砂粒,長石,雲母 明赤褐色 普通	P-4 50% 中央部覆土

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	手握土器 土師器	A [ 4.8] B 4.2 C 3.7	平底。体部はやや外傾して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面に焼成後穿孔。内面ヘラナデ。	砂粒、スコリア 明赤褐色 普通	P-5 95% 中央部床面
6	手握土器 土師器	A [ 4.1] B 4.3 C 3.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面軽いナデ。	砂粒、長石、スコリア 橙色 普通	P-6 40% 中央部覆土

### 第7号住居跡（第39図）

位置 調査区の東部，B8f5区。

規模と平面形 長軸 [5.7] m・短軸6.0mの方形。南側は調査区外のため調査できなかった。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は、24～58cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

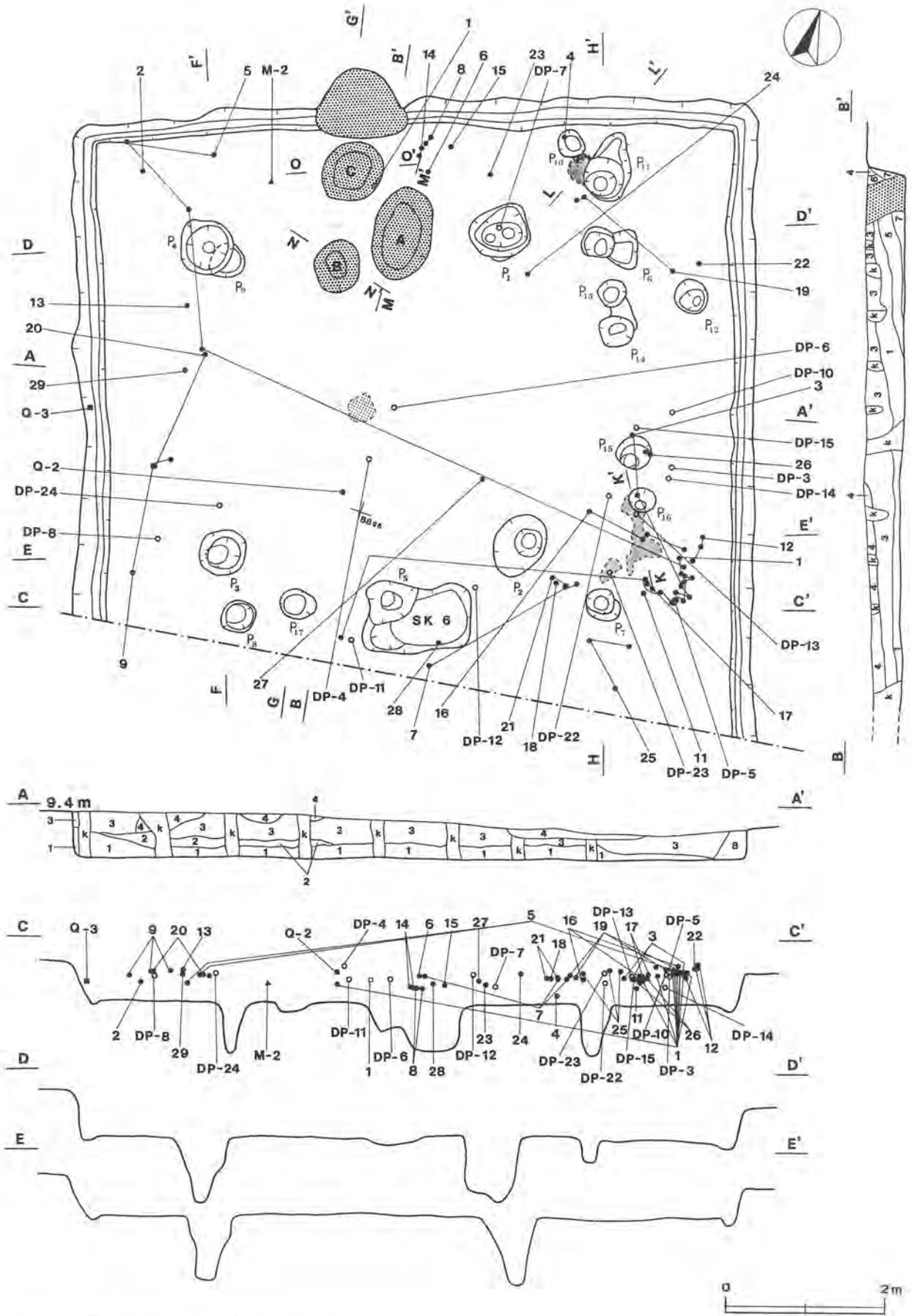
床 平坦であり、特に竈前面や中央部が堅緻である。

ピット 5か所（P<sub>1</sub>～P<sub>17</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は、径58～84cmの円形で、深さ82～88cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は径53cmの円形で、深さ61cmである。位置から、出入口に伴うピットと考えられる。P<sub>6</sub>～P<sub>17</sub>は、径24～40cmの円形で、深さ34～40cmである。規模や配列から柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>とP<sub>6</sub>～P<sub>17</sub>については、柱穴の主軸が異なる。

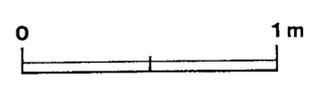
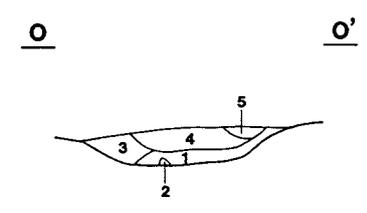
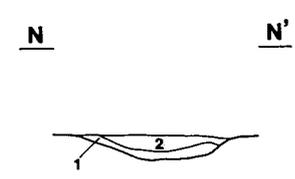
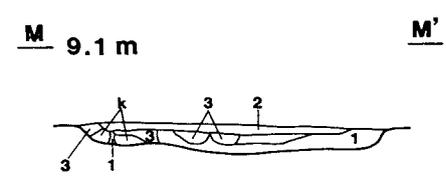
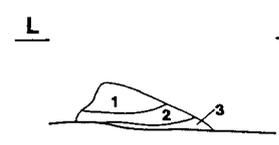
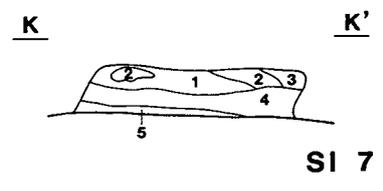
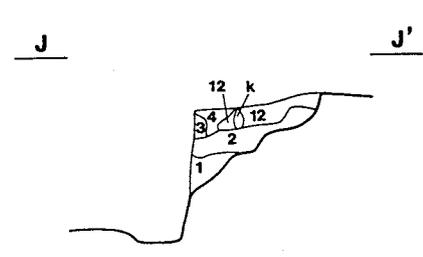
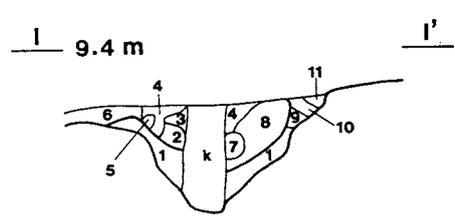
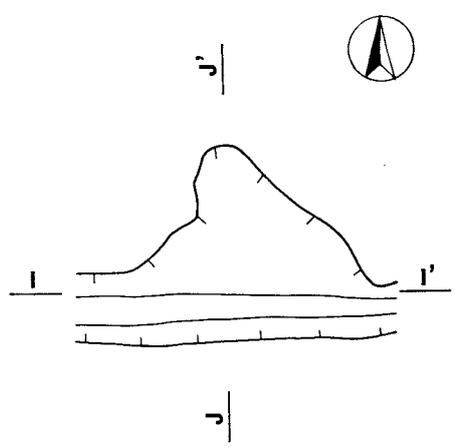
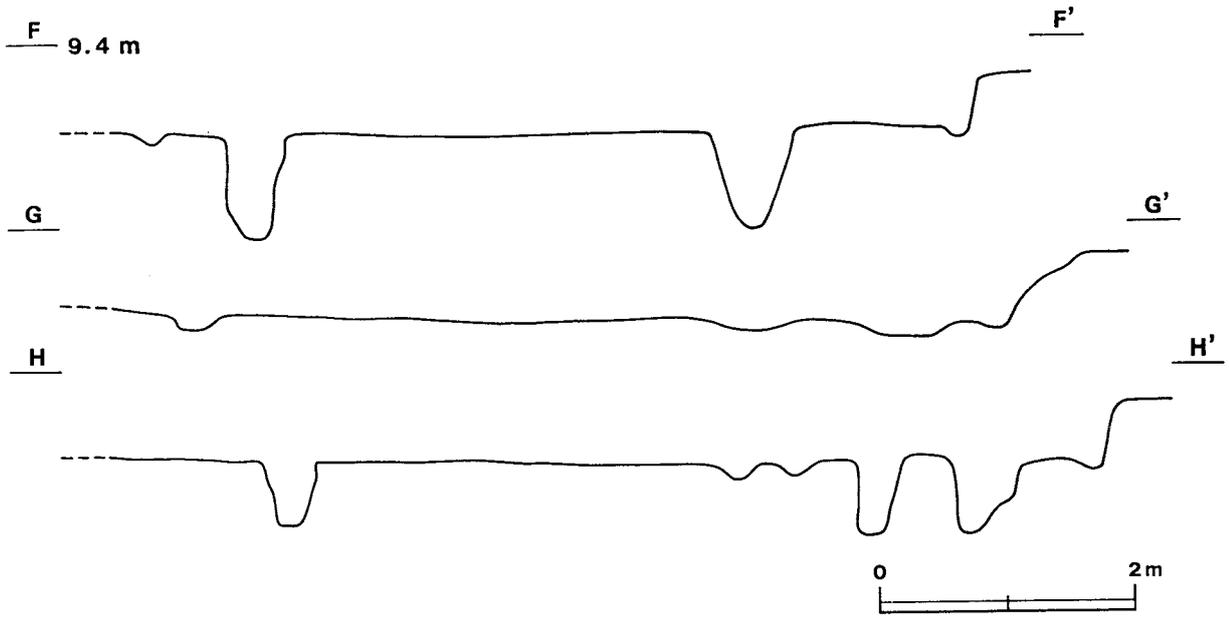
竈 北壁中央部を壁外に48cm程掘り込み、砂や粘土で構築されている。規模は長さ63cm、幅83cmである。天井部は、崩落しているが、袖部は遺存状態が良い。火床は熱を受けて赤変硬化している。煙道部は火床部から外傾して立ち上がっている。覆土は12層からなる。第1層はローム粒子・焼土小ブロックを少量、炭火物・砂を極少量含む褐色土、第2層はローム中ブロックを極少量、砂を中量、焼土小ブロックを少量含む褐色土、第3層は焼土小ブロックを中量、砂を少量含むにぶい赤褐色土、第4層は、砂を少量、ローム小・中ブロック・焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土、第5層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土、第6層はローム小・中ブロックを少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第7層は砂を中量、焼土ローム小ブロックを極少量含む褐色土、第8層は砂を中量、焼土小・中ブロック・炭化物を極少量含む褐色土、第9層はローム粒子を中量含む灰褐色土、第10層はローム粒子を少量、焼土小ブロックを極少量含む褐色土、第11層はローム粒子を少量含む褐色土、第12層は砂を中量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子を極少量含むにぶい褐色土である。

炉庭 竈の南側には、3基の炉庭（炉庭A、炉庭B、炉庭C）が確認された。炉庭Aは、長径121cm・短径72cmの楕円形で、深さ14cmである。覆土は3層からなる。第1層はローム中ブロックを多量含むにぶい褐色土、第2層は焼土小・中ブロックを少量、ローム粒子を極少量含む灰褐色土、第3層は焼土粒子を多量含む赤褐色土である。炉庭Bは、長径87cm・短径70cmの楕円形で、深さは14cmである。覆土は2層からなる。第1層はローム粒子を中量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第2層はローム粒子・焼土小・中ブロックを少量含む褐色土である。炉庭Cは、長径67cm・短径57cmの楕円形で、深さ14cmである。覆土は5層からなる。ローム粒子を中量、焼土小・中ブロックを少量含む褐色土、第2層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土、第3層はローム小ブロックを少量、砂・焼土小ブロック・炭化物を極少量含む褐色土、第4層は焼土粒子を多量、ローム小ブロックを極少量含む明赤褐色土、第5層はローム中ブロック・炭化物を極少量、焼土小・中ブロックを中量含む褐色土である。いずれも底面は堅く締まっており、炉庭Cの底面は赤変硬化している。炉庭Cについては、竈の炉床である可能性がある。

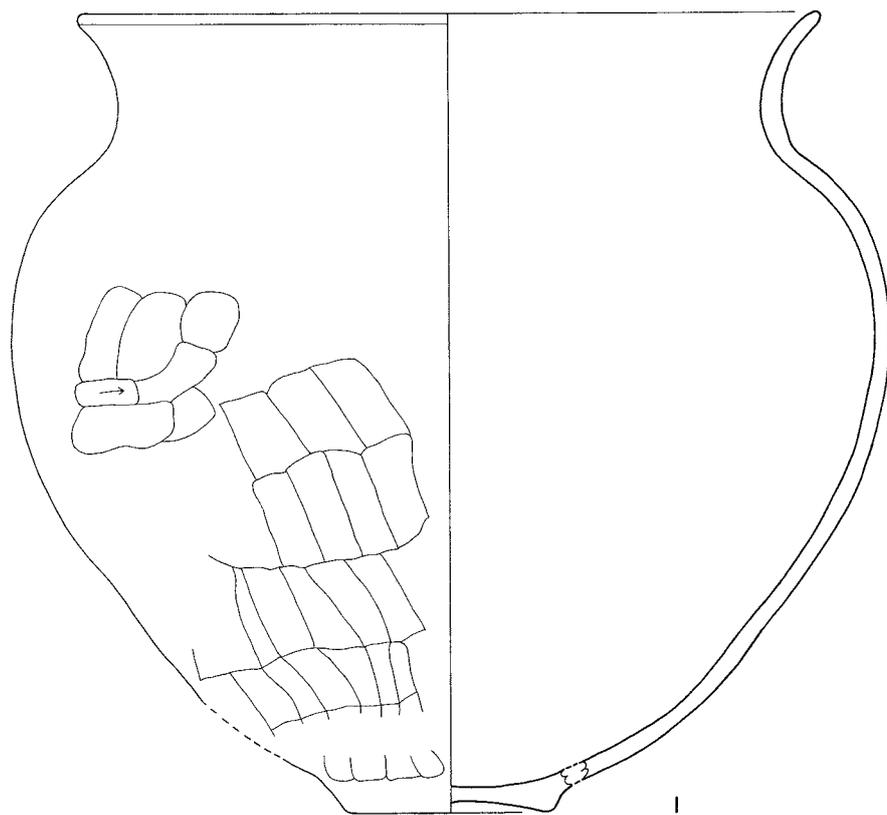
覆土 8層からなる。第1層はローム粒子を少量、ローム小ブロックを中量、炭化物を極少量含む褐色土、第2層はローム小ブロックを少量、砂粒を極少量含む黒褐色土、第3層はローム小ブロックを少量、焼土小ブ



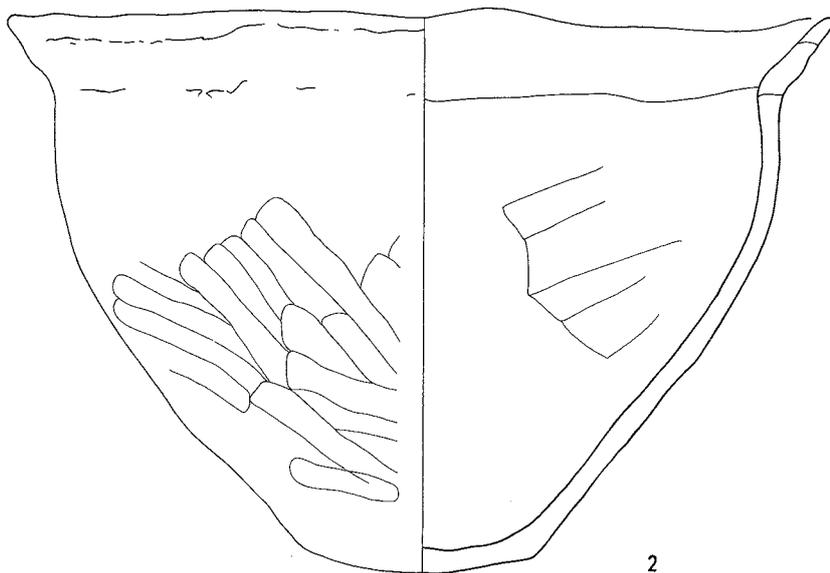
第39图 第7号住居跡実測図(1)



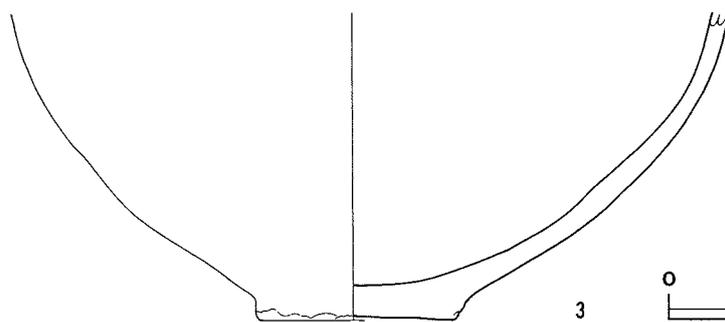
第40図 第7号住居跡・竈実測図(2)



1



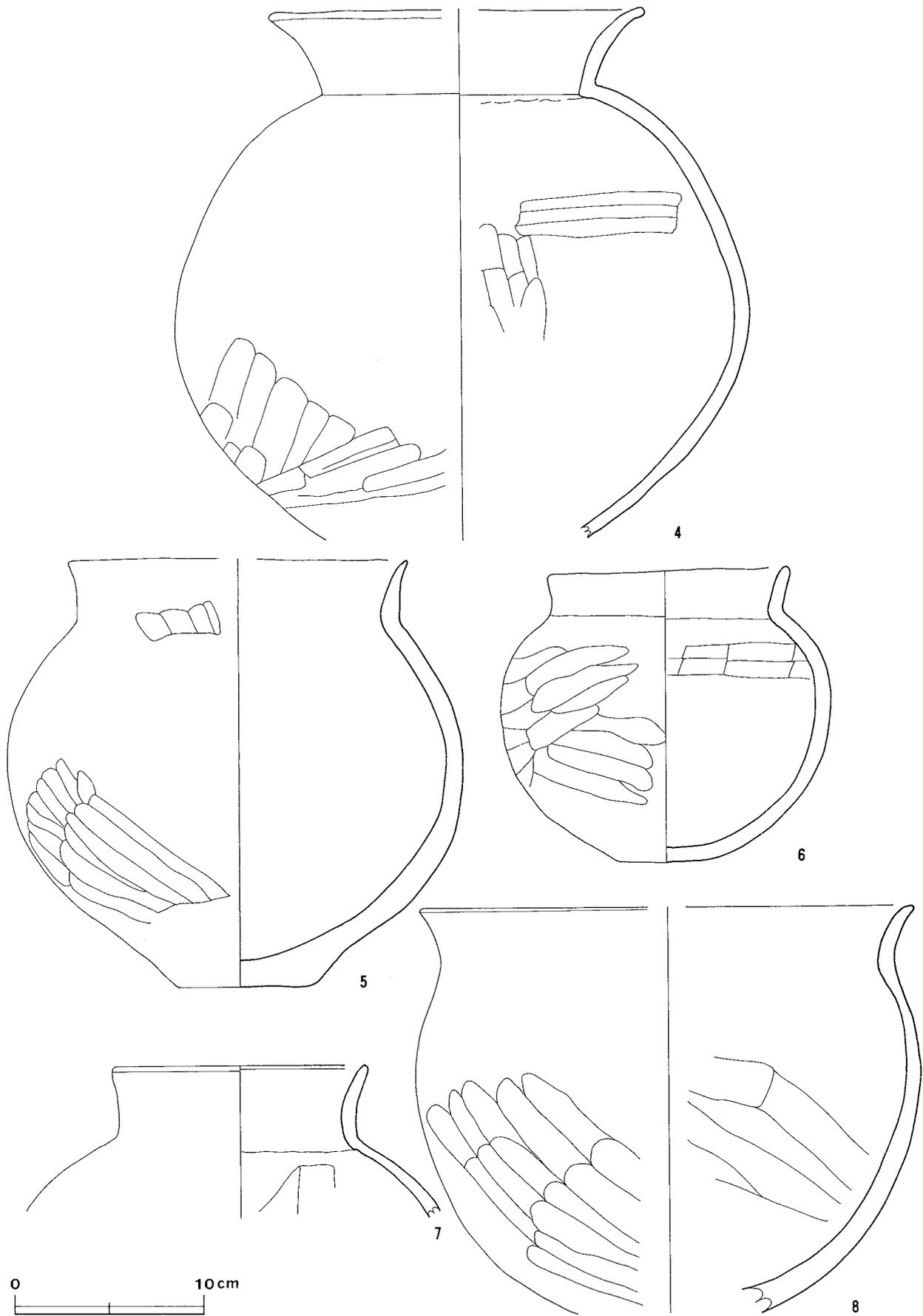
2



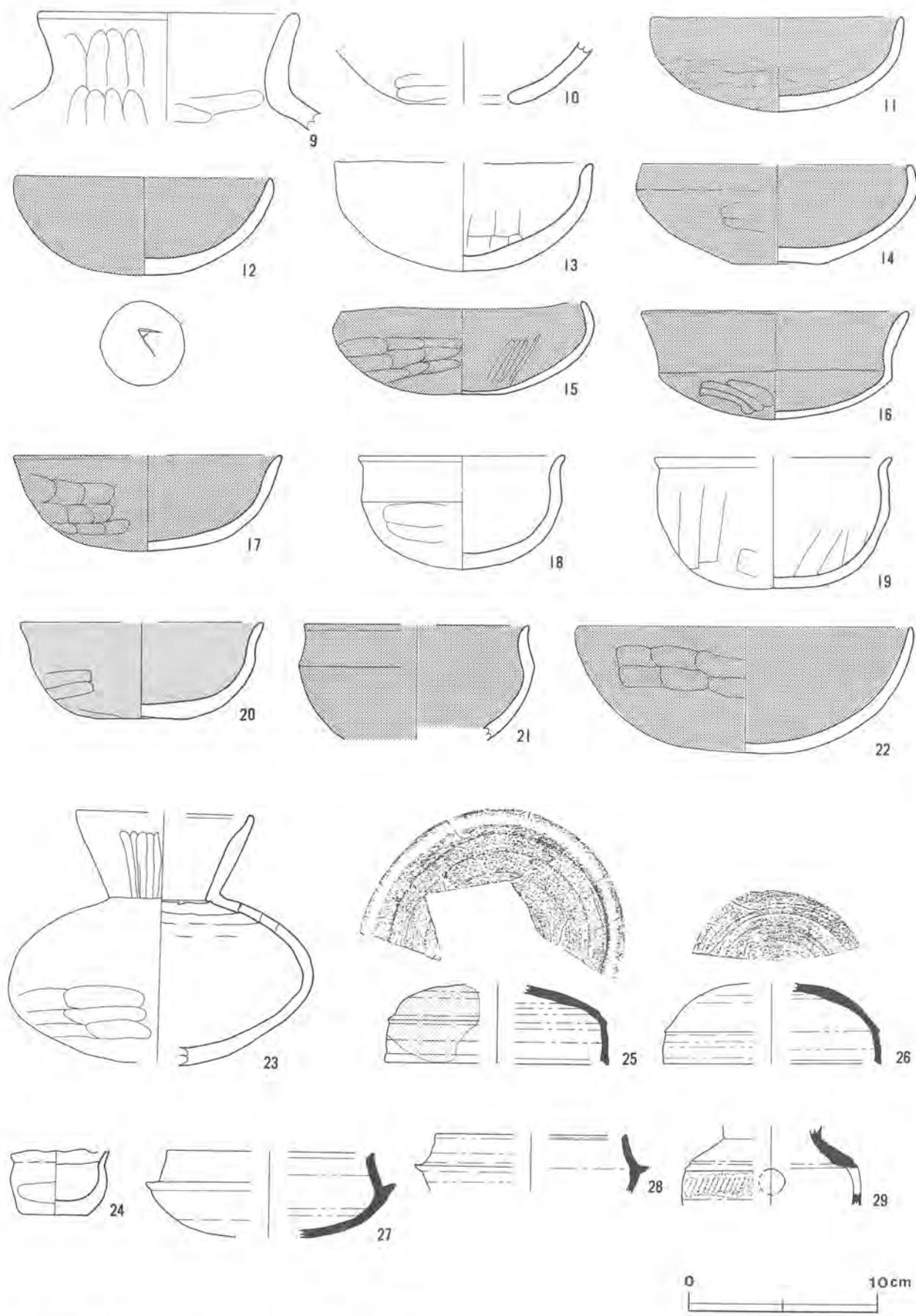
3



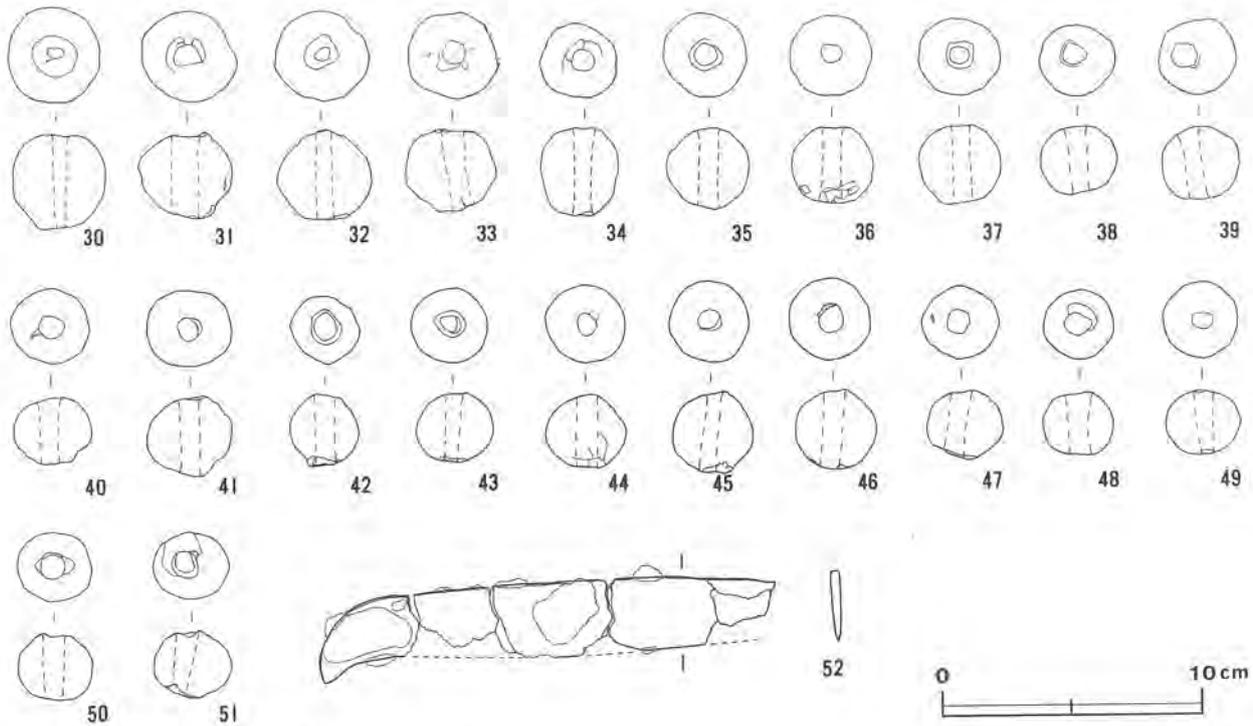
第41图 第7号住居跡出土遺物実測図(1)



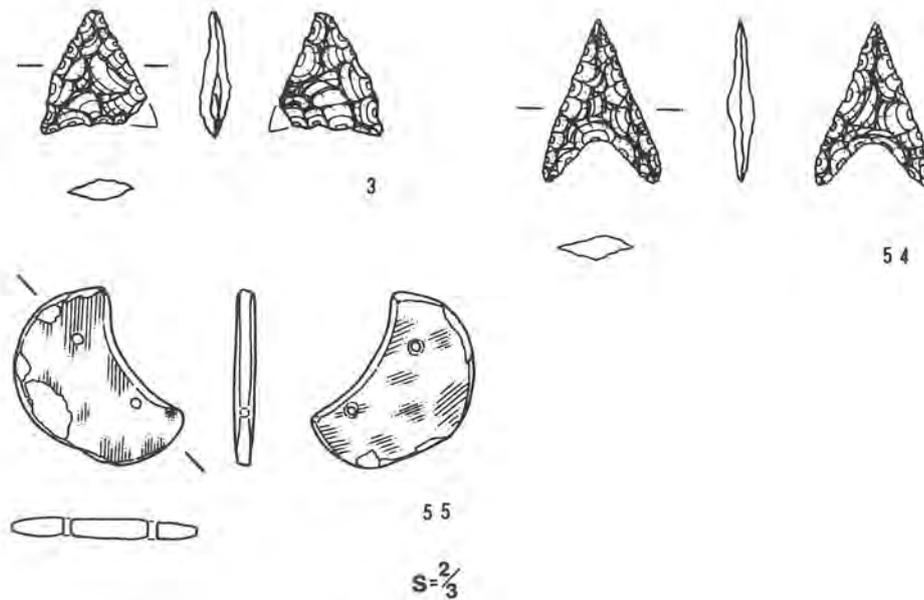
第42図 第7号住居跡出土遺物実測図(2)



第43图 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)



第44号 第7号住居跡出土遺物実測図(4)



第45図 第7号住居跡出土遺物実測図(5)

ックを極少量含む黒褐色土，第4層はローム粒子・炭化物を極少量含む黒褐色土，第5層はローム小・中ブロックを中量，焼土小ブロック・炭化物を極少量含む黒褐色土，第6層はローム粒子を多量含むにふい褐色土，第7層はローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含む黒褐色土，第8層はローム小ブロックを極少量含む暗褐色土である。自然堆積と考えられる。

遺物 覆土中・下層から多量の土師器・極少量の須恵器・鉄鎌・多量の土玉・石鏃・石製模造品が出土している。第41図2の鉢，第42図5の甕は北西コーナー付近覆土中から逆位で，第43図25の須恵器の杯は南東コーナー付近の覆土から出土している。第43図27の坏，第43図26の坏蓋，第43図29の甕は中央部覆土中層から出土している。第44図52の鎌は竈前面の覆土から出土している。石鏃は流れ込みである。

所見 本跡は、古墳時代中期の住居跡である。また、覆土中での重複はなく柱穴の主軸が異なることから、拡張して建て直された住居跡であることが考えられる。

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第41図 1	甕 土師器	A 28.8 B (32.5)	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒,長石,バミス 赤色 普通	P-27 65% 南東コーナー 付近覆土中層
2	鉢 土師器	A 32.3 B 22.1	平底。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。内面へラナデ。口縁部外面に輪積痕が残る。	砂粒,雲母,長石 橙色 普通	P-31 60% 北西コーナー 付近覆土中層
3	甕 土師器	A [12.2] B 7.7	丸底。胴部はほぼ球形を呈し、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。口縁端部を面とりする。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面ナデ。	砂粒,バミス,スコ リア 橙色 普通	P-35 40% 南東コーナー 付近覆土中層
第42図 4	甕 土師器	A [20.2] B (28.3)	底部欠損。胴部は内彎気味に立ち上がる。頸部はくびれ、口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒,雲母,バミス 明赤褐色 普通	P-29 50% 竈東側付近床面
5	甕 土師器	A [17.8] B 23.1 C 6.8	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。頸部はややくびれ口縁部は緩やかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。	砂粒,長石,バミス 橙色 普通	P-28 90% 北西コーナー 付近覆土中層
6	甕 土師器	A 12.7 B 15.8 C 5.0	平底。胴部は、内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部はやや外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,雲母,長石 明赤褐色 普通	P-32 90% 竈東側 付近覆土中層
7	甕 土師器	A 13.3 B (8.2)	胴中央部以下欠損。胴部は、内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面へラナデ。	砂粒,バミス 赤色 普通	P-33 20% 南東コーナー 付近覆土中層
8	甕 土師器	A [26.2] B 21.8	平底。胴部は、内彎して立ち上がり、頸部は緩やかにくびれ口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒,雲母,長石 橙色 普通	P-30 45% 竈東側 付近覆土下層
第43図 9	壺 土師器	A [13.5] B (6.2)	胴上半部以下欠損。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部外面へラ削り後、口縁部内・外面横ナデ。内面へラナデ。	砂粒 橙色 普通	P-34 15% 南西コーナー 付近覆土中層
10	甗 土師器	B (3.3) C [6.0]	底部片。無底式。胴部は内彎気味に立ち上がる。	胴下半部へラ削り。	砂粒,雲母,バミス にふい橙色 普通	P-36 5% 中央部覆土中層
11	坏 土師器	A 13.5 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒,長石,バミス にふい赤褐色 不良	P-38 98% 南東コーナー 付近覆土中層
12	坏 土師器	A 13.6 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。底部外面へラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒,雲母,バミス 赤色 普通	P-47 50% 南西コーナー 付近覆土上層
13	坏 土師器	A 13.6 B 6.9	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面剥離している。	砂粒,細礫,雲母 橙色 不良	P-40 85% 中央部覆土中層
14	坏 土師器	A [14.4] B 5.4 C 4.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒,長石,礫 橙色 普通	P-43 35% 竈東側 付近覆土中層
15	坏 土師器	A 13.0 B 5.1 C 4.6	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部へラ削り後へラナデ。内面へラ磨き。内・外面赤彩痕。	砂粒,細礫,雲母 明赤褐色 普通	P-37 100% 竈東側 付近覆土中層
16	坏 土師器	A 14.2 B 5.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に明瞭な稜をもち口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒,細礫,雲母 明赤褐色 普通	P-39 90% 南東コーナー 付近寄覆土
17	坏 土師器	A [14.4] B 5.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。外面へラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒,バミス,スコ リア 赤色 普通	P-42 25% 南東コーナー 付近覆土上層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
18	埴土師器	A [11.0] B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒, スコリア, パミス 赤色 普通	P-44 35% 南東コーナー 付近覆土中層
19	埴土師器	A [12.6] B 7.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒, 長石, 礫 にぶい黄橙色 普通	P-48 40% 北東コーナー 付近覆土上層
20	埴土師器	A [13.0] B 5.2	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面ナデ後黒色処理。	砂粒, 雲母, パミス 明赤褐色 普通	P-49 55% 中央部覆土上層
21	埴土師器	A [12.0] B 6.2	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内・外面赤彩痕。	砂粒, 雲母, パミス 橙色 普通	P-41 25% 南東コーナー 付近寄覆土
第43図 22	鉢土師器	A 17.6 B 6.9	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒, 雲母, 長石 赤色 普通	P-46 85% 東壁際 付近覆土上層
23	埴土師器	A [ 9.5] B (13.6)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部から頸部にかけてへラ磨き。胴下半部へラ削り後へラナデ。	砂粒, 長石, 礫 明赤褐色 良	P-45 60% 竈東側 付近覆土中層
24	手握土器 土師器	A 5.4 B 3.5 C 3.5	平底。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒, 長石, スコリア 橙色 普通	P-50 95% 中央部覆土上層
25	坏蓋 須恵器	A 12.0 B ( 4.2)	天井と口縁の境の稜は、わずかに鋭きをもつ。口縁端部は傾斜し、凹面を有する。	水挽き成形。口縁部横ナデ。天井部回転へラ削り。天井部から口縁部にかけて部分的に自然釉。	砂粒, 長石, 礫 外・灰黄褐色 内・灰色 普通	P-51 45% 南東コーナー 付近覆土上層
26	坏蓋 須恵器	A [11.6] B ( 4.4)	天井と口縁の境の稜は、わずかに鋭きをもつ。口縁端部は傾斜している。	水挽き成形。口縁部内・外面横ナデ。天井部回転へラ削り。口縁部に自然釉。	砂粒, 長石, 礫 灰色 普通	P-53 25% 東壁際 中央部覆土上層
27	坏 須恵器	A [11.0] B ( 4.6)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に鋭い稜をもち、口縁部は内傾する。	水挽き成形。口縁部内・外面横ナデ。体部下端回転へラ削り。	砂粒, 長石, 礫 褐色 普通	P-52 30% 中央部覆土上層
28	坏 須恵器	A [ 9.8] B ( 3.1)	体部上半欠損。体部は内彎して、口縁部との境に鋭い稜をもつ。口縁部は内傾する。	水挽き成形。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒, 長石, パミス 褐灰色 普通	P-55 15% 南壁際 中央部覆土中層
29	聴 須恵器	B ( 4.3)	体部片。体部は内彎して立ち上がる。体部上方に円孔を穿孔。	水挽き成形。	砂粒, パミス 灰色 普通	P-54 15% 中央部覆土下層

## 第8号住居跡（第46図）

位置 調査区の東部，B8f8区。

重複関係 本跡の北西コーナー付近と第4号土坑が重複している。第4号土坑を本跡が削平しているので、本跡が新しい。

規模と平面形 長軸不明・短軸4.0mの方形と推定される。本跡の南側は、調査区外のため調査できなかった。

主軸方向 N-14°-W

壁 壁高は15～30cmでほぼ外傾して立ち上がっている。

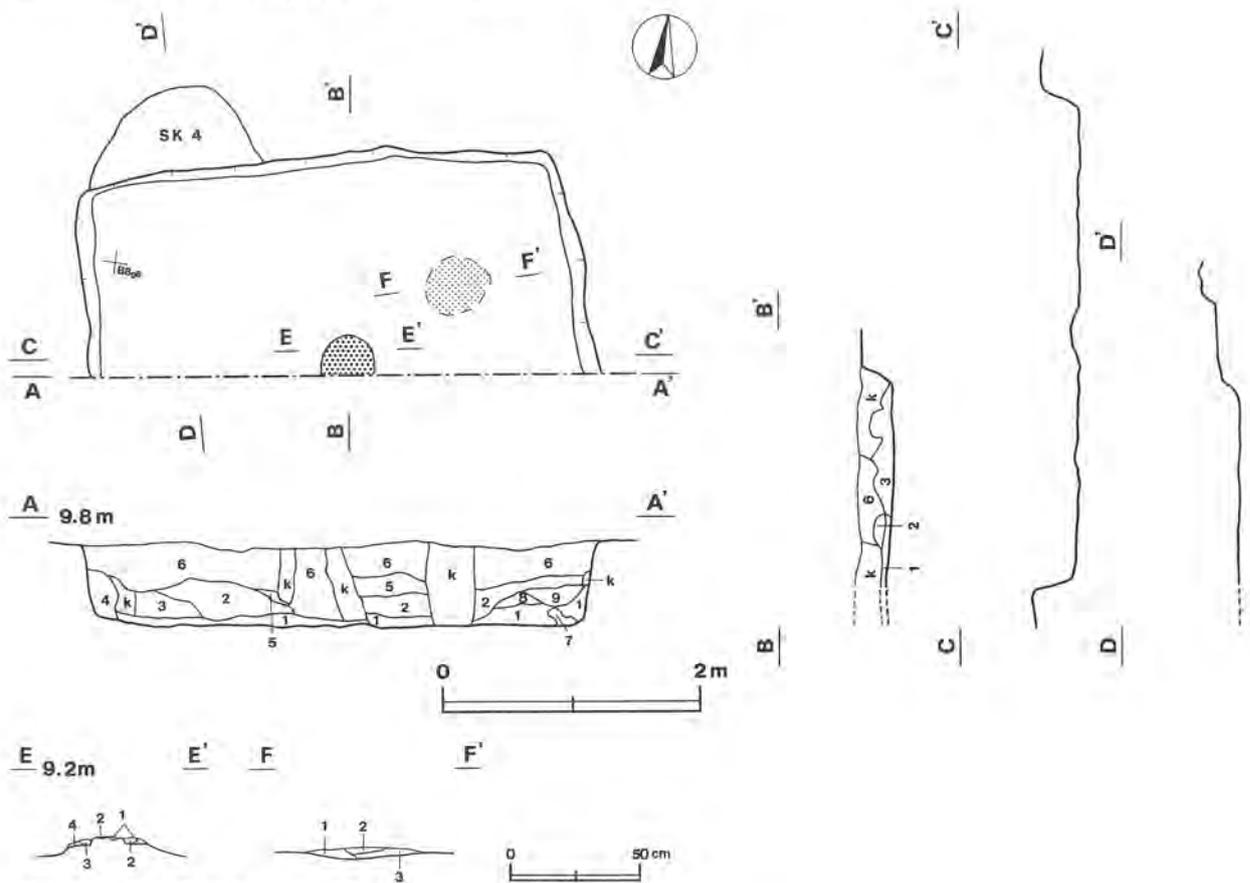
床 平坦であり硬く、特に炉の周辺が堅緻である。

炉 床中央部に位置する。長径43cm・短径35cmの楕円形で、深さ6cmである。覆土は4層からなる。第1層はローム粒子を中量含む褐色土，第2層はローム粒子を少量，焼土粒子を極少量含む褐色土，第3層はローム粒子・焼土粒子を極少量含む褐灰色土，第4層はローム粒子を中量含む褐色土である。炉床は、遺存状態が良く赤変硬化している。炉の北東側には焼土が堆積している。覆土は3層からなる。第1層はローム粒子を中量，焼土小ブロックを極少量含む褐色土，第2層はローム粒子を中量，焼土粒子を少量含むにぶい赤褐色土，第3層はローム粒子を多量，焼土粒子を少量含むにぶい褐色土である。

覆土 9層からなる。第1層はローム粒子を少量、ローム小ブロックを極少量含む黒褐色土、第2層はローム小・中ブロック・ローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第3層はローム粒子・ローム小・中ブロックを少量、炭化物・焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土、第4層はローム粒子中量、炭化物を極少量含む灰褐色土、第5層はローム粒子を多量含む明褐色土、第6層はローム粒子・ローム小・中ブロックを少量、炭化物・焼土小・中ブロックを極少量含む暗褐色土、第7層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土、第8層はローム粒子・焼土粒子を少量含む暗褐色土、第9層はローム粒子・炭化物を極少量含む黒褐色土である。

遺物 炉の周辺や北部覆土中・下層から少量の土師器・土玉・石製模造品・石匙が出土している。第47図2の小型甕は炉の東側床面から横位で、3の小型甕は北壁中央覆土下層から正位で出土し、5の高坏は中央部覆土中層から逆位で出土している。石匙は流れ込みである。

所見 本跡は、古墳時代中期の住居跡である。

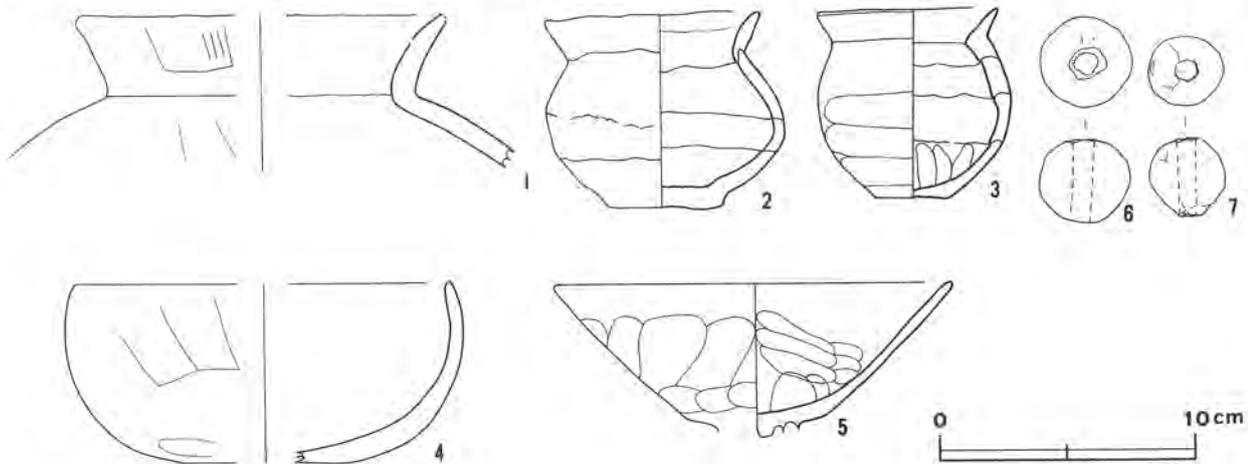


第46図 第8号住居跡実測図

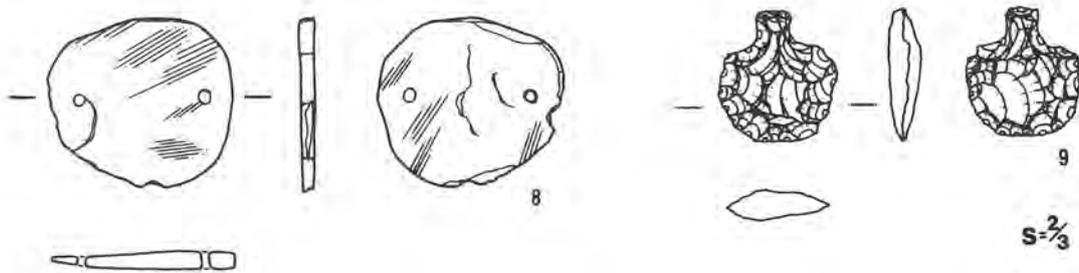
第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第47図 1	甕 土師器	A [14.0] B [6.0]	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外反して立ち上がる。	口縁部外面ハケ目整形。	砂粒、長石、雲母 赤色 普通	P-56 5% 北西壁際床面
2	小型甕 土師器	A 8.3 B 7.8 C 4.3	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部外面指頭圧痕。内面に輪積痕。	砂粒、長石、ハミス 赤色 普通	P-57 100% 中央部床面
3	小型甕 土師器	A 7.1 B 7.6 C 2.9	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。	胴部外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面に輪積痕。口縁部内面にハケ目整形。	砂粒、長石、ハミス 橙色 普通	P-58 95% 北西部覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	鉢 土師器	A [14.6] B 7.1 C [7.0]	底部欠損。体部は内燻して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面へラ削り後へラナデ。 内面へラナデ。	砂粒、パミス 明赤褐色 普通	P-59 35% 中央部覆土中層
5	高 土師器	A 15.4 B (5.9)	脚部欠損。坏底部にはふい稜をもち口縁部は外傾する。	坏部内・外面へラ削り後へラナデ。	砂粒、長石、雲母 赤色 普通	P-60 50% 西北部覆土下層



第47図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第48図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

### 第9号住居跡（第49図）

位置 調査区の東部，B8f9区。

規模と平面形 長軸4.9m・短軸4.8mの方形。本跡は、南コーナー付近が調査区外となっており調査できなかった。

主軸方向 N-38°-W

壁 壁高は40~47cmで、ほぼ外傾して立ち上がる。

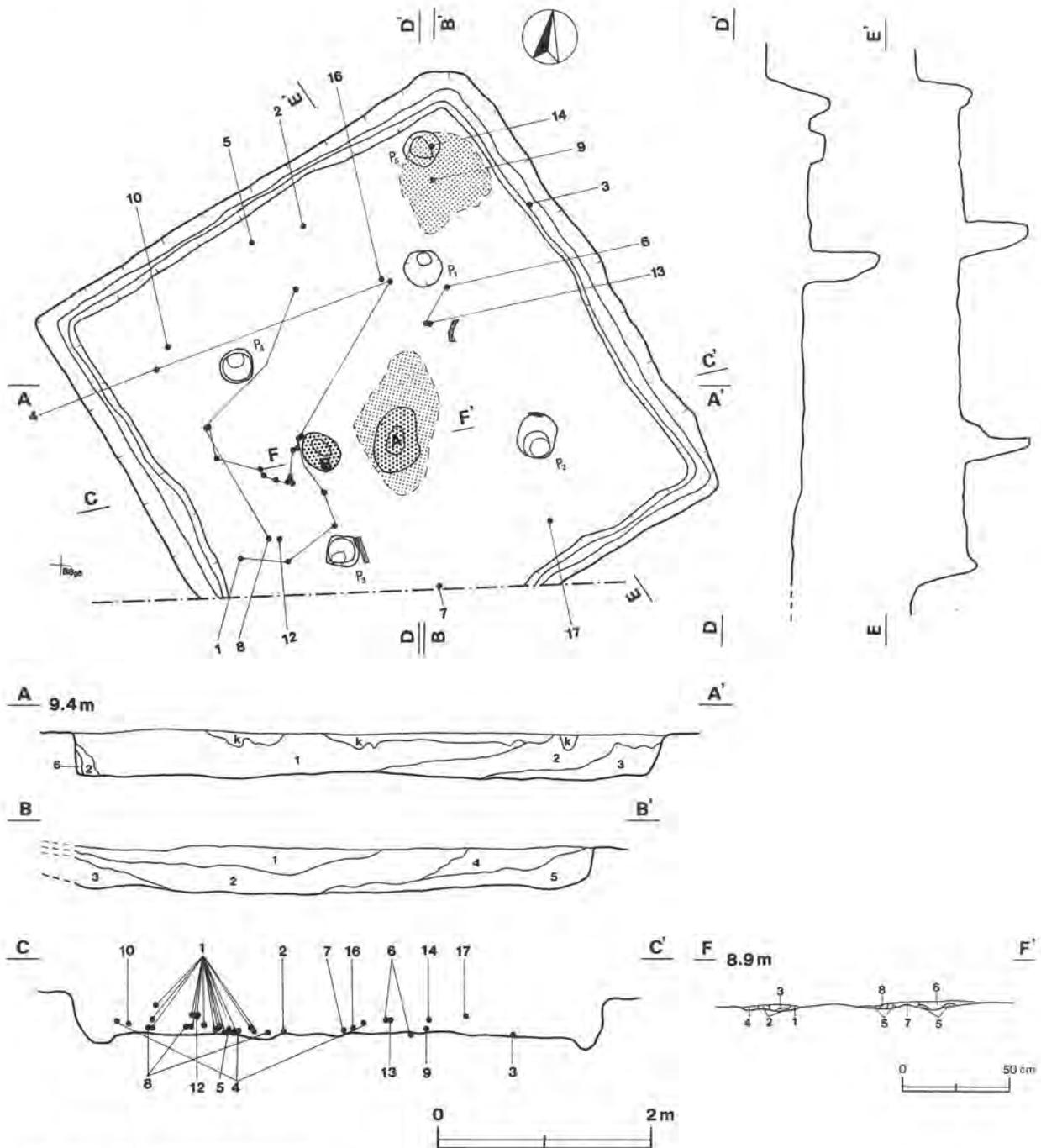
壁溝 壁下を全周し、上幅20cm、深さは10cm程で、断面形は「U」字状である。

床 平坦であり、特に中央部が堅緻である。南コーナー付近は、一段高くなっており、特に硬く締まっているため、出入り口部と考えられる。

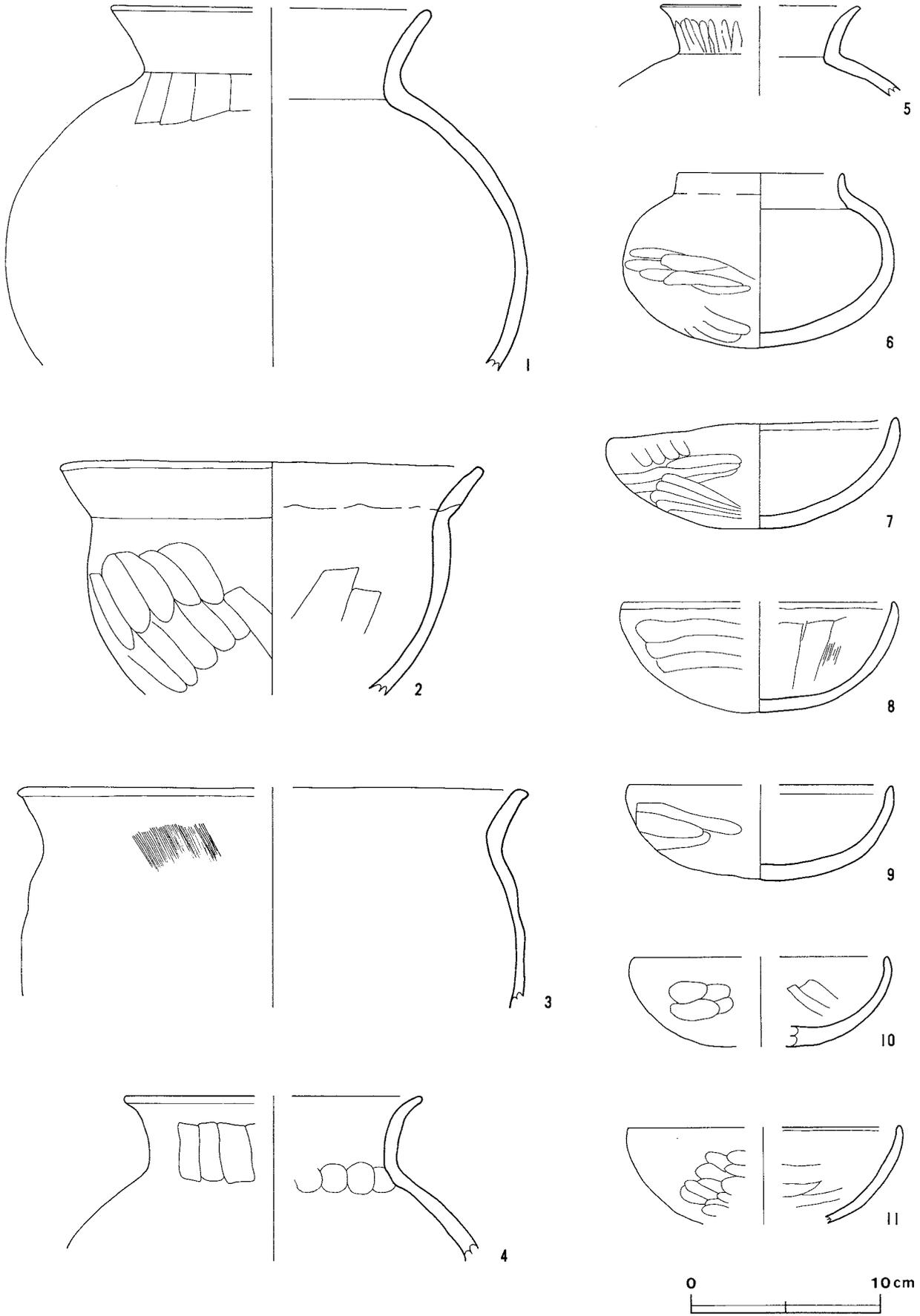
ピット 5か所（P<sub>1</sub>~P<sub>5</sub>）。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は径32~43cmの円形で、深さ64~67cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は、長径36cm・短径32cmの楕円形、深さ24cmで、補助柱穴と考えられる。

炉 2か所（炉A・炉B）。平面形は炉Aが長楕円形、炉Bが楕円形。規模はAが長径65cm、短径45cm、深さ3cm程で、Bが長径41cm、短径33cm、深さ5cm程である。炉Aの覆土は4層（第5層~第8層）からなる。

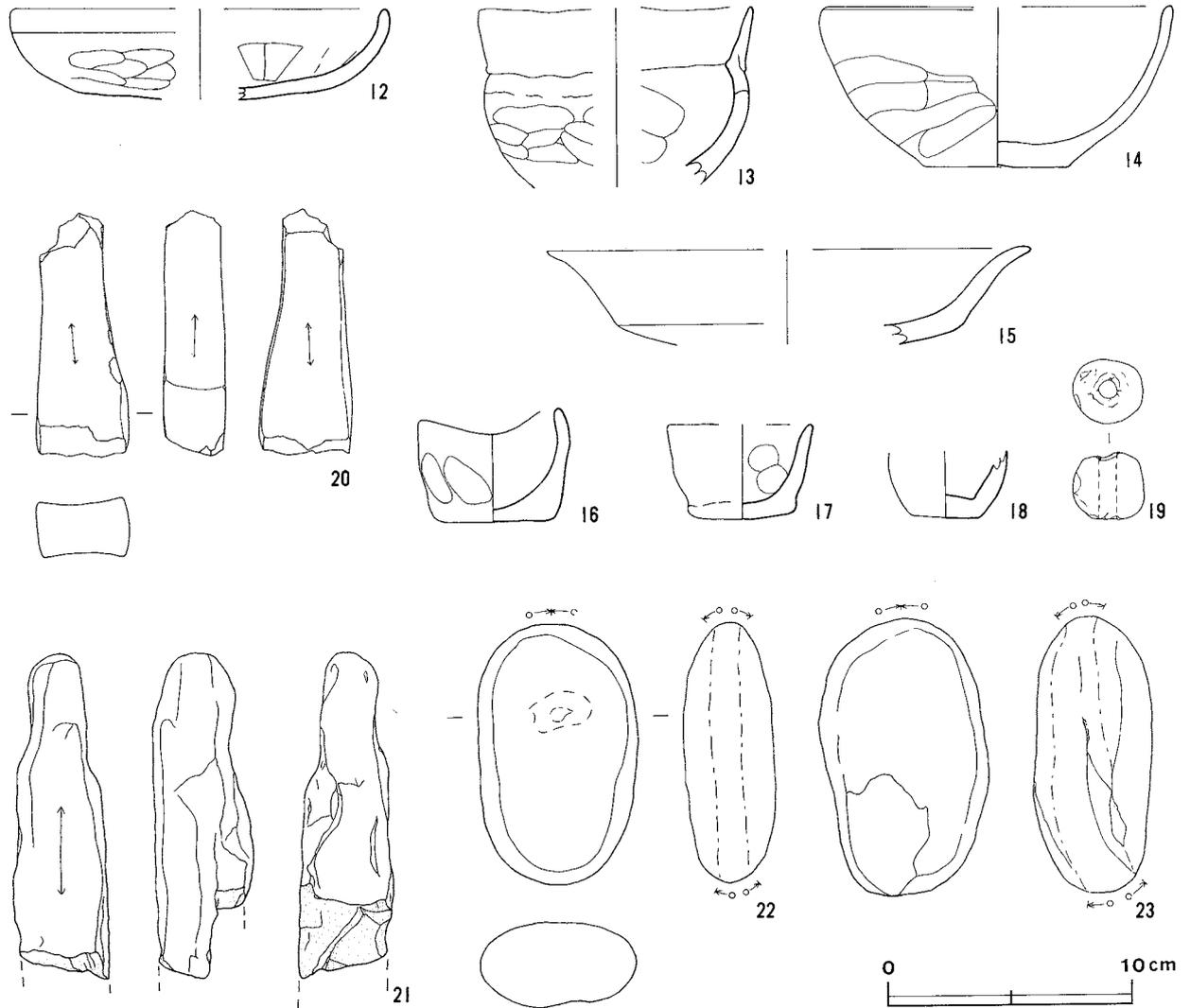
第5層はローム粒子を中量、焼土小ブロックを少量含む褐色土、第6層はローム小・中ブロックを少量、焼土粒子を極少量含む灰褐色土、第7層はローム粒子を極少量、焼土中ブロックを中量含むにぶい赤褐色土、第8層はローム粒子を多量含む明るい褐色土である。炉Bの覆土は4層(第1層～第4層)からなる。第1層はローム粒子を中量含む褐色土、第2層は焼土粒子を多量含む暗赤褐色土、第3層はローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含む褐色土、第4層はローム粒子を中量、焼土粒子を極少量含む灰褐色土である。A、Bともに炉床は焼けて赤変硬化している。



第49図 第9号住居跡実測図



第50图 第9号住居跡出土遺物実測図(1)



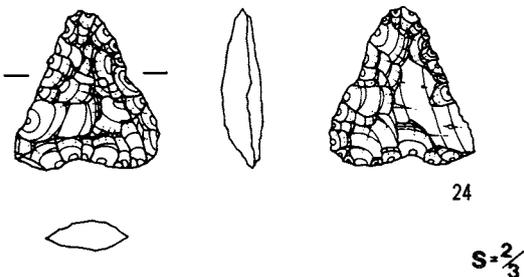
第51図 第9号住居跡出土遺物実測図(2)

覆土 6層からなる。第1層はローム小・中ブロックを少量、炭化物・焼土粒子極少量含む黒褐色土、第2層はローム小・中ブロック中量、炭化物・焼土を少量含む暗褐色土、第3層はローム小・中ブロックを少量、焼土小ブロック・炭化物を極少量含む暗褐色土、第4層はローム小・中ブロック少量、炭化物を極少量含む灰褐色土、第5層はローム小・中ブロックを少量、焼土小ブロック・炭化物を極少量含む暗褐色土、第6層はローム粒子を多量含む褐色土である。自然堆積と考えられる。

遺物 覆土下層から土師器・砥石・磨石・土玉・石鏃未製品が出土している。第50図1の甕は中央部南西寄りの床面から、第50図4の甕は北西壁際中央床面から、第51図14の坏は北コーナー床面から正位で、第50図6の

鉢が中央部床面から逆位で出土している。本跡の炉の周辺や北コーナー付近から焼土や炭化材が少量出土している。石鏃未製品は流れ込みである。

所見 本跡は、焼土や炭化材が少量みられたことから焼失住居と思われる。本跡は、古墳時代中期の住居跡である。



第52図 第9号住居跡出土遺物実測図(3)

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第50図 1	甕 土師器	A [17.0] B (19.2)	胴下半部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ口縁部は外傾する。	頸部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒,長石,パミス 赤褐色 普通	P-61 50% 中央部床面
2	甕 土師器	A 22.4 B (12.5)	胴下半部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒,パミス 黒褐色 普通	P-62 55% 北西壁 中央付近床面
3	甕 土師器	A [27.0] B (11.8)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部から頸部にかけてハケ目整形。	砂粒,パミス 橙色 普通	P-63 15% 北東壁 中央付近床面
4	甕 土師器	A [15.6] B ( 8.9)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面に指頭圧痕。	砂粒,パミス,雲母 明赤褐色 普通	P-65 10% 中央部覆土下層
5	甕 土師器	A [10.4] B ( 4.6)	口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面ハケ目整形。内面ナデ。	砂粒,パミス,スコリア 明赤褐色 普通	P-64 5% 北西壁 中央付近床面
6	短頸壺 土師器	A 8.8 B 9.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,長石 明赤褐色 普通	P-67 95% 中央部床面
7	坏 土師器	A 15.3 B 5.9	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,雲母,パミス 明赤褐色 普通	P-72 100% 中央部床面
8	坏 土師器	A [14.4] B 5.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,長石 明赤褐色 普通	P-73 50% 中央部床面
9	坏 土師器	A [14.0] B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,雲母 明赤褐色 普通	P-68 50% 北コーナー付近床面
10	坏 土師器	B (13.5) C [ 4.8]	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,雲母,パミス にぶい橙色 普通	P-70 30% 西コーナー付近床面
11	坏 土師器	A [14.3] B ( 5.2)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,長石 明赤褐色 普通	P-69 30% 中央部覆土中層
第51図 12	坏 土師器	A [15.4] B ( 3.8)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,長石 明赤褐色 普通	P-71 25% 中央部覆土上層
13	碗 土師器	A [11.2] B ( 7.4)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒,パミス,雲母 橙色 普通	P-66 30% 中央部覆土中層
14	鉢 土師器	A [14.4] B 6.7 C 6.0	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒,パミス 赤褐色 普通	P-74 40% 北コーナー 付近覆土下層
15	高坏 土師器	A [20.0] B 4.0	坏底部,脚部欠損。坏部下半に稜をもち、口縁部は大きく外反する。	口縁部外面へラ削り。	砂粒,パミス,スコリア 外・黒褐色,内・ にぶい褐色 普通	P-75 5% 中央部覆土中層
16	手握土器 土師器	A 5.8 B 4.8 C 4.7	平底。体部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部は僅かに内傾する。	体部下端に指頭圧痕。	砂粒,パミス 橙色 普通	P-76 95% 中央部床面
17	手握土器 土師器	A [ 6.0] B 4.0 C 4.4	平底。体部はわずかに内彎して立ち上がり、口縁部はほぼ外傾する。	内面指頭圧痕。	砂粒,パミス 橙色 普通	P-77 60% 南東床面
18	手握土器 土師器	B ( 2.8) C [ 2.7]	口縁部欠損。平底。体部は外傾する。	内面軽いナデ。	砂粒,スコリア,パミス 橙色 普通	P-78 50% 中央部覆土中層

第14号住居跡（第10図）

位置 調査区の東部，B9e<sub>1</sub>区。

重複関係 本跡の北西部は，第17号住居跡の南東コーナー付近を掘り込み，本跡の竈を第16号住居跡が削平しているため，第17号住居跡より新しく，第16号住居跡より古い。

規模と平面形 長軸5.5m・短軸5.1mの方形。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は，7～42cmで，ほぼ外傾して立ち上がっている。

床 平坦であり，柱穴を結んだ線の内側が堅緻である。

ピット 6か所（P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径29～34cmの円形で，深さ45～50cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>～P<sub>6</sub>は，径21～32cm，深さ30～49cmで，補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部壁ぎわで，若干の焼土や砂質粘土がみられるため，北壁中央部に構築されていたと推定される。

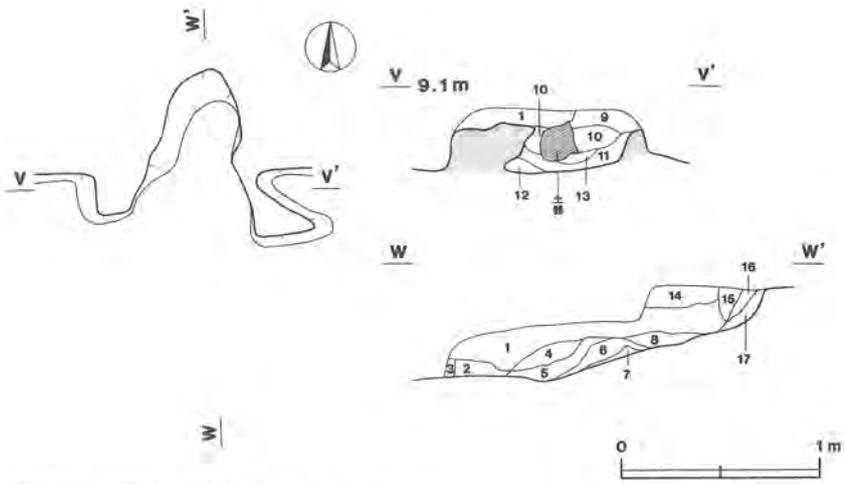
貯蔵穴 南西コーナーに付設されている。長径80cm・短径68cmの不整楕円形で深さ50cmである。底面は平坦で，壁は外傾して立ち上がっている。

遺物 全域の覆土中・下層から多量の土師器・須恵器・土玉・磨石・砥石・浮子・剥片・石篋が出土している。第55図1の甕は貯蔵穴内から横位で，第55図12の鉢は貯蔵穴周辺から正位で出土し，第56図16の須恵器の杯は斜位で貯蔵穴内から，第56図15の杯は西壁中央覆土から逆位で出土している。第55図4の甑は，第16号住居跡の遺物であり，剥片と石篋は流れ込みである。

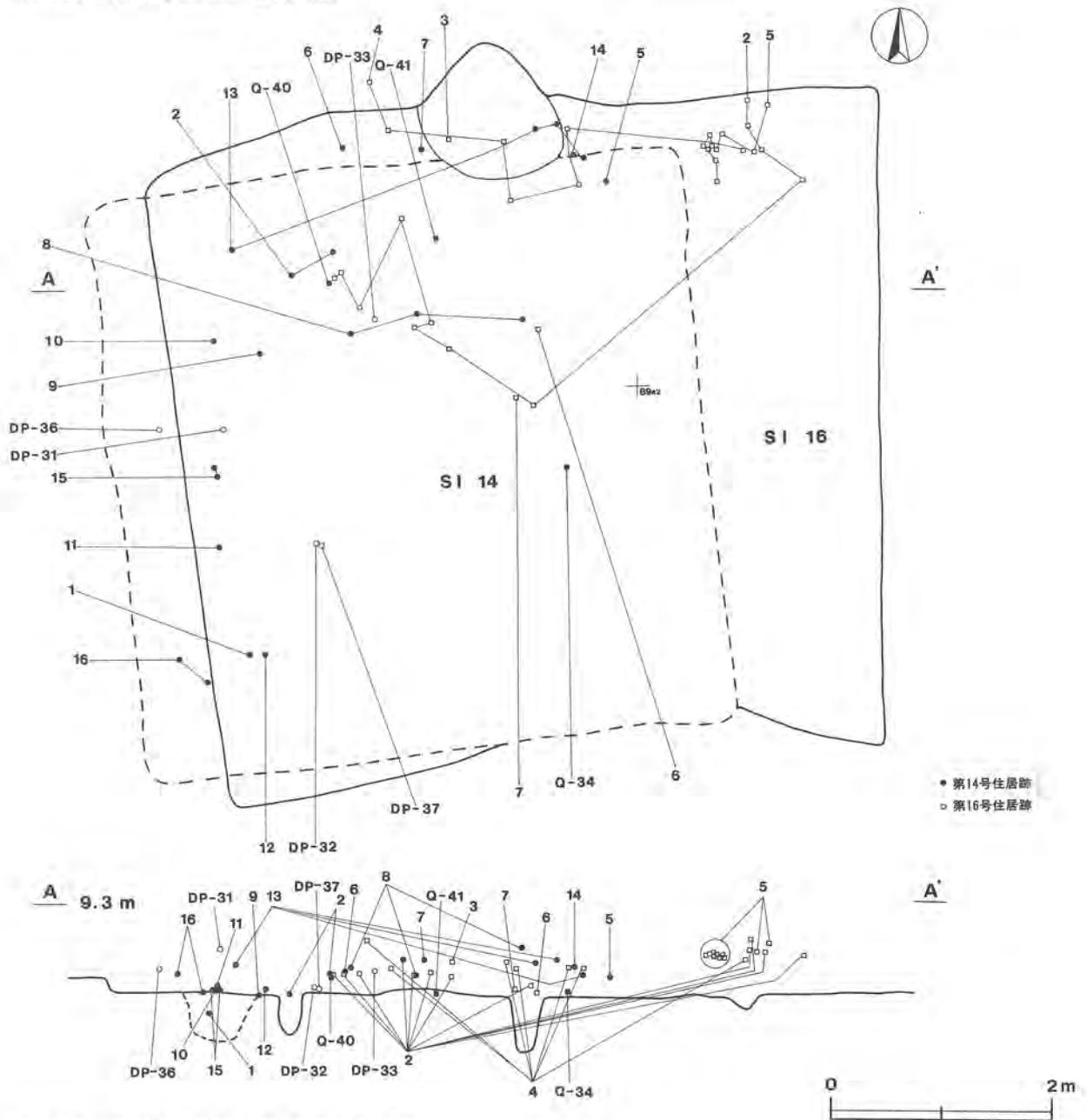
所見 本跡は，古墳時代中期の住居跡である。

第14号住居跡出土遺物観察表

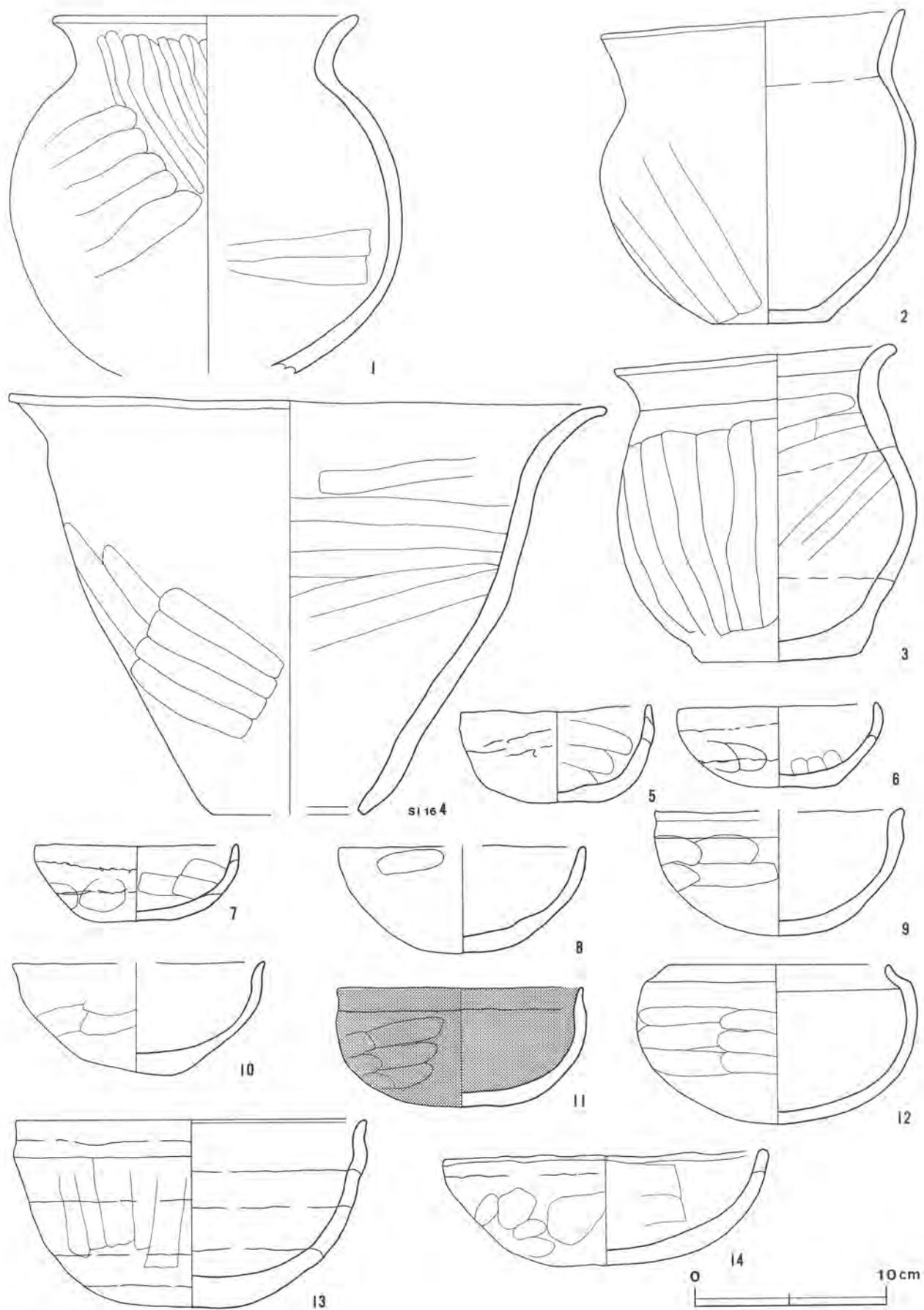
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第55図 1	甕 土師器	A 16.0 B (19.3)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒，雲母，パミス 明赤褐色 普通	P-103 95% 北西コーナー 付近床面
2	甕 土師器	A 16.2 B 16.7 C 5.7	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部はわずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒，長石，雲母 明赤褐色 普通	P-104 80% 中央部床面
3	甕 土師器	A 15.0 B 17.1 C 8.4	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面弱い横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒，雲母，礫 明赤褐色 不良	P-126 100% 竈内
4	甑 土師器	A 31.8 B 22.7 C [ 8.0]	無底式。胴部は内彎して立ち上がり，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒，雲母，スコリア にふい褐色 普通	P-108 50% SI 16遺物
5	杯 土師器	A 10.2 B 5.2 C 4.5	平底。体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。輪積痕。	砂粒，長石，パミス 橙色 普通	P-111 98% 北東コーナー 付近覆土中層
6	杯 土師器	A 10.5 B 4.5	平底。体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒，長石，パミス 灰褐色 普通	P-112 70% 竈西側 付近覆土中層
7	杯 土師器	A 10.7 B 4.3	平底。体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒，雲母，パミス にふい橙色 普通	P-113 65% 竈西側 付近覆土中層
第55図 8	碗 土師器	A [13.2] B 5.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	体部内・外面磨減著しく調整不明。	砂粒，長石，パミス 明赤褐色 普通	P-119 50% 中央部覆土中層
9	碗 土師器	A [13.0] B 6.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり，そのまま口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。	体部外面へラナデ。内面磨減著しく調整不明。	砂粒，雲母，パミス 赤色 不良	P-118 90% 中央部床面



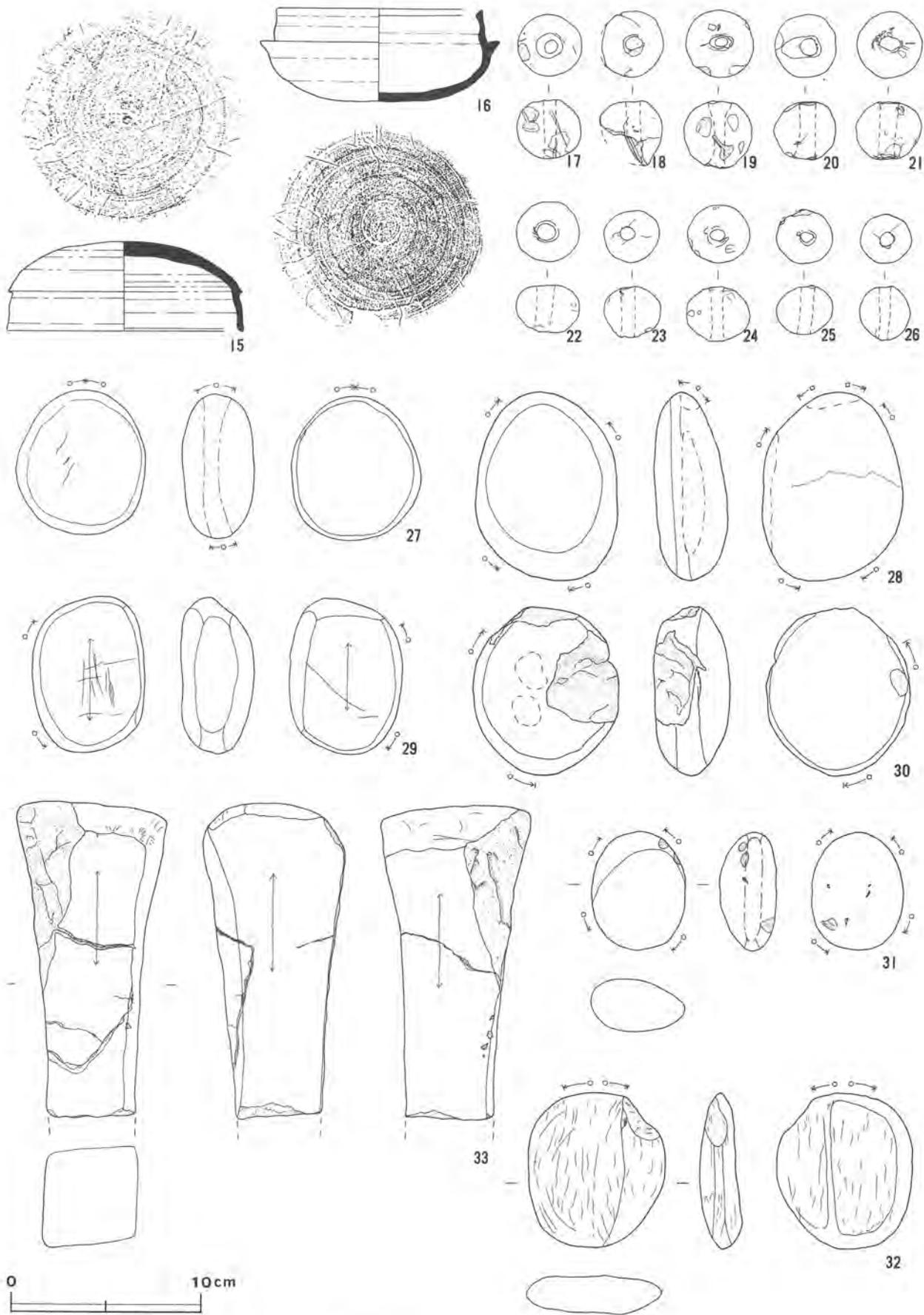
第53图 第16号住居跡竈実測図



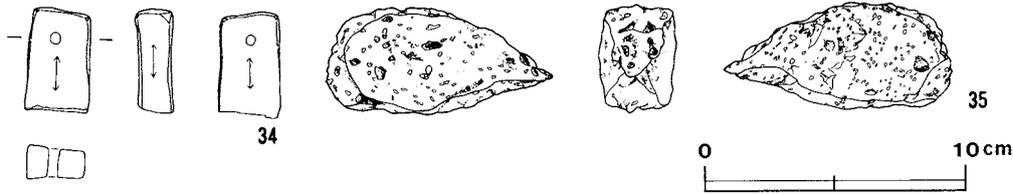
第54图 第14・16号住居跡遺物出土位置図



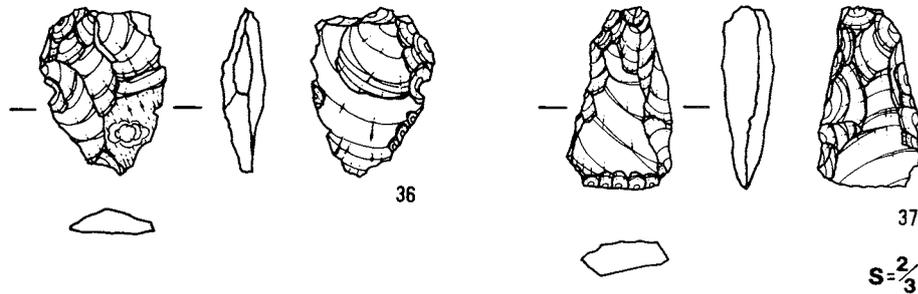
第55図 第14号住居跡出土遺物実測図(1)



第56图 第14号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)



第57図 第14号住居跡出土遺物実測図(3)



第58図 第14号住居跡出土遺物実測図(4)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	埴土師器	A [13.3] B 6.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒, 雲母, パミス 赤色 普通	P-120 60% 中央部床面
11	埴土師器	A 13.0 B 8.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。赤彩痕。	砂粒, 長石, パミス 明赤褐色 良	P-117 95% 西壁際中央床面
12	鉢土師器	A 11.6 B 8.7	丸底。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く内反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒, 雲母, 長石 明赤褐色 普通	P-102 70% 北西コーナー 付近床面
13	鉢土師器	A 18.6 B 10.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面弱い横ナデ。体部外面へラナデ。輪積痕。	砂粒, 雲母, 礫 明赤褐色 普通	P-121 90% 竈東側 付近覆土上層
14	鉢土師器	A 17.0 B 6.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り。内面へラナデ。	砂粒, 雲母, 長石 にふい橙色 普通	P-122 90% 竈東側 付近覆土中層
第56図 15	坏蓋 須恵器	A 12.4 B 4.8	天井と口縁の境の稜は、わずかに稜をもつ。口縁部端部は傾斜している。	水挽き成形。回転へラ削り。口縁内・外面横ナデ。	砂粒, パミス 灰色 普通	P-116 100% 西壁際床面
16	坏須恵器	A 11.0 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境に稜をもつ。口縁部は内傾する。	水挽き整形。底部回転へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。内面ナデ。	砂粒, 長石, パミス 灰色 普通	P-115 95% 南西コーナー 付近覆土中層

第15号住居跡 (第10図)

位置 調査区の東部, B8d0区

重複関係 本跡は、第17号住居跡の北部を掘り込み、本跡の南西壁中央部を第7号土坑、北西壁中央部を第5号土坑が掘り込んでいるため、第17号住居跡よりも新しく、第5・7号土坑よりも古い。

規模と平面形 長軸3.3m・短軸3.3mの方形。

主軸方向 N-41°-W

壁 壁高は、8~45cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 南東壁の壁下を除いて検出されている。規模は、上幅10~28cm、深さは10cmほどで、断面形は「U」字状である。

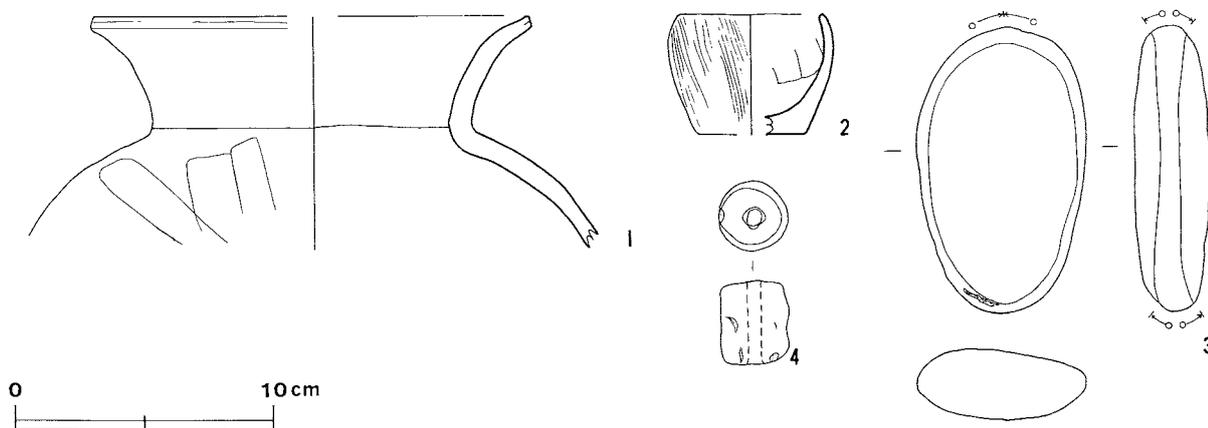
ピット 1か所(P<sub>1</sub>)検出されている。P<sub>1</sub>は、長径90cm・短径40cmの楕円形、深さ17cmで、規模や検出位置から主柱穴と考えられる。

炉 床中央からやや南寄りに検出されている。規模は、長径50cm、短径45cm、深さ5cm程で、炉床はあまり焼けていない。

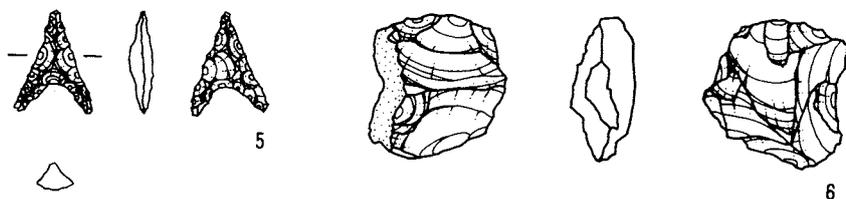
覆土 覆土は4層からなる。第1層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、炭化粒子を極少量含む暗褐色土、第2層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第4層はローム粒子・ローム小・中ブロックを中量含むにぶい褐色土である。自然堆積と思われる。

遺物 出土遺物は少なく、中央部覆土中・下層から極少量の土師器・土玉・磨石・石鏃・楔形石器が出土している。第59図1の甕は西壁際覆土中層から、第59図2の手捏土器は中央から東寄りの覆土中層から出土している。石鏃と楔形石器は流れ込みである。

所見 本跡は、古墳時代中期の住居跡である。



第59図 第15号住居跡出土遺物実測図(1)



S=2/3

第60図 第15号住居跡出土遺物実測図(2)

第15号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第59図 1	甕 土師器	A [17.0] B (9.2)	胴上半部以下欠損。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒、雲母、パミス 明赤褐色 普通	P-123 10% 西壁際覆土中層
2	手捏土器 土師器	A [5.8] B 4.8 C [4.2]	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面ハケ目整形。内面へラナデ。	砂粒、雲母、パミス 橙色 普通	P-124 40% 中央 東寄覆土中層

第18号住居跡（第27・28図）

位置 調査区の東部，B8d8区。

重複関係 本跡は，第3号溝や第25号住居跡と重複している。本跡が第25号住居跡の大半を掘り込んでおり，第3号溝は本跡の竈付近の覆土を掘り込んでいる。本跡は，第3号溝より古く，第25号住居跡より新しい。

規模と平面形 長軸5.7m・短軸5.7mの方形。

主軸方向 N-26°-W

壁 壁高は，60～70cmであり，ほぼ外傾して立ち上がる。

壁溝 壁下を周回し，上幅10～15cm程，深さ5cm程，断面形は「U」字状である。

床 平坦であり，中央部が堅緻である。

ピット 6か所（P<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径26～47cmの円形で，深さ18cm～74cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は，長径28cm，短径26cmの円形で，深さ18cmである。また，P<sub>5</sub>の周辺は，周堤状に粘土が隅丸長方形に貼ってあり，その内側が極めて硬くなっている。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は，長径36cm・短径31cmの楕円形，深さ23cmで，位置等から補助柱穴と考えられる。

竈 北壁際中央部に付設され，砂や粘土で構築されている。規模は長さ118cm，幅100cmである。天井部は，崩落しているが，袖部の遺存状態は良い。火床は，焼けて赤変硬化している。煙道部は壁内部にあり，火床部からほぼ外傾して立ち上がる。

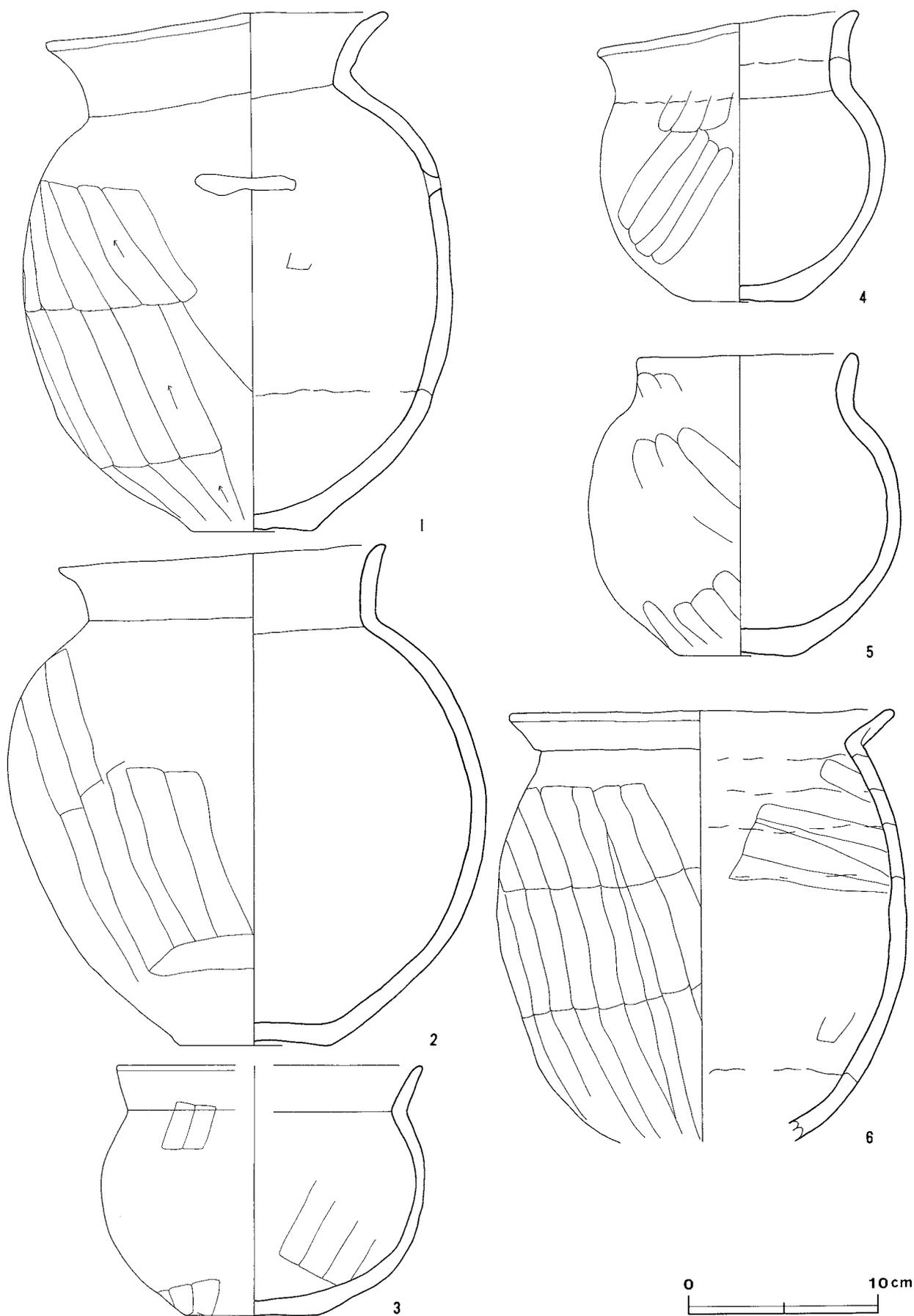
覆土 8層からなる。第1層はローム小・中ブロックを少量含む褐色土，第2層はローム小・中ブロックを少量，焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土，第3層はローム粒子小・中ブロックを少量含む褐色土，第4層はローム小・中ブロックを少量含む褐灰色土，第5層はローム小・中ブロックを少量含む暗褐色土，第6層はローム大・小ブロックを中量，焼土中ブロックを極少量含む褐色土，第7層はローム小・中ブロックを少量含む褐灰色土，第8層はローム小・中ブロックを少量含む黒褐色土である。自然堆積と思われる。

遺物 全域の覆土中・下層から多量の土師器・須恵器・土玉・土製品・磨石・敲石・石鏃・鉄釘が出土している。第61図6の甕は直立の状態で，第62図17の坏は斜位の状態で，第61図5の甕は横位の状態で竈西側床面から出土している。第62図10・15・16の杯，22の塊は貯蔵穴内から一括して出土している。第63図20の須恵器は竈周辺覆土下層から出土している。石鏃（第64図48）と鉄釘（第64図49）は流れ込みである。本跡の竈周辺や南西壁際の床面からは，炭化材やレンガ状の焼土が少量出土している。

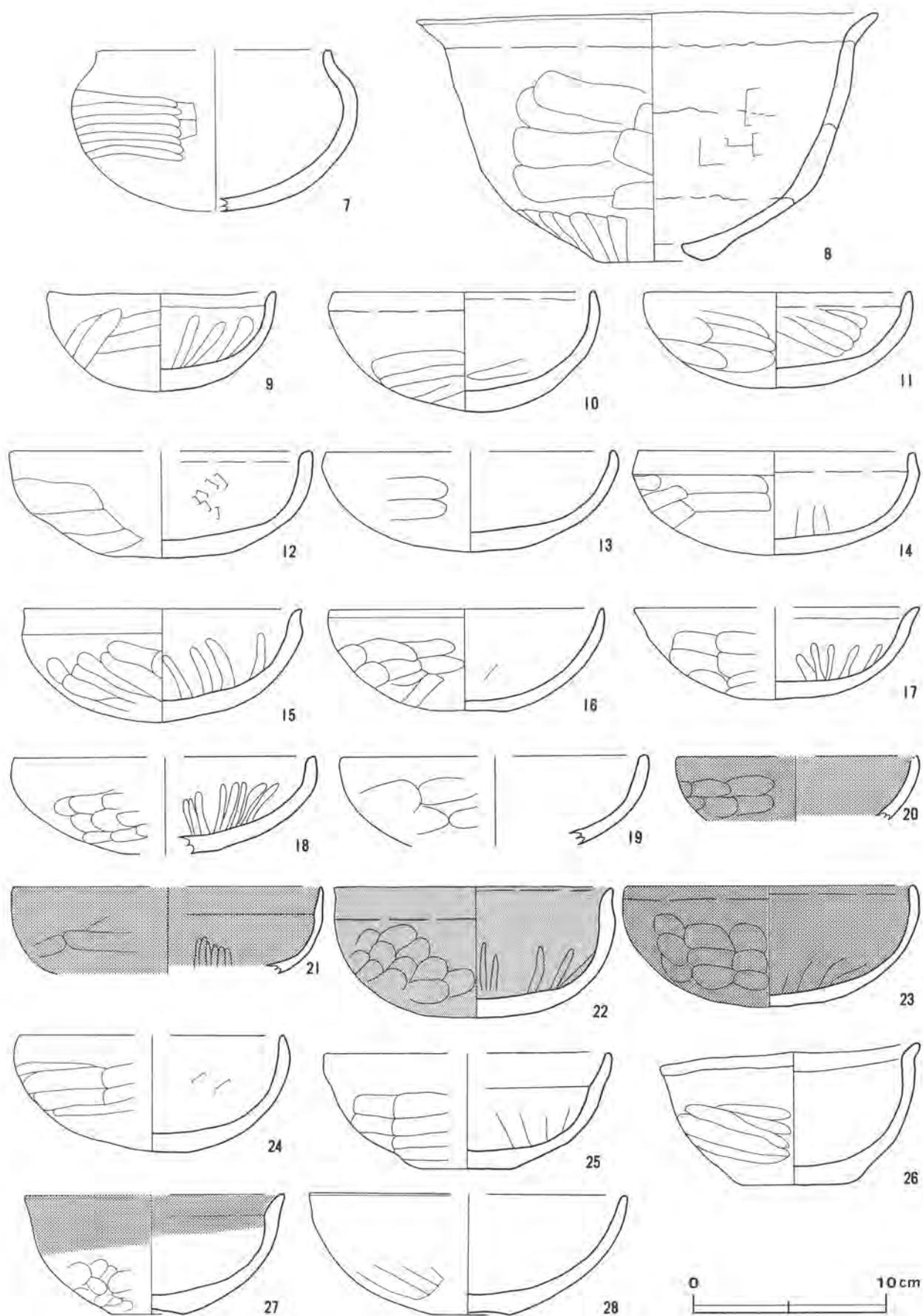
所見 本跡は，壁際及び床面から少量の焼土・炭化物が検出されていることから，焼失家屋であると考えられる。本跡は，古墳時代中期の住居跡である。

第18号住居跡出土遺物観察表

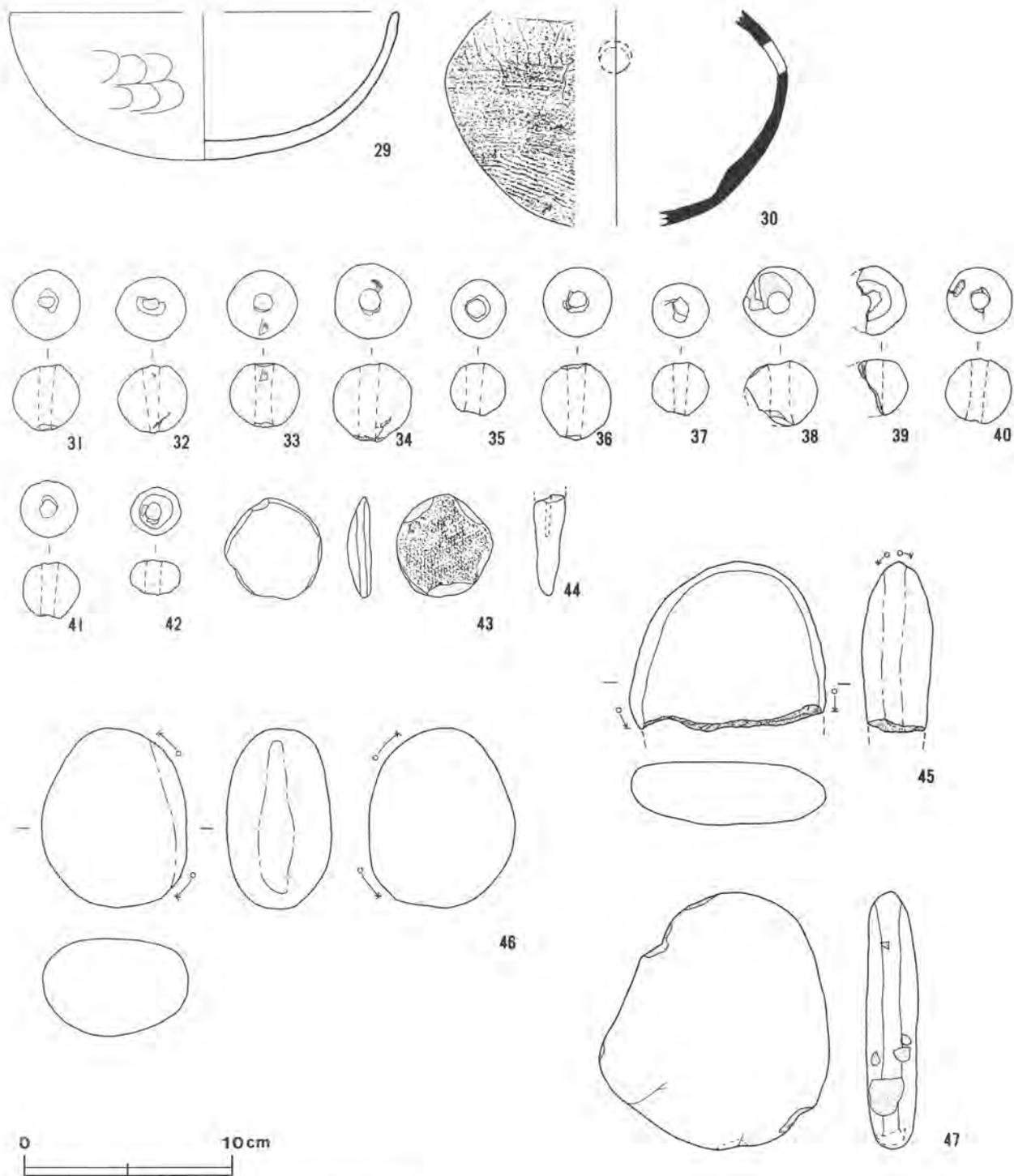
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第61図 1	甕 土師器	A 18.1 B 28.0 C 6.5	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。輪積痕。	砂粒，パミス，礫 橙色 普通	P-130 99% 竈西側付近
2	甕 土師器	A 17.5 B 27.1 C 8.0	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はくびれ，口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒，長石，パミス 明赤褐色 普通	P-131 95% 竈西側付近
3	甕 土師器	A [16.2] B 13.6	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒，雲母，パミス 赤色 普通	P-134 55% 竈内付近
4	甕 土師器	A 13.5 B 15.7 C 5.8	平底。胴部は内彎して立ち上がり，頸部はほぼ直立する。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒，雲母，パミス 橙色 普通	P-135 100%北西コー ナー付近床面



第61图 第18号住居跡出土遺物実測図(1)



第62图 第18号住居跡出土遺物実測図(2)

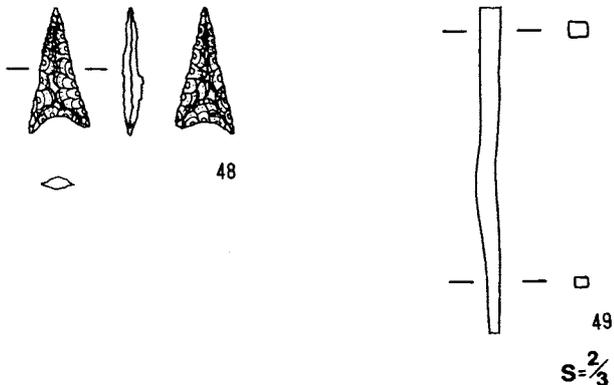


第63図 第18号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
5	甕 土師器	A 11.4 B 16.4 C 6.4	平底。胴部は内彎して立ち上がり、 頸部は直立し、口縁部はわずかに外 反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒、雲母、バミス 明赤褐色 普通	P-133 98% 中央部 北西寄床面
6	甕 土師器	A 12.4 B (23.3)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上り、 頸部はくびれ、口縁部は短く外 反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後へラナデ。内面へラナデ。 輪積痕。	砂粒、バミス、礫 橙色 普通	P-132 90% 竈西側付近
第62図 7	短頸壺 土師器	A [12.4] B 8.6	丸底。胴部は内彎して立ち上がり、 口縁部は短く直立する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒、バミス 橙色 普通	P-129 40% 竈東側 付近覆土下層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	甌 土師器	A 24.3 B 13.2 C 5.7	単孔式。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面に輪積痕。	砂粒、雲母、パミス 赤色 普通	P-136 100% 北西コーナー 付近床面
9	坏 土師器	A 11.8 B 5.8	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、パミス 橙色 普通	P-137 100% 竈内
10	坏 土師器	A 13.6 B 6.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、長石 橙色 普通	P-141 80% 貯蔵穴内
11	坏 土師器	A 14.0 B 5.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、長石 赤色 普通	P-142 90% 中央部床面
12	坏 土師器	A 15.8 B 5.7	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部磨滅著しい。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、パミス 明赤褐色 普通	P-143 50% 中央部床面
13	坏 土師器	A [15.2] B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は僅かに直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、パミス、礫 橙色 普通	P-146 30% 西コーナー覆土 下層
14	坏 土師器	A 14.4 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、礫 明赤褐色 普通	P-138 100% 貯蔵穴内
15	坏 土師器	A 14.6 B 6.1	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ後へラ磨き。	砂粒、長石、パミス 明赤褐色 普通	P-139 98% 貯蔵穴内
16	坏 土師器	A 14.4 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、パミス 橙色 普通	P-140 98% 貯蔵穴内
17	坏 土師器	A [15.0] B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラ磨き。	砂粒、雲母、スコリア 明褐色 普通	P-144 55% 竈西側付近床面
18	坏 土師器	A [15.9] B (5.9)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、パミス 橙色 普通	P-145 40% 西コーナー付近 床面
19	坏 土師器	A [16.2] B (4.8)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、パミス、礫 橙色 普通	P-147 20% 中央部床面
20	坏 土師器	A [12.5] B (3.6)	体部下端以下欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩処理。	砂粒、雲母、パミス 橙色 普通	P-148 40% 中央部覆土中層
21	坏 土師器	A [16.4] B (4.7)	体部下端以下欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラ磨き。内・外面赤彩痕。	砂粒、パミス、礫 明赤褐色 普通	P-149 15% 中央部床面
22	埴 土師器	A 14.7 B 7.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ後へラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒、長石、パミス 黒褐色 普通	P-150 95% 貯蔵穴内
23	埴 土師器	A 15.0 B 6.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は僅かに内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒、雲母、礫 赤褐色 普通	P-152 85% 中央部床面
24	埴 土師器	A [14.0] B 6.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、礫 黒褐色 普通	P-154 50% 北東壁中 央部際覆土中層
25	埴 土師器	A [14.8] B 6.2 C 4.8	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、パミス 明褐色 普通	P-153 60% 北コーナー 覆土下層
26	埴 土師器	A 13.6 B 7.6 C 5.9	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面磨滅著しい。	砂粒、長石、パミス 橙色 普通	P-151 98% 中央部床面
27	埴 土師器	A [13.7] B 6.4 C 3.7	平底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は短く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面丁寧なナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒、パミス、長石 赤褐色 普通	P-155 60% 貯蔵穴内

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
28	埴土師器	A [16.8] B 6.5 C 4.1	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒, パミス, スコリア 橙色 不良	P-157 60% 中央部床面
第63図 29	埴土師器	A [18.6] B 7.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒, 雲母, パミス 橙色 普通	P-156 60% 竈東側付近床面
30	埴土須恵器	B (10.5)	体部片。体部は内彎して立ち上がる。体部上面に穿孔。	水挽き成形。体部下端平行タタキ目, 肩部自然釉。	砂粒, 長石 明褐色 普通	P-160 30% 北部床面



第64図 第18号住居跡出土遺物実測図(4)

### 第23号住居跡 (第23図)

位置 調査区の東部, B8as区。

重複関係 本跡は, 第22号住居跡に掘り込まれており, 本跡のほうが古い。

規模と平面形 長軸 [3.0] m・短軸2.7mの方形と推定される。

長軸方向 N-28°-W

壁 壁高は, 31~40cmで, ほぼ垂直にたちあがる。

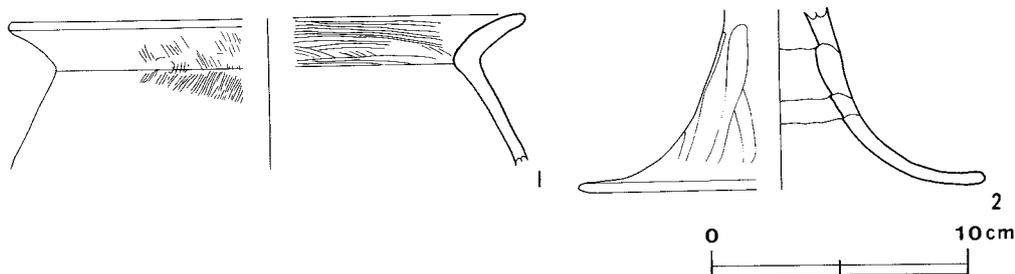
床 大半が削平されているが残存部は平坦で硬い。

ピット 1か所 (P<sub>1</sub>)。P<sub>1</sub>は, 径26cmの円形で, 深さ19cmである。規模や検出位置から支柱穴と考えられる。

覆土 6層 (第24層~第29層) からなる。第24層はローム粒子を少量, 焼土粒子を少量含む暗褐色土, 第25層はローム粒子を多量含む褐色土, 第26層はローム粒子を多量, 焼土粒子を極少量含む褐色土, 第27層はローム粒子を少量, 焼土粒子を極少量含む褐色土, 第28層はローム粒子を中量, 焼土粒子を少量含む黒褐色土, 第29層はローム粒子を多量, 暗褐色土・ローム小ブロックを少量含む明褐色土である。

遺物 中央部覆土中層から極少量の土師器が出土している。第65図1の甕口縁部片は中央部覆土中層から出土している。

所見 本跡は, 古墳時代中期の住居跡である。



第65図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第65図 1	甕 土師器	A [20.0] B ( 5.8)	口縁部片。口縁部は外反する。	口縁部外面斜位のハケ目整形。口縁部内面横位・斜位のハケ目整形。	砂粒,長石,パミス にふい 橙色 普通	P-250 5% 中央部覆土下層
2	高 土師器	B ( 7.1) D [15.8]	坏部欠損。脚部は中空で膨らみ裾部はラッパ状に開く。	脚部外面へラ磨き。内面に輪積痕。	砂粒,雲母,パミス 橙色 普通	P-196 40% 北東コーナー 覆土中層

第30号住居跡 (第67図)

位置 調査区の西部, C5a6区

規模と平面形 長軸8.4m・短軸(3.5)mで、本跡の南側は調査区外であるため不明である。平面形は、ほぼ方形と推定される。

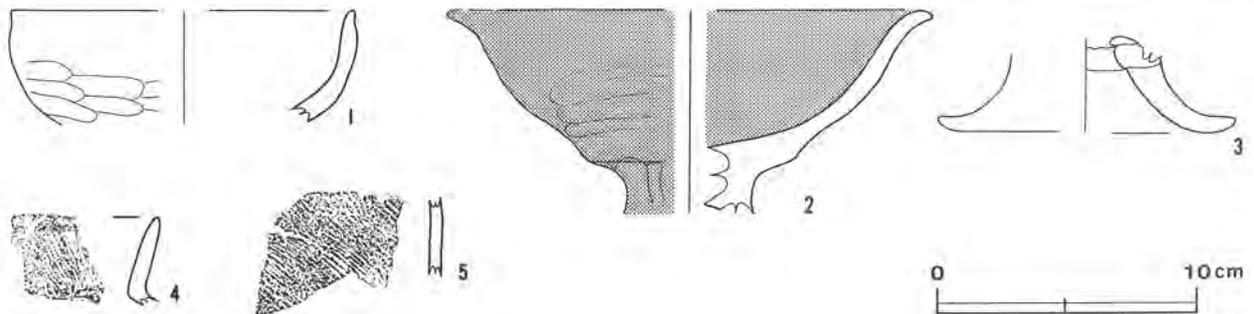
主軸方向 N-3°-W

壁 壁高は12~22cmで、ほぼ外傾して立ち上がる。

床 平坦であり、硬く締まっている。

炉 床面中央北寄りに、炉Aと炉Bが確認された。炉Aは、長軸84cm・短軸58cmの楕円形で、深さ4cmである。覆土は3層からなり、第1層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む暗褐色土、第2層はローム粒子を中量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第3層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む褐色土である。炉Bは、長軸54cm・短軸40cmの不整形で、深さ5cmである。覆土は2層(第2層・第3層)からなり、第2層はローム粒子を中量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第3層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む褐色土である。炉床は、ともに熱を受け赤変硬化している。

覆土 大半は攪乱のため不明であるが、5層が確認されている。第1層はローム粒子を多量に含むにふい褐色土、第2層はローム粒子を中量含む褐色土、第3層はローム粒子を少量、焼土小ブロック・炭化物を極少量含む



第66図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図

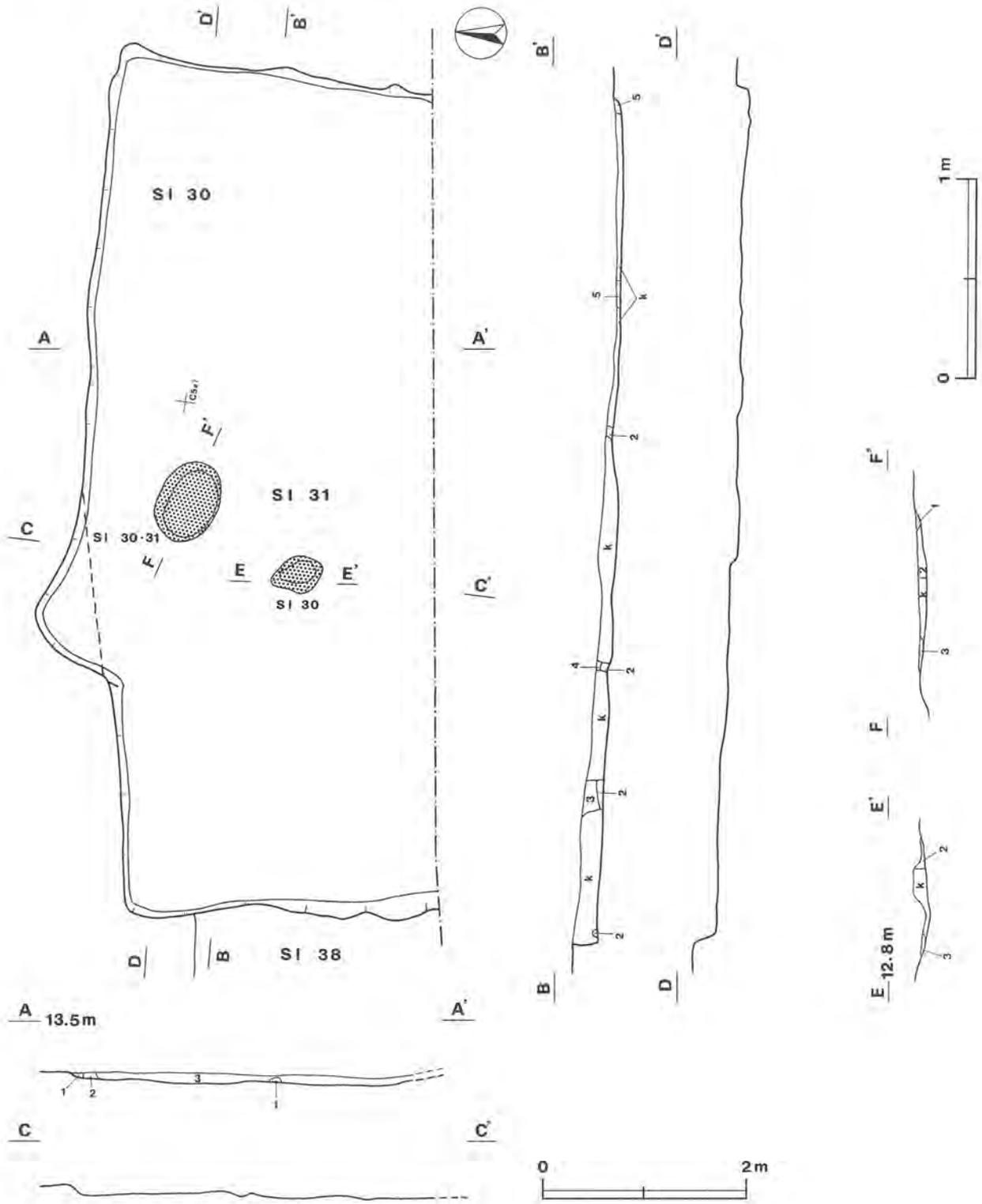
第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第66図 1	坏 土師器	A [13.4] B ( 4.4)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面へラ削り後へラナデ。	砂粒,雲母 赤色 普通	P-231 20% 北西コー ナー付近床面
2	高 土師器	A [19.0] B ( 8.0)	脚部欠損。坏底部にわずかな稜を持ち、口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。底部へラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒,雲母,礫 赤褐色 普通	P-232 20% 西壁際床面
3	高 土師器	B 3.8 D 11.6	裾部片。裾部はラッパ状に開く。	内面輪積痕。	砂粒,パミス 橙色 普通	P-233 5% 西壁際床面

む褐色土，第4層はローム小ブロック・炭化物を極少量含む暗褐色土，第5層はローム粒子を中量含む褐色土である。

遺物 西壁際から極少量の土師器片が出土している。第66図1の坏は北西コーナー付近床面から出土し，2の高坏は西壁床面から出土している。3の高坏と4・5の土師器片は流れ込みである。

所見 本跡は，古墳時代中期の住居跡である。



第67図 第30号住居跡実測図

第2号住居跡（第68図）

位置 調査区の中央部，B7g4区。

規模と平面形 長軸3.4m・短軸3.2mの方形。

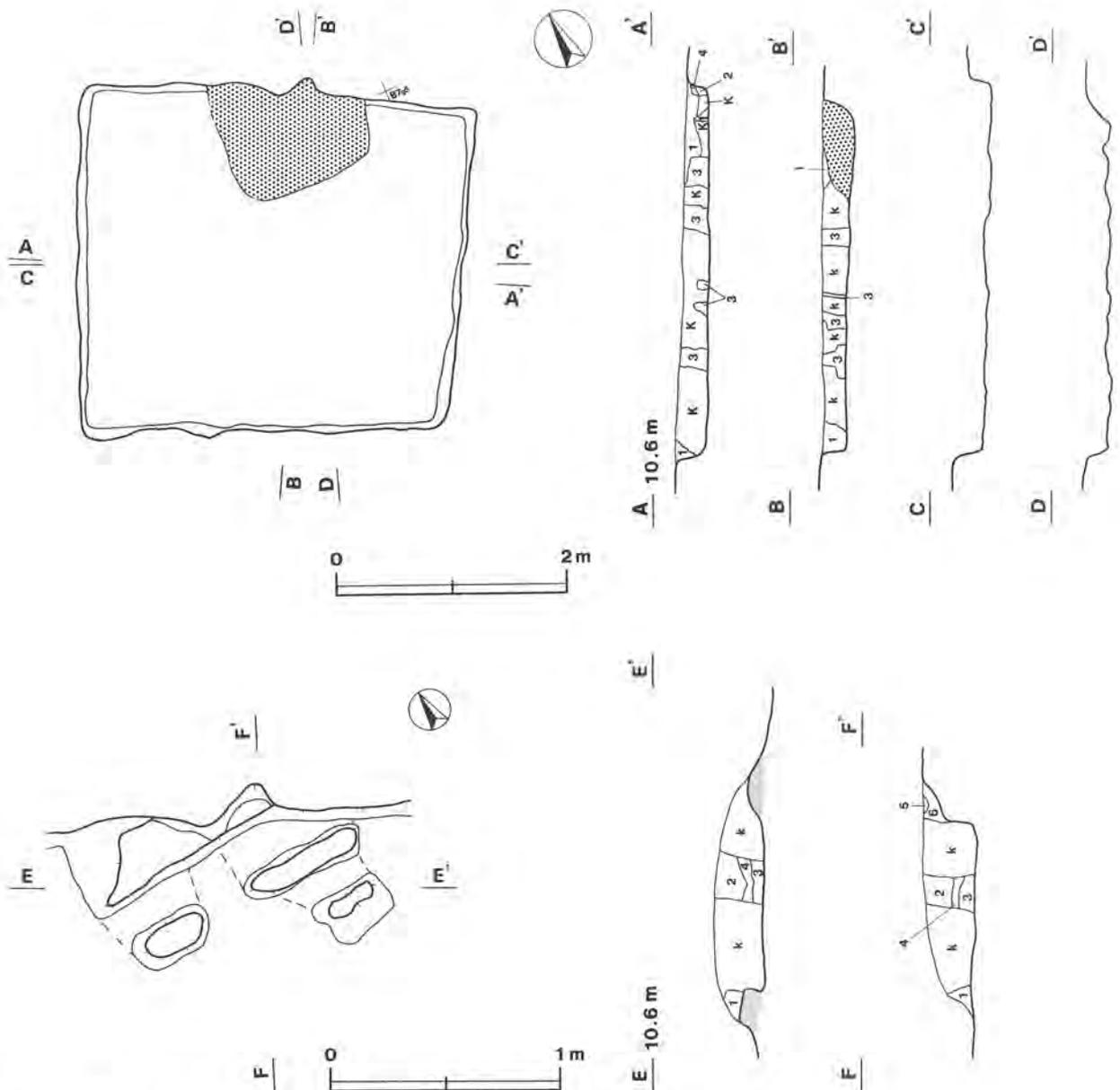
主軸方向 N-63°-W

壁 壁高は，22~32cmであり，ほぼ外傾して立ち上がっている。

床 トレンチャーによる攪乱を受けているが，残存部は平坦であり，竈前面や中央部が特に硬く締まっている。

竈 北壁中央部を壁外に15cm程掘り込み，砂や粘土で構築されている。トレンチャーによる攪乱を受け遺存状態は不良であるが，規模は長さ143cm，幅77cmと推定される。天井部・煙道部については不明で，袖部，火床部は断片的に残存しているにすぎない。火床は，床面を僅かに掘り窪めた程度で，レンガ状に赤変硬化している。

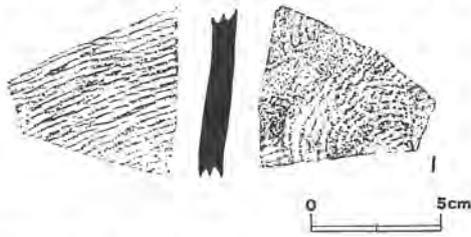
覆土 ロームブロックを全体的に含んでおり，人為堆積と思われる。



第68図 第2号住居跡・竈実測図

遺物 中央部覆土中・下層から少量の土師器・須恵器が出土している。須恵器の甕の胴部片は中央部床面から出土している。

所見 本跡は、古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第69図 第2号住居跡出土遺物拓影図

第10号住居跡 (第70図)

位置 調査区の東部, B9h<sub>4</sub>区。

規模と平面形 長軸, 短軸ともに不明であるが, 方形と推定される。住居跡の大半は, 調査区外にあるため, 北コーナー付近しか調査できなかった。

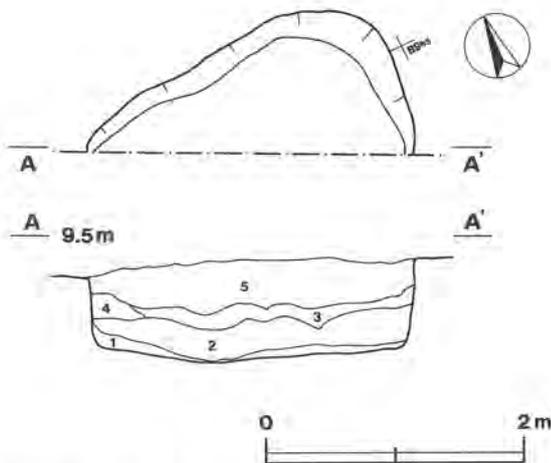
壁 壁高は, 22~25cmで, ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で硬い。

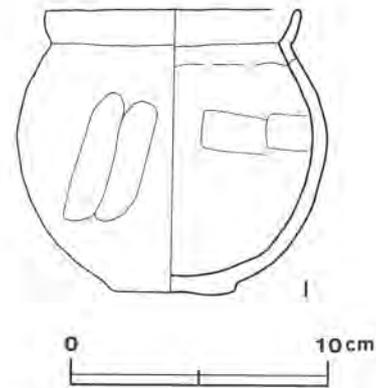
覆土 5層からなる。第1層はローム粒子を多量含むにふい褐色土, 第2層はローム粒子を中量, ローム小ブロックを少量, 炭化物・焼土ブロックを極少量含む灰褐色土, 第3層はローム小・中ブロック・炭化物・焼土ブロックを極少量含む黒褐色土, 第4層はローム粒子を少量含む黒褐色土, 第5層はローム小・中ブロックを少量, 炭化物・焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土である。自然堆積と考えられる。

遺物 北コーナー付近覆土下層から極少量の土師器が出土している。第71図1の甕は北コーナー付近の覆土下層から出土している。

所見 本跡は、古墳時代後期の住居跡と考えられる。



第70図 第10号住居跡実測図



第71図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	小型甕 土師器	A 9.8 B 11.3 C 4.7	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は短く、わずかに外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒, 雲母, 礫 赤褐色 普通	P-79 70% 北部付近床面

第11号住居跡（第72図）

位置 調査区の東端部，B9h6区。

規模と平面形 長軸，短軸ともに不明であるが，方形と推定される。住居跡の南東部は，調査区外に延びているため調査できなかった。

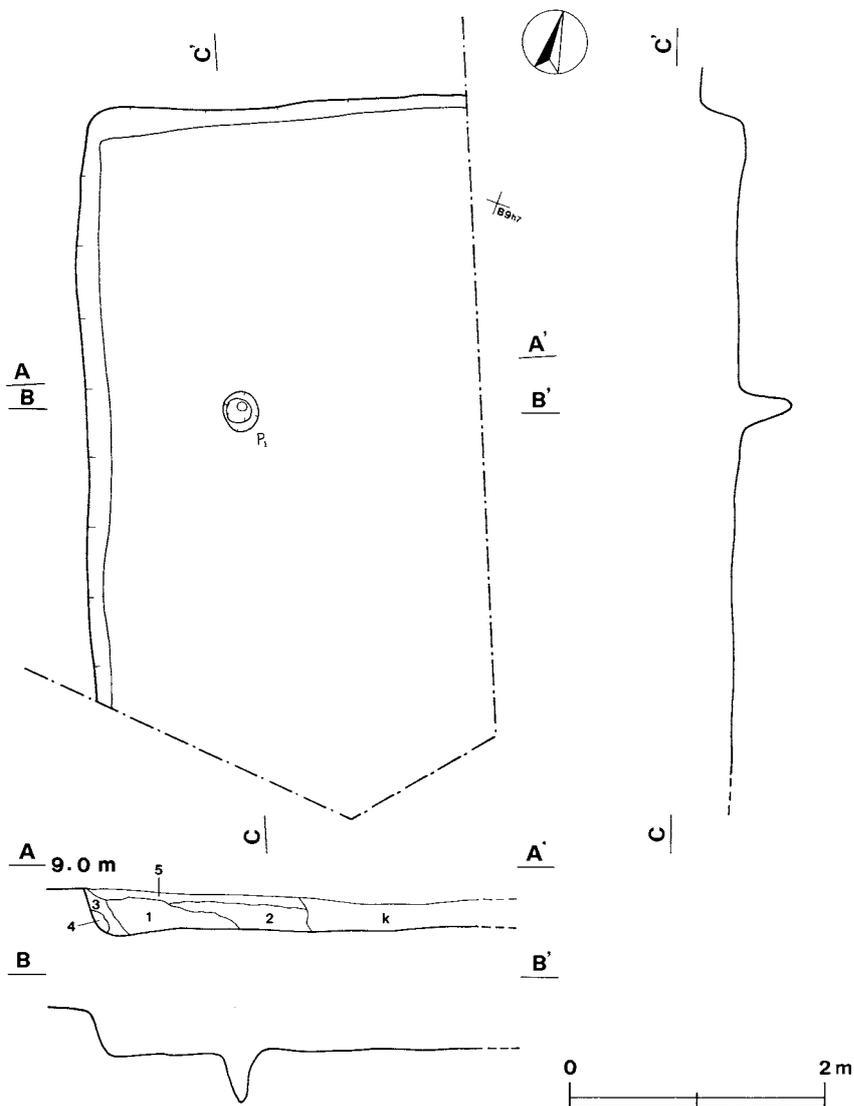
主軸方向 N-21°-W

壁 壁高は34~36cmを測り，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 全体に凹凸が見られるが堅緻であり，中央部は攪乱されている。

ピット 1か所（P<sub>1</sub>）。P<sub>1</sub>は，径32cm程の円形で，深さ43cmである。規模や位置から主柱穴と考えられる。他のピットは確認できなかった。

覆土 5層からなる。第1層はローム小ブロックを少量，炭化物・焼土中ブロックを極少量含む暗褐色土，第2層はローム粒子を極少量，ローム小・中ブロックを少量含む暗褐色土，第3層はローム小ブロックを中量含む褐色土，第4層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土，第5層はローム小ブロックを極少量含む黒褐色土である。自然堆積と考えられる。



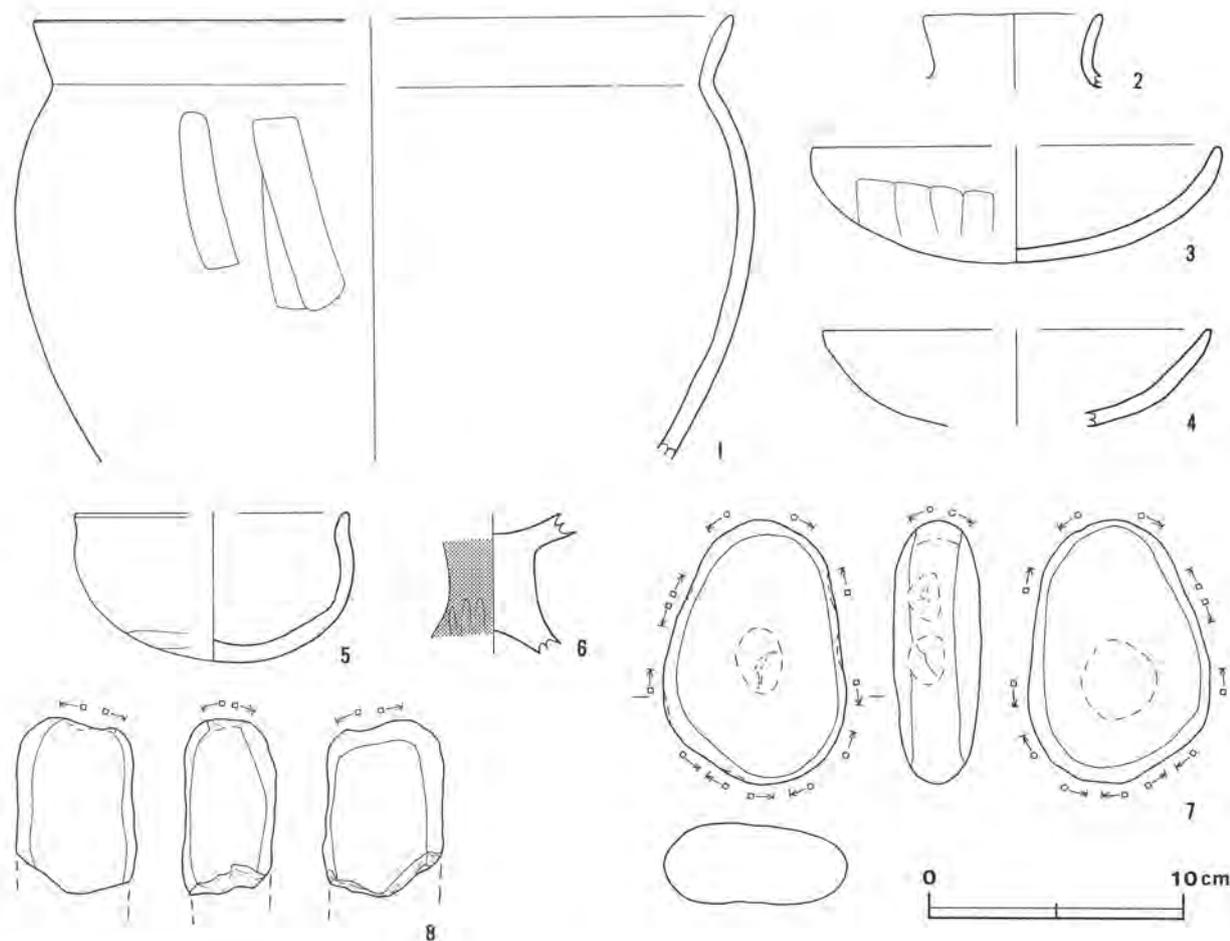
第72図 第11号住居跡実測図

遺物 住居跡西部に遺物が集中しており、覆土下層から少量の土師器が出土している。第73図1の甕・第73図3の坏は北西コーナー付近の床面から出土している。

所見 本跡は、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

### 第11号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 1	甕 土師器	A [27.6] B (17.4)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部内面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒、パミス、スコリア 橙色 普通	P-80 15% 北西部床面
2	小型甕 土師器	A [7.0] B (2.9)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する	磨減著しいため、調整不明。	砂粒、パミス 橙色 普通	P-81 20% 中央部床面
3	坏 土師器	A [16.0] B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。	体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒、スコリア、パミス 暗赤褐色 普通	P-83 50% 北西部床面
4	坏 土師器	A [15.2] B (3.8)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁に至る。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面とも磨減著しく調整不明。	砂粒、パミス 赤褐色 普通	P-84 25% 中央部覆土中層
5	埴 土師器	A [10.8] B 5.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面剥離著しいため調整不明。	砂粒、パミス 橙色 不良	P-85 70% 中央部覆土



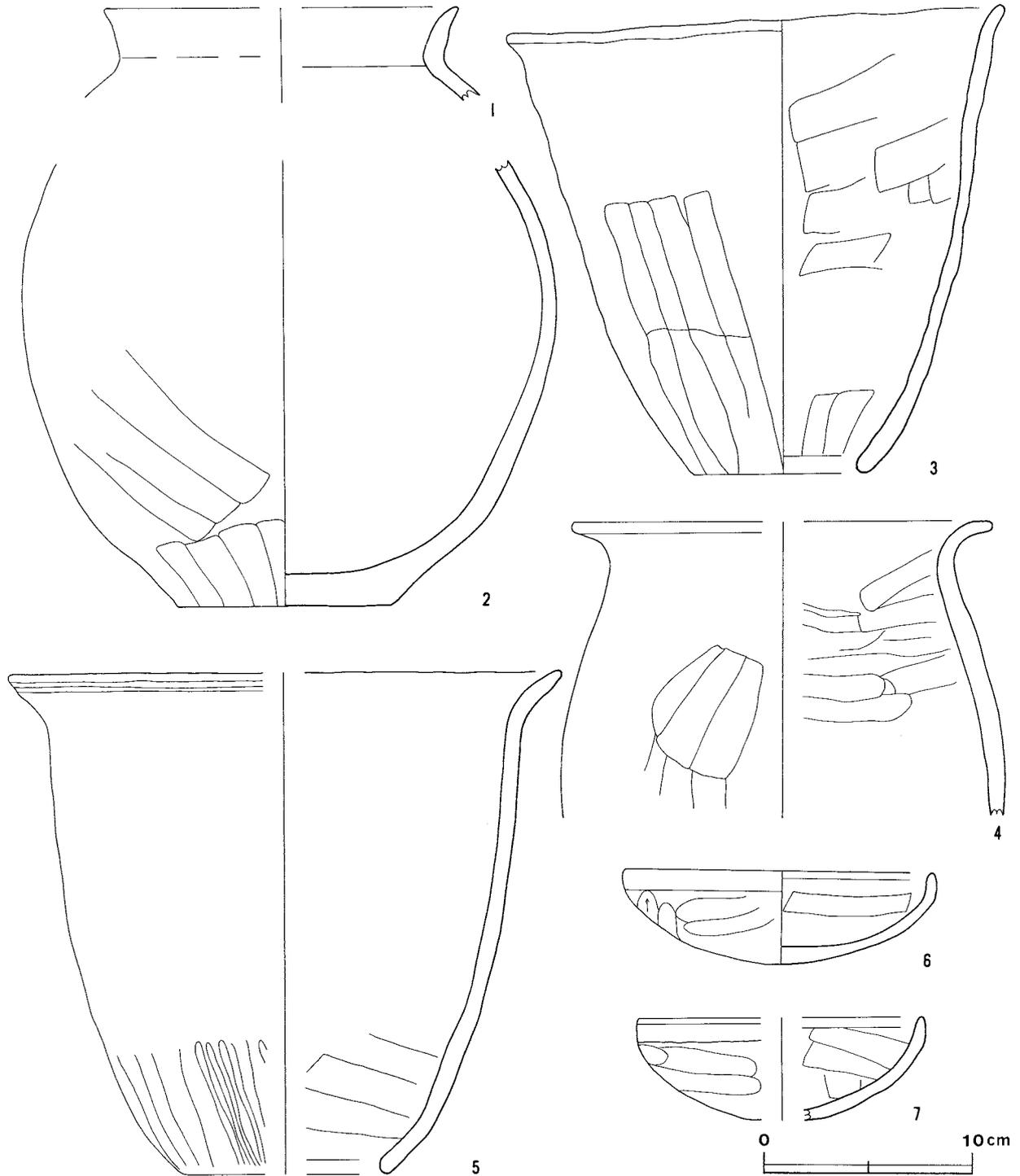
第73図 第11号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	高坏 土師器	B(5.5)	脚部片。	脚部外面へラ磨き。外面赤彩痕。	砂粒, スコリア, パミス 赤色 良	P-86 10% 中央部床面

第16号住居跡 (第10図)

位置 調査区の東部, B9e1区。

重複関係 本跡は, 第13・14・17・26・36号住居跡を掘り込んでいるため, いずれの住居跡よりも本跡のほうが新しい。



第74図 第16号住居跡出土遺物実測図

規模と平面形 長軸6.7m・短軸6.0mの方形。

主軸方向 N-2°-W

壁 壁高は、7~35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦であり、竈全面や中央部が堅緻である。

ピット 8か所(P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径22~43cmの円形で、深さ30~60cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>は、径12~17cmの楕円形で、補助柱穴等と思われる。

竈 北壁中央部を壁外に54cm程掘り込み、砂や粘土で構築されている。規模は長さ96cm、幅80cmである。天井部は崩落しているが、袖部の遺存状態は良い。火床は、赤変硬化している。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がっている。

覆土 覆土は5層からなる。第1層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土、第2層はローム粒子・ローム小ブロックを多量、焼土粒子・炭化粒子を少量、ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子・ローム小ブロックを多量、焼土粒子・炭化粒子を少量、ローム中ブロック・炭化物を極少量含む暗褐色土、第4層はローム粒子・焼土粒子を多量、ローム小ブロック・焼土ブロックを中量、炭化粒子・ローム小ブロックを少量含む暗褐色土、第5層はローム粒子を少量、焼土粒子・炭化粒子を極少量含む黒褐色土である。自然堆積と思われる。

遺物 全域の覆土上層に少量の土師器が少量出土している。第74図1の甕・3の甗は竈内から、6・7の坏は中央部床面から出土している。

所見 本跡は、古墳時代後期の住居跡である。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第74図 1	甕 土師器	A [17.0] B (4.6)	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒、パミス 明赤褐色 普通	P-125 5% 竈内
2	甕 土師器	B (21.8) C 10.2	平底。胴上半部以上欠損。胴部は内彎して立ち上がる。	胴部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒、長石、パミス 赤色 不良	P-105 50% 中央部覆土中層
3	甗 土師器	A 23.8 B 22.7 C 8.0	無底式。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、長石、パミス 橙色 普通	P-107 90% 竈内
4	甕 土師器	A [20.0] B (14.4)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面粗いへラナデ。	砂粒、雲母、礫 褐色 普通	P-106 25% 竈付近覆土中層
5	甗 土師器	A [26.6] B 24.4 C [9.8]	無底式。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラ磨き。内面へラナデ。	砂粒、長石 にふい黄橙色 普通	P-109 30% 北東コーナー 付近覆土上層
6	坏 土師器	A 14.7 B 4.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒、雲母、長石 赤色 普通	P-110 98% 中央部床面
7	坏 土師器	A [13.6] B (5.0)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、礫 赤色 普通	P-114 35% 中央部床面

## 第20号住居跡（第75図）

位置 調査区の東部，B9b2区。

重複関係 本跡は，北部の竈付近及び南西コーナー付近を第1号溝によって東西に掘り込まれているので第1号溝より本跡のほうが古い。

規模と平面形 長軸4.0m・短軸4.0mの方形。

主軸方向 N-17°-W

壁 壁高は，30～58cmで，ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北・南壁下及び東壁下の一部にみられる。上幅10～17cm，深さ10cm程で，断面形は「U」字状である。

床 やや凹凸は見られるが，ほぼ平坦で，特に南西部が硬く締まっている。

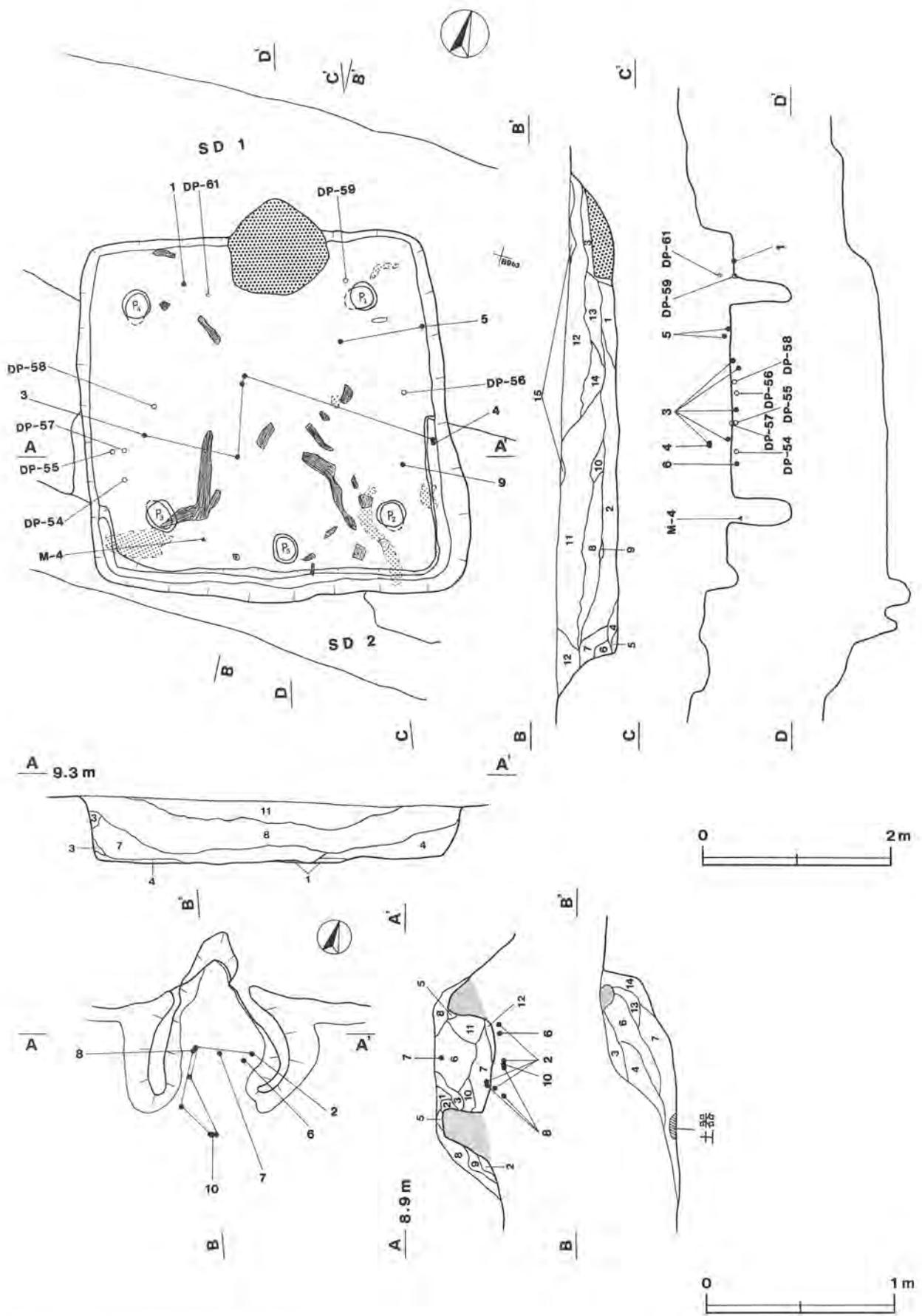
ピット 5か所（P<sub>1</sub>～P<sub>5</sub>）。P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は，径28～41cmの円形で，深さ26～65cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>は，径30cm程の円形，深さ27cmで，位置等から出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部を壁外に37cm程掘り込み，砂や粘土で構築されている。規模は長さ100cm，幅107cmである。天井部は，崩落している。袖部の遺存状態は良く，火床部は，赤変硬化している。煙道部は，火床部から緩やかに立ち上がる。覆土は14層からなる。第1層はローム粒子・焼土粒子を少量含むにぶい褐色土，第2層はローム粒子多量，焼土粒子・焼土小ブロックを中量含むにぶい赤褐色土，第3層はローム粒子を多量，ローム小ブロック・粘土小ブロックを少量含むにぶい褐色土，第4層はローム粒子・ローム小ブロックを中量，焼土粒子を少量含む褐色土，第5層はローム粒子・ローム小ブロックを多量，砂を少量，焼土粒子を極少量含む灰褐色土，第6層はローム粒子を多量，砂・ローム小ブロックを中量，ローム小ブロック・炭化粒子・焼土粒子を少量含む褐色土，第7層はローム粒子・ローム小ブロック・焼土中ブロックを少量，焼土粒子・焼土小ブロックを中量含むにぶい赤褐色土，第8層はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を極少量含む灰褐色土，第9層はローム粒子・ローム小ブロックを多量，ローム中ブロック・焼土粒子を少量含む灰褐色土，第10層はローム粒子・ローム小ブロックを多量，焼土小ブロックを中量，焼土小ブロックを少量含む褐色土，第11層はローム小ブロック・焼土小ブロックを中量，焼土大ブロックを極少量含むにぶい赤褐色土，第12層は焼土粒子を多量，灰・ローム粒子を中量含むにぶい赤褐色土，第13層はローム粒子・砂・焼土粒子を中量，焼土小ブロックを少量含む褐色土，第14層はローム粒子を中量，焼土粒子・焼土小ブロックを少量含む褐色土である。

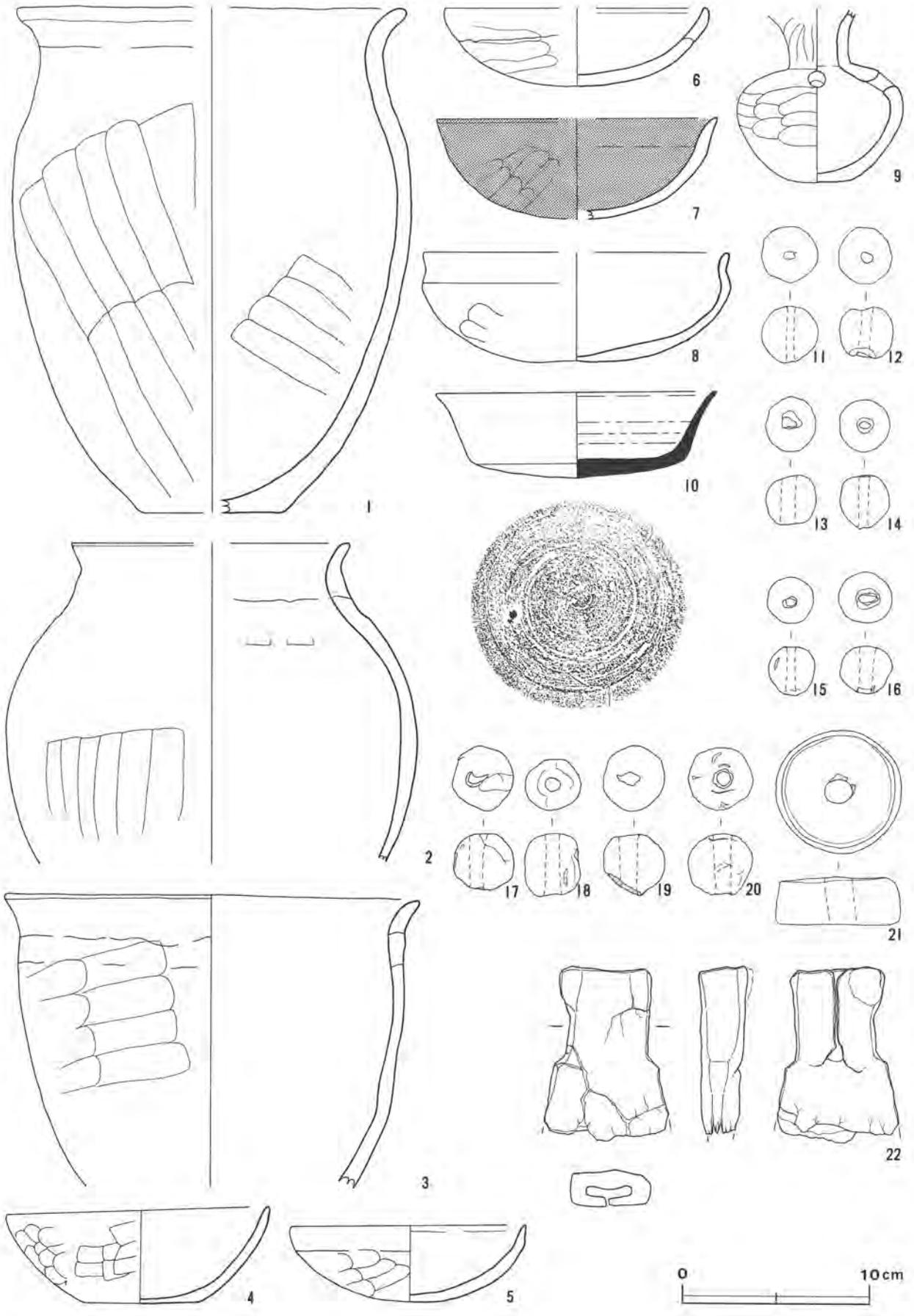
覆土 11層からなる。第1層はローム小・中ブロックを少量，焼土粒子・炭化物・砂を極少量含む灰褐色土，第2層はローム小・中ブロックを少量，炭化物・焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土，第3層はローム粒子を多量含む褐色土，第4層は粘土を少量，ローム粒子・焼土ブロック・炭化物を極少量含む褐色土，第5層は粘土を多量含む黄褐色土，第6層はローム粒子を中量，炭化物を極少量含むにぶい褐色土，第7層はローム粒子を多量，焼土小ブロックを極少量含むにぶい褐色土，第8層はローム小・中ブロックを少量，炭化物・焼土小ブロックを極少量含む灰褐色土，第9層はローム粒子を少量含む褐色土，第10層はローム粒子を少量含む暗褐色土，第11層はローム粒子を中量，焼土小ブロックを極少量含む褐色土である。自然堆積と思われる。

遺物 覆土下層から土師器・須恵器・土玉・鉄斧・石製模造品が出土している。第76図4の坏が中央部床面から，6・7の坏が竈内から出土している。21の土製の紡錘車と22の鉄斧が中央部床面から出土している。10の須恵器坏は竈付近覆土上層からの出土であり，流れ込みと考えられる。本跡は，壁際，床面から炭化材，焼土が少量検出されている。

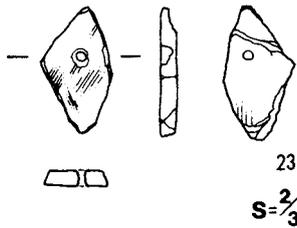
所見 本跡は炭化物・焼土が少量検出されることから，焼失家屋と考えられる。本跡は，古墳時代後期の住居跡である。



第75图 第20号住居跡・竈実測図



第76图 第20号住居跡出土遺物実測図(1)



第77図 第20号住居跡出土遺物実測図(2)

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	甕 土師器	A [20.8] B 27.3 C [7.6]	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はややくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,スコリア 橙色 普通	P-161 60% 竈西側付近床面
2	甕 土師器	A [15.0] B (17.2)	胴下半部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,雲母,パミス 明赤褐色 普通	P-162 25% 竈内
3	甕 土師器	A 22.2 B (15.8)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,雲母,パミス 赤褐色 普通	P-163 70% 中央部床面
4	坏 土師器	A 14.0 B 5.3 C 6.2	平底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒,雲母,パミス にぶい橙色 普通	P-164 100% 東壁 中央際覆土中層
5	坏 土師器	A 12.7 B 4.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面横ナデ。	砂粒,雲母,パミス 黄褐色 普通	P-165 80% 北東コーナ床面
6	坏 土師器	A [14.0] B 4.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,長石,パミス 明赤褐色 普通	P-166 50% 竈内
7	坏 土師器	A [15.0] B (5.4)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒,雲母,礫 赤色 普通	P-167 25% 竈内
8	坏 土師器	A [16.4] B 5.9	口縁部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。	口縁部横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。	砂粒,パミス 明赤褐色 普通	P-168 30% 竈内
9	土師器	B (9.2) C 3.1	口縁部欠損。平底。体部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	1孔。体部外面へラ削り後へラナデ。頸部へラ磨き。	砂粒,雲母,パミス 橙色 普通	P-169 80% 東壁 中央際覆土上層
10	坏 須恵器	A 15.0 B 4.6 C 11.2	平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	水挽き成形。底部回転へラ削り。	砂粒,雲母,礫 明褐灰色 普通	P-170 80% 竈付近覆土上層

第22号住居跡 (第23図)

位置 調査区の東部, B8b9区。

重複関係 本跡は, 第23号住居跡と, 第21号住居跡を掘り込んでいるため本跡が新しい。第1号溝に浅く掘り込まれているため, 本跡が古い。

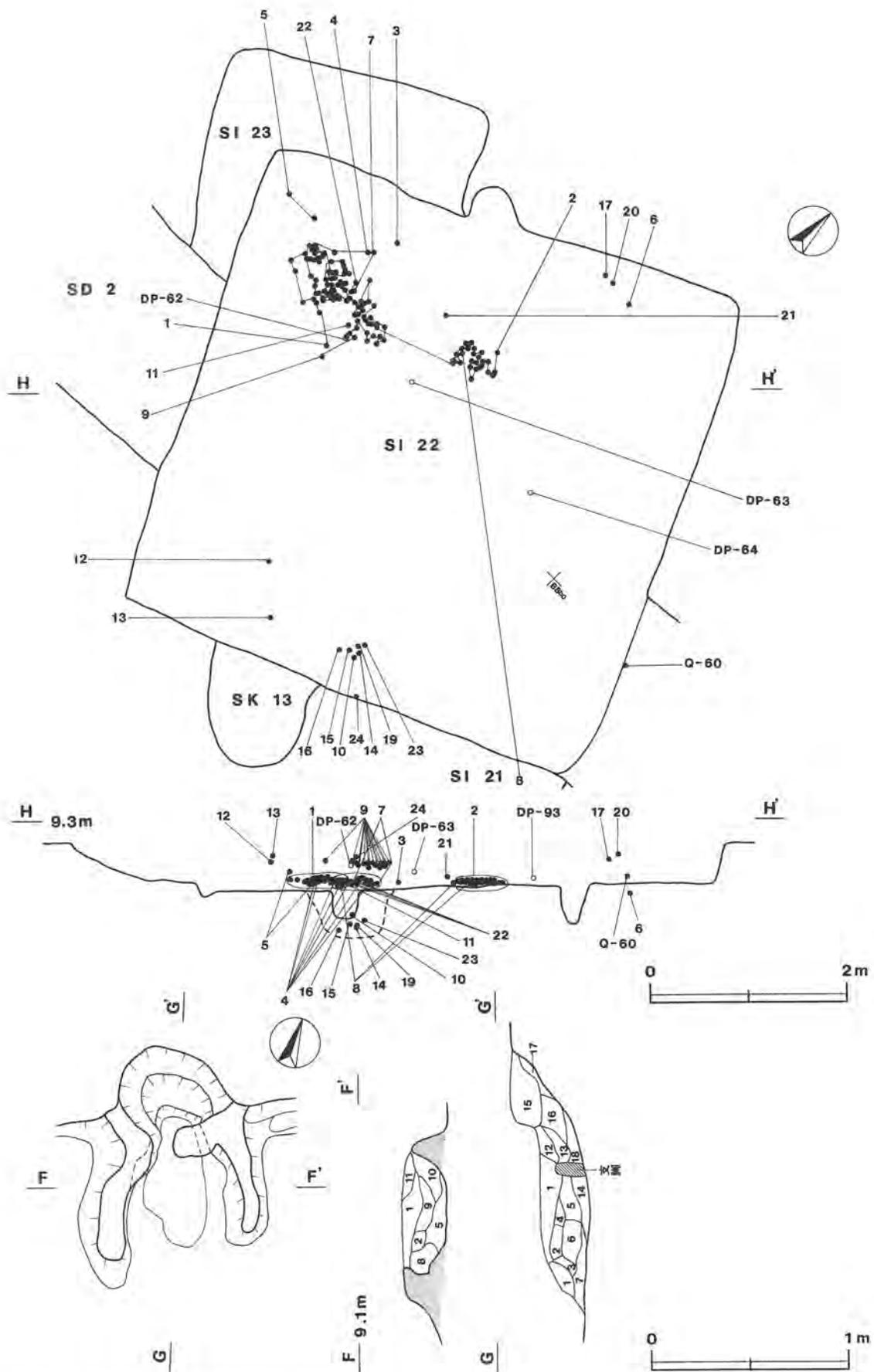
規模と平面形 長軸5.1m・短軸5.0mの方形。

主軸方向 N-24°-W

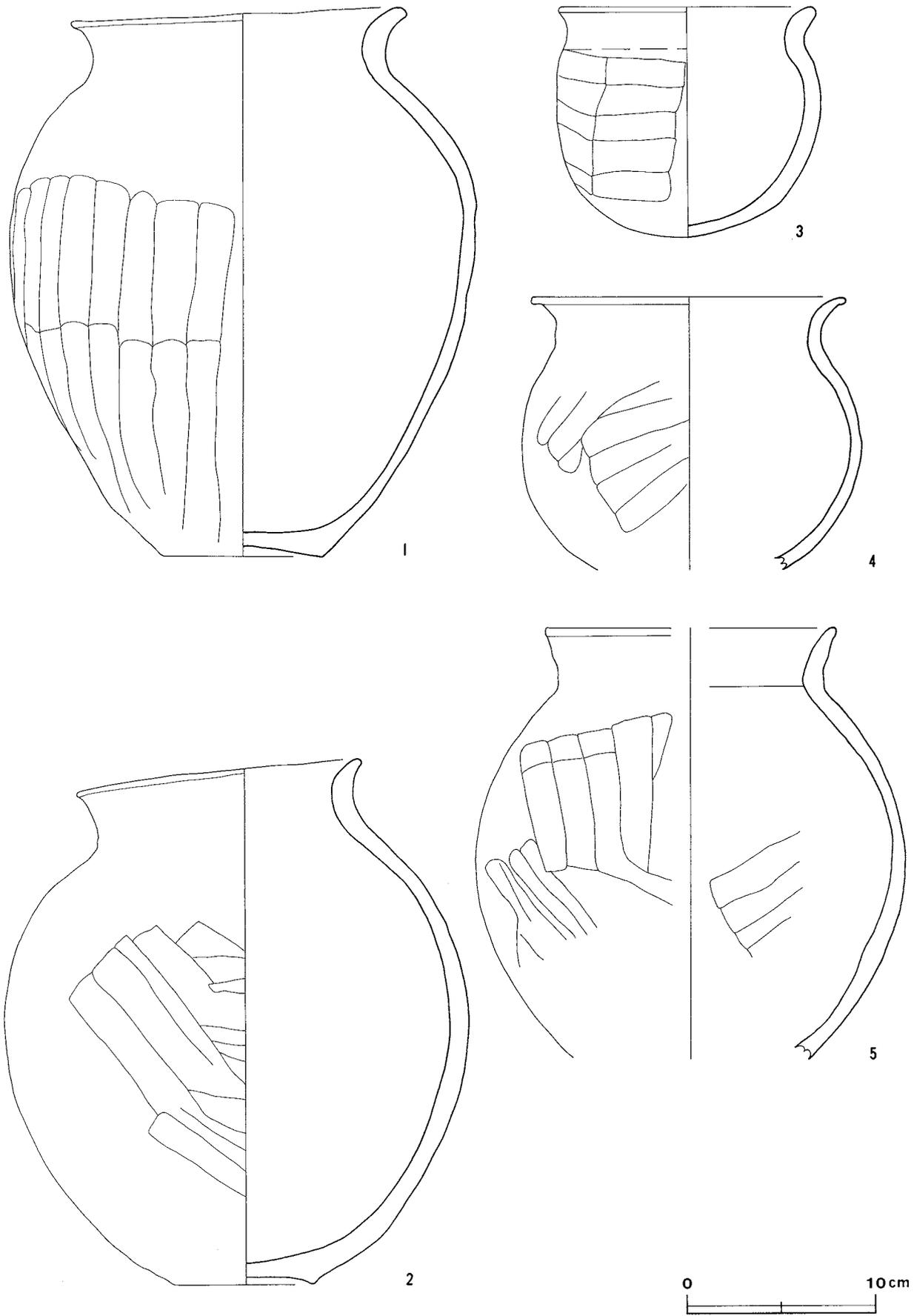
壁 壁高は, 12~50cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 北東壁と北西壁を除いて, 壁溝が周回している。上幅10~20cm, 深さ10cm程で, 断面形は「U」字状である。

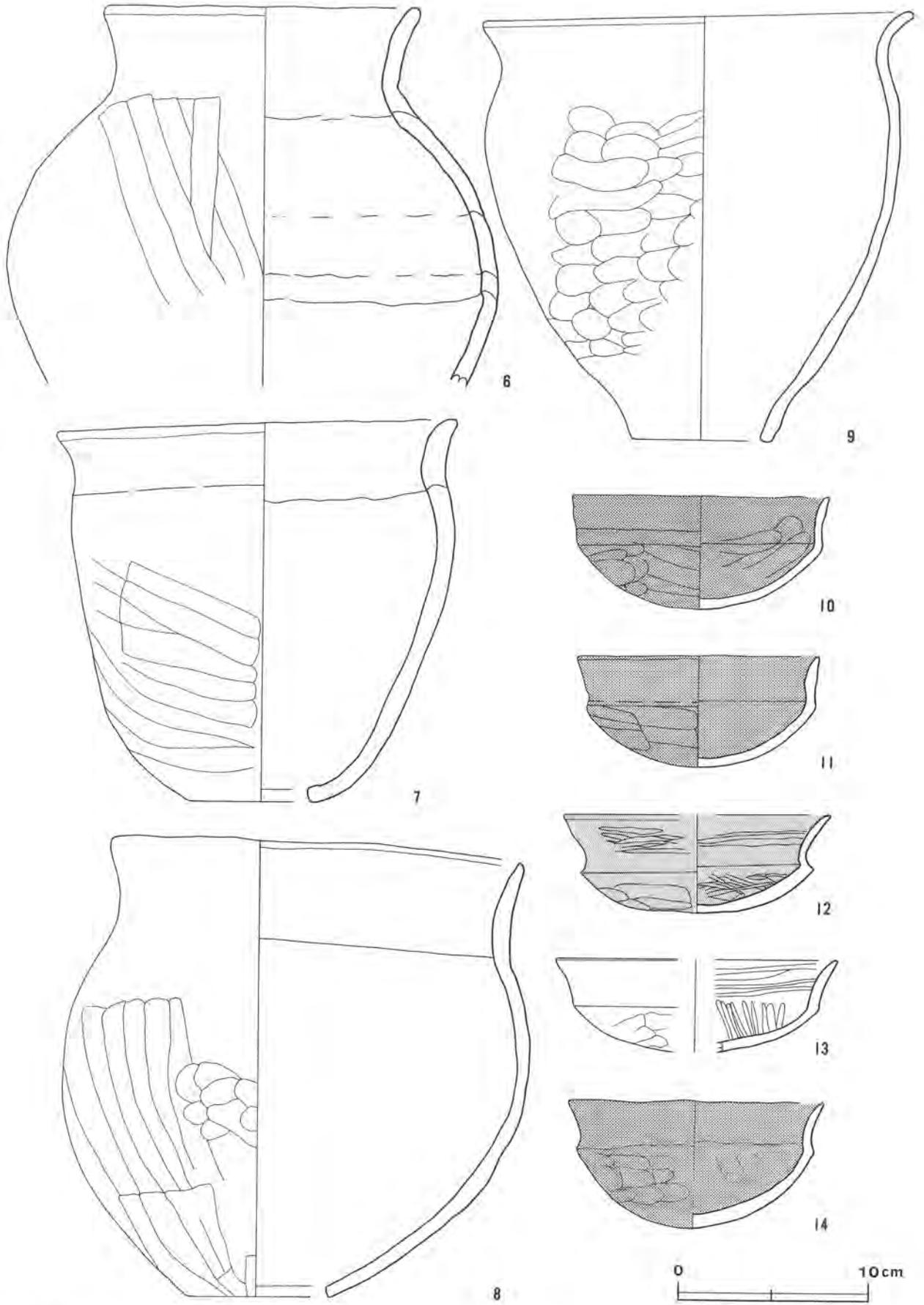
床 平坦であり, 竈全面の中央部や貯蔵穴付近が特に堅緻である。



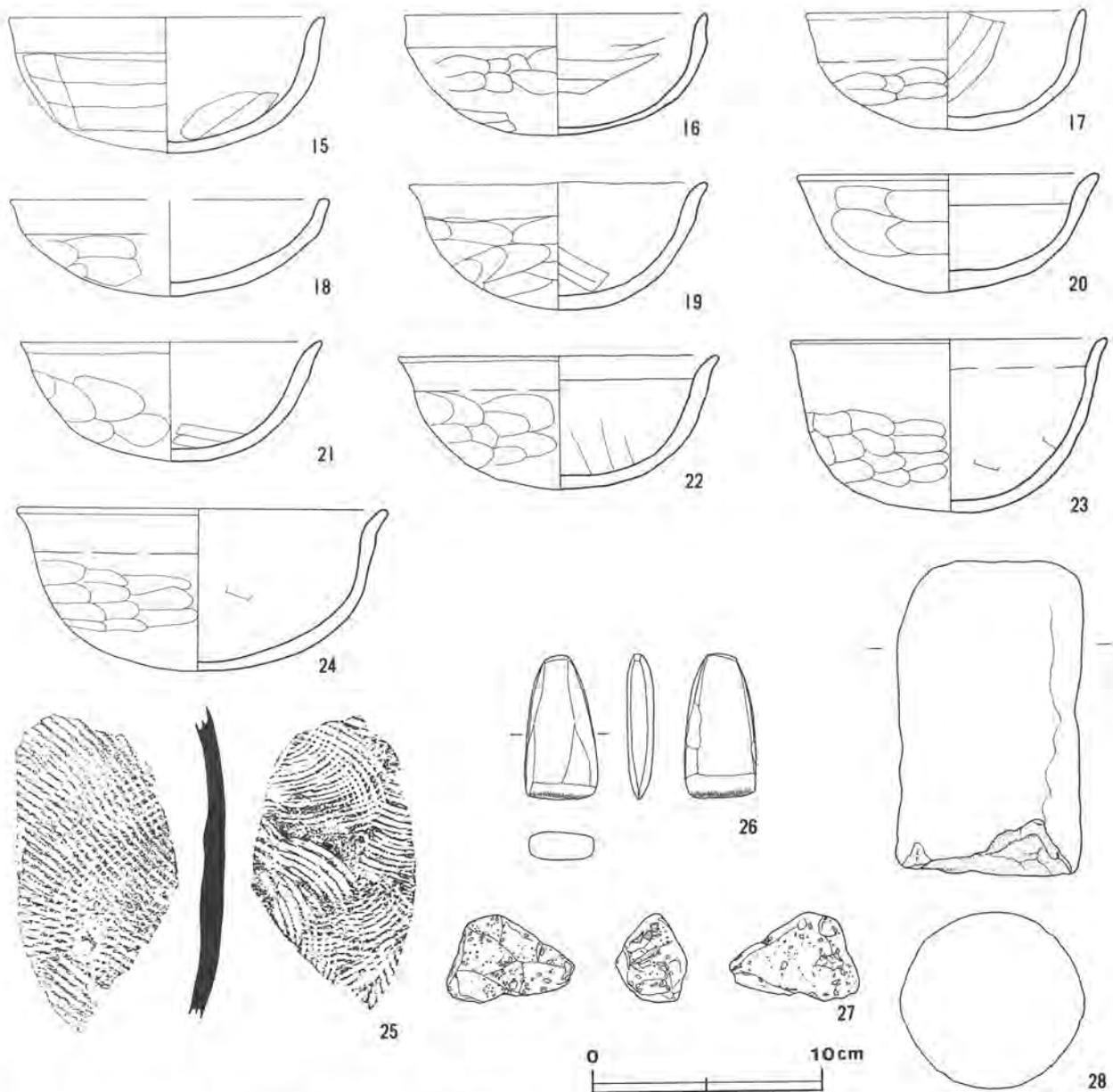
第78图 第22号住居跡遺物出土位置図・竈実測図



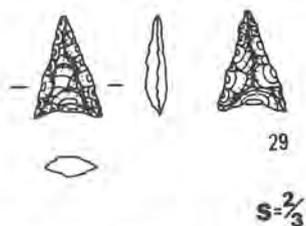
第79图 第22号住居跡出土遺物実測図(1)



第80号 第22号住居跡出土遺物実測図(2)



第81図 第22号住居跡出土遺物実測・拓影図(3)



第82図 第22号住居跡出土遺物実測図(4)

ピット 8カ所 (P<sub>1</sub>~P<sub>8</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、径22~34cmの円形で、深さ25~73cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。P<sub>5</sub>~P<sub>8</sub>は、径21~81cmの楕円形、深さ20~26cmで、位置等から補助柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部を壁外に37cm程掘り込み、砂や粘土で構築されている。規模は長さ110cm、幅90cmである。天井部は、崩落しているが、袖部は遺存状態が良い。火床は、熱を受け赤変硬化している。煙道部は火床部から緩やかに立ち上がる。覆土は18層からなる。第1層は焼土粒子を多量、ローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土小ブロックを少量、粘土を極少量含む褐色土、第2層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、砂・焼土

粒子を極少量含む褐色土、第3層は砂・焼土粒子を中量含む褐色土、第4層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第5層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土小ブロックを少量含む褐色土、第6層は焼土粒子・ローム小ブロックを中量、焼土小ブロックを少量含む褐色土、第7層はローム粒子・焼土粒子を中量、焼土小ブロック・砂・ローム小ブロックを少量含む褐色土、第8層は焼土粒子を多量、焼土小ブロックを中量、灰を少量含むにぶい赤褐色土、第9層は焼土大ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロックを少量含むにぶい赤褐色土、第10層はローム小ブロックを中量、焼土小ブロックを少量、焼土小ブロック・砂を極少量含むにぶい赤褐色土、第11層はローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を少量含む褐色土、第12層は砂を多量、焼土粒子・ローム小ブロックを中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子を極少量含むにぶい褐色土、第13層は砂・焼土粒子を多量、ローム小ブロック・焼土小ブロックを少量含む暗褐色土、第14層はローム粒子・焼土粒子を少量含む褐色土、第15層はローム粒子を中量、ローム小ブロック・焼土粒子を少量含む暗褐色土、第16層は焼土粒子・ローム粒子を中量、砂を少量含む暗褐色土、第17層は暗褐色土・ローム粒子を少量含む明褐色土、第18層は焼土粒子・砂を中量、焼土小・中ブロック・ローム中ブロックを少量含む明赤褐色土である。

貯蔵穴 南壁中央部付近に付設され、規模は長さ138cm、幅110cmである。底面は凹凸状を呈し、壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。貯蔵穴の周囲には幅10～40cm、厚さ10cm程の粘土を周堤状に貼り巡らしている。

覆土は7層（第9層～第15層）からなる。第9層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、炭化粒子を極少量含む黒褐色土、第10層はローム粒子を中量、炭化粒子を少量含む黒色土、第11層はローム粒子を中量、ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土、第12層はローム粒子を少量、炭化粒子・粘土を極少量含む黒色土、第13層はローム粒子を少量、粘土小ブロックを極少量含む黒褐色土、第14層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、ローム大ブロックを少量含む暗褐色土、第15層は粘土を多量含むにぶい褐色土である。

覆土 覆土は13層（第4層～第8層、第16層～第23層）からなる。第4層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子を極少量含む極暗褐色土、第5層はローム粒子・ローム小ブロックを中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロックを少量含む極暗褐色土、第6層はローム小ブロックを極少量含む暗褐色土、第7層はローム粒子を多量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土、第8層はローム粒子・ローム小ブロックを多量、ローム小ブロックを極少量含む暗褐色土、第16層はローム粒子を中量、焼土粒子・焼土大ブロックを少量含む極暗褐色土、第17層はローム粒子を中量、ローム小ブロック・炭化物・焼土粒子を少量含む暗褐色土、第18層はローム粒子・炭化物を中量含む黒褐色土、第19層はローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む暗褐色土、第20層はローム粒子を中量、焼土粒子・炭化粒子を少量含む褐色土、第21層はローム粒子を多量含む明褐色土、第22層はローム粒子を多量、ローム小ブロックを少量、炭化粒子を極少量含む褐色土、第23層は暗褐色土を中量含む明褐色土である。自然堆積と思われる。

遺物 北部及び竈、貯蔵穴内の覆土中・下層から多量の土師器片・磨製石斧（第81図26）・浮子（第81図27）・支脚（第81図28）・石鍬（第82図1）が出土している。第79図1・5の甕は北コーナー中・下層から、第87図7の甕が竈西側下層から、第80図10・第81図15・19・22の坏が貯蔵穴内から出土している。磨製石斧と石鍬は流れ込みである。南コーナー付近に、少量の炭化材、焼土がみられる。

所見 本跡は、炭化物・焼土の状況から、焼失家屋と考えられる。本跡は、古墳時代後期の住居跡である。

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	甕 土師器	A 15.7 B 29.3 C 8.6	平底。胴部は内彎して立ち上がり、 頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,パミス,礫 明赤褐色 普通	P-172 80% 北西コーナー 付近覆土下層
2	甕 土師器	A 15.1 B 28.0 C 7.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、 頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒,雲母,パミス 明赤褐色 普通	P-173 80% 竈前面付近床面
3	小型甕 土師器	A 13.3 B 12.3	丸底。胴部は内彎して立ち上がり、 頸部はややくびれ、口縁部は外反す る。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,雲母,パミス 橙色 普通	P-177 10% 竈西側 付近覆土下層
4	甕 土師器	A 16.6 B (14.6)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上 がり、頸部はくびれ、口縁部は大きく 外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒,パミス 橙色 普通	P-176 60% 北西コーナー 付近覆土中層
5	甕 土師器	A [15.3] B (23.0)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上 がり、頸部はくびれ、口縁部は外傾す る。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒,雲母,パミス 赤色 普通	P-175 50% 北西コーナー 付近覆土中層
第80図 6	壺 土師器	A 16.7 B (20.4)	胴下半部以下欠損。胴部は内彎して 立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部 は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ナデ。 内面に輪積痕。	砂粒,パミス,礫 橙色 普通	P-174 50% 竈・北西コーナ ー 付近覆土中層
7	甗 土師器	A 21.3 B 20.8 C 6.9	無底式。胴部は内彎して立ち上 がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,長石,パミス 橙色 普通	P-178 90% 竈西側 付近覆土下層
8	甗 土師器	A 21.6 B 24.8 C [ 7.7]	無底式。胴部は内彎して立ち上 がり、頸部は直立する。口縁部は外反 する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,長石,パミス 明赤褐色 普通	P-179 60% 北西コーナー 付近覆土下層
9	甗 土師器	A 22.5 B 23.3 C 7.5	無底式。胴部は内彎して立ち上 がり、頸部はくびれ、口縁部は外反す る。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,パミス,スコ リア にふい褐色 普通	P-180 60% 竈前面付近覆土 下層
10	坏 土師器	A 13.7 B 6.1	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、口縁部との境ににふい稜をもち、口 縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。 内・外面赤彩痕。	砂粒,雲母,礫 赤色 普通	P-181 98% 貯蔵穴覆土中層
11	坏 土師器	A 13.0 B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、口縁部との境ににふい稜をもち、口 縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。 内・外面赤彩痕。	砂粒,長石,パミス 明赤褐色 普通	P-187 90% 竈前面 付近覆土下層
12	坏 土師器	A [14.2] B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、口縁部との境に明瞭な稜をもち、口 縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ後ヘラ磨き。 体部外面へラ削り後ヘラナデ。内面 へラ磨き。内・外面黒色処理。	砂粒,雲母,パミス 黒色 良	P-190 75% 南西コーナー 付近覆土上層
13	坏 土師器	A [15.0] B ( 5.0)	底部欠損。体部は内彎して立ち上 がり、口縁部との境ににふい稜をも つ。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ後ヘラ磨き。 体部外面へラ削り後ヘラナデ。内面 暗文状のヘラ磨き。	砂粒,パミス 橙色 良	P-193 15% 南西コーナー 付近覆土上層
14	坏 土師器	A 13.7 B 6.9	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、口縁部との境ににふい稜をもち、口 縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナ デ。内・外面赤彩痕。	砂粒,雲母,パミス 暗赤色 普通	P-186 100% 貯蔵穴覆土中層
第81図 15	坏 土師器	A 13.8 B 6.0	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外 反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面摩滅著しく 調整不明。	砂粒,雲母 橙色 不良	P-182 100% 貯蔵穴覆土中層
16	坏 土師器	A 13.2 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、口縁部との境ににふい稜をもち、口 縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外 面へラ削り後ヘラナデ。	砂粒,雲母,パミス 橙色 普通	P-183 100% 貯蔵穴覆土中層
17	坏 土師器	A 12.2 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、そのまま口縁部に至る。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,雲母,礫 橙色 普通	P-185 95% 竈東側 付近覆土中層
18	杯 土師器	A 14.0 B 4.3	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、そのまま口縁部に至る。 口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,雲母,礫 橙色 普通	P-192 60% 中央部覆土中層
19	坏 土師器	A 13.0 B 5.6	丸底。体部は内彎して立ち上 がり、そのまま口縁部に至る。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒,パミス,スコ リア 明赤褐色 普通	P-184 100% 貯蔵穴覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
20	坏土師器	A 13.0 B 5.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,長石,パミスにふい橙色普通	P-191 70% 竈東側付近上層
21	坏土師器	A 13.2 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,スコリア 橙色普通	P-189 95% 竈前面付近中層
22	坏土師器	A 14.0 B 5.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,雲母,スコリア 橙色普通	P-188 95% 北西部床面
23	埴土師器	A 13.8 B 7.7	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,雲母,礫 橙色普通	P-194 100% 貯蔵穴覆土中層
24	埴土師器	A 16.1 B 7.2	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒,パミス,スコリア にふい橙色普通	P-195 98% 南壁中央 際付近覆土上層

### 第28号住居跡 (第83図)

位置 調査区の中央部, B6h3区。

重複関係 本跡の南東コーナー付近は, 第27土坑に掘り込まれているため, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長軸5.2m・短軸5.1mの方形。

主軸方向 N-20°-W

壁 壁高は, 5~40cmである。北・東壁は攪乱を受け遺存状態は悪いが, 西・南壁は遺存状態が良く, ほぼ垂直に立ち上がる。

床 平坦であるが, やや東側に向かって傾斜している。中央部が特に堅緻である。

ピット 4か所 (P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は, 径28~36cmの円形で, 深さ59cmである。規模や配列から主柱穴と考えられる。

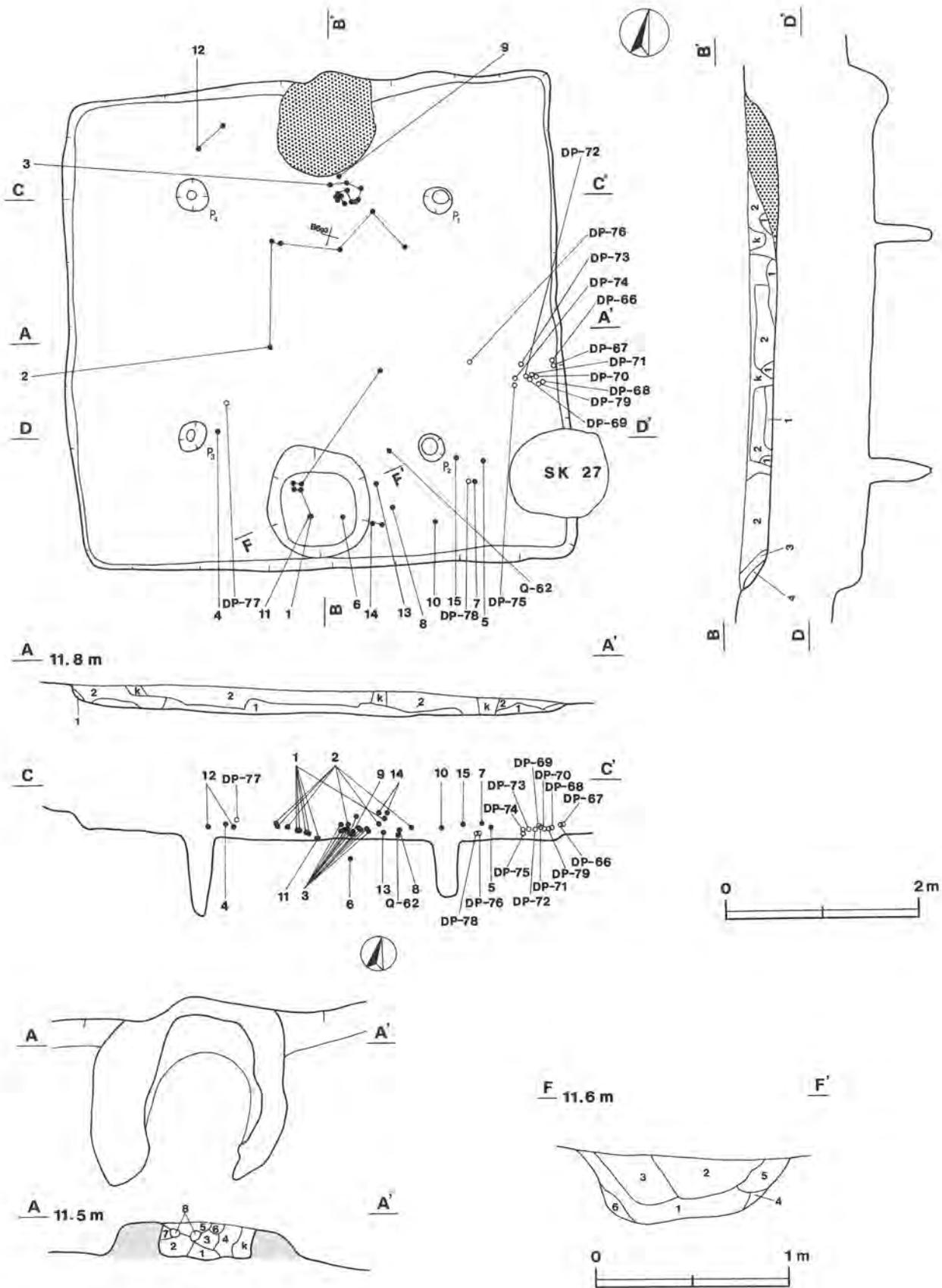
竈 北壁中央部を壁外に10cm程掘り込み, 砂や粘土で構築されている。規模は長さ110cm, 幅100cmを有するものと推定される。トレンチャーによる攪乱を受けているため, 竈の遺存状態は悪く, 天井部や煙道部は不明である。火床部は, レンガ状に赤変硬化している。

貯蔵穴 南壁中央に位置する。長さ124cm・幅123cmの楕円形で, 深さ31cmである。底面は皿状で壁は外傾して立ち上がる。覆土は8層からなる。第1層は焼土大・小ブロックを少量, ローム粒子・炭化物を極少量含む褐色土, 第2層は焼土小・中ブロックを中量, 砂・ローム粒子・炭化物を極少量含む褐色土, 第3層は焼土大・小ブロックを少量, 炭化物・砂を極少量含む褐色土, 第4層は焼土小ブロックを中量, 炭化物・砂を極少量含むにふい褐色土, 第5層は砂を多量, 焼土大ブロックを少量含むにふい黄橙色土, 第6層は焼土中ブロックを中量, 砂を少量含む灰褐色土, 第7層は焼土大・小ブロックを中量, ローム粒子・炭化物・砂を極少量含む褐色土, 第8層は焼土粒子を多量, 砂を極少量含む橙色土である。

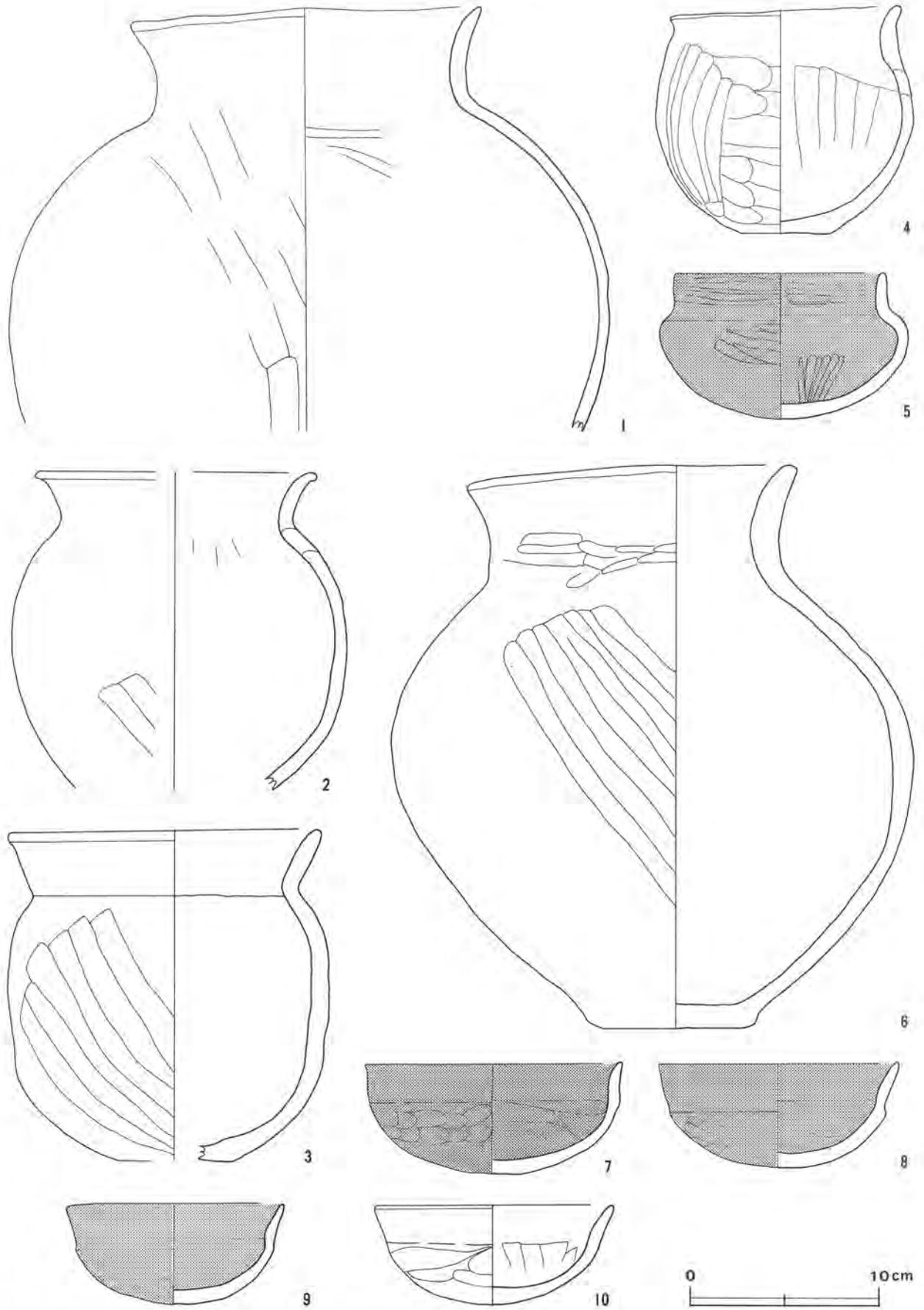
覆土 4層からなる。第1層はローム粒子を中量, 焼土小ブロックを極少量含む明褐色土, 第2層はローム中ブロックを少量, 焼土小ブロック・炭化物を極少量含む黒褐色土, 第3層はローム小・中ブロックを少量, 炭化物を極少量含む褐色土, 第4層はローム粒子を中量, 焼土小ブロックを極少量含む褐色土である。自然堆積と思われる。

遺物 中央部覆土中・下層から多量の土師器・土玉・土製品が出土している。第84図1の甕・第85図11の坏は貯蔵穴内から出土し, 第84図5の小型壺は北東コーナー付近の覆土中層から出土している。

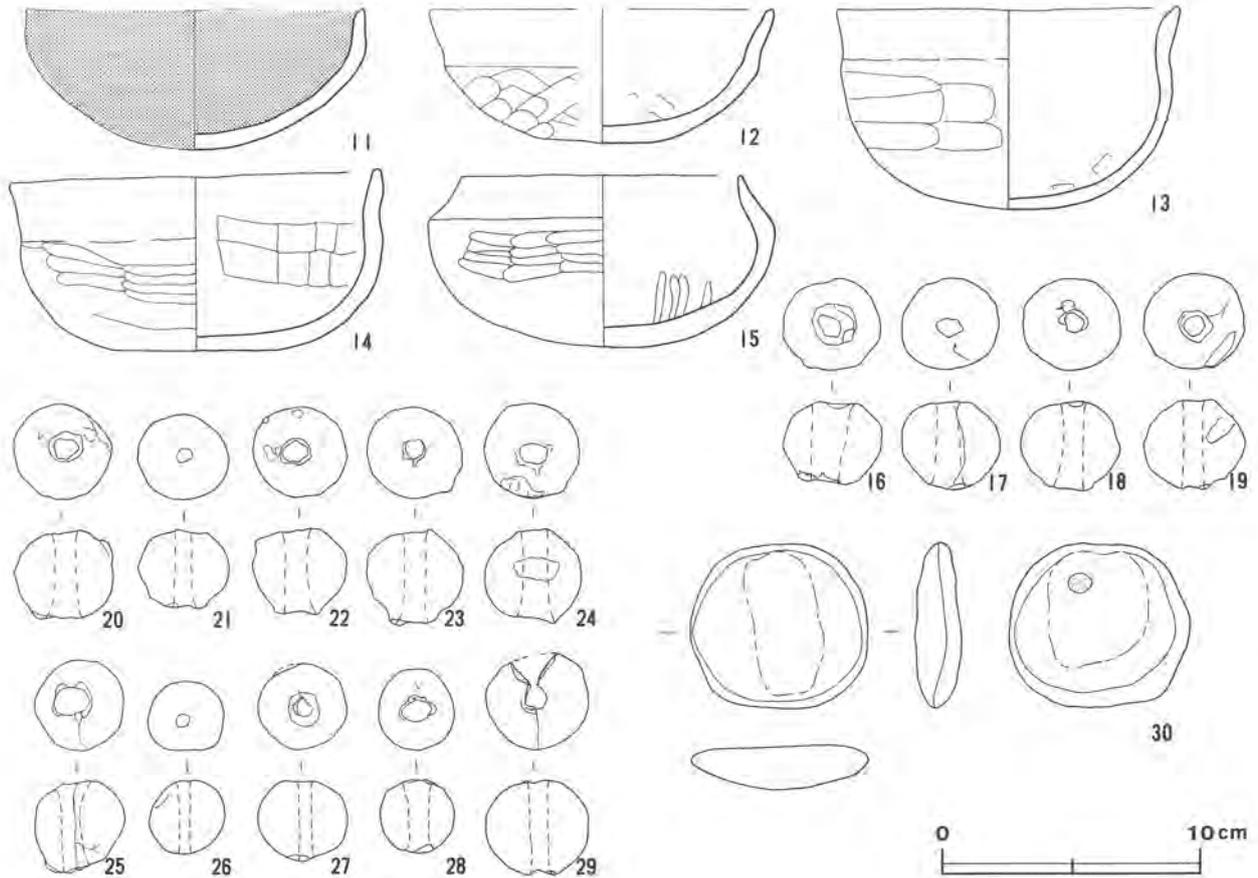
所見 本跡は, 古墳時代後期の住居跡である。



第83图 第28号住居跡・竈実測図



第84图 第28号住居跡出土遺物実測図(1)



第85図 第28号住居跡出土遺物実測図(2)

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	甕 土師器	A 18.4 B [22.8]	胴下半部以下欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、バミスにふい橙色普通	P-218 30% 貯蔵穴 中央部覆土中層
2	甕 土師器	A [15.0] B (17.0)	底部欠損。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へ面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、礫、バミス明赤褐色普通	P-219 25% 竈前面付近
3	甕 土師器	A 16.5 B 17.8 C [ 6.0]	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、雲母、礫赤色普通	P-217 98% 竈前面付近
4	小型甕 土師器	A 12.2 B 12.1 C 5.3	平底。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒、バミス橙色普通	P-220 100% 中央部覆土中層
5	短頸壺 土師器	A 11.0 B 7.8	丸底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は直立する。	口縁部内・外面へラ磨き。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラ磨き。内・外面赤彩痕。	砂粒、雲母、長石明赤褐色良	P-214 98% 北東コーナー 付近覆土中層
6	甕 土師器	A 17.2 B 30.4 C 8.7	平底。胴部は内彎して立ち上がり、頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部外面へラ削り。胴部外面へラ削り。内面磨減著しく調整不明。	砂粒、雲母、バミスにふい赤褐色普通	P-216 100% 貯蔵穴覆土中層
7	坏 土師器	A 13.6 B 5.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒、長石、バミス明赤褐色普通	P-221 100% 北西コーナー 付近覆土中層
8	坏 土師器	A 12.6 B 5.6	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒、長石、バミス赤褐色普通	P-222 100%南壁中央 付近覆土中層
9	坏 土師器	A 11.4 B 5.4	丸底。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にふい稜をもつ。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。内・外面赤彩痕。	砂粒、雲母、バミス赤褐色普通	P-223 100% 竈前面覆土中層

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
10	坏 土師器	A 12.5 B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境にふい稜をもつ。 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒、礫、パミス 赤色 普通	P-225 100% 南壁中央から東 より覆土中層
第85図 11	坏 土師器	A 13.2 B 5.5	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。 内・外面赤彩痕。	砂粒、パミス 赤褐色 普通	P-224 95% 貯蔵穴覆土中層
12	坏 土師器	A [13.2] B 5.3	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部との境にふい稜をもつ。 口縁部は外反する。	口縁部・外面横ナデ。体部外面へラ 削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。 口縁部は外反する。	砂粒、雲母、パミス 黒褐色 普通	P-226 55% 竈西側付近
13	埴 土師器	A 13.3 B 7.9	丸底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒、雲母、パミス 明赤褐色 普通	P-227 100% 貯蔵穴 東部覆土中層
14	埴 土師器	A 14.5 B 7.1 C 6.5	平底。体部は内彎して立ち上がり、 口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ。	砂粒、パミス 赤褐色 普通	P-228 90% 貯蔵穴 東側覆土中層
15	短頸壺 土師器	A 10.8 B 6.8	丸底。胴部は内彎して立ち上がり、 口縁部は、内傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へ ラ削り後ヘラナデ。内面ヘラ磨き。	砂粒、雲母、パミス 赤色 良	P-215 80% 北東コーナー付近

### 第32号住居跡（第86図）

位置 調査区の中央部，C5a4区。

規模と平面形 長軸（7.0）m・短軸6.9mの方形と推定される。

主軸方向 N-15°-E

壁 壁高は，7～27cmで，ほぼ外傾して立ち上がる。

床 残存部は平坦であり，特に中央部は硬く締まっている。

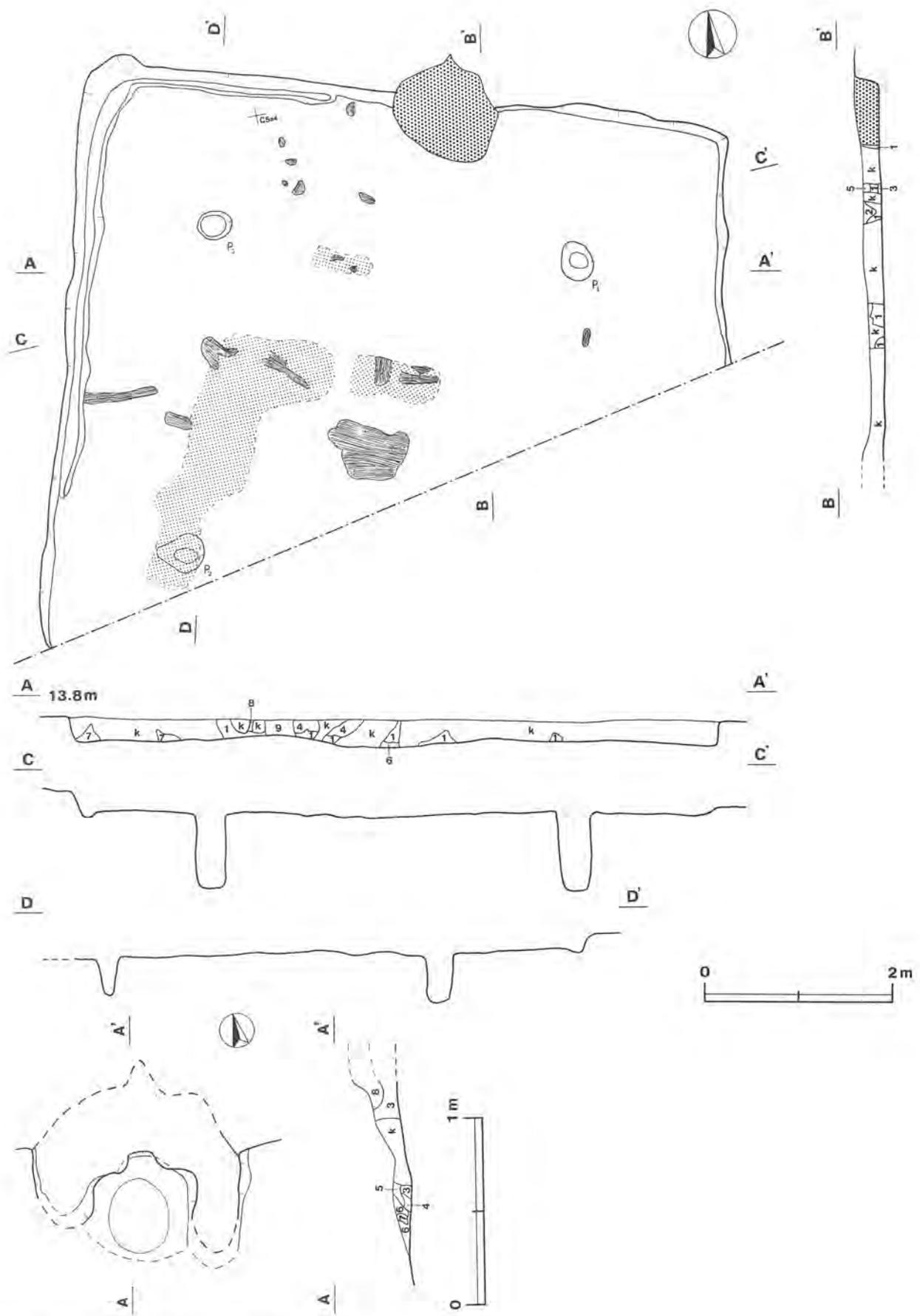
ピット 3か所（P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>）検出されている。P<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>は，径33～52cmの円形で，深さ61～85cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。

竈 北壁中央部から壁外に50cm程掘り込み，砂や粘土によって構築されている。規模は，長さ112cm，幅113cmと推定される。耕作による攪乱により大半を破壊され，袖部が断片的に遺存しているにすぎない。火床は，赤変硬化している。煙道部は火床から緩やかに外傾して立ち上がる。8層からなる。第1層はローム粒子を少量，焼土粒子を極少量含む暗褐色土，第2層はローム粒子・焼土粒子を極少量含む暗褐色土，第3層はローム粒子を多量含むにふい褐色土，第4層はローム粒子・炭化物を極少量含む暗褐色土，第5層は砂を少量，焼土粒子・炭化物を極少量含む灰褐色土，第6層は焼土粒子を中量，炭化物を極少量含む灰褐色土，第7層は焼土大ブロックを少量，炭化物を極少量含む明赤褐色土，第8層はローム粒子を中量含む褐色土である。

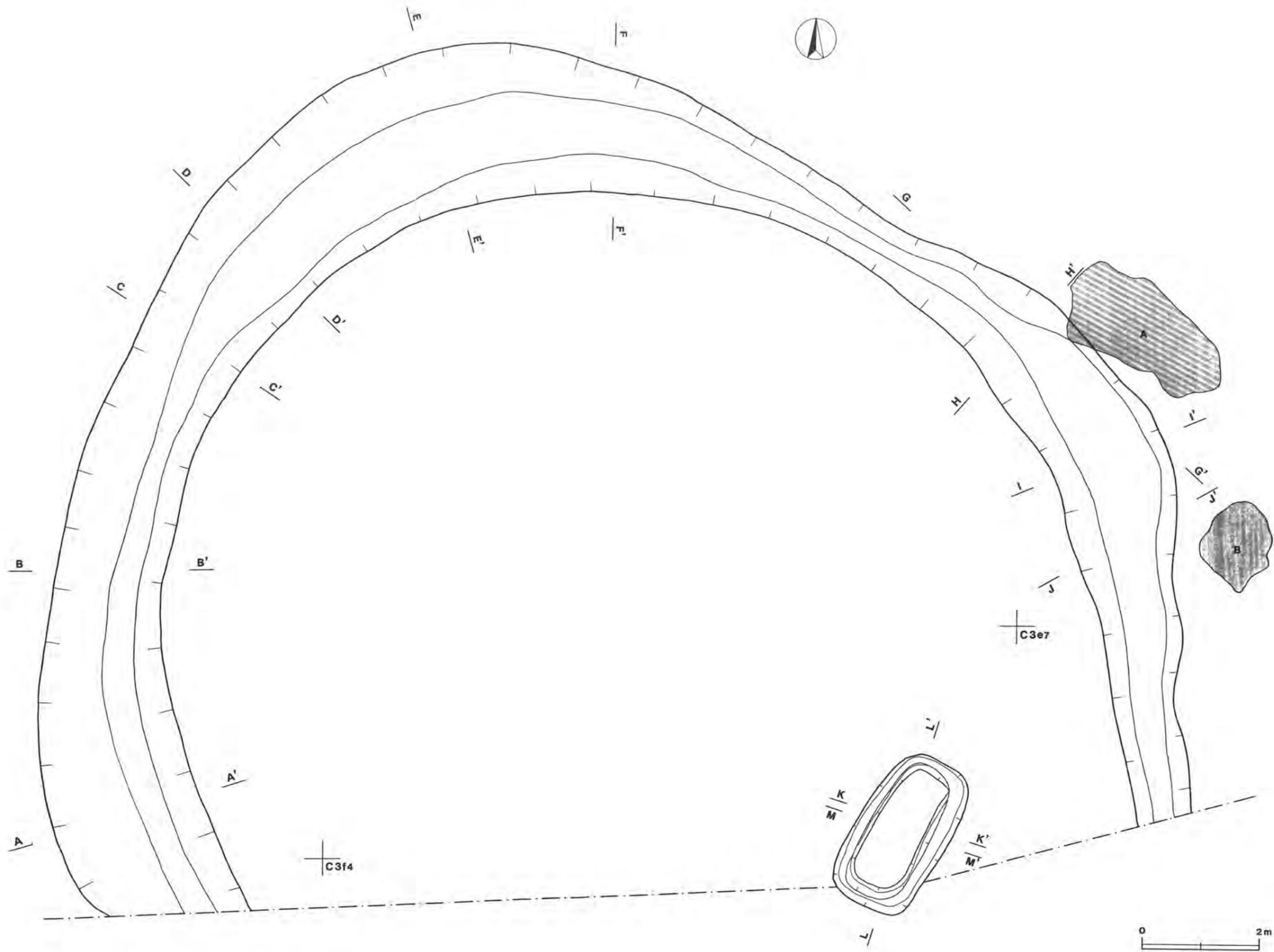
覆土 耕作による攪乱を受けているため，堆積状況は不明である。覆土は9層からなる。第1層はローム粒子を少量，焼土小ブロックを中量，炭化物を極少量含む暗褐色土，第2層は暗褐色土を中量，ローム小ブロックを少量，炭化物を極少量含む暗褐色土，第3層はローム粒子・炭化物を少量含む褐色土，第4層はローム小ブロック・焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土，第5層は砂を少量，焼土小ブロック・炭化物を極少量含む灰褐色土，第6層はローム粒子を中量含む褐色土，第7層はローム粒子を中量，炭化物を極少量含む褐色土，第8層は焼土小ブロックを中量含む暗赤褐色土，第9層は焼土粒子・炭化物を中量，ローム粒子を少量含む褐色土である。

遺物 壁際覆土下層から極少量の土師器が出土している。第87図2のミニチュア土器は北壁際覆土下層から，第87図1の甌は竈東側の覆土下層から出土している。南西部には多量の炭化物・焼土がみられる。

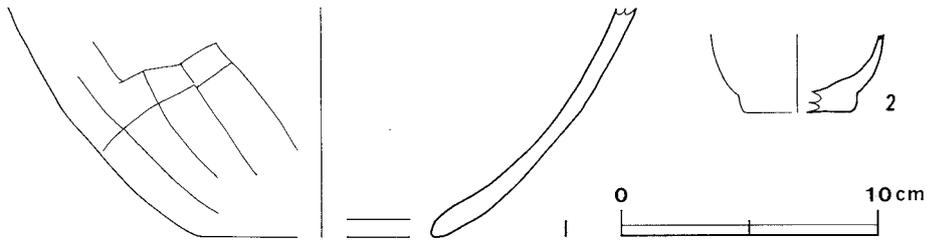
所見 本跡は，床面にみられる多量の焼土・炭化物の状況から，焼失家屋と考えられる。本跡は，古墳時代後期の住居跡である。



第86図 第32号住居跡・竈実測図



第87图 第1号墳実測図(1)



第88図 第32号住居跡出土遺物実測図

第32号住居跡出土遺物観察表

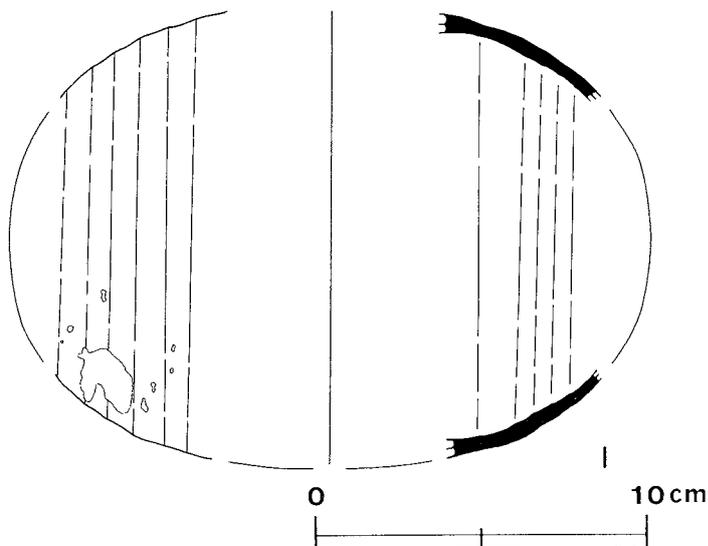
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 1	甑 土師器	B ( 9.0) C [ 9.2]	胸部片。無底式。胸部は内彎して立ち上がる。	胸部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒,長石,パミスにふい褐色普通	P-234 10% 竈東側付近床面
2	手捏土器 土師器	B ( 3.1) C [ 4.2]	底部片。平底。体部は内彎する。	体部内面あらいへラナデ。	砂粒,パミスにふい橙色不良	P-235 20% 中央部覆土中層

## (2)古墳

### 第1号墳 (第87・90図)

位置 調査区の西部の台地先端部のC3区を中心に確認されている。本墳の北東側6mに第2号墳が位置し、北東側10mに第3号墳が位置している。

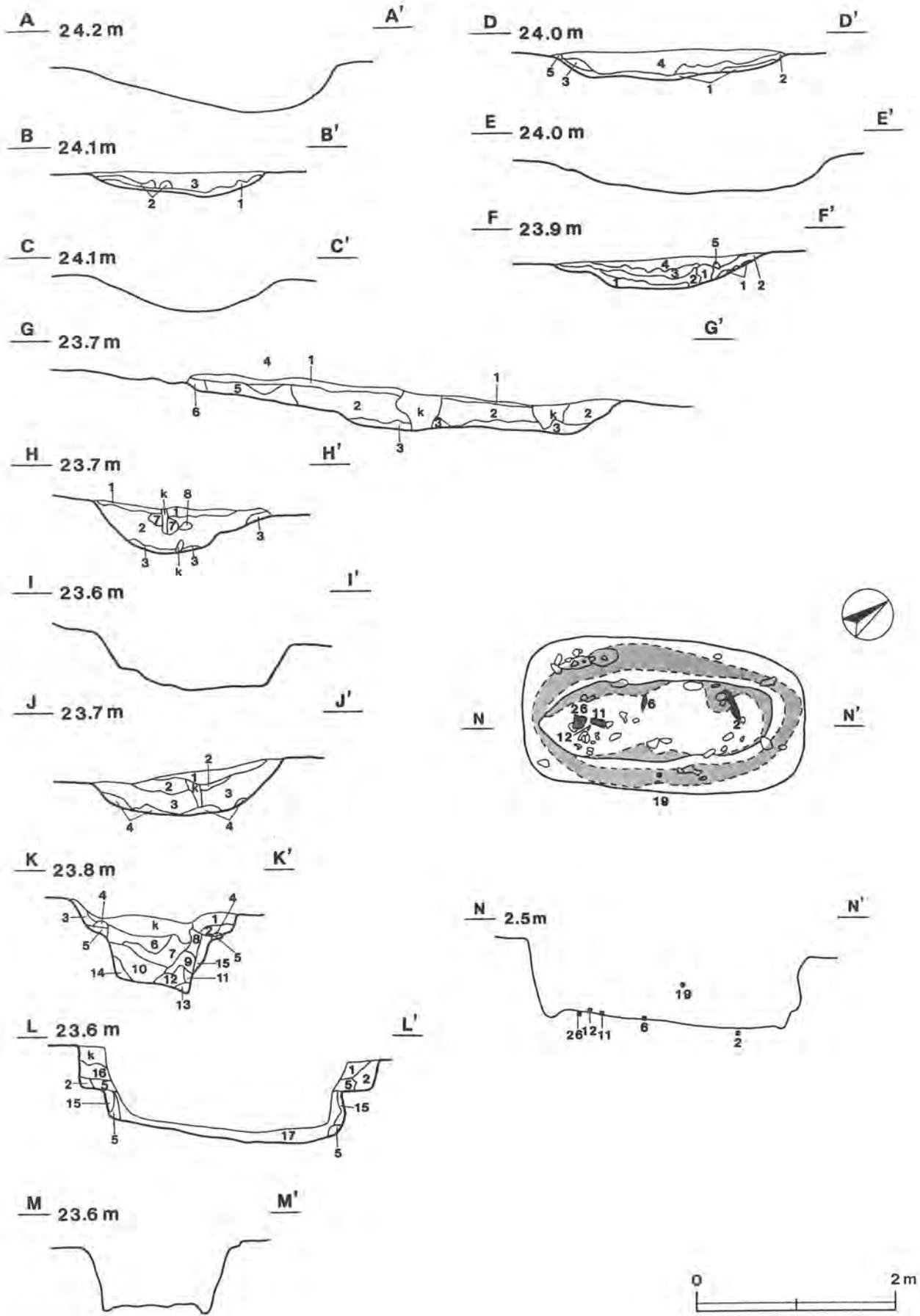
規模と平面形 墳丘は既に消失している。平面形は、本墳の周溝の一部が南側の調査区域外のため完掘できなかったが、周溝の形状から円墳と推定される。本墳の規模は、外法が長径(南北) (20.0)m、短径(東西) (19.8)mで、内法は、南北16.0m、東西 (16.0)mと推定される。埋葬施設は、墳丘の南東部に確認されている。



第89図 第1号墳出土遺物実測図

第1号墳出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	横瓶 須恵器	B (13.6)	体部破片。体部中央に最大径を持ち、体部は球形である。	内外面ともにナデが施される。	砂粒 灰白色 普通	P-252 5% 主体部覆土中層



第90图 第1号墳実測図(2)

周溝 周溝は円形に廻っていると推定されるが、南側は調査区域外となっている。周溝の規模は上幅1.0～2.8 m, 下幅0.25～1.30 m, 深さ35～50 mを測る。壁は外傾して立ち上がっている。覆土はローム粒子を含む黒褐色土や暗褐色土が自然堆積しており、いずれも硬く締まっている。

埋葬施設 埋葬施設は墳丘の南東側の裾部（C3e6区）で確認された。覆土は、粘土を小・中量含む褐色土・暗褐色土が硬く締まって堆積している。埋葬施設は、すでに石は抜き取られているが、箱式石棺と推定される。掘り方は、長軸1.4 m, 短軸0.8 m, 深さ100 cm程で地山を掘り込んで構築している。覆土からは石棺に使用されていた雲母片岩の石片や裏込めに使用された青白色の粘土や石片が検出されている。粘土の厚さは、遺存状態の良い底面や壁面で8～16 cm程である。石棺の規模は、抜き取られた石材の痕跡から長軸1.1 m, 短軸0.5 m, 深さ80 cm程である。

遺物 北部周溝覆土中から須恵器の細片が2片出土し、埋葬施設の覆土中層から第89図1の須恵器の瓶の破片が出土している。東部周溝のC3c7, C3d7区付近の2か所からは、長さ3～25 cm, 厚さ3～6 cmの雲母片岩の石片が集中して（集石部NO1・NO2地点）出土している。これらの石材は、埋葬施設から出土している雲母片岩と同じ石質で、埋葬施設が破壊された際に周溝付近に投棄されたものと推定される。

所見 本墳は、7世紀中葉の古墳と考えられる。

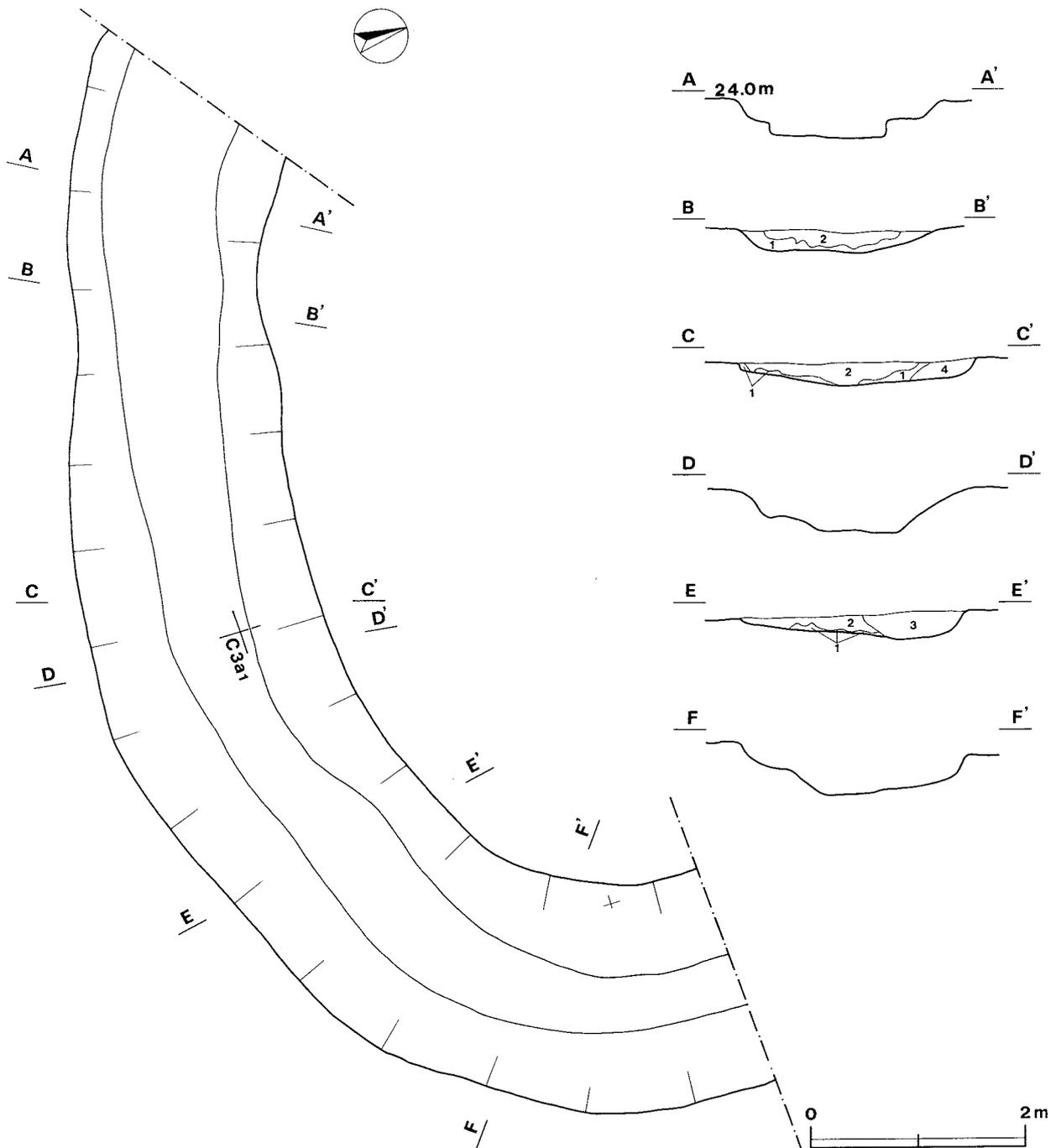
## 第2号墳（第91図）

位置 調査区の西部B3区を中心に確認されている。本墳の南側6 mに第1号墳が位置し、東側4 mに第3号墳が位置している。

規模と平面形 本墳の墳丘は既に消失しており、本墳の北側は調査区外であるため調査できなかった。本墳の規模は、直径約（14.0） m, 内法は直径約（11.2） mと推定される。平面形は不明であるが、第1号墳と同様に円墳と推定される。

周溝 周溝は円形に廻っていると推定されるが、北側は調査区外のため完掘できなかった。周溝の規模は、上幅1.65～2.25 m, 下幅0.15～1.05 m, 深さ33～42 cmである。壁は外傾して立ち上がる。覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土・褐色土が堆積している。いずれもよく締まっている。

所見 本墳は、第1号墳とほぼ同じ場所にあり、周溝の彫り方も同じであることから、第1号墳とそれほど時期差はないものと思われる。



第91図 第2号墳実測図

### 第3号墳 (第92図)

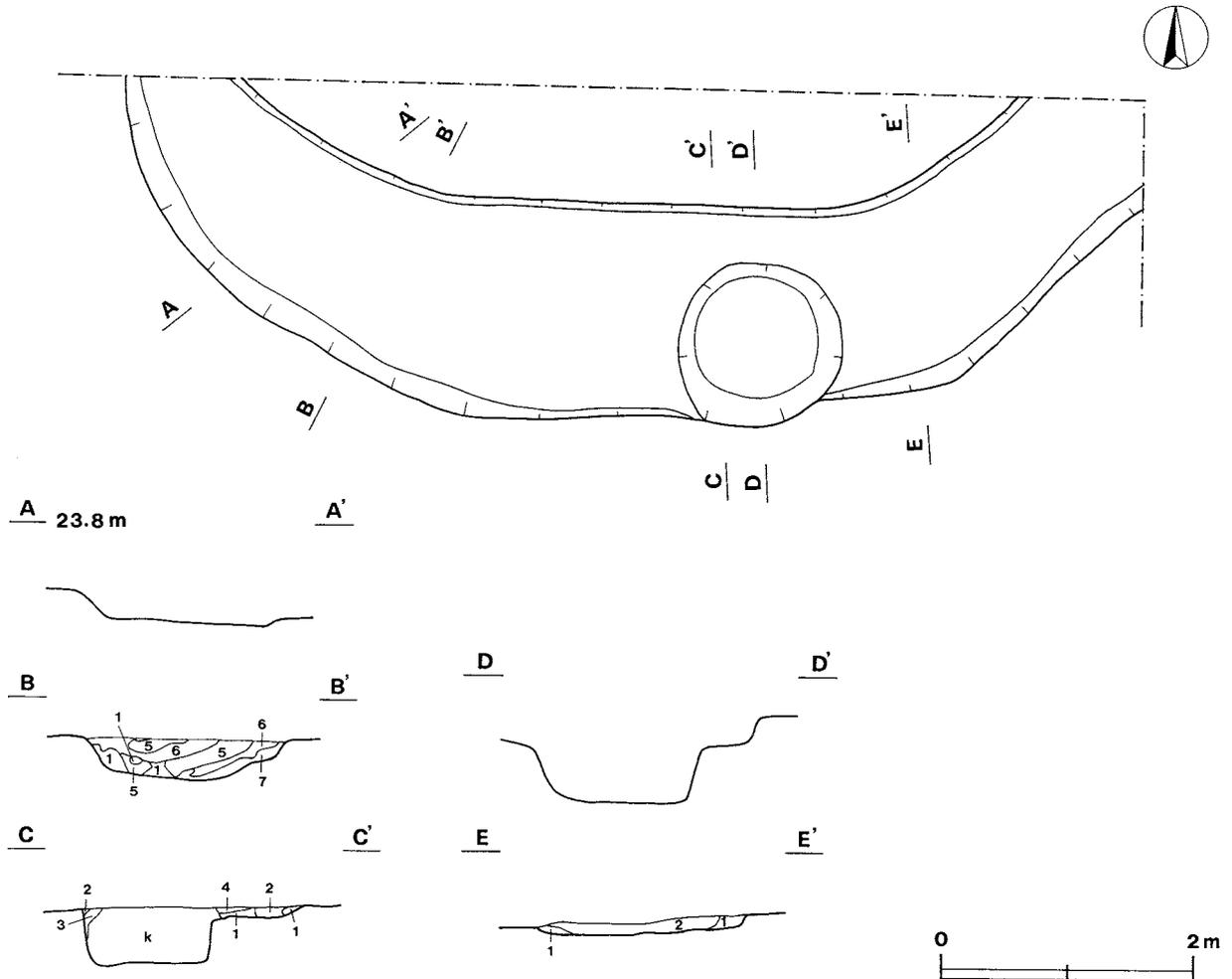
位置 調査区の西部B<sub>3</sub>区を中心に確認されている。本墳の南西側10mに第1号墳が位置し、西側4mに第2号墳が位置している。

規模と平面形 本墳の墳丘は既に消失しており、本墳の北側は調査区外であるため調査できなかった。規模は、外法は直径約(10.0)m、内法直径約(9.2)mと推定される。平面形は第1・2号古墳と同様に円墳と推定される。

周溝 周溝は、他の古墳と同様に円形に廻っているため、円墳と推定される。北側は調査区外のため完掘できなかった。周溝の規模は、上幅0.95~1.7m、下幅0.7~1.6m、深さ23~30cmである。壁は外傾して立ち上がる。

覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土・褐色土が堆積している。いずれもよく締まっている。

所見 本墳は、第1号墳とほぼ同じ場所にあり、周溝の掘り方も同じであることから、第1・2号墳と時期差はないものと思われる。



第92図 第3号墳実測図

### 3. 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代の遺構は、竪穴住居跡が中位段丘より2軒確認されている。以下、検出した遺構や遺物の特徴について記載する。

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第1号住居跡 (第93図)

位置 調査区の中央部，B7h<sub>1</sub>区。

規模と平面形 長軸3.3m・短軸2.7mの方形。

主軸方向 N-17°-E

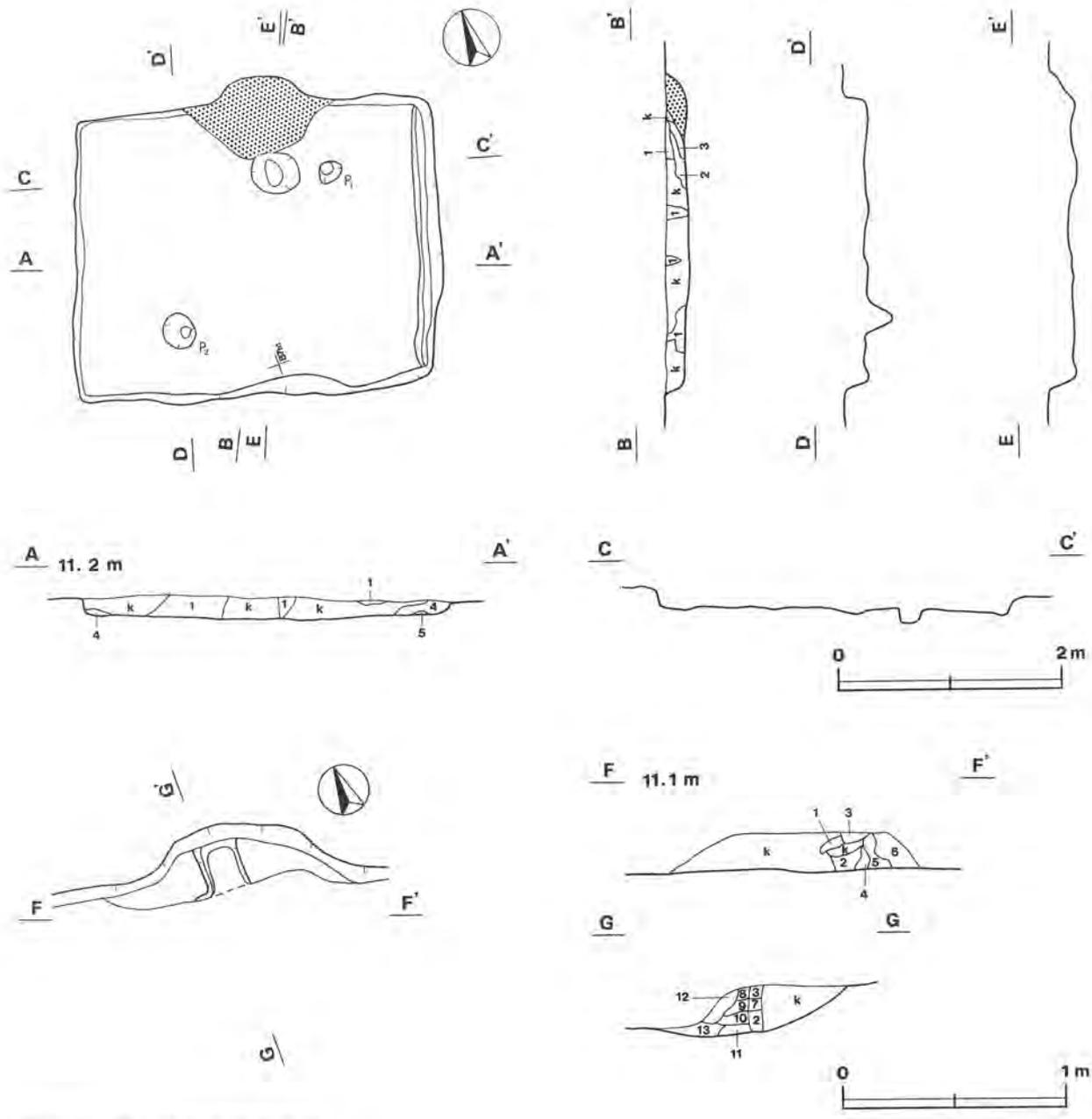
壁 壁高は、18~25cmを測り、ほぼ外傾して立ち上がる。

壁溝 東壁の壁下にある、上幅16~20cmで、深さは6cm程である。断面形は「U」字状である。

床 トレンチャーによる攪乱を受けている。残存している床面はほぼ平坦であり、全体的に硬く特に竈全面や中央部が、きわめて硬く締まっている。

ピット 2か所 (P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>)。いずれも支柱穴と考えられ、平面形は円形である。径はP<sub>1</sub>が19cm, P<sub>2</sub>が33cmで、深さはP<sub>1</sub>が37cmで、P<sub>2</sub>が44cmである。他の柱穴は、トレンチャーによって破壊されているため不明である。

竈 北壁中央部を壁外に17cm程掘り込み、砂や粘土で構築されている。トレンチャーによる攪乱を受けており、規模は長さ32cm, 幅110cmと推定される。天井部・煙道部については不明で、袖部や火床部が僅かに残存しているにすぎない。覆土は13層からなる。第1層はローム粒子を極少量含む黒褐色土、第2層はローム粒子を極少量含む灰褐色土、第3層ローム粒子・砂を極少量含む黒褐色土、第4層は砂(浅黄色)を少量、焼土小ブロックを極少量含む褐色土、第5層は砂(淡黄色)を中量、焼土粒子・炭化物を極少量含む褐色土、第6層はローム粒子・焼土小ブロック・炭化物を極少量含む褐色土、第7層はローム粒子を少量含む暗褐色土、第8層は砂



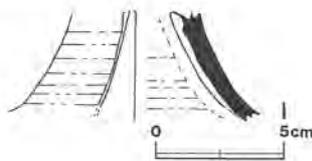
第93図 第1号住居跡実測図

を多量、焼土粒子を極少量含む暗褐色土、第9層は砂を少量、焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土、第10層は砂を少量、焼土中ブロックを中量含む暗褐色土、第11層はロームブロックを多量含む橙色土、第12層はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を極少量含む暗褐色土、第13層はローム粒子・ローム小ブロックを少量含む褐色土である。確認された火床は、床面をわずかに掘り窪めた程度で、赤変硬化している。また、火床の南側には、径46cm、深さ5cmの平面形が円形の炉庭がある。

**覆土** 覆土の大半はトレンチャーによる攪乱を受けているが、5層が確認されている。第1層はローム粒子・ローム小ブロックを少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第2層はローム粒子・粘土を少量、ローム小ブロックを極少量含む黒褐色土、第3層はローム粒子を少量含む黒褐色土、第4層はローム粒子を少量含む黒色土、第5層はローム粒子を多量、ローム小ブロックを極少量含む褐色土である。

**遺物** 中央覆土上・中層から極少量の土師器片、須恵器片が出土している。第94図1の須恵器の高坏は中央部覆土中層から出土している。

**所見** 本跡は、奈良時代の住居跡である。



第94図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	高坏 須恵器	B(4.3)	脚は、なめらかなカーブを描いて立ち上がる。	水挽き。横ナデ。透かし窓はヘラ切り。	砂礫 灰褐色 不良	P-249 5% 中央部覆土中層

### 第6号住居跡(第95図)

**位置** 調査区の東部、B8h<sub>2</sub>区。

**規模と平面形** 長軸(4.2)m・短軸4.1mの方形と推定される。南側は、調査区外で調査できなかったため不明である。

**主軸方向** N-4°-E

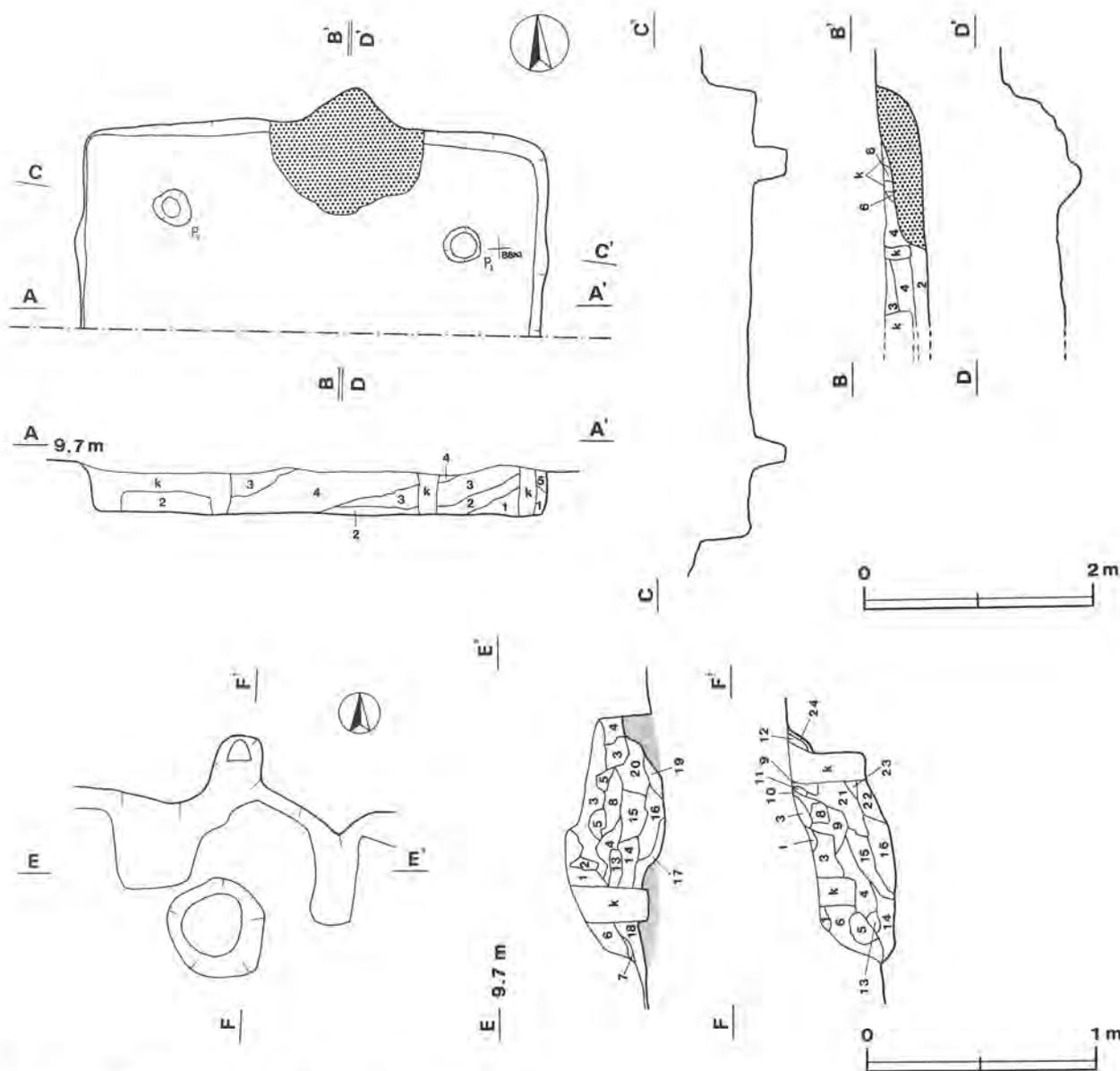
**壁** 壁高は44~47cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

**床** 平坦であり、特に竈前面やその周辺が硬く締まっている。

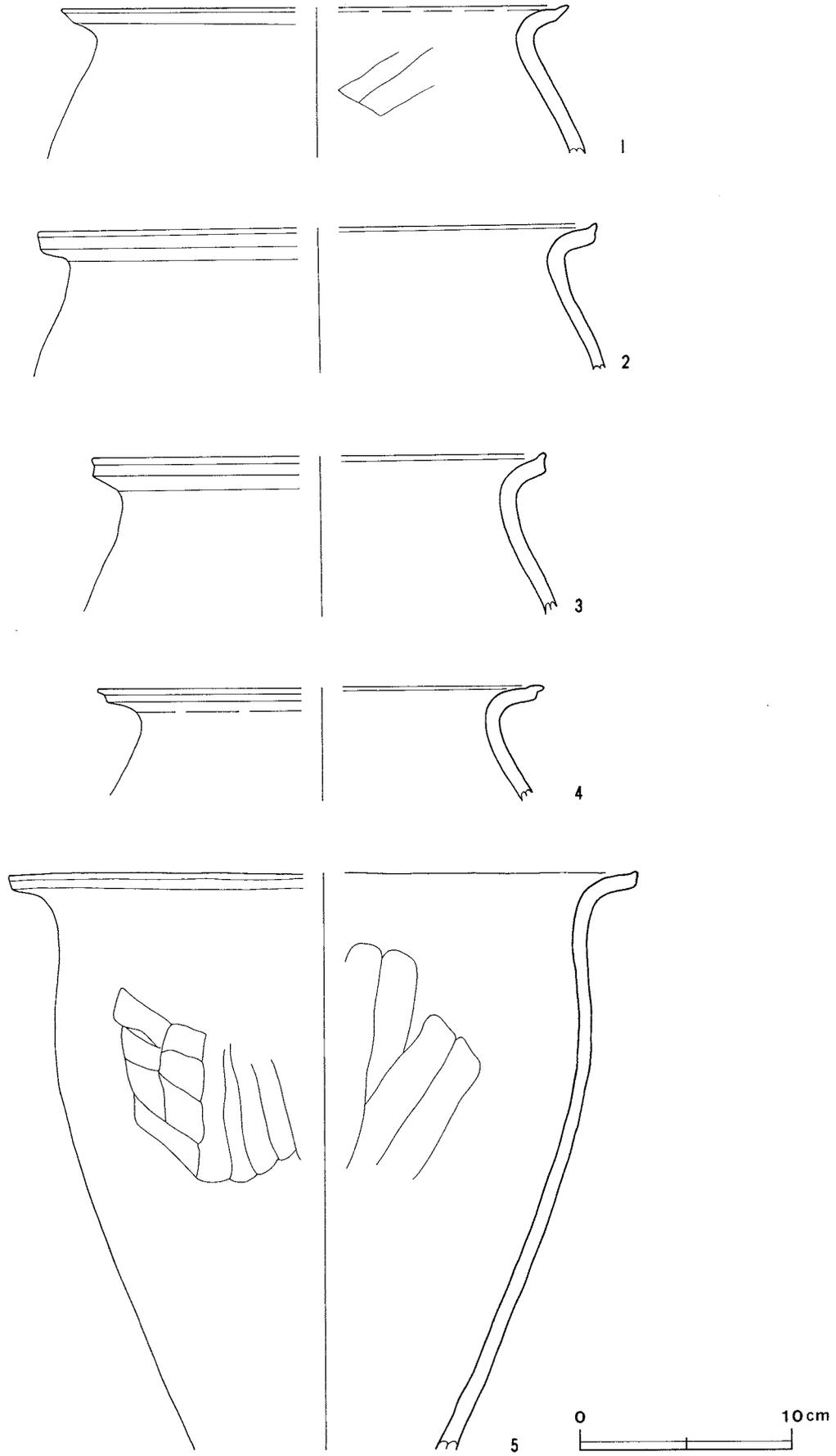
**ピット** 2か所(P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>)。P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>は、径31~34cmの円形で、深さ28cmである。規模や配列から支柱穴と考えられる。

**竈** 北壁中央部を壁外に32cm程掘り込み、砂や粘土で構築されている。規模は長さ108cm、幅110cmを測り、遺存状態は良い。火床は赤変硬化し、煙道部は火床から緩やかに立ち上がる。覆土は24層からなる。第1層は粘土粒子を中量、粘土小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子を極少量含むにふい褐色土、第2層は焼土粒子・焼土小ブロックを少量、砂・粘土小ブロックを極少量含むにふい褐色土、第3層は焼土ブロックを中量、砂・粘土粒子を少量、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を極少量含む褐色土、第4層は砂・焼土粒子を多量含む淡黄色土、第5層は砂を多量、焼土粒子を極少量含む褐色土、第6層は砂・粘土小ブロック・焼土小ブロックを少量、炭化粒子を極少量含む褐色土、第7層は砂・焼土ブロックを極少量含む褐色土、第8層は砂を多量、焼

土粒子・炭化粒子を少量含む淡黄色土，第9層は焼土小ブロック・炭化粒子を中量，砂を少量含む極暗赤褐色土，第10層は砂を多量，粘土粒子・焼土粒子を少量含む淡黄色土，第11層は焼土粒子を多量含む橙色土，第12層は砂・ローム粒子を中量，焼土粒子を多量含む橙色土，第13層は砂・ローム粒子・焼土粒子を少量含む極暗赤褐色土，第14層はローム粒子・焼土粒子小ブロックを中量含む暗赤褐色土，第15層はローム粒子・砂を少量，焼土小ブロックを中量含む暗赤褐色土，第16層はローム粒子を少量，焼土粒子を中量，炭化物を極少量含む暗赤褐色土，第17層は砂・ローム粒子を中量，焼土粒子を多量含む暗赤褐色土，第18層は砂を中量，焼土中ブロックを少量含む灰褐色土，第19層は砂を少量，焼土小ブロックを極少量含む褐色土，第20層は焼土小・中ブロックを中量，砂・炭化物を極少量含むにぶい赤褐色土，第21層は焼土粒子を多量，焼土中ブロック・炭化粒子・砂を少量含む極暗赤褐色土，第22層は焼土粒子を中量，砂・炭化粒子を少量含む暗赤褐色土，第23層は焼土粒子を多量，炭化粒子・砂を少量含む暗赤褐色土，第24層はローム粒子・焼土粒子を少量含むにぶい褐色土である。



第95図 第6号住居跡・竈実測図

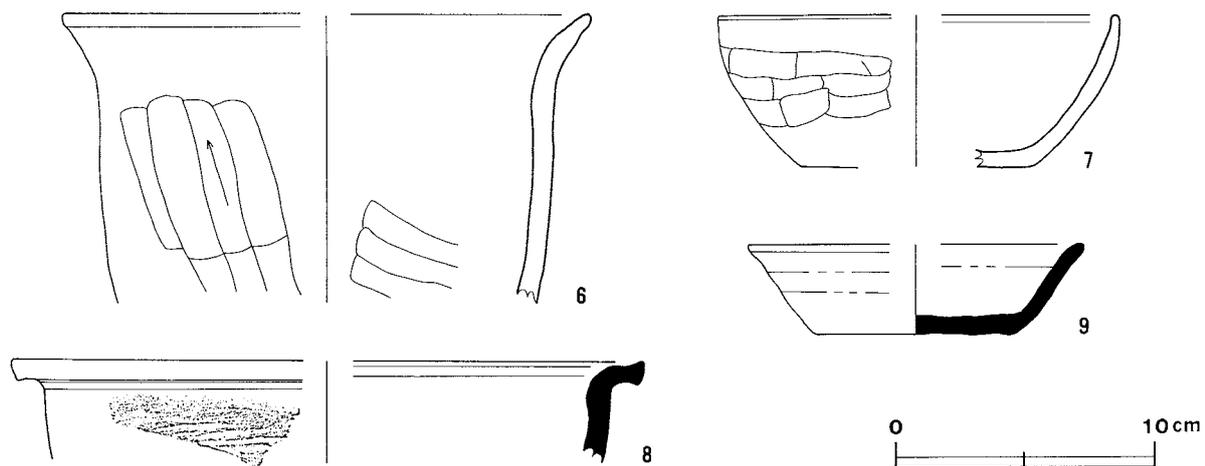


第96图 第6号住居跡出土遺物実測図(1)

覆土 6層からなる。第1層はローム小・中ブロックを中量，焼土小ブロック・炭化物を極少量含む暗褐色土，第2層はローム小・中ブロックを中量，焼土小ブロック・炭化物を極少量含む黒褐色土，第3層はローム粒子を少量，ローム小・中ブロックを中量，炭化物・焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土，第4層はローム小・中ブロックを中量，砂を少量，焼土小ブロック・炭化物を極少量含む黒褐色土，第5層はローム粒子・ローム小・中ブロックを少量，炭化物・焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土，第6層は砂（淡黄色）を多量，炭化物・焼土小・中ブロックを極少量含む褐色土である。自然堆積と考えられる。

遺物 竈付近や中央部覆土中・下層から少量の土師器片と極少量の須恵器片が出土している。第96図2の甕は竈内から出土している。第97図8の須恵器甕と9の須恵器杯は中央部覆土中層から出土している。

所見 本跡は，奈良時代の住居跡である。



第97図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	甕 土師器	A [24.0] B (7.2)	胴中央部以下欠損。頸部は短くくびれ，口縁部は大きく外反する。	口縁部外面へラ削り。内面へラナデ。口縁端部を外上方につまみあげる。	砂粒，バミス，石英 橙色 普通	P-18 20% 竈前方 付近覆土中層
2	甕 土師器	A [26.0] B (7.0)	胴中央部以下欠損。頸部は短くくびれ，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面ナデ。口縁端部を上方につまみあげる。	砂粒，長石，雲母 橙色 普通	P-20 5% 竈内
3	甕 土師器	A [21.6] B (7.8)	胴中央部以下欠損。頸部は短くくびれ，口縁部は大きく外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。口縁端部を上方につまみあげる。	砂粒，長石，雲母 橙色 普通	P-19 5% 北西コーナー 付近覆土中層
4	甕 土師器	A [21.2] B (5.5)	胴中央部以下欠損。頸部から口縁部にかけて鋭く屈曲する。	口縁部内面・外面横ナデ。口縁部外面剝離著しく調整不明。口縁部を外上方につまみあげる。	砂粒，雲母，バミス 橙色 普通	P-21 5% 中央部覆土下層
5	甕 土師器	A [30.0] B (28.1)	底部欠損。胴部は緩やかに内彎し，頸部から口縁部にかけて鋭く屈曲する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。端部を上方につまみあげる。	砂粒，長石，礫 明赤褐色 普通	P-23 35% 中央部床面
第97図 6	甕 土師器	A [20.6] B (11.4)	胴上半部以下欠損。胴部は，ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部は緩く外反する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラナデ。内面へラナデ。	砂粒，長石，スコリア 橙色 普通	P-24 15% 竈内
7	鉢 土師器	A [15.4] B (6.0) C [9.0]	平底。体部は内彎して立ち上がり，口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面へラ削り後へラナデ。	砂粒，雲母，長石 明赤褐色 普通	P-26 35% 中央部床面

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	甕 須恵器	A 24.6 B 4.0	口縁部片。頸部から口縁部にかけて鋭く屈曲する。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面にタタキ目。口縁端部を上下方向につまみだす。	砂粒，長石 浅黄橙色 普通	P-22 5% 中央部覆土中層
9	坏 須恵器	A [13.0] B 4.0 C [8.0]	平底。体部は外傾して立ち上がる。	底部回転ヘラ切り。	砂粒，雲母，長石 橙色 普通	P-25 20% 中央部覆土中層

#### 4 その他の遺構と遺物

本調査区から，土坑 27 基・地下式壙 1 基・井戸 1 基・溝 5 条を確認した。土坑については，主なものを記述し，他は一覧表に掲載した。

##### (1)土坑

###### 第 1 号土坑 (第100図)

位置 調査区の中央部，B7d<sub>9</sub>区。

重複関係 本跡は，第 4 号住居跡と重複している。本跡の上面には，第 4 号住居跡が構築されていることから，本跡が古い。

規模と平面形 長径1.63m・短径1.37mの楕円形で，深さ38cmである。

長軸方向 N-80°-W

壁面 外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 3層からなる。第1層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土，第2層はローム小・中ブロックを中量，焼土小ブロック・炭化物・粘土を極少量含む褐色土，第3層はローム粒子小・中ブロックを中量，焼土小ブロックを極少量含む灰褐色土である。自然堆積。

遺物 覆土中・下層から縄文式土器の破片が出土している。

所見 出土遺物から，縄文時代前期の土坑と考えられる。

###### 第 6 号土坑 (第100図)

位置 調査区の東部，B8g<sub>6</sub>区。

重複関係 本跡は，第 7・19号住居跡と重複している。本跡の上面には，第 7・19号住居跡が構築されていることから，本跡が古い。

規模と平面形 長軸1.47m・短軸0.91mの隅丸長方形で，深さ40cmである。

長軸方向 N-68°-E

壁面 外傾して立ち上がる。

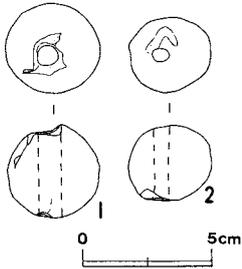
底面 平坦で，粘土を貼っている。

覆土 10層からなる。第1層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土，第2層はローム小ブロックを少量含む暗褐色土，第3層はローム粒子小・中ブロックを中量含む灰褐色土，第4層はローム小ブロックを中量含む黒褐色土，第5層はローム小ブロックを中量含む褐色土，第6層はローム粒子を中量含む褐色土，第7層はローム小ブロック・粘土を少量含む暗褐色土，第8層はローム大ブロックを少量，ローム小ブロック・砂を極少量含む灰褐色土，第9層はローム中ブロックを少量含む灰褐色土，第10層はローム粒子を少量，粘土中ブロックを

極少量含むにふい褐色土である。自然堆積。

遺物 覆土中より土師器の破片が出土している。

所見 出土遺物から古墳時代の土坑と考えられる。



第 98 図 第 6 号土坑出土遺物実測図

#### 第22号土坑（第101図）

位置 調査区の北東部，B8b<sub>8</sub>区。

規模と平面形 長軸1.72m短軸0.83mの隅丸長方形で，深さ40cmである。

長軸方向 N-35°-W

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で，粘土を貼っている。

覆土 4層からなる。第1層はローム粒子を少量，ローム中ブロックを極少量含む褐色土，第2層はローム粒子・ローム小ブロックを中量含む褐色土，第3層はローム粒子を多量，ローム小・中ブロックを少量含む褐色土，第4層はローム粒子を多量含む明褐色土である。自然堆積。

遺物 覆土下層から縄文式土器片が数点出土している。

所見 出土遺物から縄文時代の土坑と思われる。

#### 第23号土坑（第101図）

位置 調査区の北東部，B8c<sub>5</sub>区。

重複関係 本跡は第2号溝と重複している。本跡の上面には，第2号溝が構築されていることから本跡が古い。

規模と平面形 長径1.00m・短径0.97mの不整形円形で，深さ45cmである。

長軸方向 N-73°-E

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦で粘土を貼っている。

覆土 6層からなる。第1層はローム小・中ブロックを少量含む黒褐色土，第2層はローム粒子を多量含む赤褐色土，第3層はローム粒子を中量，焼土粒子・炭化物を極少量含む暗褐色土，第4層はローム小・中ブロックを中量，焼土粒子・炭化物を極少量含む黒褐色土，第5層はローム小・中ブロックを極少量含む黒褐色土，第6層はローム粒子を多量含むにふい褐色土である。自然堆積。

所見 出土遺物もなく，重複関係から第2号溝より古い時期に構築されており，遺構の形態や位置等から第22号土坑と同時期の縄文時代の土坑と推定される。

第25号土坑 (第101図)

位置 調査区の東端, B9c3区。

規模と平面形 長径1.19m・短径1.11mの楕円形で、深さ40cmである。

長軸方向 N-88°-E

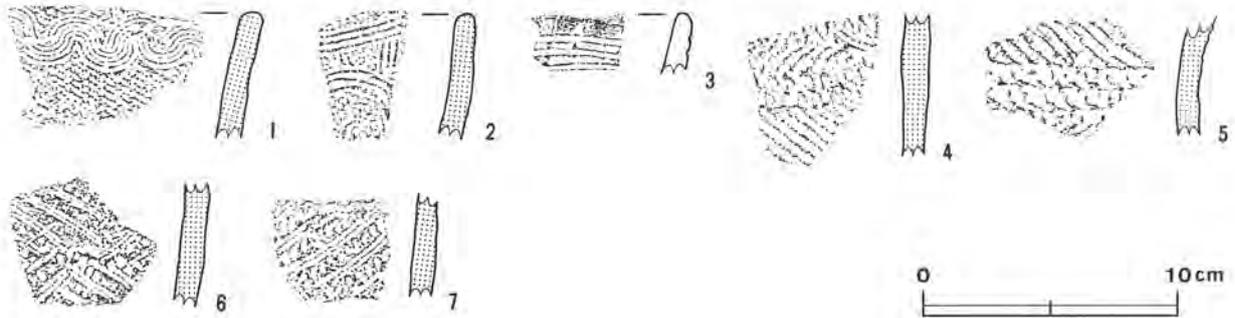
壁面 ほぼ外傾して立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から縄文式土器片が多量に出土している。第99図1・2は組紐文を地文としていて、1はコンパス文を2には半截竹管の凹面で文様を描いている。3は口縁部破片で、沈線が施される。4・5はルーブ文が施される。6・7は直前段合撚縄文が施される。

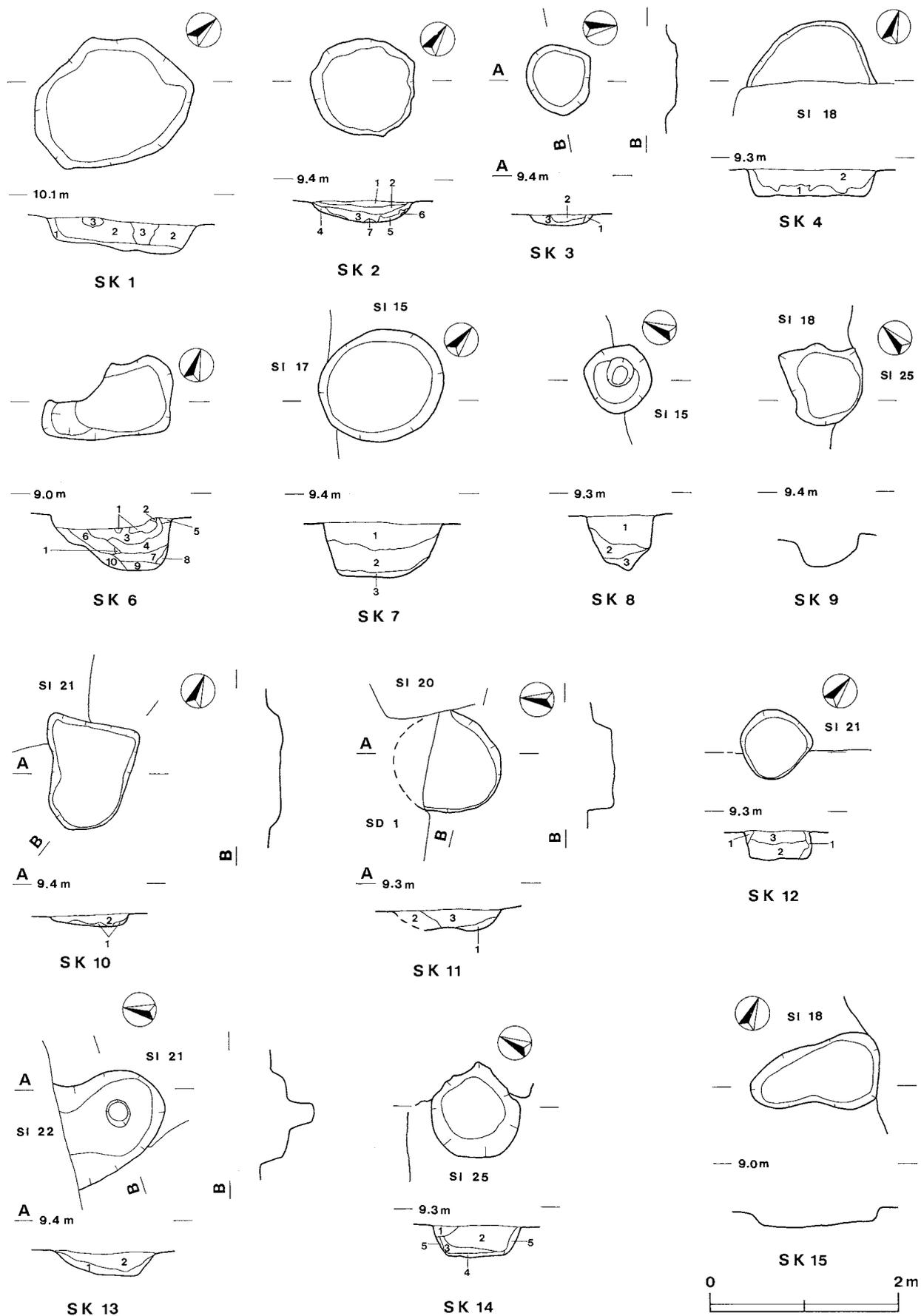
所見 出土遺物から縄文時代前期の土坑と考えられる。



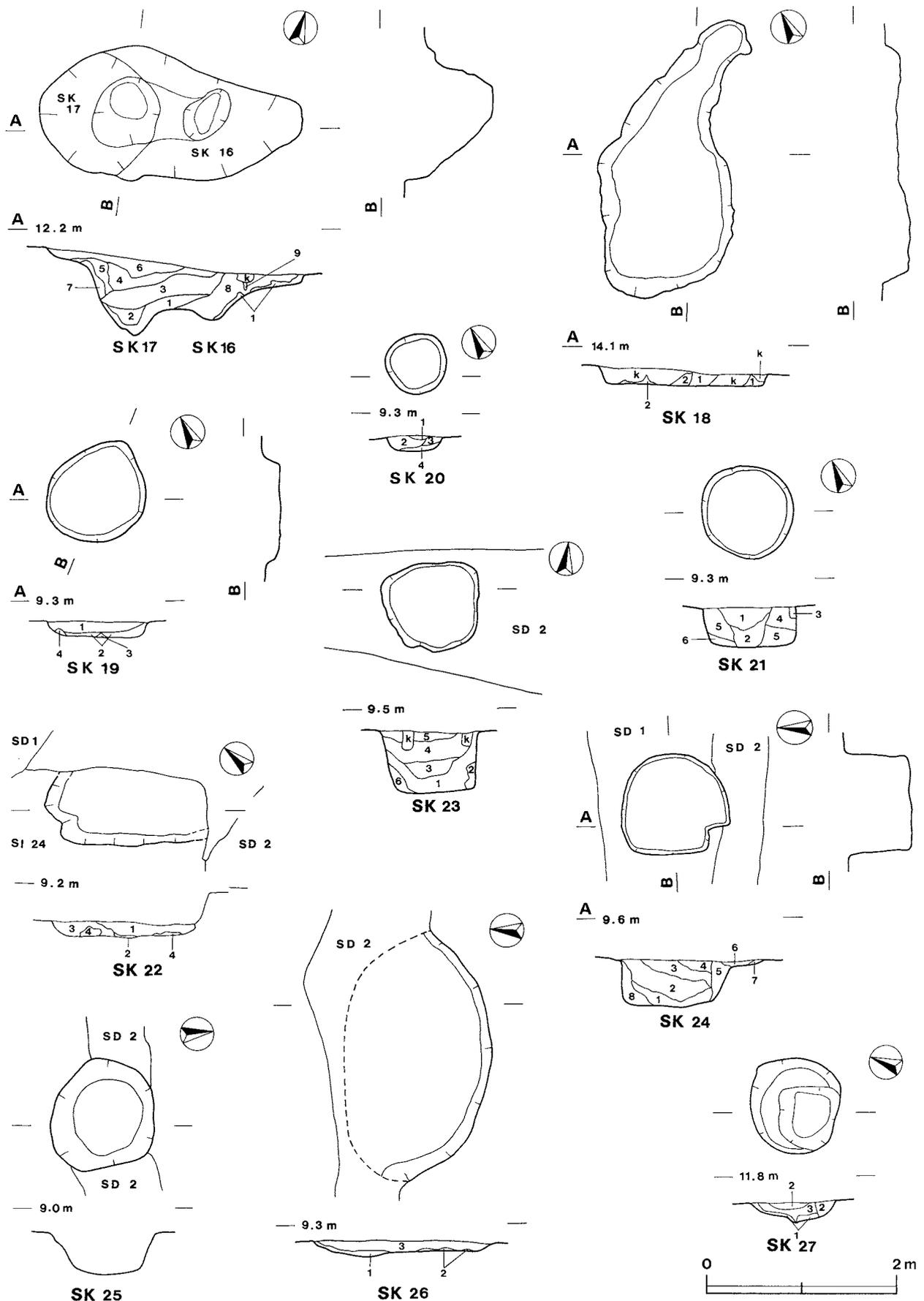
第99図 第25号土坑出土遺物拓影図

表2 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	覆土	底面	壁面	備考
1	B7d9	N-80°-W	楕円形	1.63 × 1.37	0.38	自然	皿状	外傾	土師器片7片, 縄文式土器片3片
2	B8f8	N-77°-E	楕円形	1.14 × 1.06	0.23	自然	皿状	外傾	土師器片7片
3	B8e9	N-58°-E	円形	0.76 × 0.75	0.12	自然	皿状	外傾	
4	B8f8	N-68°-E	楕円形	1.33 × 0.65	0.15	自然	皿状	外傾	
6	B8g6	N-68°-E	隅丸長方形	1.47 × 0.91	0.40	自然	平坦	外傾	土師器片91片, 縄文式土器片1片, 須恵器片3片, 球状土錘
7	B8d0	N-15°-E	楕円形	1.45 × 1.17	0.30	自然	皿状	外傾	土師器片38片, 縄文式土器片3片
8	B8c0		円形	0.74 × 0.74	0.50	自然	皿状	外傾	
9	B8e8	N-11°-W	楕円形	0.98 × 0.93	0.31	自然	皿状	外傾	土師器片14片, 縄文式土器片3片
10	B8b0	N-8°-W	不整楕円形	1.17 × 0.83	0.13	自然	皿状	外傾	
11	B9b1	N-18°-E	[楕円形]	1.06 × [0.80]	0.28	自然	皿状	外傾	
12	B9b0		円形	0.73 × 0.70	0.32	自然	皿状	垂直	土師器片4片, 縄文式土器片4片
13	B8b9	[N-30°-W]	不整楕円形	[1.12] × 1.00	0.48	自然	平坦	垂直	土師器片10片
14	B8c8	N-78°-E	楕円形	1.04 × 0.96	0.48	自然	平坦	外傾	土師器片3片
15	B8d8	N-45°-E	不定形	1.44 × 0.80	0.18	自然	平坦	外傾	
16	B6j2	N-7°-E	楕円形	0.62 × 0.44	0.52	自然	平坦	外傾	SK17に切られる
17	B6j1	N-21°-W	不整楕円形	1.33 × 1.27	0.82	自然	平坦	外傾	SK16を切る
18	C5a1	N-48°-E	不整楕円形	3.27 × 1.57	0.30	自然	平坦	外傾	
19	B8d1	N-50°-E	不整円形	1.17 × 1.03	0.17	自然	平坦	外傾	
20	B8d1	N-40°-W	円形	0.66 × 0.65	0.13	自然	平坦	外傾	
21	B8d1	N-27°-E	円形	0.99 × 0.97	0.46	自然	平坦	外傾	土師器片4片, 縄文式土器片14片



第100图 土坑夷测图(1)



第101図 土坑実測図(2)

土坑番号	位置	長径方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(m)	覆土	底面	壁面	備考
22	B8b8	N-35°-W	隅丸長方形	1.72 × 0.83	0.40	自然	平坦	垂直	縄文式土器片4片
23	B8c5	N-73°-E	不整形	1.00 × 0.97	0.45	自然	平坦	垂直	
24	B8b5	N-3°-W	不整形	1.16 × 1.09	0.73	自然	平坦	垂直	土師器片19片, 縄文式土器片11片
25	B9c9	N-88°-E	楕円形	1.19 × 1.11	0.40	自然	皿状	外傾	縄文式土器片150片
26	B9c1	[N-0°]	[楕円形]	2.66 × [1.57]	0.08	自然	皿状	外傾	SD2を切る
27	B6h4	N-30°-E	楕円形	1.1 × 0.99	0.28	自然	平坦	外傾	

#### 土坑土層解説

##### 第2号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化物極少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 におい褐色 ローム粒子多量
- 6 褐色 ローム粒子少量
- 7 灰褐色 ローム粒子中量

##### 第3号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
- 2 灰褐色 ローム粒子極少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

##### 第4号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム小・中ブロック少量, 焼土微ブロック・炭化物極少量

##### 第7号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム微ブロック多量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム微ブロック多量, ローム中ブロック中量, 焼土粒子極少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

##### 第8号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム微ブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, ローム微ブロック中量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム微ブロック多量, ローム少ブロック少量

##### 第10号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量

##### 第11号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子少量

##### 第12号土坑土層解説

- 1 におい褐色 ローム粒子多量
- 2 灰褐色 ローム小・中ブロック少量, 焼土粒子極少量
- 3 暗褐色 ローム小・中ブロック少量

##### 第13号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小・中ブロック少量

##### 第14号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム微ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 5 明褐色 ローム粒子多量

##### 第16・17号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム小・中ブロック・焼土ブロック極少量
- 4 極暗褐色 焼土ブロック少量, ローム粒子・粘土極少量
- 5 褐色 粘土少量・焼土ブロック極少量
- 6 黒褐色 ローム中ブロック・焼土小・中ブロック・炭化物極少量
- 7 明褐色 粘土多量, 焼土微ブロック極少量
- 8 暗褐色 ローム小・中ブロック少量, 焼土小ブロック極少量
- 9 褐色 ローム粒子中量, 炭化物極少量

##### 第18号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 におい褐色 ローム粒子多量

##### 第19号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム微ブロック中量, 焼土粒子極少量
- 2 暗褐色 ローム・ハードローム微ブロック少量, 焼土粒子極少量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック少量
- 4 明褐色 暗褐色土少量

##### 第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム微ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子少量

##### 第21号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・ローム微ブロック多量, 焼土粒子極少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・ローム微ブロック多量, 炭化物極少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子・ローム微ブロック中量, 焼土粒子極少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム微ブロック中量, ローム少ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・ローム微ブロック少量

##### 第24号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小・中ブロック少量, 炭化物極少量
- 2 褐色 ローム小・中ブロック少量, 炭化物極少量
- 3 暗褐色 ローム小・中ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム少量, 焼土小ブロック極少量
- 5 褐色 ローム粒子中量, 炭化物極少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量 (第2号溝覆土)
- 7 褐色 ローム粒子少量 (第2号溝覆土)
- 8 褐色 ローム粒子中量

##### 第26号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 砂極少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土微ブロック極少量
- 3 暗褐色 ローム小・中ブロック少量, 炭化物・焼土ブロック極少量

##### 第27号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
- 2 褐色 ローム粒子少量
- 3 灰褐色 ローム粒子少量

## (2) 地下式竈

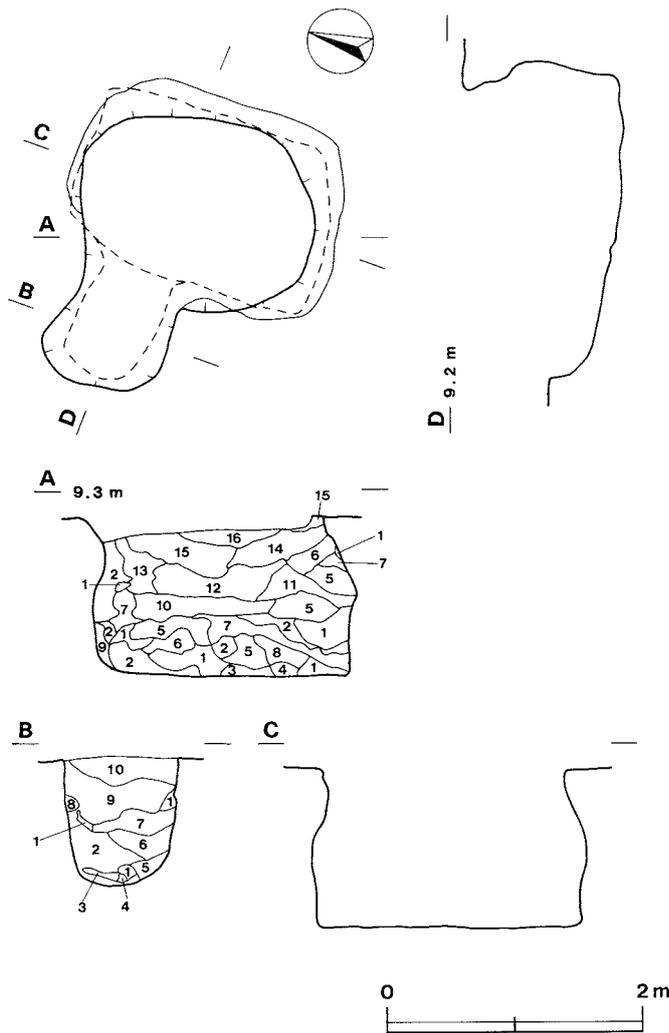
### 第1号地下式竈 (第102図)

位置 調査区の東部, B8d9区。

重複関係 本跡は, 第18号住居跡の東コーナー部を掘り込んでいる。

主軸方向 N-84°-W(竈坑と主室を通る線)

規模と形状 竈坑と主室からなり, 天井部はすでに崩落している。竈坑の開口部は, 平面形が台形で, 規模は長軸1.0m・短軸0.9mである。竈坑の深さは, 約1.0mで, 竈坑底面は, 径0.9m程の円形である。底面は平坦で, 壁は, 底面からほぼ垂直に立ち上がり, 竈坑から主室に向かって緩やかに傾斜して主室へ続いている。主室は, 確認面から底面までの深さが1.3m, 底面は長軸2.00m・短軸1.70mの方形で, 天井部までの壁は0.9m



である。壁は下位から上位にかけて内傾しながら立ち上がる。主室の底面は、10～20cmの厚さで粘土を貼り、平坦面を形成している。

覆土 16層からなり覆土上層には、黒褐色、暗褐色が自然堆積し、中～下層の覆土は、主室底面と平行に堆積し底面や壁際の覆土には、天井部や壁の崩落によって混入したと思われるロームブロックが少量含まれ、どの層も締まりなくざくざくとしている堆積状況を示している。第1層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土、第2層はローム粒子を中量含むにぶい褐色土、第3層はローム粒子を中量含む褐色土、第4層はローム粒子を中量含む褐色土、第5層はローム粒子を中量含む褐色土、第6層はローム小・中ブロックを少量含む暗褐色土、第7層はローム粒子を極少量含む黒褐色土、第8層はローム粒子を少量含む暗褐色土、第9層は粘土を多量含む淡黄色土、第10層はローム小・中ブロック・焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第11層はローム粒子小・中ブロックを極少量含む黒褐色土、第12層はローム粒子小・中ブロックを少

第102図 第1号地下式墳実測図

量、焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土、第13層はローム粒子小ブロックを中量含む暗褐色土第14層はローム粒子小・中ブロックを少量、焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土、第15層はローム小・中ブロック・焼土粒子・炭化物・粘土を極少量含む黒褐色土、第16層はローム粒子を少量、焼土中ブロック・炭化物を極少量含む黒褐色土である。

遺物 縄文式土器片と土師器片の細片が覆土上層から出土している。いずれも流れ込みと考えられる。

所見 本跡は、中世に属するものと考えられる。

### (3)井戸

#### 第1号井戸 (第103図)

位置 調査区の中央部、B6g5区。

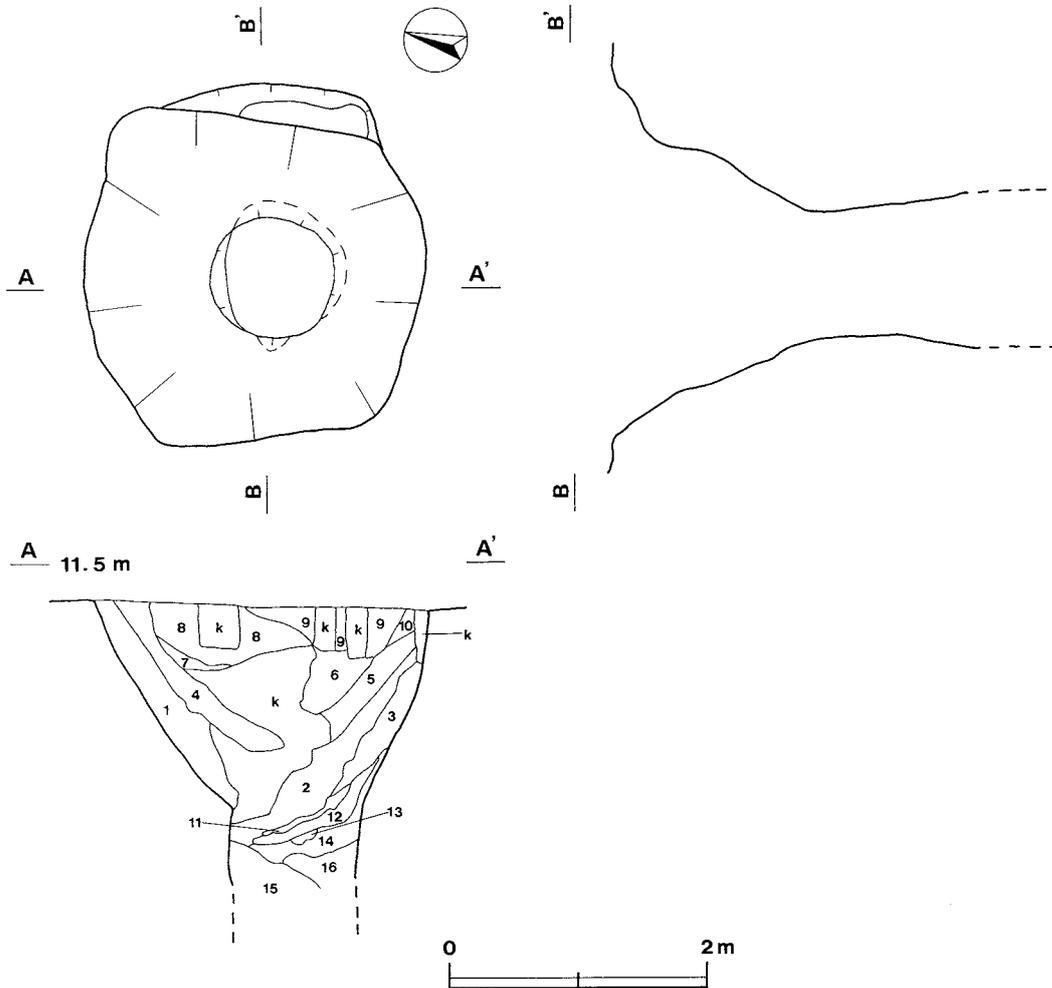
規模と形状 平面形は、直径2.3mの円形状で、1.5mの深さまで鉢状に掘り込まれたあと、さらに径1m程の円筒状に1.5m程掘り込んだところ底面から湧水がみられた。

覆土 自然堆積と思われる。16層からなる。第1層はローム粒子を中量含む褐色土、第2層はローム粒子を少量含む灰褐色土、第3層はローム粒子を中量、炭化物を極少量含む褐色土、第4層はローム粒子を極少量、粘土を少量含む黒褐色土、第5層はローム小・中ブロック・焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土、第6層はローム粒子を少量含む黒褐色土、第7層はローム粒子を少量含む褐灰色土、第8層はローム小ブロック・炭化物を

極少量含む黒褐色土，第9層はローム小・中ブロックを少量，焼土小ブロックを極少量含む黒褐色土，第10層はローム粒子を少量，炭化物を極少量含む黒褐色土，第11層はローム粒子を少量含む褐色土，第12層はローム粒子を中量含む褐色土，第13層はローム粒子を中量含むにぶい褐色土，第14層はローム粒子を少量含む黒褐色土，第15層はローム粒子を少量含む暗褐色土，第16層はローム粒子を中量含む褐色土である。

遺物 覆土上層から陶磁器片が数点出土している。流れ込みと思われる。

所見 本跡は，中世に属するものと考えられる。



第103図 第1号井戸実測図

#### (4)溝

##### 第1号溝 (第104図)

位置 調査区の北東部，B8・B9区。本跡の両端は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡は，B9b<sub>2</sub>区で第20号住居跡の北部を掘り込んでおり，B8h<sub>9</sub>区では第21・22号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

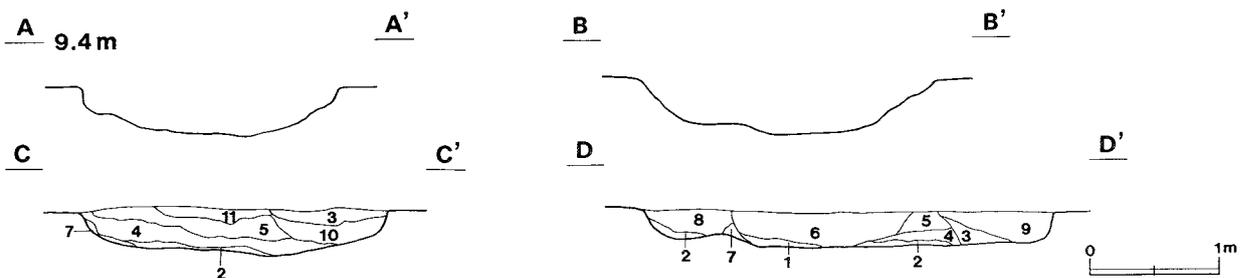
規模と形状 全長は約20.7mで，上幅1.80～2.53m，下幅1.20～2.20m，深さ38～43cmである。断面形は逆台形状で，壁は外傾して立上がる。

方向 B9b<sub>3</sub>区から東西方向 (N-83°-E) へ直線的に延びている。

覆土 覆土は11層からなる。第1層はローム粒子を少量含む褐色土、第2層はローム粒子を多量含む褐色土、第3層はローム小・中ブロックを少量、炭化物・焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土、第4層はローム小・中ブロックを少量含む暗褐色土、第5層はローム小・中ブロックを少量、焼土小ブロックを極少量含む暗褐色土、第6層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第7層はローム粒子を中量含む褐色土、第8層はローム粒子を少量、焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第9層はローム小・中・大ブロックを中量、粘土・砂を極少量含む暗褐色土、第10層はローム小・中ブロックを少量、炭化物・焼土粒子を極少量含む黒褐色土、第11層はローム小・中ブロックを少量、炭化物・焼土粒子を極少量含む暗褐色土である。自然堆積と思われる。

遺物 溝の東部覆土下層からは、皇宋通寶、大観通寶、正元通寶など8枚の古銭が出土している。

所見 本跡は、古墳時代と思われる第20・21・22号住居跡を掘り込んでいることから、古墳時代後期以降の溝である。古銭は中世に属するものであるが、本跡の性格については不明である。



第104図 第1号溝実測図

### 第2号溝 (第105図)

位置 調査区の南東部、B8・B9区。本跡の両端は、調査区域外にのびている。

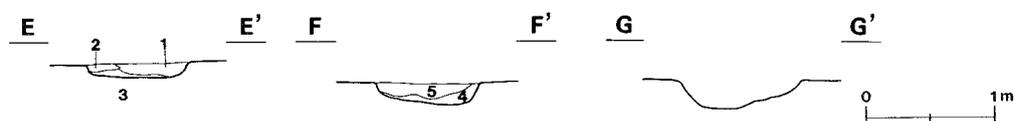
重複関係 本跡は、東部のB9c3区で第25号土坑、B9c1区では第26号土坑、B9b2区では第20号住居跡の南西コーナー部を掘り込んでおり、西部のB8c9では第21号住居跡の南コーナー部、B8c7区では第24号住居跡の中央部を掘り込み、B8b5・B8b6区では第23・24号土坑を掘り込んでいる。西端のB8c3区では第27号住居跡の中央部を掘り込んでいる。

規模と形状 全長は、36m程で、上幅0.45~1.00m、下幅0.28~0.70m、深さ22~24cmで、断面形は逆台形状である。底面は凹凸しており、壁は外傾して立ち上がる。

方向 B9c3区から東西方向(N-87°-E)へ直線的に延びている。

覆土 覆土は5層からなる。第1層はローム粒子を少量含む暗褐色土、第2層はローム小ブロックを極少量含む暗褐色土、第3層はローム粒子を極少量含む暗褐色土、第4層はローム粒子を中量含む褐色土、第5層はローム粒子を少量含む黒褐色土である。自然堆積と思われる。

所見 本跡は、古墳時代後期の第24号住居跡を掘り込んでいることから、古墳時代後期以降の溝と考えられる。第1号溝とはほぼ主軸方向が一致するため第1号溝に関連することも考えられるが、本跡の性格は不明である。



第105図 第2号溝実測図

### 第3号溝 (第106図)

位置 調査区の東部, B8区。

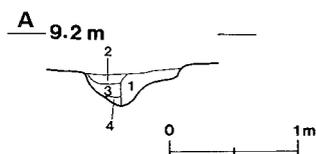
重複関係 本跡は, 第18号住居跡の竈と重複している。本跡は浅い掘り込みで, 第18号住居跡の竈の上面を掘り込んでいる。

規模と形状 全長3 m程の短い溝で, 上幅0.33~0.66 m, 下幅0.28~0.58 m, 深さ13 cmである。断面形は[U]字状で, 底面は凹凸している。

方向 B8d1区から東西方向(N-80°-W)へほぼ直線的に延びている。

覆土 覆土は4層からなる。第1層はローム粒子・ローム小ブロック・砂を少量含む褐色土, 第2層はローム粒子・ローム小ブロックを中量含む褐色土, 第3層はローム粒子・ローム小ブロックを少量, 焼土粒子を極少量含む褐色土, 第4層はローム粒子を中量, 焼土粒子を極少量含む褐色土である。自然堆積と思われる。

所見 本跡は, 遺物の出土もなく, 時期及び性格については不明である。



第106図 第3号溝実測図

### 第4号溝 (第107図)

位置 調査区の東側, B8c7区からB8d7区。

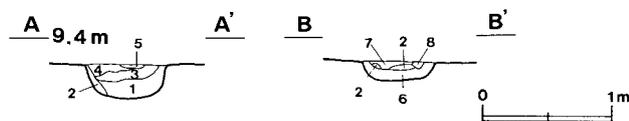
重複関係 本跡は, 第37号住居跡と重複している。第37号住居跡の中央部を掘り込んでいるが, 掘り込みが浅いため, 第37号住居跡の床面には達していない。

規模と形状 全長7.80 mで, 上幅0.45~0.78 m, 下幅0.24~0.50 m, 深さ28 cmである。断面形は[U]字状である。底面は, 平坦で, 壁は外傾して立ち上がる。

方向 第2号溝と接するB8c6区から南南東(N-15°-W)のB8d7区にかけては, 直線的に6 m程延び, 南東方向(N-40°-W)へ2 m程延びて, B8d8区で途切れている。

覆土 8層からなる。第1層はローム粒子を少量含む暗褐色土, 第2層はローム粒子を少量含む黒褐色土, 第3層はローム粒子を中量, 炭化物を極少量含む暗褐色土, 第4層はローム粒子を少量含む黒褐色土, 第5層はローム粒子を極少量含む暗褐色土, 第6層はローム粒子を少量含む暗褐色土, 第7層はローム粒子を中量含む褐色土, 第8層はローム粒子を極少量含む黒褐色土である。自然堆積と思われる。

所見 本跡は, 第2号溝と接していることから, 第1・2号溝との関連性が考えられるが, 性格及び時期については不明である。



第107図 第4号溝実測図

### 第5号溝（第108図）

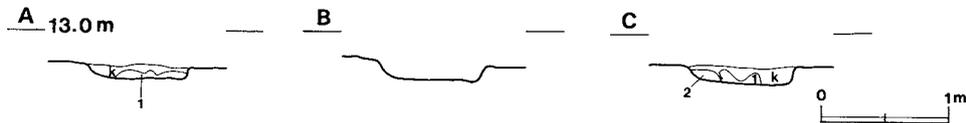
位置 調査区の中央部，B5区。

規模と形状 全長5.80mで，上幅0.60～0.90m，下幅0.45～0.70m，深さ13cm程である。断面形状は，[U]字状で，底面は平坦で，壁は斜めに立ち上がる。

方向 B5i8・B5h8区から南6m程(N-6°-W)のB5j8区まで直線的に延びている。

覆土 2層からなる。第1層はローム粒子を多量含むにぶい褐色土，第2層はローム粒子を多量含む明褐色土である。自然堆積と思われる。

所見 本跡は，出土遺物もなく，時期・性格については不明である。



第108図 第5号溝実測図

### (5) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は，試掘・表土除去・遺構確認の調査で出土した遺物である。それら遺物を土器・土製品・石器に大別し，それらの特徴について解説する。

#### 土器

土器については，その大半が縄文土器と弥生土器である。それらを第I～VI群に分けて記載する。

第I群 縄文時代早期末葉の土器群

第II群 縄文時代前期中葉の土器群

第III群 縄文時代前期後葉の土器群

第IV群 縄文時代中期の土器群

第V群 縄文時代後期の土器群

第VI群 弥生時代の土器群

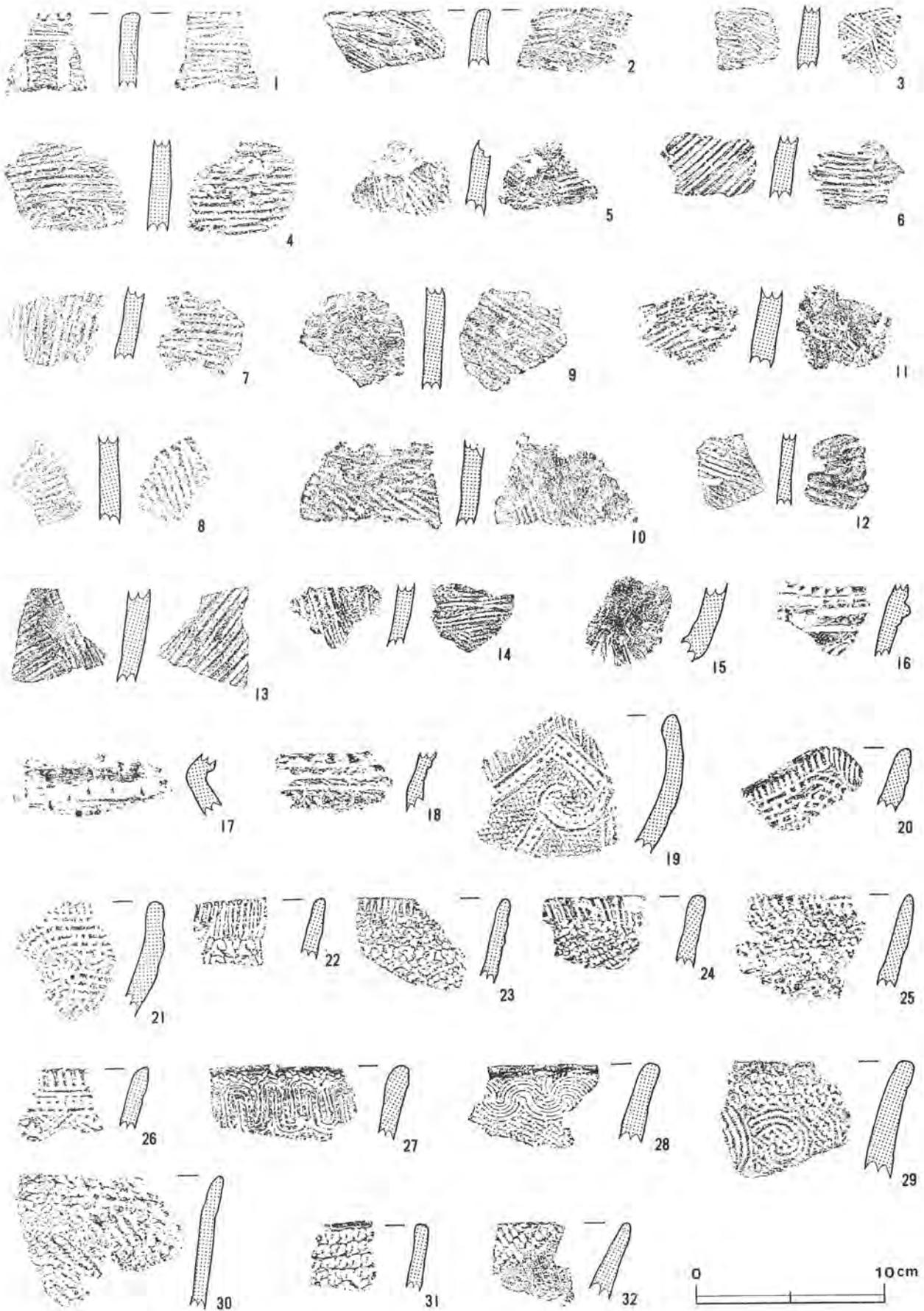
#### 第I群土器（第109図）

1～15は，茅山下層式土器である。1は断面が角頭状で，口唇両端部を丸棒状の施文具で刺突している。内外面とも条痕を施し，外面は丸棒状の施文具で刺突をし沈線を縦に施している。2～14は，内外面に条痕文を施している。15は，底部付近の破片である。

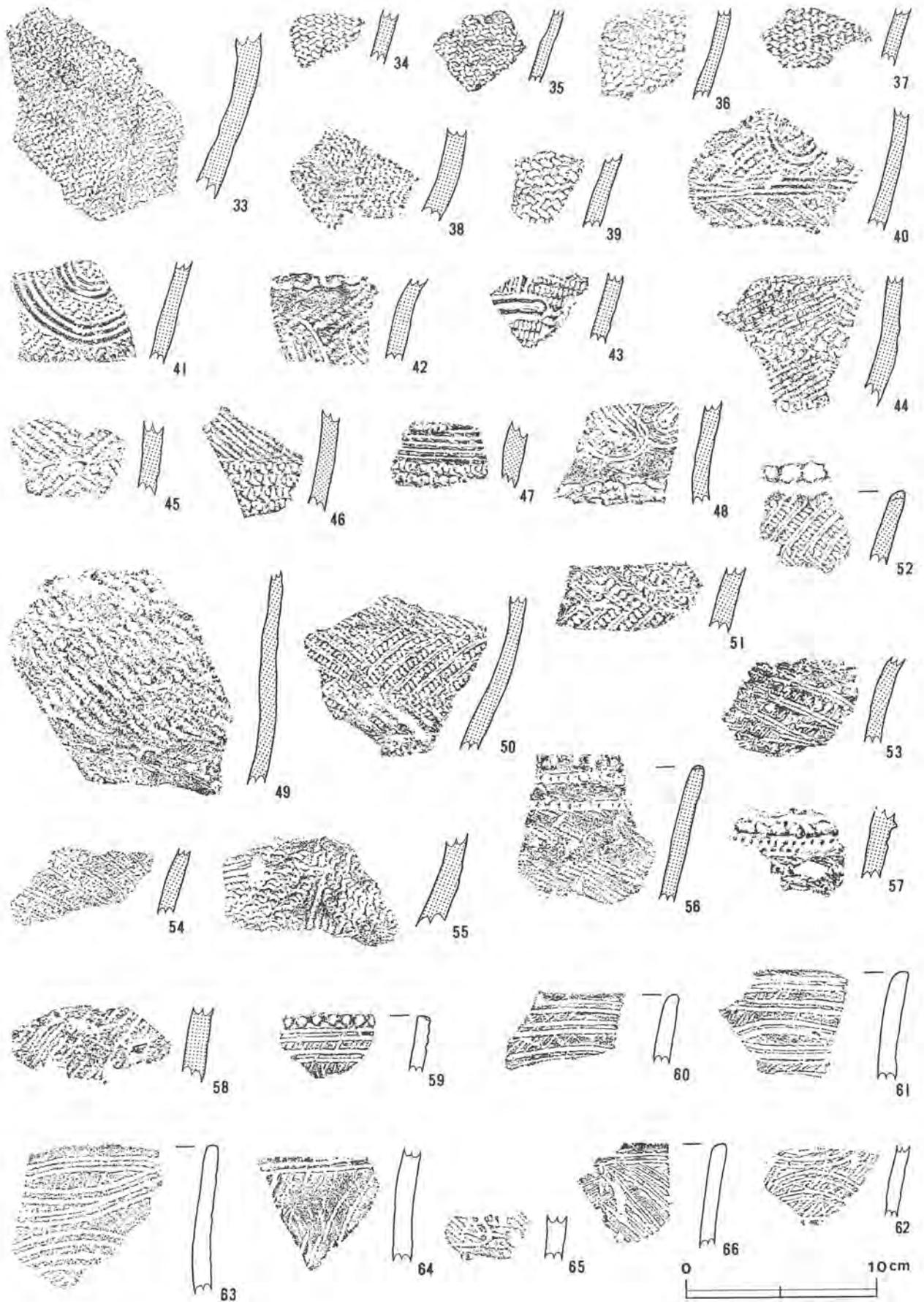
#### 第II群土器（第109・110図）

16～18・57は，関山I式土器である。竹管による沈線を施文後，ボタン状の貼付文を施している。

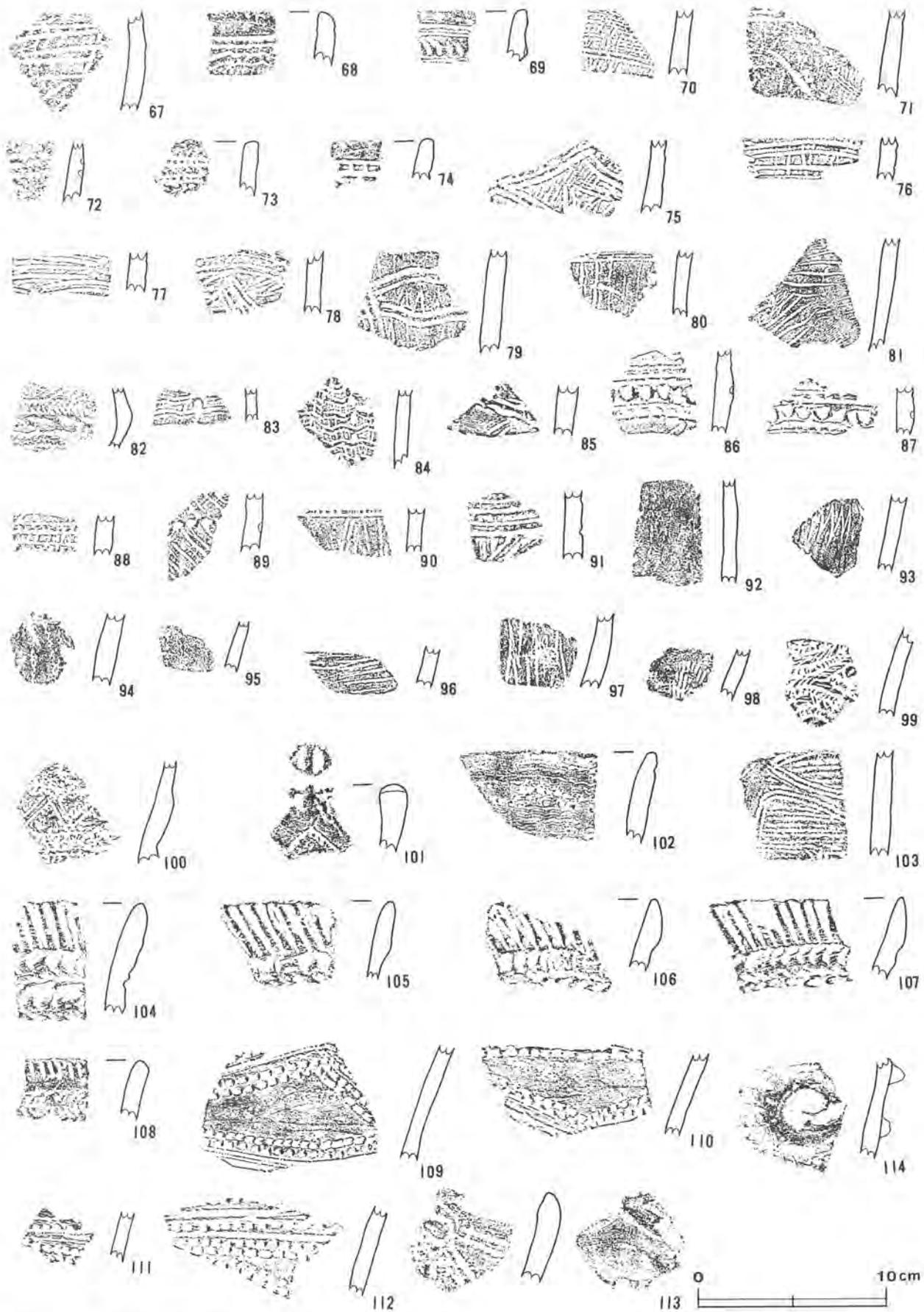
19～55は関山II式土器で，19～32・52が口縁部，33～55が胴部破片である。19～26は，口縁部直下に縦位の条線が施されるものである。19・20は波状口縁，21・26は平口縁で，半截竹管凹面により有節平行沈線文が施されている。22～25にはループ文を施している。27～29は組紐文を地文とし，27・28にはコンパス文を，29には半截竹管凹面により渦文を施している。30・31はループ文を施している。32はLRの単節縄文を地文とし，



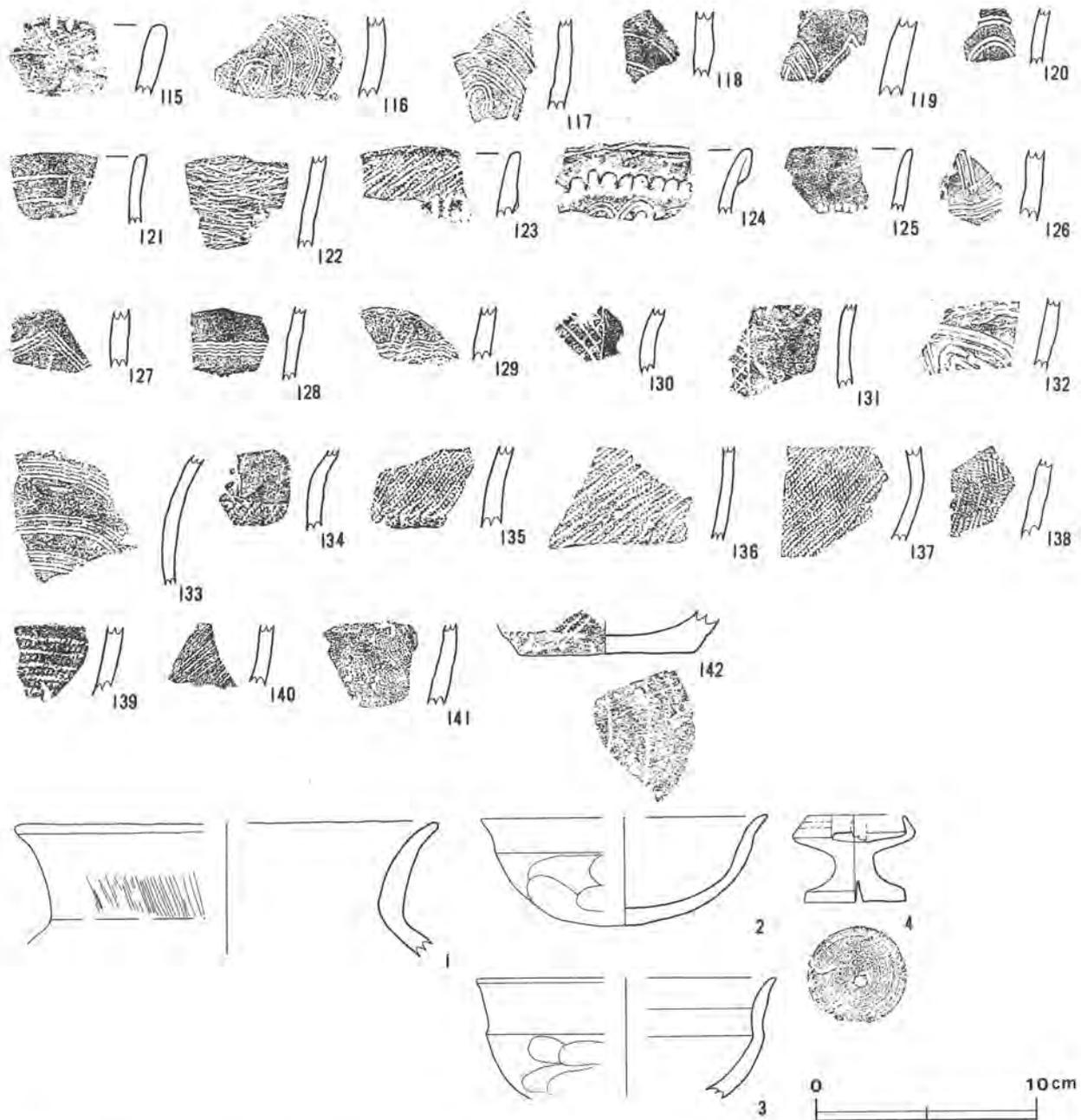
第109图 遺跡外出土遺物拓影图(1)



第110图 遺跡外出土遺物拓影图(2)



第III图 遺跡外出土遺物拓影图(3)



第112図 遺構外出土遺物実測・拓影図(4)

磨り消し部に条線文を施している。33～39には、組紐文を施している。41は組紐文を地文とし、半截竹管凹面による平行沈線文で文様を構成している。40・50～54は直前段合撚縄文を施している。52は口縁部破片で、口唇部を指頭で押圧している。42・43は単節縄文を地文とし、42は沈線で43は平行沈線で文様を施している。44～47にはループ文を、49にはR Lの単節縄文を施している。55は単節縄文を地文とし、ループ文で文様を構成している。

56・58は、黒浜式土器である。56は口唇部に刻みが施され、その直下を2条の押引文を施している。58は、R Lの単節縄文を施している。

### 第III群土器（第110・111図）

59～92・100・102は、浮島I式土器である。59～64・68・70・75・78・79・80・84は撚糸文を地文とし、半截竹管凹面による平行沈線文を施すものである。そのほとんどが平行沈線文を横位に施しているが、61・63・75のように弧状に施すもの、83～85・102のように波状に施すもの、100のように鋸歯状に施すものがある。65～67・76・77は撚糸文を地文とし、沈線を施すものである。69・82は、隆起帯上に刻みを施すものである。72は3本1組の施文具で短沈線を施している。

86・87・93～98は、浮島II式土器である。86・87は、横位の指頭押圧文の上下に有節平行沈線文を施している。93～97は、貝殻腹縁文が施されるものである。93・96・97には肋のない貝が、94・95には肋のある貝が使われている。98は、貝殻背圧痕文を施している。

104～108は、浮島III式土器である。口縁部直下には縦位の沈線を施し、その下部は貝殻波状文を施している。99～101・103は、諸磯式土器である。99には浮線文を、100には平行沈線文を施している。101は、波頂部に鶏頭状の小突起を有するものである。103は撚糸文を地文とし、平行沈線で区画し区画外を磨り消している。109～112は、興津式土器である。沈線で区画し、区画と平行に2条の連続刺突文を施している。

### 第IV群土器（第111図）

113は波状口縁で、頂部に小突起を有するものである。頂部下端に沈線で渦巻文を施し、口縁部に押引文を施している。114は、隆帯で渦巻文を施している。

### 第V群土器（第112図）

115は、加曾利B式土器である。口縁部破片で、口縁部に縦2条の刻みを施している。

### 第VI群土器（第112図）

116～122は、弥生時代中期後葉の土器である。121は口縁部破片で、沈線で区画している。116～120は、平行沈線で文様を施す足洗式土器である。116・117には、渦文が施されている。122は、直前段反撚縄文である。123～142は、弥生時代後期前葉の土器である。123・124は複合口縁で、口縁下部に刻みを施すものである。124の頸部には、櫛歯状工具で連弧文を施している。125は口縁部破片で、広い無文帯下に刺突文を施している。126～129・133は、櫛歯状工具で鋸歯文あるいは波状文を施すものである。127は3本櫛歯を、126・128・129は4本櫛歯を用いている。130・131・134は、頸部に格子文を施すものである。134は、胴部にLRの単節縄文を施している。135・136・139・140は付加条1種付加2条の縄文を施している。羽状縄文のものはない。139・140の軸縄は不明瞭である。141は布目文を施している。142は底部破片で、底部に木葉痕が残る。

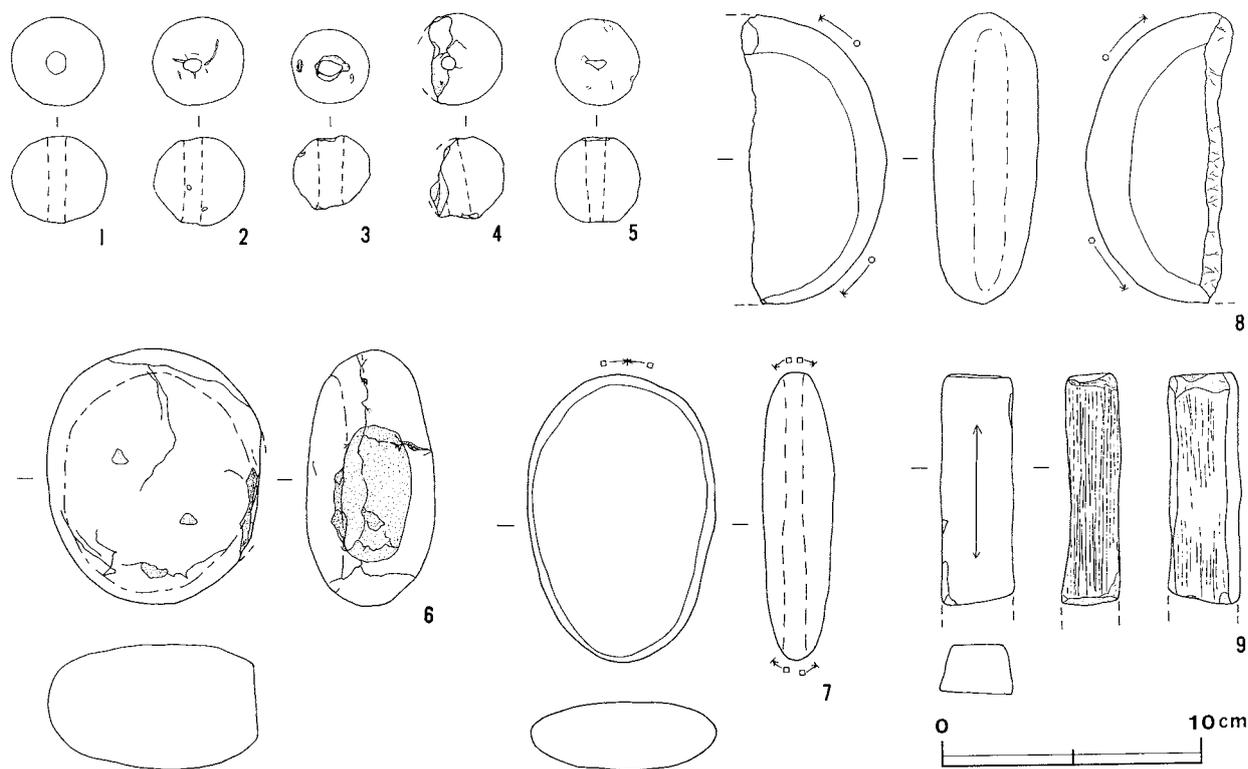
### 土製品（第113図）

5点の土玉が出土している。形状は球形で、1孔の貫通孔があげられている。形状および法量が古墳時代住居跡出土のものと近似するため、古墳時代のものと考えられる。

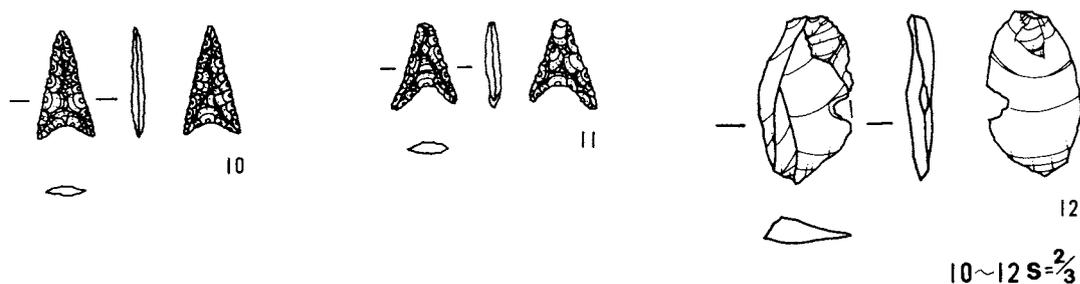
### 石器（第113・114図）

磨石・敲石・砥石・石鏃・剥片が出土している。第113図6・7は磨石である。端面にわずかな磨痕が認められる。8は敲石である。上下端部に敲打痕が認められる。9は砥石である。石質は砂岩であり、断面形は台形

である。第114図1・2は無茎の石鉢である。1・2ともに基部に抉入があり、1は浅く、2は深い。3は剥片である。表面と裏面の剥離方向は一致している。



第113図 遺構外出土遺物実測図(5)



第114図 遺構外出土遺物実測図(6)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第113図 1	甕 土師器	A [19.2] B (6.3)	口縁部片。頸部はくびれ、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。頸部ヘラ削り。	砂粒、雲母、長石 におい黄橙色 普通	P-248 5% B9h4区
2	坏 土師器	A [13.0] B 5.0	丸底。体部は内彎して立ち上がり、そのまま口縁部に至る。口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、雲母、バミス 赤色 普通	P-247 30% B8a0区
3	坏 土師器	A [13.6] B (5.5)	底部欠損。体部は内彎して立ち上がり、口縁部との境にふい稜をもち、口縁部は外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒、雲母 赤色 普通	P-245 15% 覆土中
4	乗 陶 燭 器	A 4.4 B 4.0 C 4.5	平底。基部は絞られ、体部は内彎して立ち上がり、口縁部は内傾する。	水挽き整形。底部回転糸切り。底面に穿孔。底面を除き外面に赤褐色の釉が掛けられている。	砂粒、スコリア 赤褐色 普通	P-246 100% B5i9区

## 第4章 考察 (第1次)

平出久保遺跡で確認した遺構と遺物は、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代に大別することができる。ここでは、各期ごとの土器や住居跡の特徴を述べるとともに、若干の考察を加えて行くことにする。

### 第1節 遺構と遺物

#### 1 土器の様相

##### 縄文時代 (I期)

当調査区における縄文式土器の最古の段階のものとしては、早期末の茅山下層式土器で遺構外から出土している。前期は関山式土器が中心で、黒浜式土器が極少量出土している。

関山式土器は多数出土しているが、ボタン状の貼付文を有する関山I式土器は少ない。関山式期の文様組成は、単節縄文(複節・無節縄文を含む)42.4%、組紐文16.9%、直前段合撚縄文14.1%、沈線文6.1%、撚糸文5.4%、異段縄文5.2%、ループ文4.5%、刺突文1.9%、その他3.5%である。底部は、上げ底状や上げ底である。地文上に文様が施される土器は、関山II式に比定される。器種構成は深鉢がほとんどであるが、第12号住居跡から片口の土器片が出土している。

茨城県において関山式期の住居跡や土器を出土しているおもな遺跡は、日立市金木場遺跡<sup>(1)</sup>(第64・68号住居跡)、同向畑遺跡<sup>(1)</sup>(第1号住居跡)、茨城町権現峰遺跡<sup>(2)</sup>(第7・8号住居跡)、守谷町郷州原遺跡<sup>(3)</sup>(第23・25号住居跡)、石下町鴻野山貝塚<sup>(4)</sup>(第1号住居跡)がある。類似の土器が出土している遺跡は、鉾田町と距離的に近い茨城町権現峰遺跡がある。権現峰遺跡の第8号住居跡第33図47は、口縁部に竹管によるキザミを施し地文にループ文が施されている。平出久保遺跡においても、第37号住居跡出土土器は、口縁部にキザミを施し、地文にループ文や組紐文が施されていることから、技法的に類似している。

黒浜式土器は、単節縄文を地文とし押引文を施している。

##### 弥生時代 (II期)

当調査区から出土した弥生式土器は、中～後期にかけての土器片で、いずれも表土及び他の時期の遺構の覆土内からのものである。この時期の遺構は、今回の調査では確認されていない。当調査区内での最古の段階のものとしては、中期後葉の足洗式土器である。足洗式土器は、渦文が施されていることが特徴である。足洗式土器を出土している遺跡は、太平洋岸に多く認められ、鉾田町では、安塚遺跡<sup>(5)</sup>、徳宿遺跡がある。安塚遺跡からは、第6号住居跡第31図5,6などの渦文が施された足洗式土器が少量出土し、他の住居跡からは十王台式土器も出土している。徳宿遺跡では、遺構を確認していないが、グリッドから足洗式土器片が出土している。

鉾田町周辺では、旭村浜山古墳群<sup>(6)</sup>があり、同遺跡第1号土坑から完形の壺が出土している。この土器は胴部上半部に2本同時施文具による6単位の連続渦文が描かれている。当調査区から出土している足洗式土器片は、2本同時施文具による連続渦文が描かれていることから、技法が類似しているものと思われる。

当調査区内で後期に比定される土器は、複合口縁で羽状縄文がないことから、後期前葉に比定できる。

## 古墳時代

古墳時代の遺物は、前期をⅢ期、中期をⅣ期、後期をⅤ期に分け、中期と後期についてはさらに第1期と第2期とに細分した。銚田町の古墳時代の遺跡は、昭和53年度に当教育財団が調査を実施した鹿島線関係の烟田<sup>(5)</sup>遺跡、塙遺跡や昭和60年に報告された阿巳の山遺跡<sup>(7)</sup>、平成2年度に報告された烟田川波遺跡<sup>(8)</sup>、平成3年度に報告された沢三木台遺跡<sup>(9)</sup>がある。

烟田遺跡と烟田川波遺跡は、いずれも銚田町大字烟田に所在し、両遺跡の距離はおよそ100mしか離れていないためほぼ同一集落ととらえることができる。塙遺跡は、銚田町大字安房に、沢三木台遺跡は大字塔ヶ崎に所在している。

烟田川波・烟田遺跡は、平出久保遺跡から、南東へおよそ2km、塙遺跡は、北北東へおよそ2.5km、沢三木台遺跡は、南西へ0.8km隔てて所在し、古墳時代の住居跡は、烟田遺跡からは35軒、烟田川波遺跡からは15軒、沢三木台遺跡からは14軒、塙遺跡は5軒が報告されている。時期ごとに平出久保遺跡と比較していきたい。

### ①前期（Ⅲ期）

本期は、ハケ目などが見られる甕、埴、器台などが出土している第4・13・34号住居跡出土土器を中心に設定した。

土師器は、甕、壺、坏、埴、高坏、器台、手捏土器からなる。特徴としては、甕、高坏、器台及び埴が多く出土しているが、台付甕や甑は少ないことがあげられる。

甕は、各住居跡ごとに口縁部片が数多く出土していてすべてハケ目整形が施されている銚田町では、本期と同時期と考えられる。烟田遺跡第28号住居跡から出土している甕は、胴部下半にハケ目整形が施されている。

高坏は、中実柱状部をもつ脚部を有しているものが出土している。柱状部全体がほぼ中実で裾部は短く、屈曲しつつ開くものである。類例を上げてみると、水戸市大塚新池遺跡<sup>(10)</sup>、鹿島町木滝台遺跡<sup>(11)</sup>らの出土例などがある。

埴は、大型埴（第18図8・第21図2）や小型埴（第18図6・第26図7）が出土している。大型埴は、頸部にくびれをもち、口縁部は、外傾して開く。口縁部・胴部外面にヘラ磨きが施され、内・外面が赤彩されている。小型埴は、凹底で、胴部最大径を中位から頸部にもち、口径が胴部最大径を大きく上まわる。口縁部・胴部外面にヘラ磨きが施され、内・外面に赤彩が施されているものである。器台は、脚部が緩やかに反りをもって裾部へ至るもので、器受部に稜をもつもの（第20図8・9）が出土している。裾部は穿孔しているもの（第20図8）と穿孔していないもの（第20図6・5）がある。烟田遺跡第28号住居跡出土の器台は、脚部の穿孔は3孔を有する。この器台は報告書によると「口径9.3cm、器高は8.3cm、底部径は9.5cmである。～(中略)～にふい黄橙色で、砂礫粒をわずかに含む。焼成は硬い。なでで整形している。」と報告されており、平出久保遺跡の第13号住居跡出土の器台（第20図8）とは、器形や整形技法などが類似している。平出久保遺跡のⅢ期とはほぼ同時期と思われる。本期は、土師器の様相から4世紀後葉と考えられる。

### ②中期（Ⅳ期）

#### 第1期

本期は、輪積痕などが見られる甕、高坏などが出土している第8・9号住居跡を中心にして設定した。土師器は、甕、壺、杯、高坏、手捏土器が出土している。

甕は、胴部が球形状を呈し、頸部はくびれ、口縁部が外傾しているものと胴部上位に最大径をもつものとが

ある。小型の甕は、平底で、胴部は内彎して立ち上がり、口縁部は外傾している。輪積痕が残るもの（第47図2・3）もある。

銚田町では、本期と同時期と報告されている阿巳の山遺跡第1号住居跡から出土している甕は、すべて胴部に最大径を有し、長胴状を呈している。ハケ目整形痕が残るものも存在している。

坏は、丸底で、内彎して立ち上がり口縁部にそのまま至るもの（第73図3）である。器高指数は27である。  
(器高指数=高さ÷口径×100)

また、本期と同時期と考えられる畑田遺跡第11号住居跡からも杯が4個体出土している。底部は欠損しているものが1個体で、平底が2個体、丸底が1個体である。杯の平均器高指数は、33である。平出久保遺跡出土の杯と比較すると器高指数は27で差が少ない。

本期は、土師器の様相などから5世紀前葉と考えられる。

## 第2期

本期は、第7・14・18号住居跡出土土器を中心として設定した。

土師器は、甕・坏・鉢が出土している

坏は、多量に出土している。坏の平均器高指数は、40である。底部は、丸底と平底があり、平底のほうが多い。体部内面の整形技法は、大半がへら削り後へらナデで、内面はへらナデやへら磨きを施されているものが多い。中には、赤彩されているものもある。

甕は、大型と小型があり、底部は、平底である。胴部は、胴部中央に最大径をもつ球形状を呈していて頸部が「く」の字状を呈し、口縁部で外反するものである。整形技法は口縁部内・外面横ナデ、胴部内面はナデ、外面はへら削り後へらナデを施しているものが多い。輪積痕が残るものも存在する。

須恵器は、坏の蓋と身が出土している。杯の蓋と身が第7・14号住居跡から出土している。坏は、中村編年<sup>(12)</sup>で大半が5世紀後半頃のI型式の4段階である。第43図25の坏はI型式の4段階で、第43図27の杯はI型式の5段階である。

本期は、須恵器の編年や土師器の様相から5世紀後葉と考えられる。

## ③後期（V期）

### 第1期

本期は、模倣坏が多く出土している第22・28号住居跡出土の土器を中心として設定した。土師器は甕、甗、坏が出土している。

坏は、模倣坏が大きな割合を占めるようになっている。そして本期の平均器高指数は42であり、中期第2期よりも器高指数がやや高くなっている。本期の坏の特徴は、口径が大型化し、器高が深くなることである。内・外面に赤彩痕のある坏も見られる。

甕は、胴部が球状を呈し、口縁部が長く外反するものや短く外反するものが存在している。整形技法は、口縁部内・外面横ナデ、胴部外面へら削り後へらナデである。本期は、模倣杯の様相から6世紀前葉と考えられる。

### 第2期

本期は、坏の口径が小さくなるものが出土している第20号住居跡出土土器をもって設定した。土師器は甕、

坏が出土している。

坏は、口径が小さくなり、器高が低くなっている。坏の整形技法はへら削りが施されている。本期の坏の平均器高指数は34である。

甕（第76図1）は、長胴化している。胴部上位に最大径をもつもの（第76図2）も出土している。

甌（第76図3）は、胴部は内彎して、口縁部が外反している。

本期は6世紀後葉と考えられる。

## 奈良時代（VI期）

本期は、つまみだしの技法などが見られる甕などが出土している第6号住居跡の出土土器を中心に設定した。甕は、口縁部片で、口唇部をつまみだすもの（第96図1）、口唇部に凹線を巡らすもの（P-19）などがある。甕は、口唇部をつまみあげた後沈線をいれ、胴部外面下半部にはへら削り後へらナデを施す、いわゆる「常陸型甕」であると考えられるが胴部が欠損しているため不明確である。坏は1個体で、平底でそのまま口縁部に至る。

甌は、口縁部は外反するもの（第97図6）が見られる。

須恵器の坏は、平底で、体部は外傾して立ち上がる。本期は、土師器の様相や須恵器の編年から8世紀前葉と考えられる。

## 2 住居跡の形態

### 縄文時代（I期）

本期の住居跡は、5軒（第12・26・27・36・37号住居跡）が確認され、いずれも関山II式期の住居跡である。住居跡の平面形は、長方形が2軒と台形が1軒の方形系統である。関山式期の住居跡の特徴として「平面形は長方形または台形が主流で、小型住居跡に円形・不整形がある。～（中略）～関山式期の平面形の特徴をみると、小型住居には円形・楕円形・不整形平面で、壁柱のないものが多く、中・大型住居は長方形・台形平面で壁柱をもつ<sup>(13)</sup>」ことがあげられるが、当調査区では、円形・不整形の住居跡はなく、平均床面積は、24㎡である。第12号住居跡が12㎡と最小で第26号住居跡が31㎡と最大である。主軸方向は第26号住居跡が40°西へ傾いていて、第12・37号住居跡は東に50～68°傾いている。炉は長軸線上の中央部や、北より西へ1ないし2カ所を有している。第37号住居跡は、台形の中型住居跡で、支柱穴は6カ所と考えられ、壁柱穴をもたない。地床炉は2カ所所有している。関山式期の特徴的な住居跡と思われる。

### 弥生時代（II期）

本期に伴う遺構は検出されていないが、中～後期にかけての遺物が出土していることから、調査区の南・北側に当該期の遺構が存在する可能性も考えられる。

### 古墳時代

当調査区における古墳時代の住居跡は最も多く、34軒中27軒である。住居跡の大きさについては、長軸6mよりも大きい住居跡で床面積38㎡以上を大型住居跡、長軸6mを基準にして床面積36㎡前後を中型住居跡、長軸6mより小さい住居跡で床面積34㎡以下を小型住居跡に分けた。

## ①前期（Ⅲ期）

本期の住居跡は、10軒（第4・5・13・17・21・24・25・29・33・34号住居跡）が検出され、東部（第4・5・13・17・21・24・25号住居跡）と中央部（第29・33・34号住居跡）の2群に分けることができる。両群の住居跡からの遺物の出土量は、少量である。住居跡は全て方形で、規模は、大型住居跡が1軒、中型住居跡が3軒、小型住居跡が6軒である。主軸方向は、東にほぼ $1^{\circ}$ ～ $49^{\circ}$ 傾く住居跡が3軒で、西にほぼ $3^{\circ}$ ～ $37^{\circ}$ 傾く住居跡が7軒である。主柱穴は基本的に4か所で、規則的に配置されている。炉は中央から北よりに1か所付設されているが第19号住居跡は3か所付設されている。貯蔵穴は第17号住居跡の南コーナー付近から検出されている。本期と同時期の住居跡は、畑田遺跡から1軒報告されている。平面形は方形で、床面積 $48.3\text{m}^2$ の大型住居跡である。主軸方向は、東に $29^{\circ}$ 傾いている。主柱穴は、3カ所であるが、1カ所は住居跡に攪乱されていると推定されることから4カ所と考えられる。炉跡は不鮮明であるが中央部に検出されている。この畑田遺跡の住居跡は、平出久保遺跡の住居跡と同様の形態をしている。

## ②中期（Ⅳ期）

### 第1期

本期の住居跡は、4軒（第8・9・15・23号住居跡）が検出されている。平面形は、方形又は隅丸方形である。一辺が $8.0\text{m}$ 程の大型住居跡が1軒、一辺 $4\sim 5\text{m}$ 程の小型の住居跡が4軒である。主軸方向はいずれも西へほぼ $14^{\circ}$ ～ $71^{\circ}$ 傾く範囲におさまる。本期の住居跡からは、壁溝は検出されていない。

炉は、床中央からやや北よりに1か所ないし2か所所有している。主柱穴は基本的に4か所である。貯蔵穴を有している住居跡は、存在していない。

本期と同時期の住居跡は、畑田遺跡から2軒（第11・28号住居跡）が報告され、埜遺跡からは、3軒（第2・4・5号住居跡）、阿巳の山遺跡からは1軒（第1号住居跡）が報告されている。3遺跡の住居跡の平面形は、長方形や方形で、大型住居跡が3軒（ $48.28\sim 82.01\text{m}^2$ ）、小型住居跡が3軒（ $12.60\sim 23.32\text{m}^2$ ）である。埜遺跡の3軒はすべて小型の住居跡である。炉は、6軒中5軒から中央部ないし中央よりやや北側から検出されている。主軸は、真北が1軒、西へ $16^{\circ}$ ～ $47^{\circ}$ 傾いているものが3軒、東へ $29^{\circ}$ ～ $31^{\circ}$ 傾いているものが2軒である。畑田遺跡の2軒には、一部壁溝が確認されている。

平出久保遺跡では、大型と小型の住居跡が確認されている。他の3遺跡では、畑田遺跡と阿巳の山遺跡の住居跡が大型の住居跡で、埜遺跡の住居跡は小型の住居跡である。この時期における住居跡は、大型と小型の住居跡が構築されていたものと思われる。

### 第2期

本期の住居跡は3軒（第7・14・18号住居跡）が確認されている。平面形は方形ないし隅丸方形である。規模は、一辺が $7\text{m}$ 程の大型住居跡が2軒、一辺が $6.0\text{m}$ 程の中型の住居跡が4軒で、小型の住居跡は認められない。第1期よりも床面積が広がっている。主軸方向は、いずれも西に $2^{\circ}$ ～ $26^{\circ}$ 傾いている。主柱穴は、基本的に4か所である。周溝は第18号住居跡に存在する。竈は北壁や北西壁に付設している。貯蔵穴は、第14号住居跡の南東コーナー付近検出されている。本期と同時期の住居跡は、畑田川波遺跡から1軒（第15号住居跡）が報告されている。平面形は方形で、一辺が $6.3\text{m}$ 程で床面積は、 $39.69\text{m}^2$ の大型住居跡である。主軸方向は、西に $38^{\circ}$ 傾いている。炉が中央からやや北西よりに検出されている。壁溝は、南西壁際を除いて確認されている。貯蔵穴は南東壁際中央部に付設されている。

竈は、住居跡の北壁などに付設されており、炉は、烟田川波遺跡の住居跡の中央に付設されている。両遺跡の住居跡は、同時期であることから、本期には竈をもつ住居跡と炉をもつ住居跡が存在していると考えられる。

### ③後期（V期）

#### 第1期

本期の住居跡は、2軒（第22・28号住居跡）が検出されている。平面形は、方形である。ともに一辺が5m程の小型の住居跡で、床面積が26㎡である。主軸方向は、西に20°～24°に傾いている。主柱穴は基本的に4か所である。壁溝は、第22号住居跡に存在する。竈は北壁や北西壁中央部に付設されている。

本期と同時期の住居跡は、烟田川波遺跡から3軒（第4・6・9号住居跡）、烟田遺跡から4軒（第10・15・22・26号住居跡）、沢三木台遺跡から2軒（第14・18号住居跡）が報告されている。平面形は、方形を呈し、床面積27.03～46.23㎡で、平均床面積は、33.94㎡である。平出久保遺跡よりも広い。主軸方向は、西に15°～51°傾いている。主柱穴は4か所である。竈は、烟田川波遺跡の第4・6号住居跡を除きすべての住居跡の北壁などに付設されている。炉は、第4号住居跡からは1か所、第6号住居跡からは2か所検出されている。

本期は、前期と同様炉をもつ住居跡と竈をもつ住居跡該当する同時期に存在していることが考えられる。

#### 第2期

本期の住居跡は、1軒（第20号住居跡）が検出されている。平面形は隅丸方形で、一辺が4mの小型の住居跡である。主軸方向は西に17°に傾いている。主柱穴は基本的には4か所である。壁溝は、西壁下を除き巡っている。竈は、北壁中央部に付設されている。

本期と同時期の住居跡は、銚田町の他の遺跡からは検出されていない。

### 奈良時代（VI期）

本期の住居跡は、2軒（第1・6号住居跡）である。平面形はいずれも方形又は方形状で、これらの住居跡は、一辺が3.0m程の小型住居跡である。平均床面積は、12.9㎡であり、平出久保遺跡の中では、最も狭くなっている。主軸方向は、4°～17°以内で東に傾いている。

本期と同時期の住居跡は、沢三木台遺跡から5軒が確認され、平面形は方形で、平均床面積13.8㎡である。主軸方向は、西へ10°以内に傾いている。

平出久保遺跡の住居跡の形態について述べてきたが、縄文時代前期の住居跡は、方形や楕円形を呈し、中央部に炉をもち、主柱穴が6ないし4か所である。古墳時代前期と中期の住居跡は、方形ないし長方形を呈し、主軸線上の中央部に炉をもち、主柱穴が4か所である。大型と小型の住居跡がある。古墳時代後期の住居跡は、方形を呈し、主柱穴は4か所である。前期初頭には竈をもつ住居跡と炉をもつ住居跡が存在し、やがて竈をもつ住居跡だけになる。床面積は、時期が新しくなるごとに小型化して奈良時代に続いていると考えられる。

注：参考文献

- (1)茨城県教育財団 「金木場遺跡他」 『茨城県教育財団文化財調査報告 第59集』 1990年
- (2)井上 義安 『茨城町権現峰遺跡』 茨城町史編さん委員会 1990年
- (3)丸子 亘 『郷州原遺跡』 守谷町教育委員会 1974年
- (4)佐藤 誠 『鴻野山遺跡』 石下町郷土史資料集 1987年
- (5)茨城県教育財団 「畑田遺跡他」 『茨城県教育財団文化財調査報告VI』 1980年
- (6)浜山古墳群発掘調査会 『浜山古墳群発掘調査報告書 1号墳・2号墳』 旭村教育委員会 1990年
- (7)銚田町教育委員会 『阿巳の山遺跡』 阿巳の山遺跡発掘調査会 1986年
- (8)茨城県教育財団 「畑田川波遺跡 畑田城跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告 第68集』 1990年
- (9)茨城県教育財団 「沢三木台遺跡 餓鬼塚」 『茨城県教育財団文化財調査報告 第70集』 1991年
- (10)茨城県教育財団 「大塚新池遺跡他」 『茨城県教育財団文化財調査報告 第XI集』 1981年
- (11)鹿島町木滝台遺跡発掘調査会 「木滝台遺跡他」 『鹿島町の文化財 第6集』 1978年
- (12)中村浩 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1981年
- (13)国立歴史民俗博物館の酒井清治氏のご教示による。
- (14)宮本 長二郎 「関東地方の縄文時代竪穴住居の変遷」 『文化財論叢』 同明社 1983年
- (15)茨城県教育財団 『年報 8』 1998年
- (16)笹森 健一 「縄文時代前期竪穴住居跡の変遷」 『土曜考古』 第3～5号 1981・1982
- (17)海老沢 稔 「茨城県における中期後半の弥生土器について」 『婆良岐考古』 第13号 婆良岐考古同人会  
1991年

## 第5章 遺跡（第2次）

### 第1節 遺跡の概要

今回の調査区は、第1次調査区の西側、上位台地にあたる。調査前の現況は竹林で、調査面積は1842㎡である。

確認された遺構は、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、土坑1基、防空壕跡1基、溝1条である。竪穴住居跡からは坏、紡錘車、砥石等が出土している。土坑からは中世の短頸壺が出土している。防空壕跡から遺物は出土していないが、戦時中につくられたものである。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に2箱ほどである。縄文時代の遺物は、縄文時代早期から中期までの土器片・土錘・石斧が出土している。古墳時代以降の遺物は、土師器・砥石等が出土している。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1 竪穴住居跡

##### 第38号住居跡（第115図）

位置 調査区の南部。C2g0区。

規模と平面形 長軸（2.50）m、短軸（1.80）mで、長方形と推定される。南部は調査区外であるため、調査できなかった。

壁 壁高は56～60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦であり、堅く踏み締められている。住居跡の掘り方は床面より10～30cm下位にあり、掘り方の底面は起伏に富んでいる。床はロームを主体とする褐色土が使われている。

壁溝 北東壁下の床面を幅20cm、深さ6cmほど掘り窪め、断面形は皿状である。

ピット 北西コーナー付近に1カ所確認された。P<sub>1</sub>は長径22cm・短径19cmの楕円形で、深さ44cmである。支柱穴と考えられる。

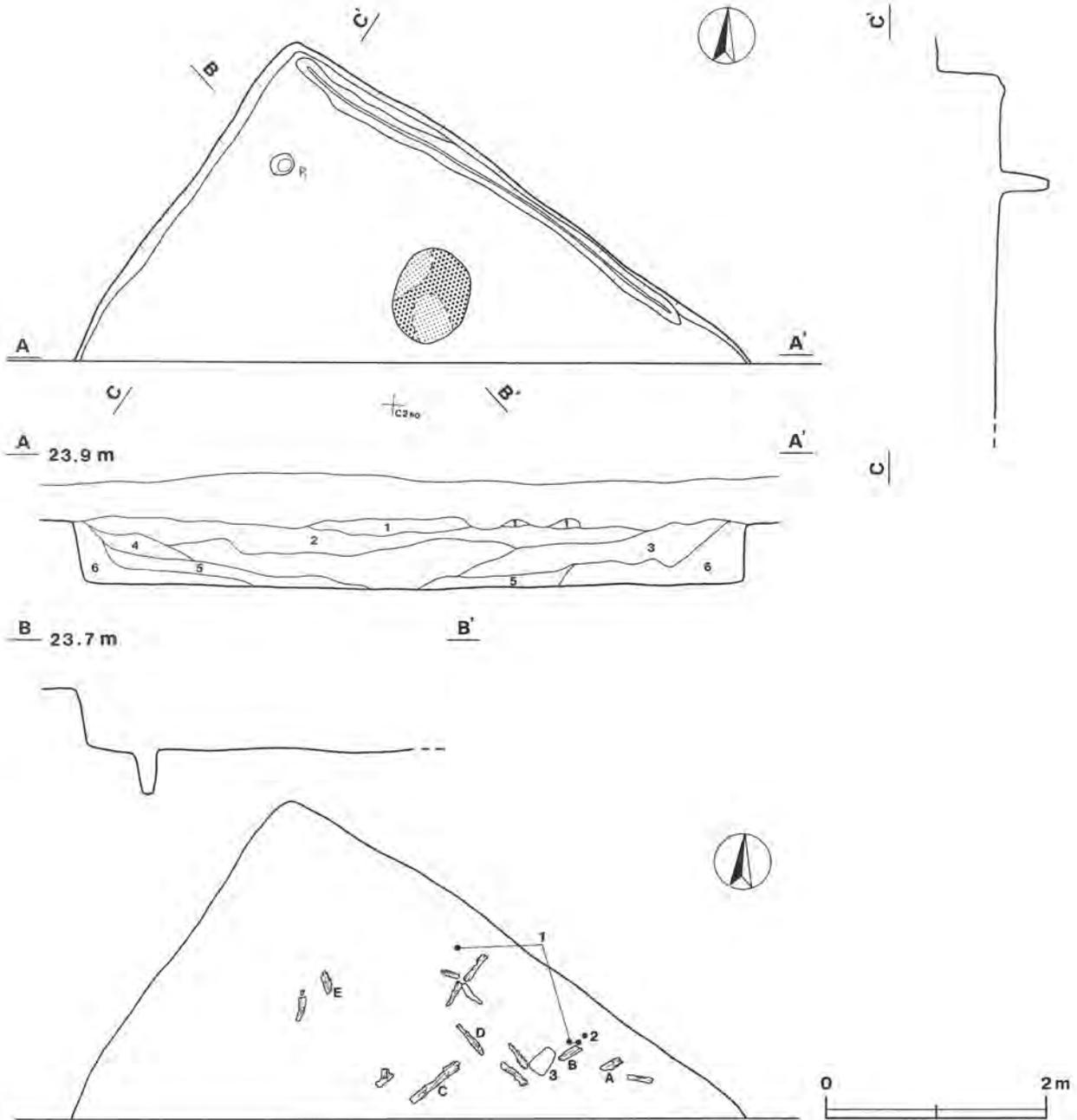
炉 床面中央北東壁寄りに付設される。長軸83cm、短軸68cmで、床を3cmほど掘り窪めた地床炉である。

覆土 7層からなり、自然堆積と考えられる。北東壁際床面上に堆積する第7層が粘土質の強いものである以外、黒褐色あるいは暗褐色を基調とする堆積土である。第3・6・7層の下層からは、多量の炭化材が確認される。第1層はローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量含む黒褐色土である。第2層は焼土粒子を微量、ローム小ブロックを少量含む暗褐色土である。第3層はローム粒子・ローム小ブロックを少量、焼土粒子を少量炭化材を少量含む黒色土である。第4層はローム粒子を少量、ローム中ブロックを微量含む極暗褐色土である。第5層はローム小ブロックを少量、炭化粒子を微量含む黒褐色土である。第6層はローム小ブロックを少量、炭化粒子を少量、焼土粒子を含む暗褐色土である。第7層はローム中ブロックを少量、炭化粒子を少量含む褐色土である。

遺物 土師器の甕18片・土師器の坏7片が出土している。第116図1の坏は6層から、2の紡錘車は7層下部から、3の砥石は床面から出土している。炭化材が焼土とともに覆土下層あるいは床面から、床中央部を中心に

して放射状に確認された。

所見 北東壁寄りに地床炉を持つ、焼失した住居跡である。1の坏が6層より出土したことから、古墳時代中期の住居跡であると考えられる。

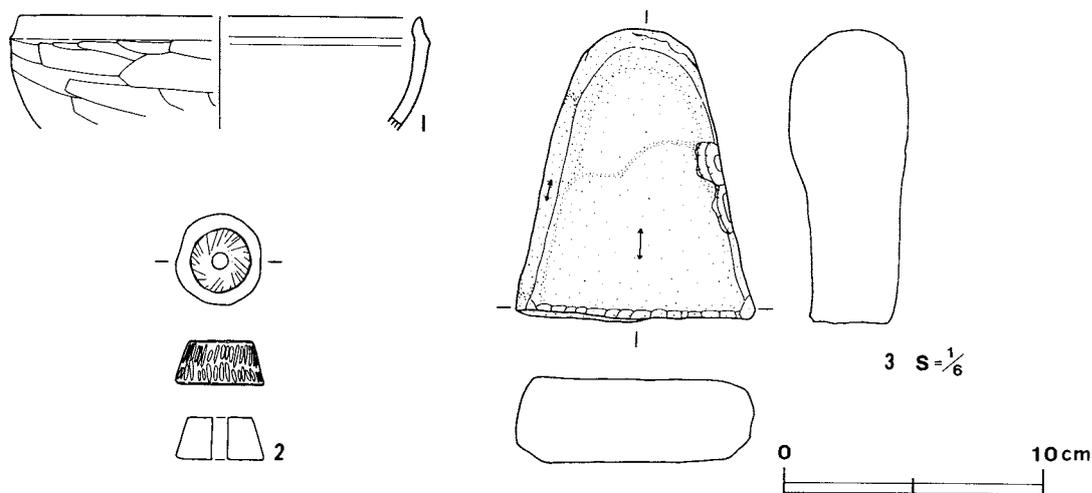


第115図 第38号住居跡実測・遺物出土位置図

第38号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	杯 土師器	A 16.2	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部との境に不明瞭な稜を有する。口縁部は内傾する。	体部外面へラ磨き。口縁部・体部内面横ナデ。	礫粒中にふい褐色普通	P-254 20% 6層 体部外面赤彩

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
2	紡錘車	3.6	3.4	1.7	32.8	粘板岩	7層下部	Q94
3	砥石	23.1	18.9	9.2	430.0	砂岩	床面	Q95



第116図 第38号住居跡出土遺物実測図

## 2 土坑

第28号土坑 (第117図)

位置 調査区の東側, C3b9区。

規模と平面形 長軸2.74m・短軸1.14mの楕円形で、深さ1.01mである。

長軸方向 N-62°-E

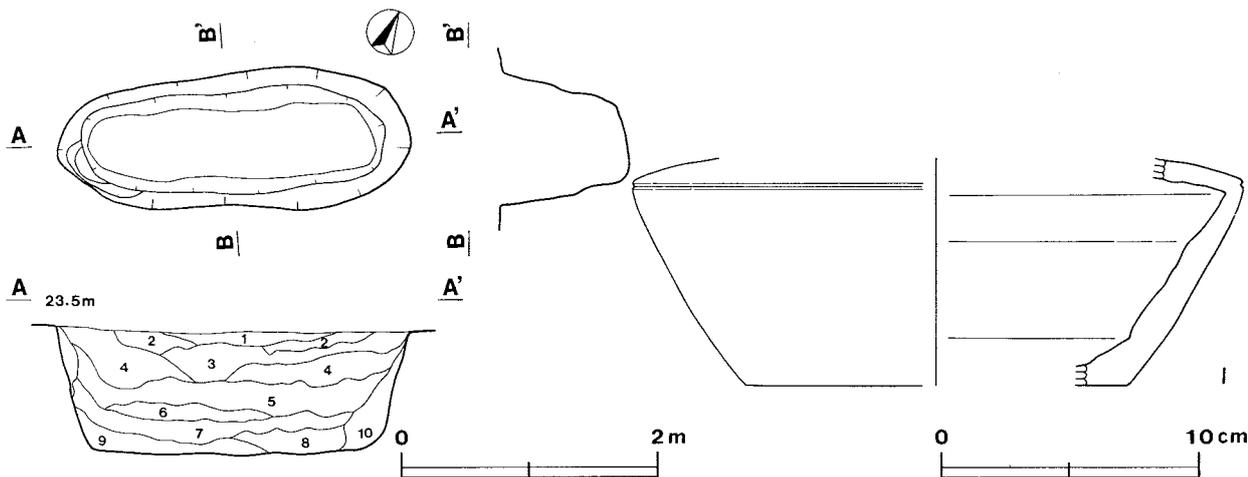
壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。南西壁には段を有している。

底面 平坦である。

覆土 11層からなる。第1層は、ローム小ブロックを中量、黒色ブロックを微量含む褐色土である。第2層はローム小ブロックを少量、焼土粒子を微量含む暗褐色土である。第3層はローム粒子を中量、ローム小ブロックを微量含む褐色土である。第4層は黒色土粒子を少量、ローム粒子を少量、ローム小ブロックを微量、焼土粒子を微量、炭化粒子を微量含む暗褐色土である。第5層はローム粒子を多量、ローム小ブロックを中量、炭化粒子を微量含む褐色土である。第6層は、ローム粒子・ローム小ブロックを多量、炭化粒子を微量含む褐色土である。第7層はローム粒子を多量、炭化粒子を微量含む褐色土である。第8層は、ローム粒子を多量、ローム大ブロックを少量、黒色小ブロックを微量含む褐色土である。第9層はローム粒子を多量、黒色土粒子を微量含む褐色土である。第10層はローム粒子を多量、ローム大ブロックを少量含む褐色土である。第11層はローム粒子を多量含む褐色土である。

遺物 覆土上層から第117図1の口縁部から頸部までが欠損した短頸壺が出土している。

所見 時期や性格については不明である。



第117図 第28号土坑・出土遺物実測図

第28号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第117図 1	短頸壺 陶器	C (15.0)	平底。体部は外傾して立ち上がり、 肩部で内側に屈曲する。	体部外・内面ともに横ナデ。	礫粒微含 灰白色 良好	P-255 20% 覆土上層 体部自然釉

### 3 防空壕跡

#### 第1号防空壕（第118図）

位置 調査区の東部，C3e1～C3e3区。

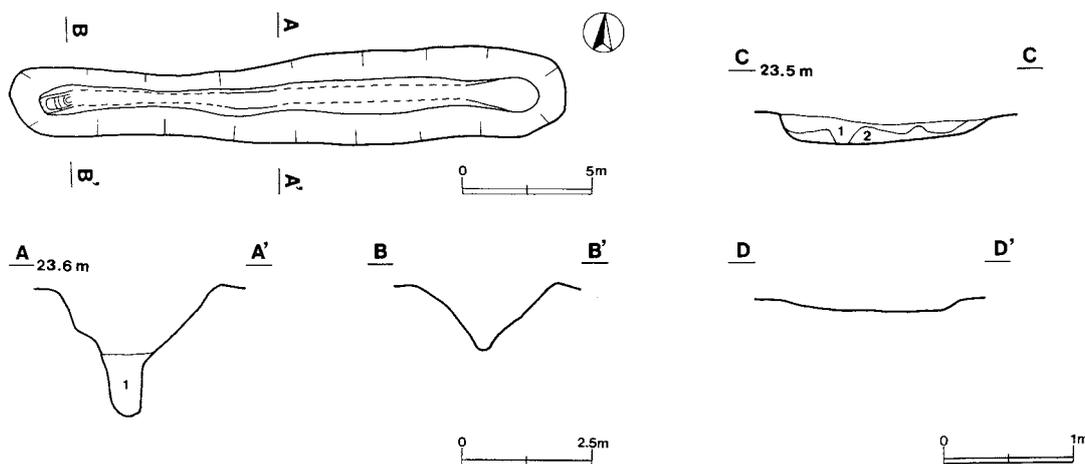
確認状況 覆土が埋まりきらず，地表より0.9～1.20m窪んだ状態で確認された。

重複関係 第6号溝を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模と平面形 長軸21.50m・短軸3.70mの長楕円形である。

壁面 短軸方向の断面形はロート状で，底面付近は垂直に立ち上がり，開口部付近は開いている。東側は，壁面中位からオーバーハングしている。

床 西側は最も浅く，中央部に向かって階段状に深くなっている。東側が最も深く，推定で3mはある。底面は幅60cm程あり，ほぼ平坦である。



第118図 第1号防空壕・第6号溝実測図

覆土 1層で、遺構中位から床面にかけて堆積している。第1層は、ローム中ブロックを少量、ローム大ブロックを微量含む褐色土である。

所見 本跡は、西側の階段状部分を出入り口とする昭和時代の防空壕である。天井部の有無は不明である。

#### 4 溝

##### 第6号溝（付図・第118図）

位置 調査区の東部，C3a5～C3f6区。

重複関係 第1号溝状遺構に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と形状 上幅1.64m，下幅1.40m，深さ0.20m，全長（25.0）mで，断面形は鍋底状である。

方向 N-4°-W

覆土 2層からなる。第1層はローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含む暗褐色土である。第2層はローム小ブロックを少量，ローム中ブロックを微量含む褐色土である。

所見 時期や性格については不明である。

#### 5. 遺構外出土遺物

##### 土器（第119図）

縄文時代早期から中期にかけての土器が出土している。

1と2は早期中葉の田戸下層式土器である。1は外削ぎ状の口縁部破片で，口唇部に斜位の条線文が施される。胴部には浅い沈線が施される。2は胴部破片で，横位に浅い沈線が施される。

3・13は，前期前葉の黒浜式土器である。3は，付加条1種付加2条でLRにRを加えた縄文を施している。13は，RLの単節縄文を施している。

4～10・15・16は前期後葉の土器である。4・5・8～10は浮島I式土器である。4は内傾する口縁部破片で，撚糸文を地文とし，半截竹管凹面による2条の有節平行沈線文を施している。5は胴部破片で，撚糸文を地文とし，半截竹管凹面による平行沈線と連続刺突文により文様を構成している。8～10は，半截竹管凹面による有節平行沈線文を施すものである。8・9は平口縁で，10は波状口縁である。9は有節平行沈線文間に波状文を施している。6・7は浮島II式土器である。6は肋のあるアナグラ属の貝で，7は肋のない貝により，貝殻腹縁文を施している。15・16は浮島式土器で，単軸絡条体を回転施文したものである。いずれも縄の巻き方は疎であるが，15は縄を結節している。

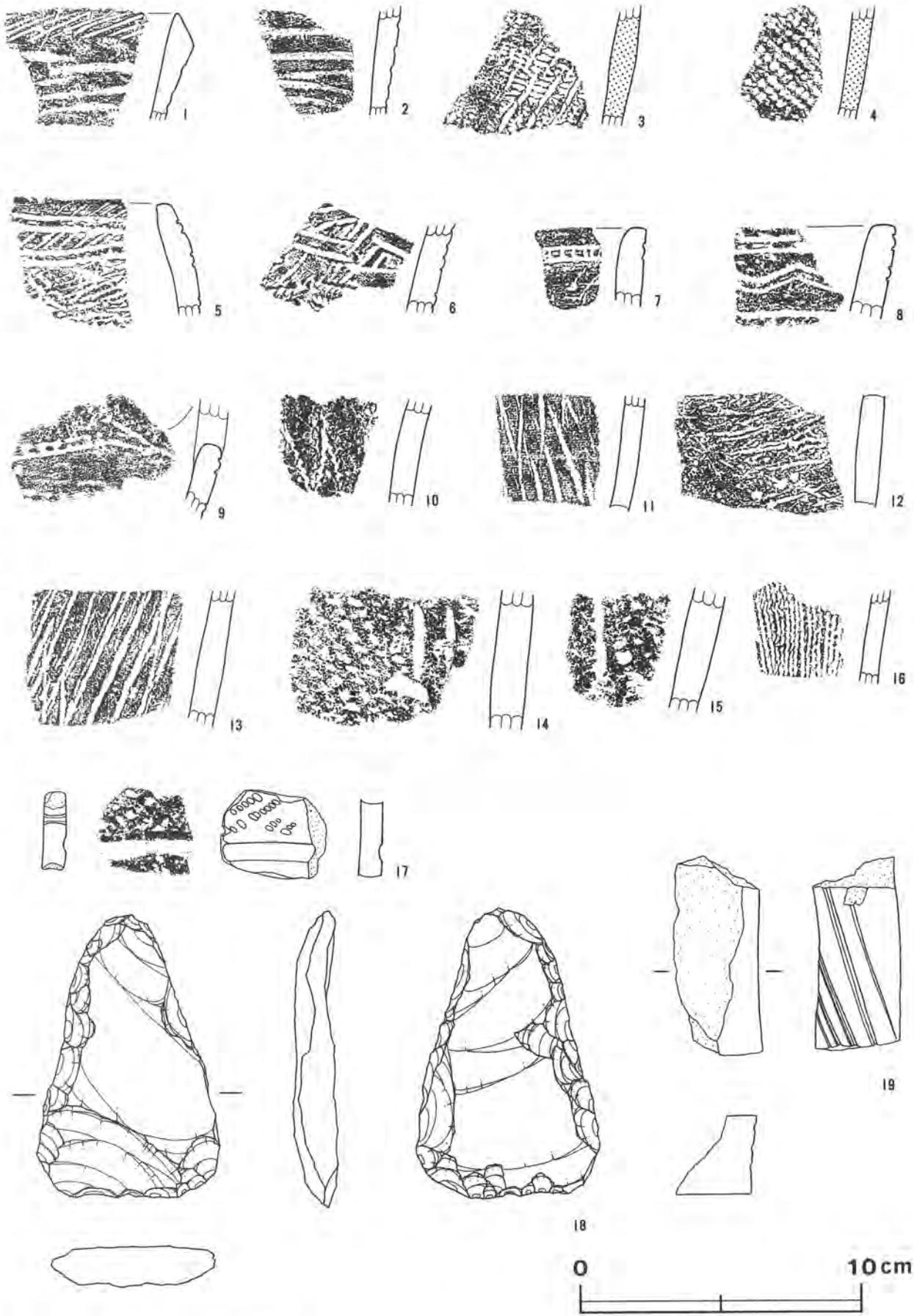
11・12・14は中期後葉の土器である。11・12は加曾利EII式土器の胴部破片である。沈線文を垂下させ，LRの単節縄文を施している。11には撚糸文を施している。

##### 土製品（第119図）

17は土器片錘である。加曾利EII式土器の胴部破片を利用している。長軸方向に抉りをいれているが，片方は欠損している。

##### 石器（第119図）

18はバチ形の打製石斧である。縦長剥片を素材として，周辺部は両面調整が施されている。縄文時代の所産と考えられる。ホルンフェルス。127g。19は砥石である。断面形は長方形と推定され，その一面には5条の研ぎ溝がある。安山岩。73.3g。



第119図 遺構外出土遺物実測図

## 第6章 まとめ

平出久保遺跡の調査で得られた成果を、各時代ごとにまとめておきたい。

### 縄文時代（Ⅰ期）

第12・26・27・36・37号住居跡の時期である。いずれも中位段丘に立地している。住居跡の平面形は不整長方形で、支柱穴は6本柱である。出土遺物は関山式土器で、組紐文と直前段合撚縄文を地文としたものが31%を占めている。文様帯を有する土器には、地文上にループ文を施すものと、地文上に半截竹管の凹面を利用して平行沈線を施すものがある。また口縁部直下に縦位の条線を施すものがある。住居跡の時期は、関山Ⅱ式期に比定できる。この他、遺構外出土遺物としては、早期中葉の田戸下層式土器・早期末葉の茅山下層式土器・前期前葉の黒浜式土器・前期後葉の浮島式土器と興津式土器・中期後葉の加曾利Ⅴ式土器等が出土している。

### 弥生時代（Ⅱ期）

弥生時代の遺構は、確認されていない。出土遺物は、第1次調査区で中期後葉から後期中葉の土器が出土している。

### 古墳時代前期（Ⅲ期）

第4・5・13・17・21・24・25・29・33・34号住居跡の時期である。いずれも中位段丘に立地している。住居跡の平面形は方形で、支柱穴は4本柱である。炉は中央北寄りに位置し、貯蔵穴は南コーナーに付設される。出土土器は、甕・壺・杯・埴・高坏・器台・手捏土器からなる。甕にはハケ目整形が施されており、単純口縁ではある。高坏は脚部が中実柱状のものが多い。器台は器受部に稜を持ち、脚部に3ヶ所の穿孔を有する小型器台が出土している。器種組成や器形の特徴等から4世紀後葉に比定できる。

### 古墳時代中期（Ⅳ期）

#### 第1期

第3・8・15・23号住居跡の時期である。いずれも中位段丘に立地している。住居跡の平面形は、方形または隅丸方形で、支柱穴は4本柱である。炉は中央北寄りに位置し、貯蔵穴はないものが多い。出土土器は、甕・壺・杯・高坏・手捏土器である。甕にみられたハケ目調整は少なくなる。高坏の脚部には、直線的に深く開くものと大きく開くものがある。本期は5世紀前葉に位置づけられる。

#### 第2期

第7・9・14・18・30・38号住居跡の時期である。第38号住居跡が上位台地に立地しているが、それ以外の5軒は中位段丘に立地している。この時期は、竈の有無と土器の様相から、古段階（第9・14号住居跡）と新段階（第7・18号住居跡）とに分けることができる。

古段階の住居跡は平面形が、方形または隅丸長方形で、支柱穴は4本柱である。床面中央北寄りに炉を有している。出土土器は甕・壺・杯・鉢・高坏・手捏土器で、この段階から須恵器が共伴する。甕は、頸部が屈接し、胴部は球形である。杯は口縁部でわずかな稜をもつ。鉢は小形で、口縁部が内彎して立ち上がるものと、

外傾して立ち上がるものがある。高坏の坏底部には段がなく、わずかに稜を残すのみである。他の遺物としては、土玉や砥石が増加する。

新段階の住居跡は、平面形が方形または長方形で、支柱穴は4本柱である。北壁に竈が付設されており、煙道は壁の内側につくられている。甕は、胴部径に対する口径の比率が前段階より高くなる。坏は、体部に稜を持ち口縁部が外反するものが組成に加わり、赤彩された坏の割合が増加する。大型の鉢が出現する。また、第7号住居跡からは鉄鎌が出土しており、牛久市ヤツノ上遺跡第19号住居跡出土資料と近似している。本期は、古段階が陶邑編年のON46に、新段階がTK208に併行し、5世紀後葉に位置づけることができる。

## 古墳時代後期（V期）

### 第1期

第22・28号住居跡の時期である。いずれも中位段丘に立地している。住居跡の平面形は隅丸方形で、支柱穴は4本柱である。竈が北壁に付設され、煙道は壁外に突出してつくられている。出土土器は、甕・甑・坏が出土している。甕は、わずかに長胴化する。甑は、頸部がくびれる甕形の甑である。坏は、坏身模倣の坏が出現し、主体を占める。本期は、TK47・MT15に比定され、6世紀前葉に位置づけることができる。

### 第2期

第11・16・20号住居跡の時期である。いずれも中位段丘に立地している。住居跡の平面形は隅丸方形で、支柱穴は4本柱である。竈が北壁に付設される。出土土器は、甕・甑・坏が出土している。甕は、より長胴化する。甑は甕形のものなくなり、外反して立ち上がる直線的なものとなる。坏は大型化し、器高が低くなる。本期はTK10からTK43に比定され、6世紀後葉に位置づけることができる。

### 第3期

第1・2・3号墳の時期である。上位台地に立地し、群をなし墓域を形成する。古墳は円墳であり、主体部は箱式石棺と推定される。遺物は、第1号墳主体部から横瓶が出土している。本期は7世紀中葉に位置づけることができる。

## 奈良時代（VI期）

第1・6号住居跡の時期である。いずれも中位段丘に立地している。住居跡の平面形は隅丸方形で、竈は北壁に付設されている。出土遺物は、甕・甑・鉢・坏・高坏で、甕・坏・高坏には須恵器がある。甕は常総甕で、口唇部はつまみだしている。坏は盤状坏で器高が低い。本期は8世紀前葉に位置づけることができる。

## 参考文献

(1) 櫻村 直行 「茨城県南部における鬼高式土器について」 『研究ノート』2号 茨城県教育財団 1993年

# 付章 自然科学分析

## 平出久保遺跡第38号住居跡出土炭化材の樹種同定について

パリノ・サーヴェイ株式会社

### I. はじめに

行方台地の北部では、河川は北浦に注ぐ巴川と鉾田川に限られる。平出久保遺跡は、行方台地北端の台地上に位置する。

発掘調査により、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物が検出され、当時の住居域と墓域の関係を考察するための有効な資料となっている。

今回の自然科学分析調査では、古墳時代の住居構築材の用材選択について検討するために、住居跡から検出された炭化材の樹種同定を行う。その結果と周辺の遺跡におけるこれまでの分析例との比較を行う。

### II. 試料

試料は、古墳時代の38号住居跡から検出された、住居構築材と考えられる炭化材5点(No. A, B, C, D, E)である。

### III. 方法

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柀目(放射断面)・板目(接線断面)の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

### IV. 結果

炭化材は、イヌガヤ、コナラ属アカガシ亜属の1種、ムクロジに同定された(表\*)。各種類の主な解剖学的特徴や現在種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑 木本編< I・II>」(北村・村田, 1971, 1979)に従い、一般的性質などについては「木の辞典 第2巻・第8巻」(平井, 1979, 1981)も参考にした。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (knight) K.Koch f) イヌガヤ科

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞は早・晩材部の区別なく散在する。放射組織は柔細胞のみで構成され、分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

イヌガヤは、本州(岩手県以南)・四国・九州に分布する常緑小高木~低木で、時に植栽される。なお、北海道西部と本州(主に日本海側)・四国の一部には、匍匐性のハイイヌガヤ(*C.harringtonia* var.*nana*)が分布する。イヌガヤの材はやや重硬で、器具材・旋作材等に用いられる。

・コナラ属アカガシ亜属の一種 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと同列放射組織とがある。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属(カシ類)には、アカガシ(*Quercus acuta* Thunberg), イチイガシ(*Q.gilva* Blume), アラクシ(*Q.gluca* Thunberg)など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木~小高木のウ

バメガシ (*Q. phyllyraeoides* Asa Gray) も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種であり、主とし西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn)                      ムクロジ科

環孔材で孔圏部は1列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状、帯状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

ムクロジは本州（茨城・新潟県以西）・四国・九州・琉球に自生し、時に社寺などに植栽される落葉高木である。材は中程度～やや重硬で、器具・家具・下駄などの用途が知られる。

表1 平出久保遺跡・炭化材同定結果

番号	検出遺構	用途	時代	樹種名
A	38号住居跡	住居構築材	古墳時代	ムクロジ
B	38号住居跡	住居構築材	古墳時代	イヌガヤ
C	38号住居跡	住居構築材	古墳時代	コナラ属アカガシ亜属の一種
D	38号住居跡	住居構築材	古墳時代	イヌガヤ
E	38号住居跡	住居構築材	古墳時代	ムクロジ

## V. 考察

住居構築材には、少なくとも3種類の木材が使用されていたことが明らかとなった。同定された樹種は、アカガシ亜属を中心に暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）を構成する種である。住居構築材として使用する木材は、遺跡の比較的周辺部から入手したものと考えられることから、古墳時代の本遺跡周辺は、アカガシ亜属を中心とした常緑樹の入手が可能な環境であったと推定される。これまで沿海地で行われた建築材の樹種同定は、多くが奈良・平安時代を対象としていた。それらの調査でもアカガシ亜属が認められており、古墳時代から奈良・平安時代を通じて沿海地ではアカガシ亜属が入手できる環境にあったことが推定される。

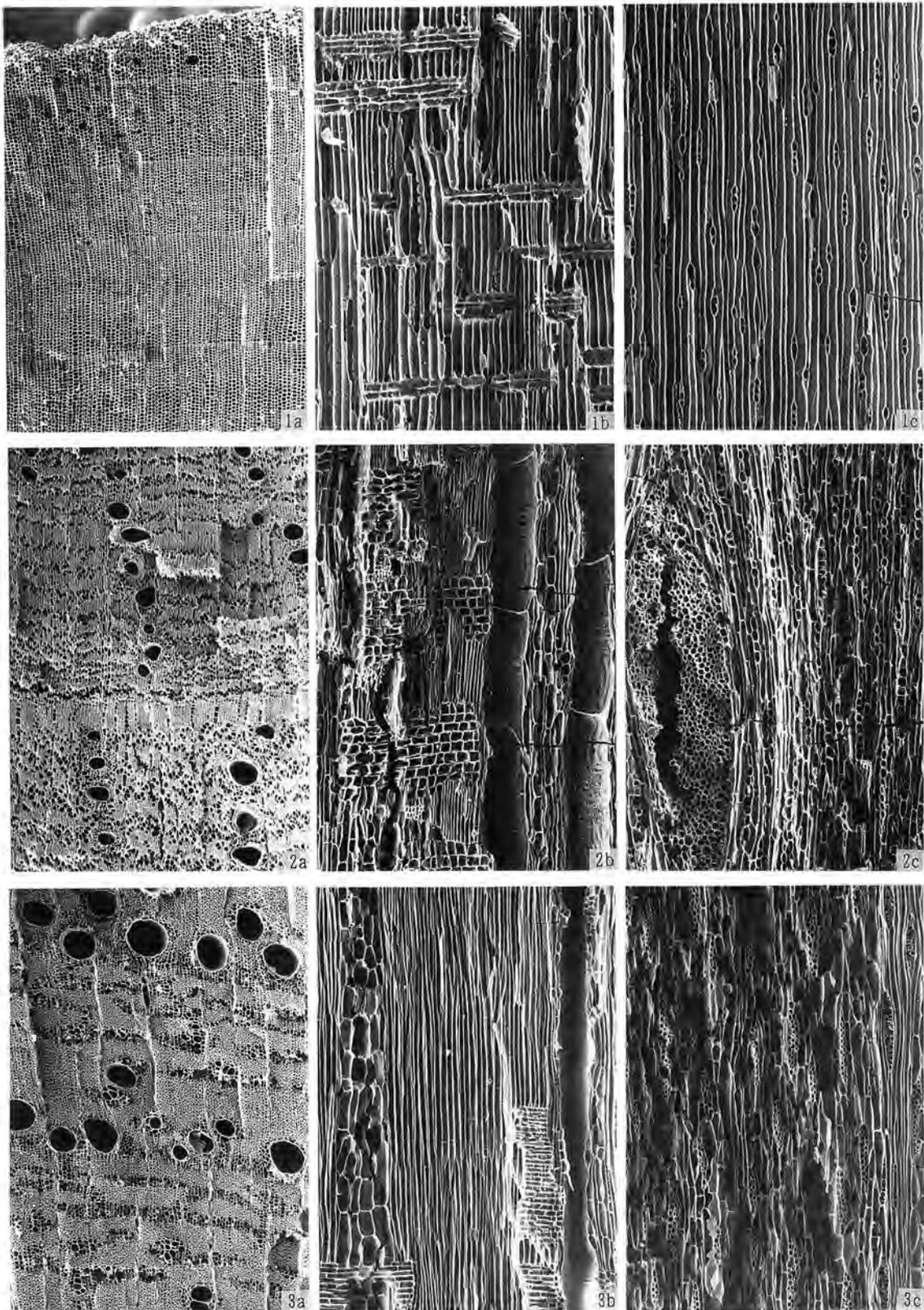
茨城県では、これまでの調査結果から沿海地と内陸地で住居構築材の樹種構成が異なり、植生の違いや時代によって用材選択が異なっていたことが推定されている（未公表）。今回得られた結果から、用材選択は時代によって異なっていたのではなく、周辺の植生が大きく関割っていたことが推定される。すなわち、沿海地では常緑広葉樹を中心とした落葉広葉樹からなる植生が見られたものと考えられる。

## 引用文献

平井信二（1979,1981）木の辞典 第2巻・第8巻. かなえ書房.

北村四郎・村田 源（1971,1979）原色日本植物図鑑 木本編< I・II >. 453p., 545p., 保育社.

図版 平出久保遺跡・炭化材の顕微鏡写真

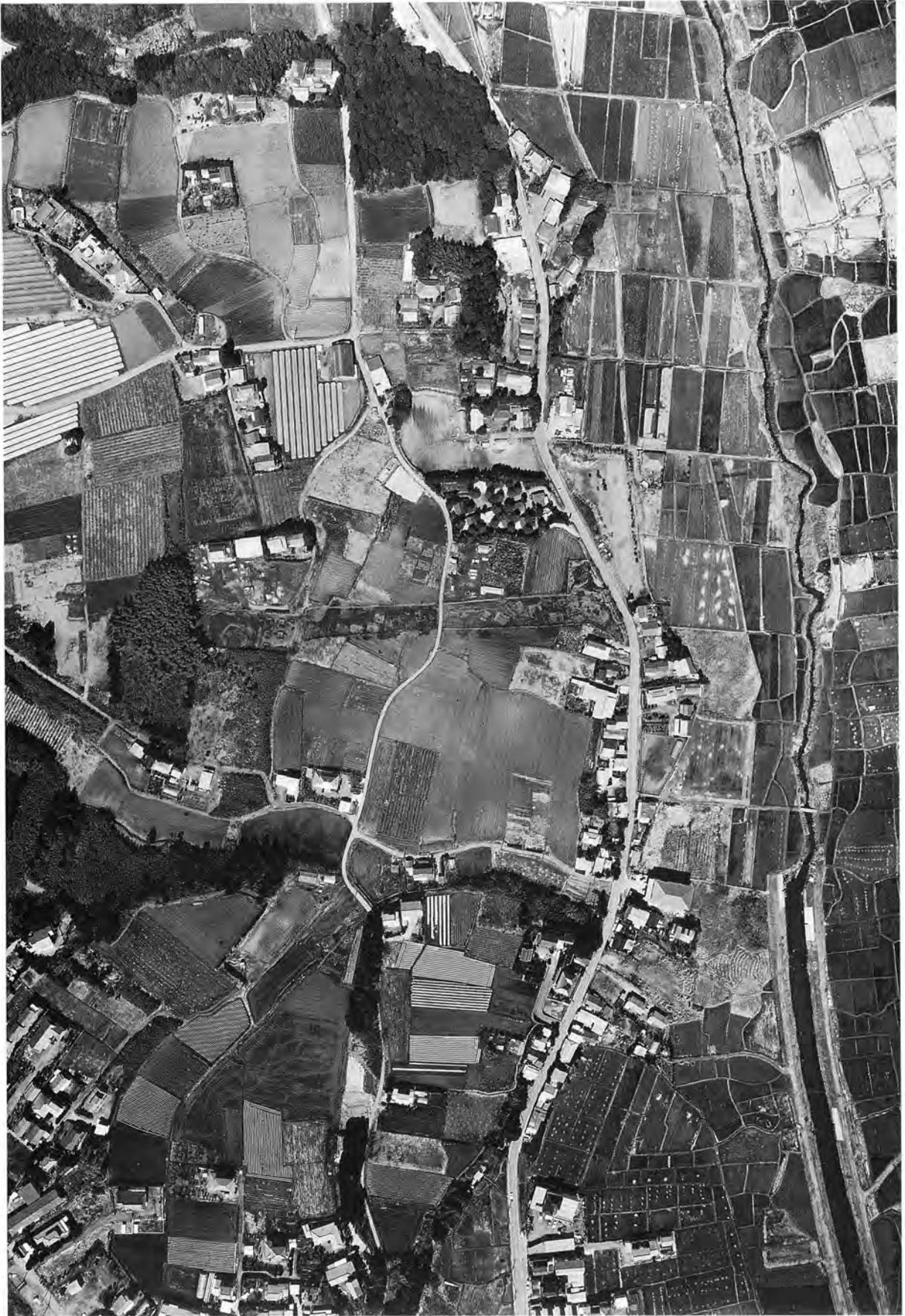


1. イヌガヤ(No. B)
  2. コナラ属アカガシ亜属の一種(No. C)
  3. ムクロジ(No. E)
- a: 木目, b: 柁目, c: 板目

200 μm : a  
 200 μm : b, c

# 写 真 图 版

平 出 久 保 遺 跡



平出久保遺跡全景



上 遺跡遠景(東から), 下 遺跡遠景(西から)

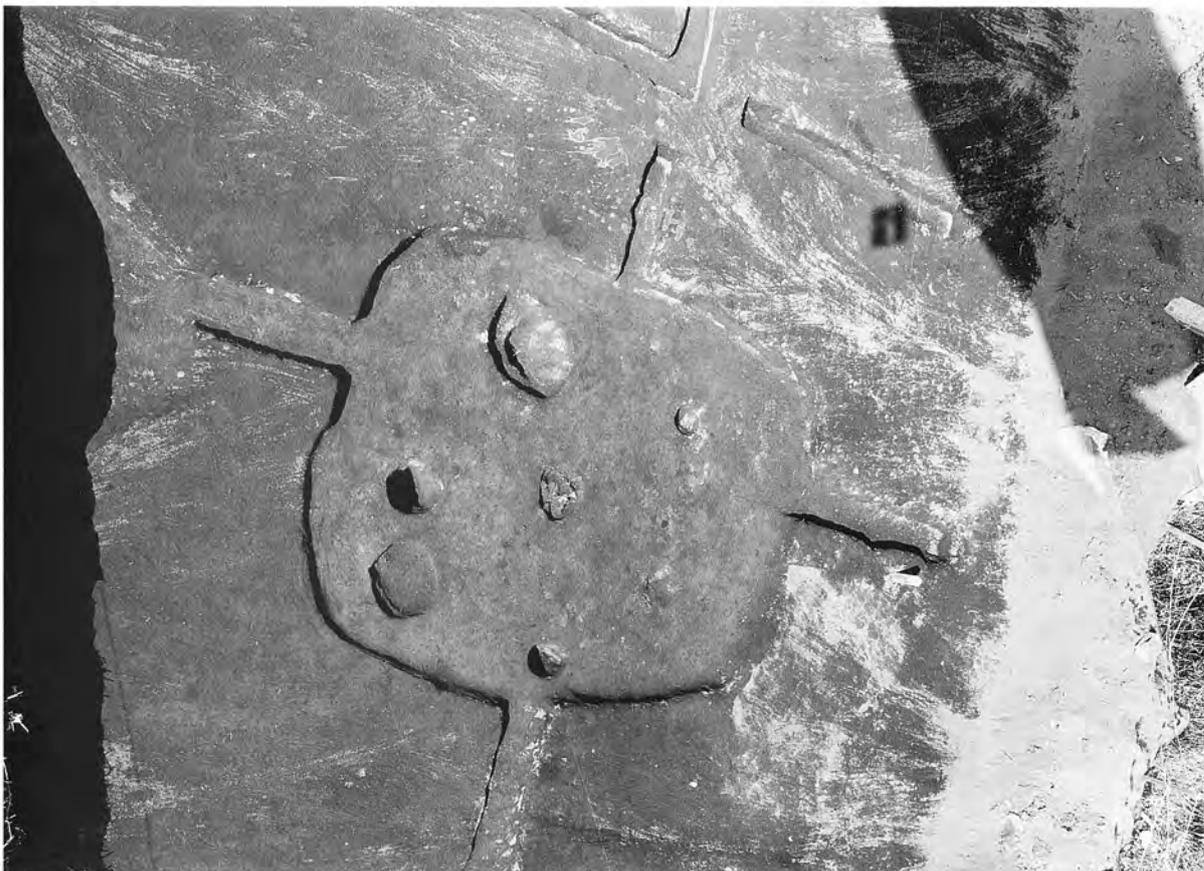


上 調査区東部全景，下 調査区中央部全景

PL 4

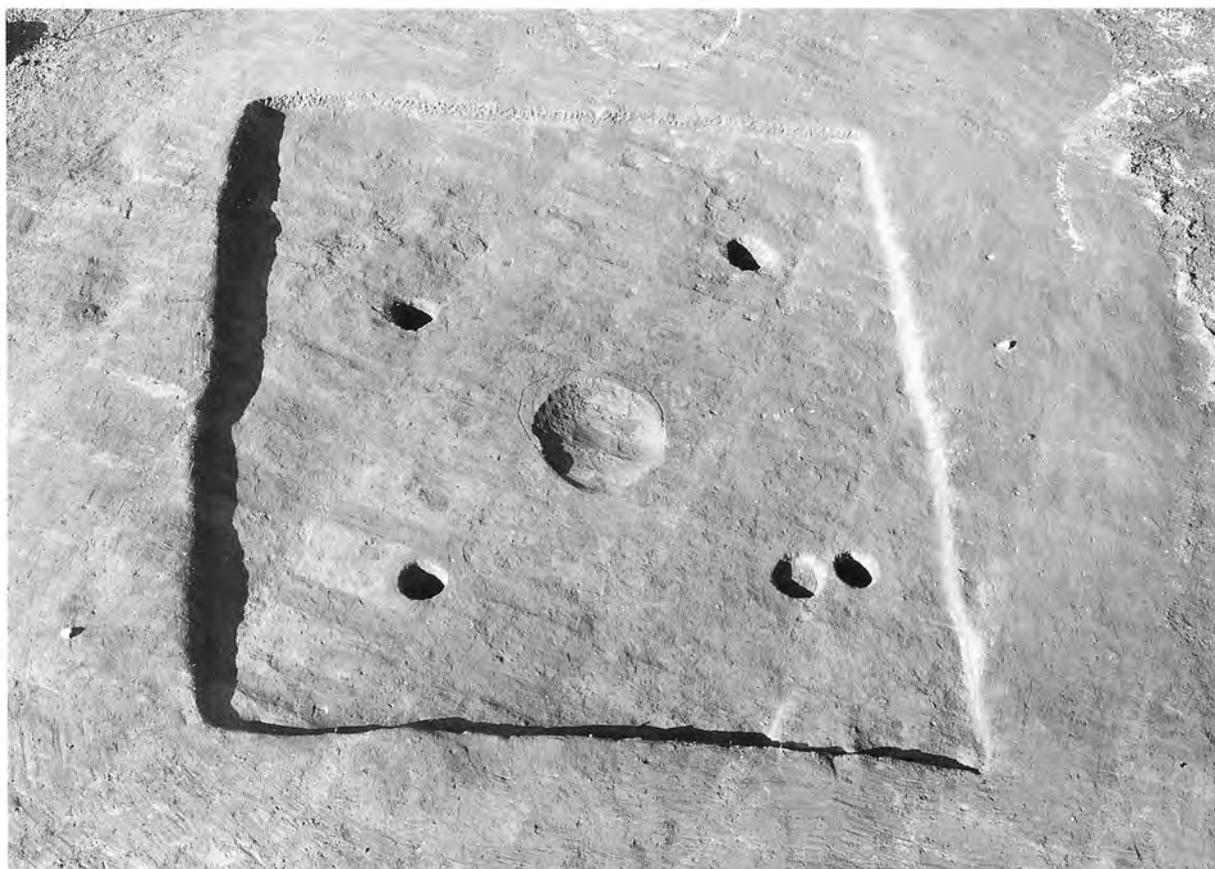
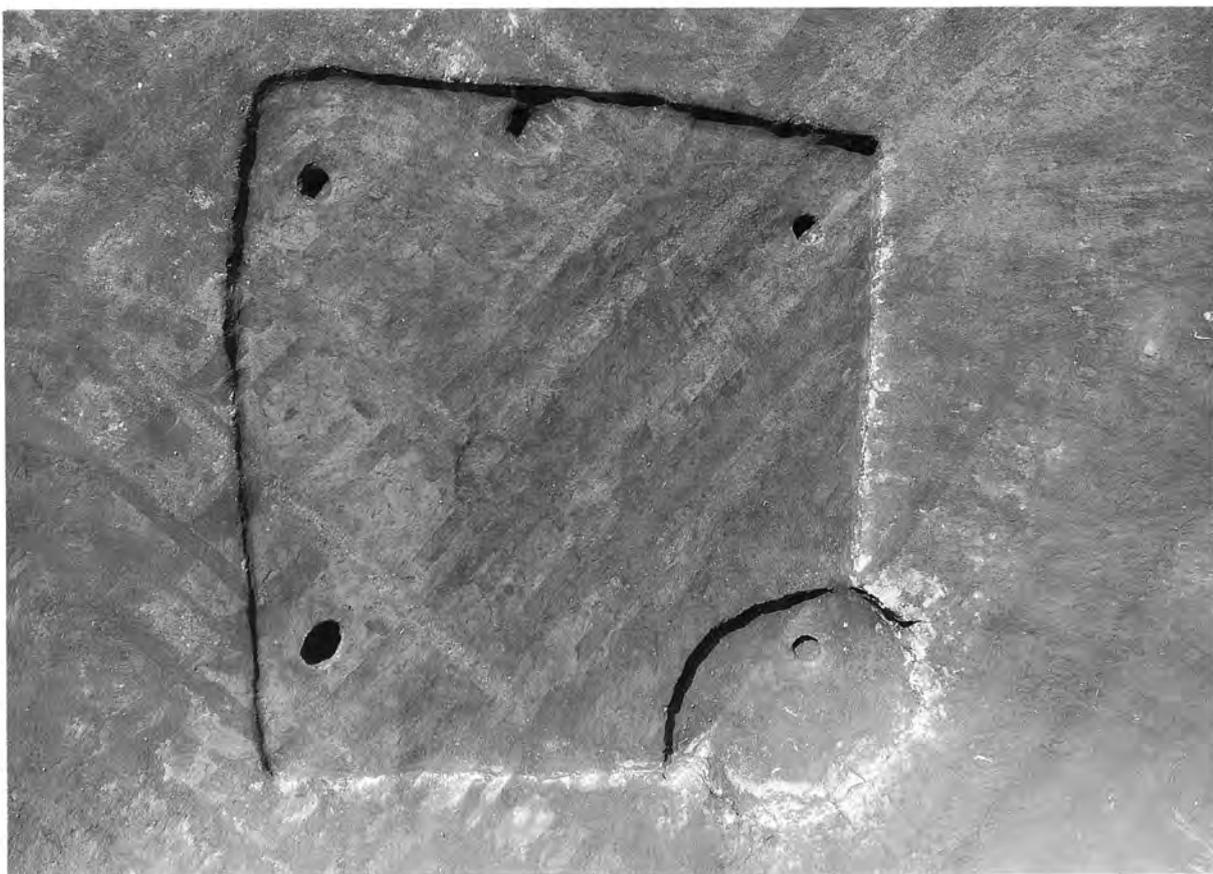


上 調査区西部全景，下 第1号墳全景

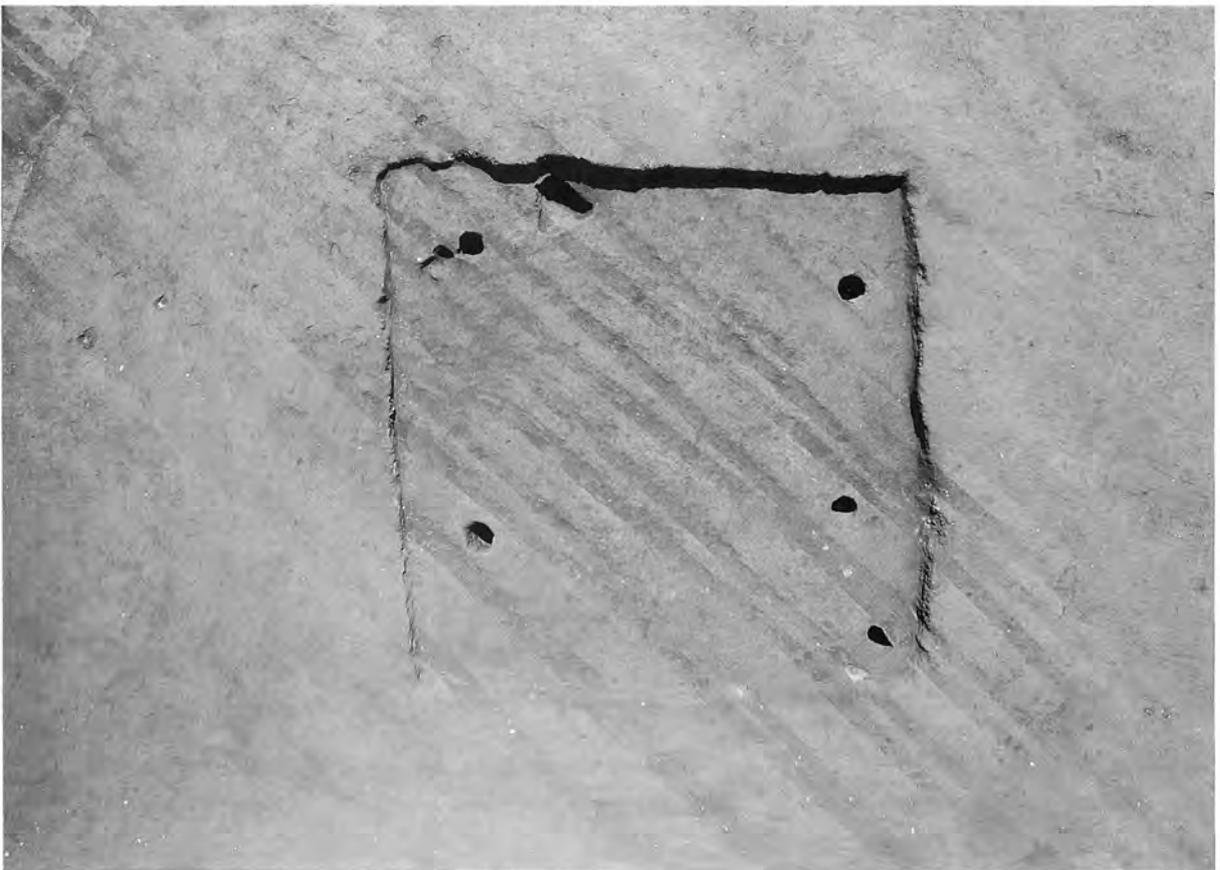


上 第12号住居跡全景，下 第37号住居跡全景

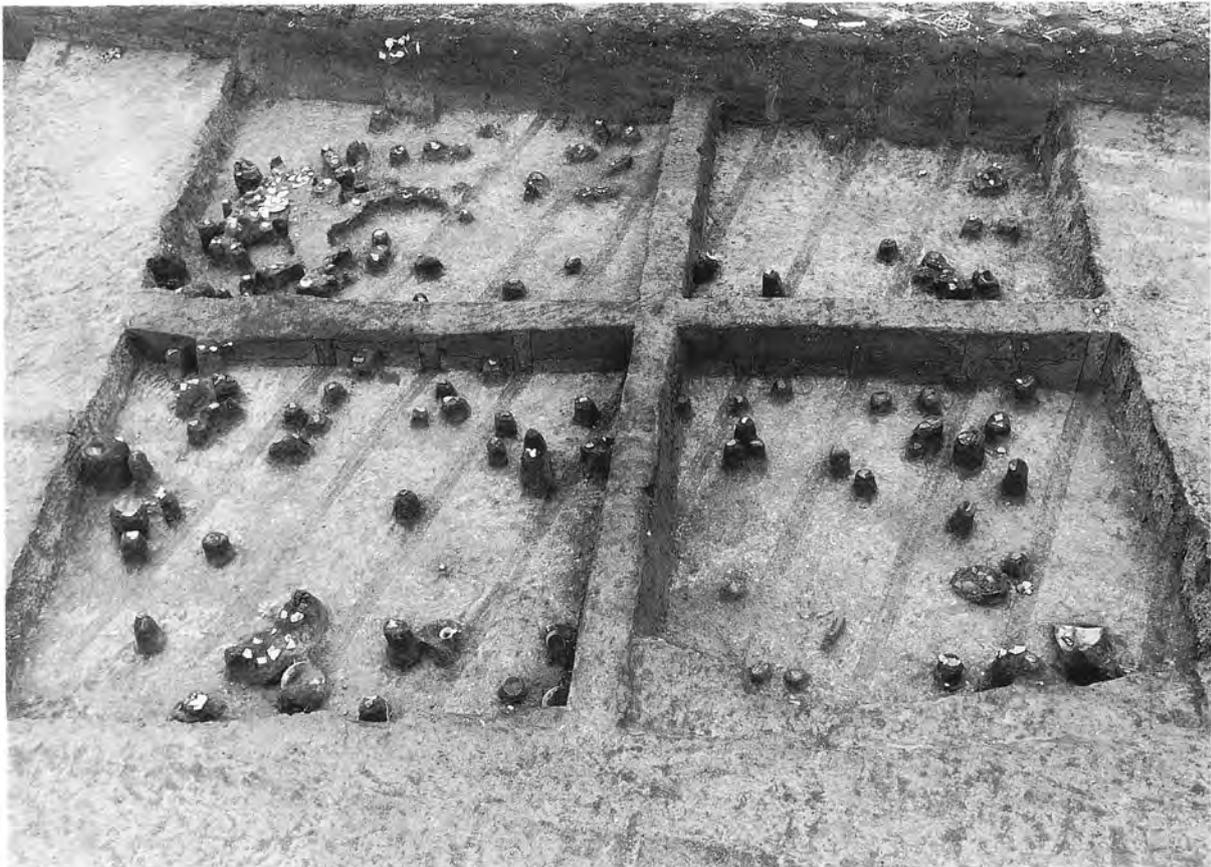
PL 6



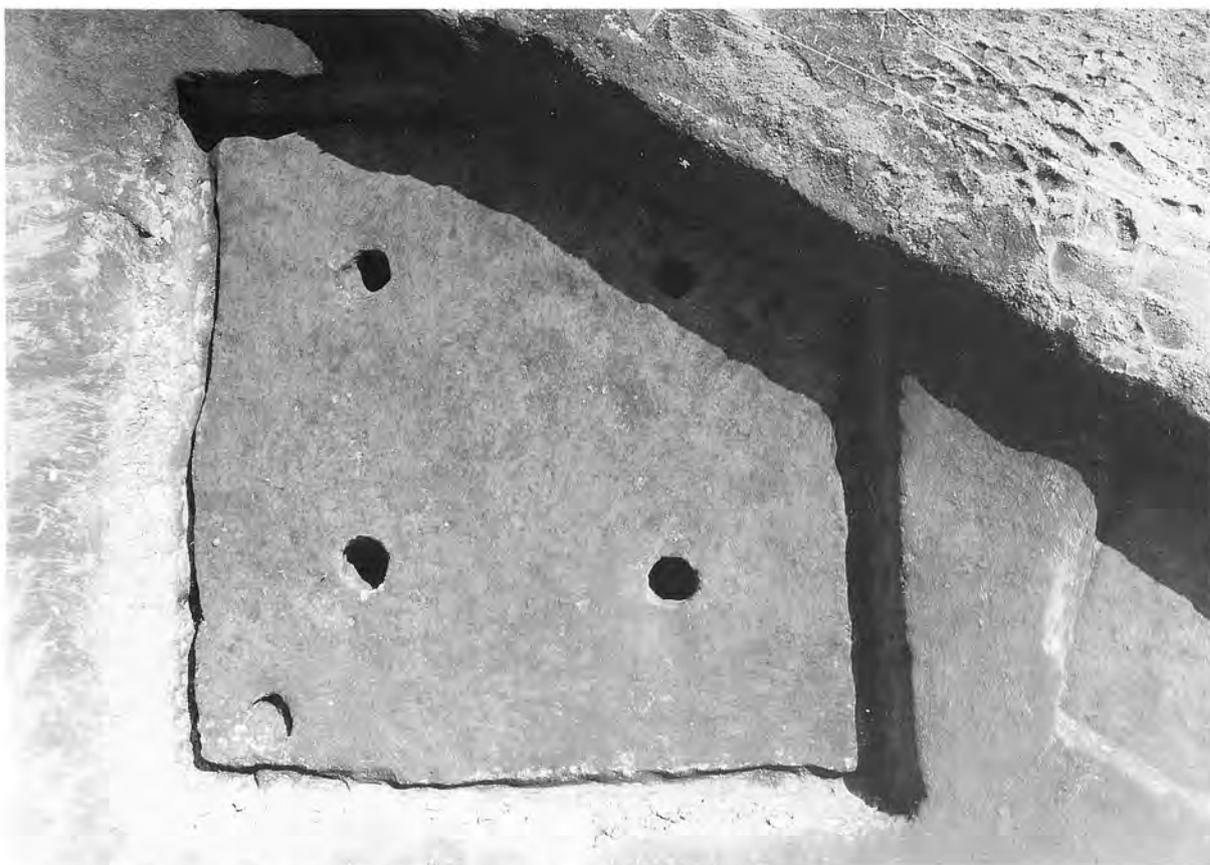
上 第4号住居跡全景，下 第5号住居跡全景



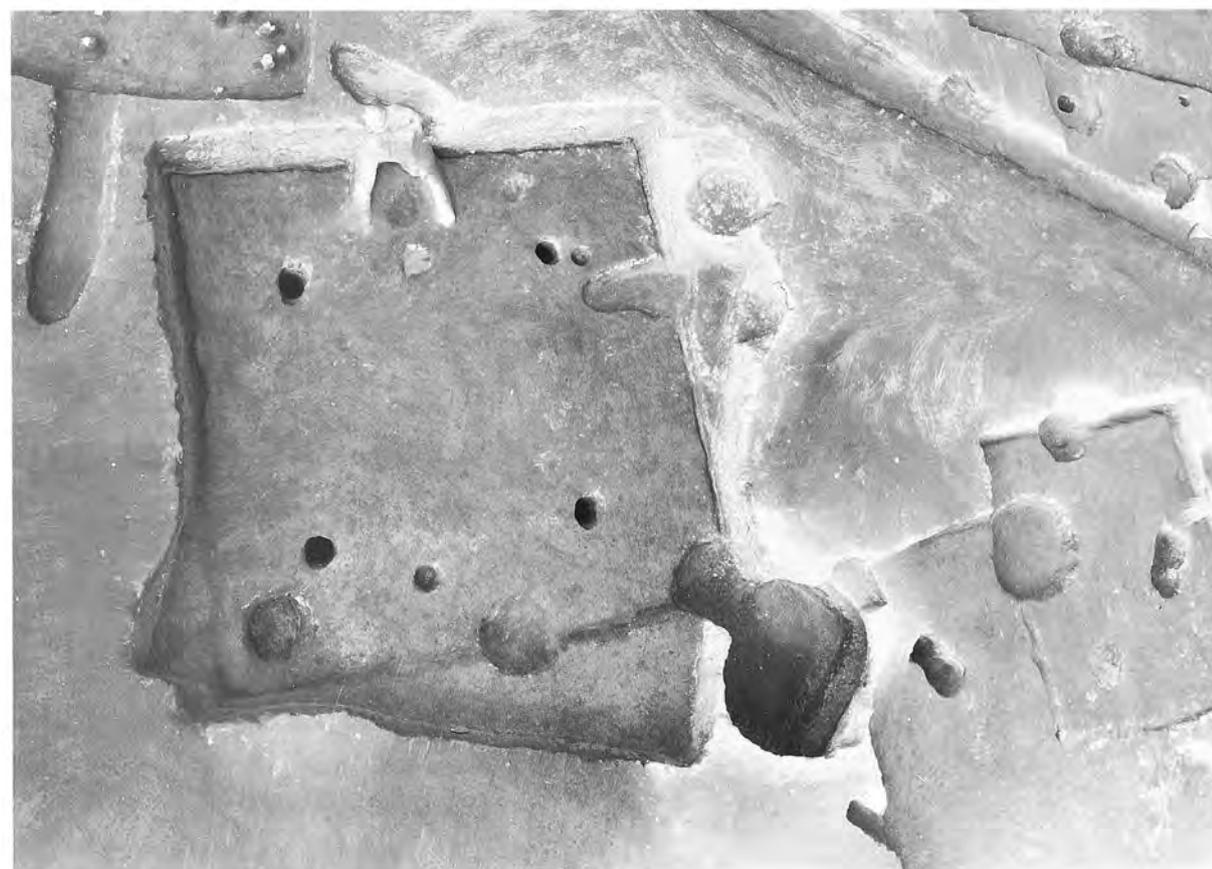
上 第24号住居跡全景，下 第29号住居跡全景



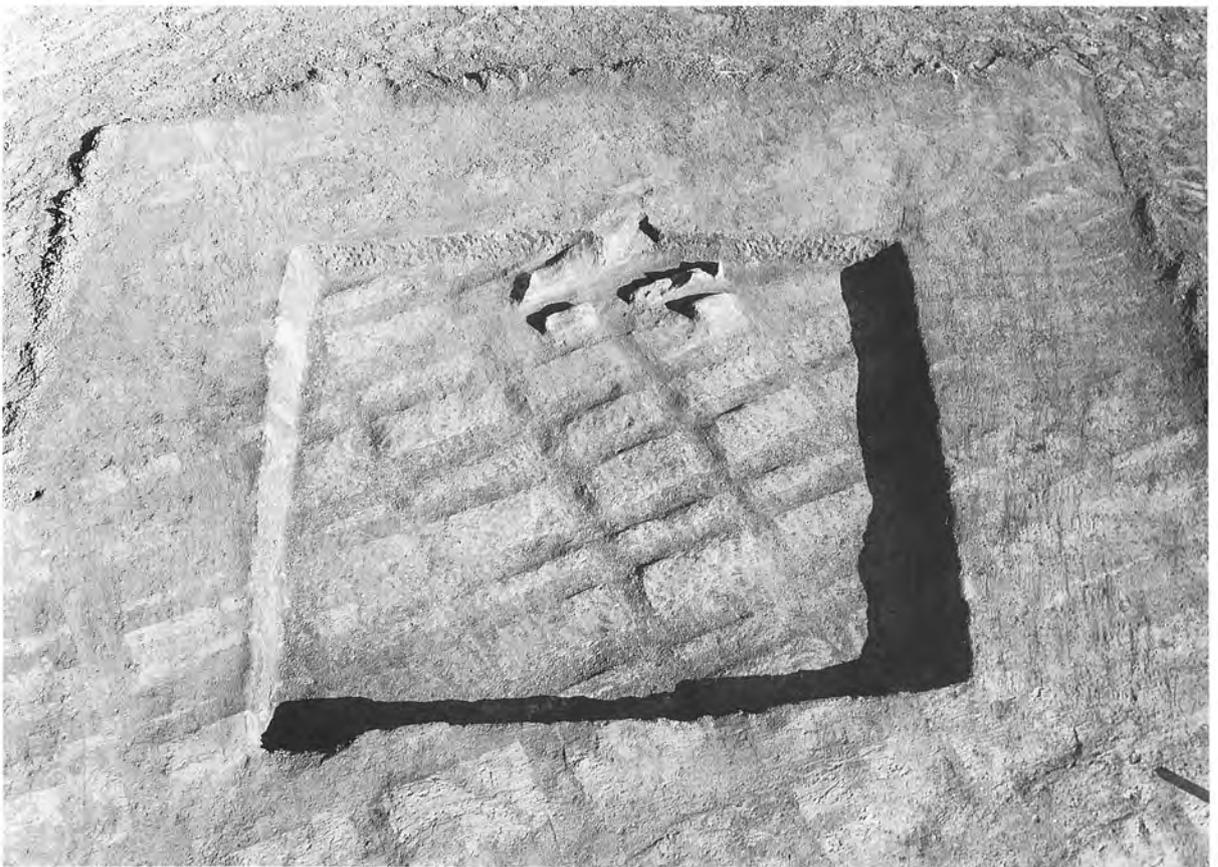
上 第7号住居跡全景，下 第7号住居跡遺物出土狀況



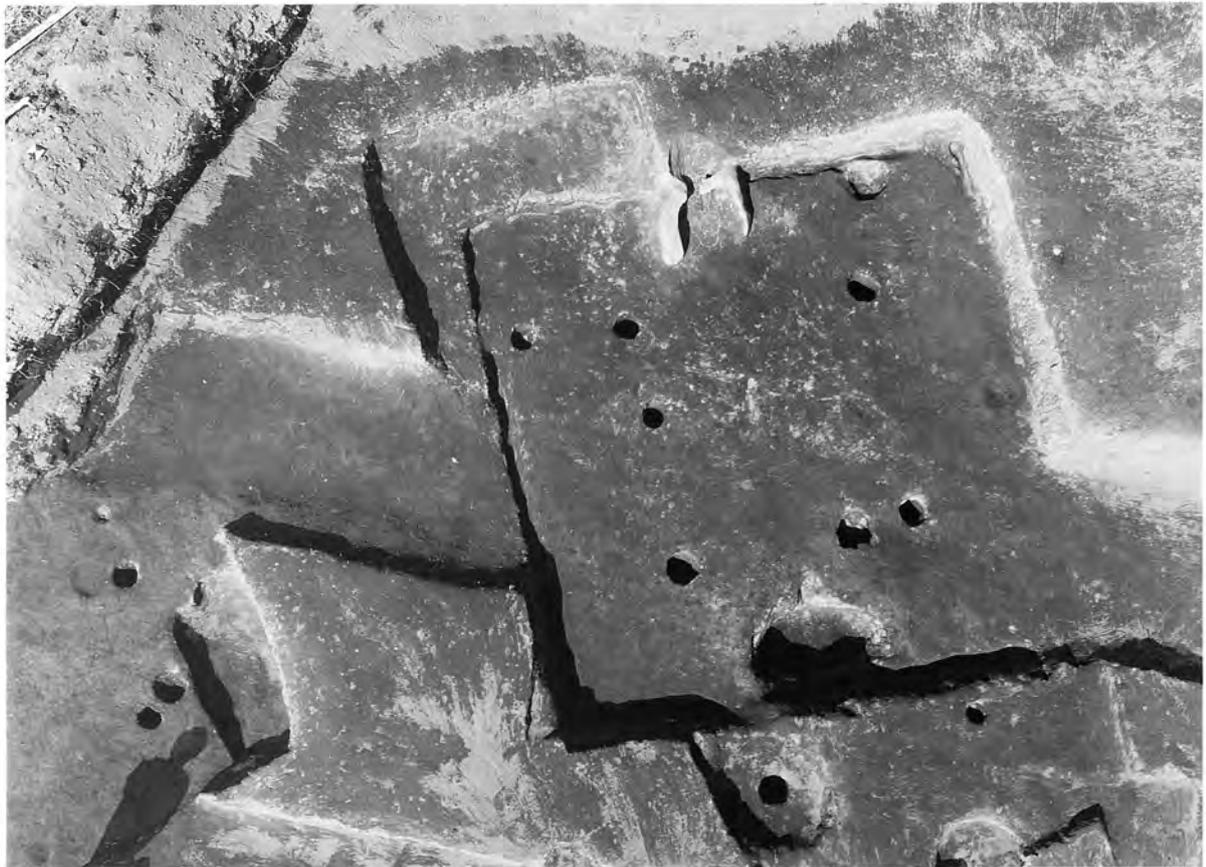
上 第8号住居跡全景，下 第9号住居跡全景



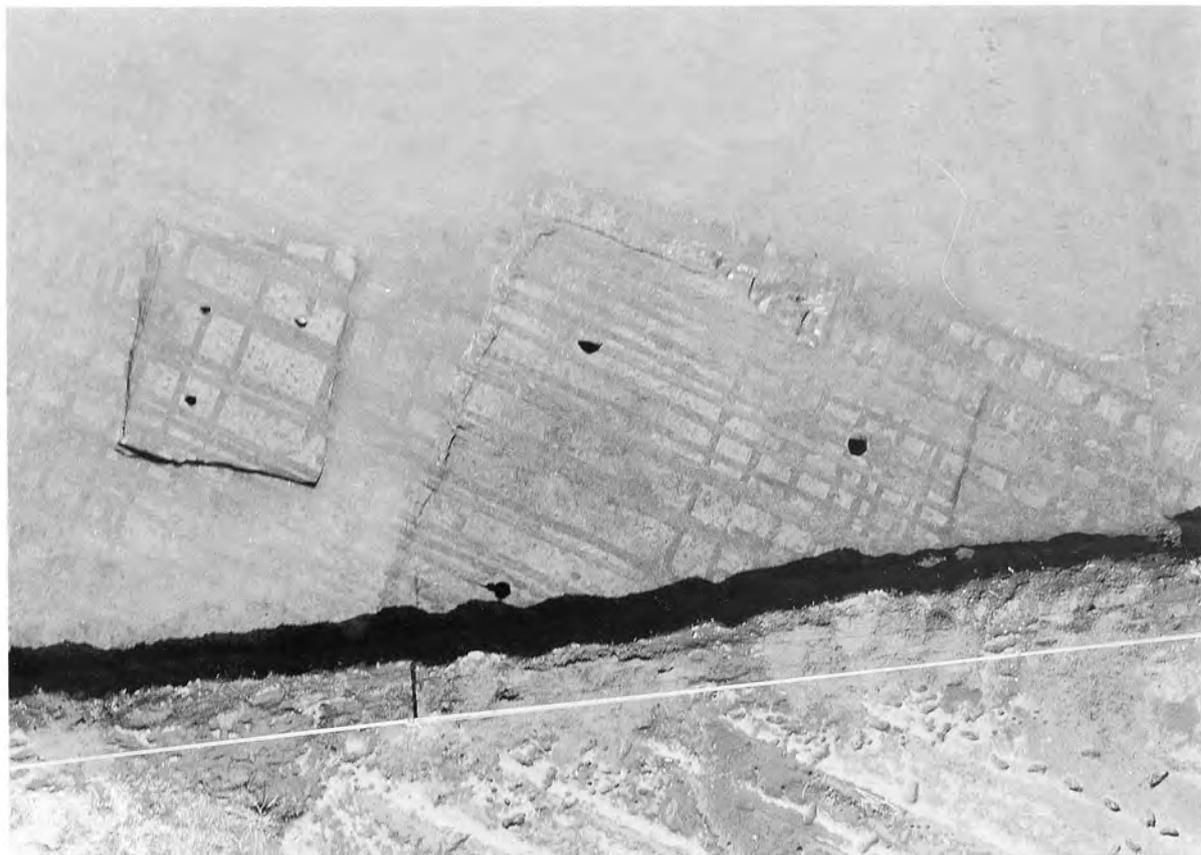
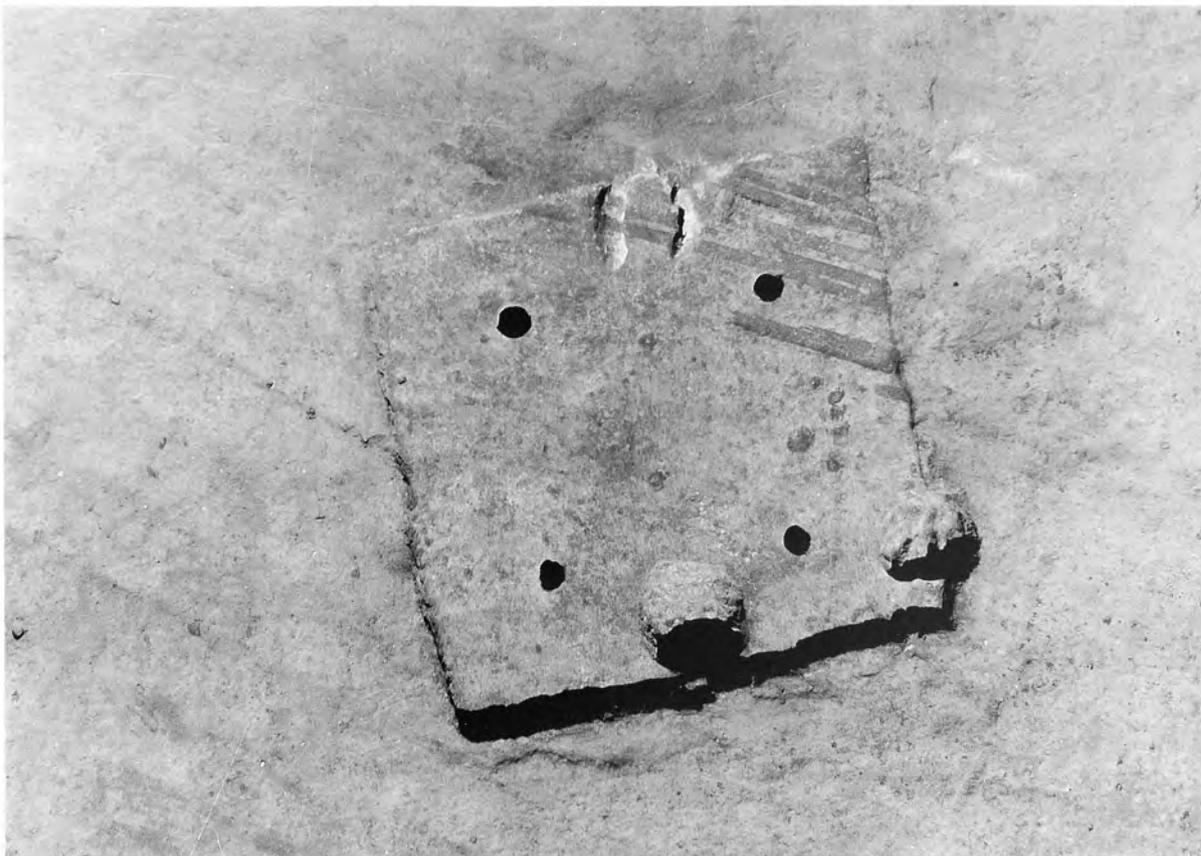
上 第15号住居跡全景，下 第18・25号住居跡全景



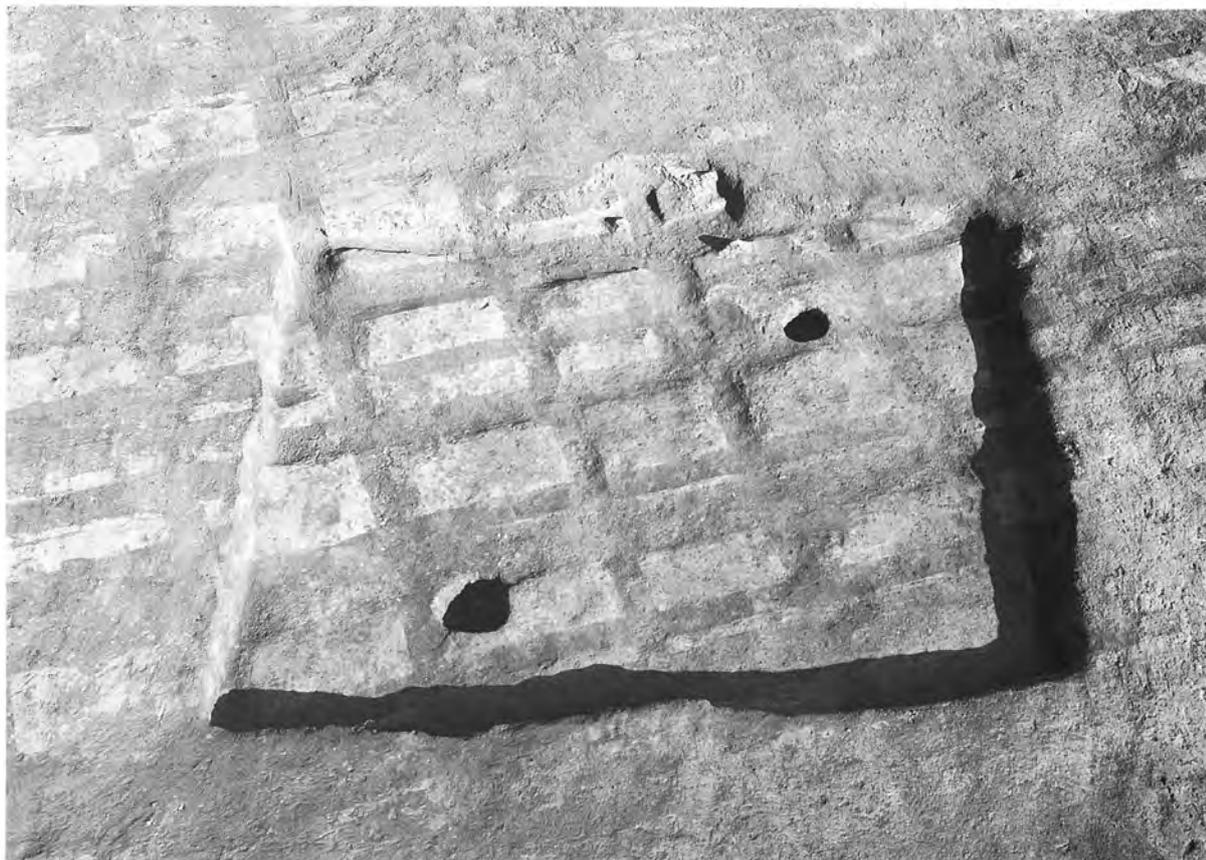
上 第30号住居跡全景，下 第2号住居跡全景



上 第20号住居跡全景, 下 第22・23号住居跡全景



上 第28号住居跡全景，下 第32・33号住居跡全景



上 第1号住居跡全景，下 第6号住居跡全景

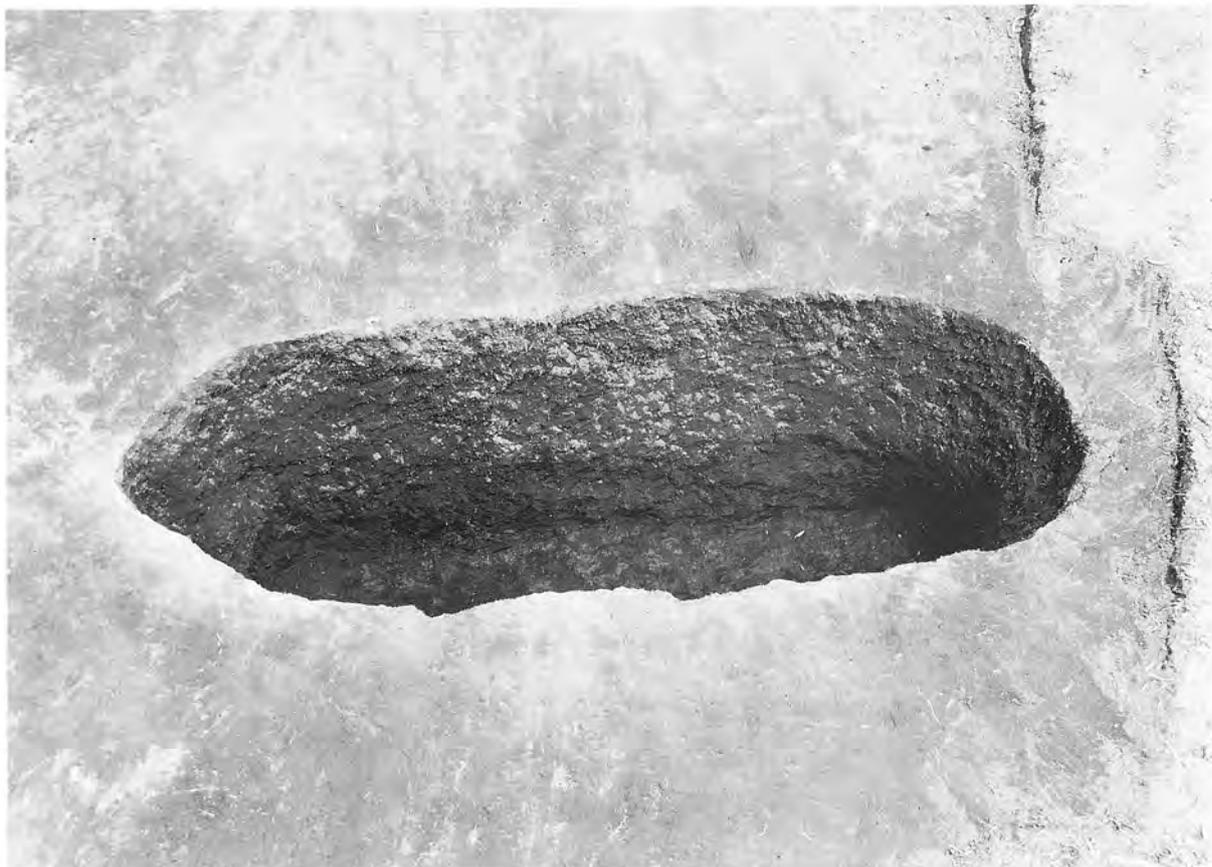


上 調査区全景(第2次), 下 第38号住居跡全景

PL 16



上・中 第38号住居跡遺物出土状況，下 第38号住居跡 炉全景



上 第28号土坑全景，下 第1号防空壕全景



SI 12-1



SI 12-5



SI 12-4



SI 12-2



SI 12-3



SI 4-5



SI 13-3



SI 24-5



SI 4-6



SI 13-6



SI 24-6



SI 4-7



SI 13-5



SI 24-7



SI 4-10



SI 13-8



SI 24-8



SI 4-1



SI 24-10



SI 24-11



SI 13-4



SI 24-12





SI 7-2



SI 7-24



SI 7-26



SI 7-3



SI 7-23



SI 7-15



SI 7-13



SI 7-11



SI 7-22



SI 7-16



SI 7-25



SI 8-2



SI 9-16



SI 8-3



SI 9-17



SI 8-5



SI 9-12



SI 9-2



SI 14-1



SI 9-6



SI 14-2



SI 9-7



SI 14-5



SI 14-8



SI 14-6



SI 14-13



SI 14-7



SI 14-16



SI 14-14



SI 14-15



SI 14-11



SI 14-9



SI 18-1



SI 18-2



SI 18-5



SI 18-3



SI 18-6



SI 18-4



SI 18-9



第18号住居跡出土土器



SI 18-25



SI 18-27



SI 18-29



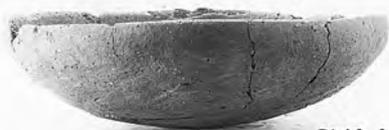
SI 18-28



SI 18-24



SI 23-2



SI 16-6



SI 16-3



SI 16-7



SI 14-3



SI 20-9



SI 20-1



SI 22-1



SI 20-4



SI 20-5



SI 20-6



SI 20-10



SI 22-2



SI 22-6



SI 22-10



SI 22-16



SI 22-19



SI 22-3



SI 22-14



SI 22-7



SI 22-9



SI 22-11



SI 22-12



SI 22-23



SI 22-22



SI 22-20



SI 22-24



SI 22-21



遺構外10



SI 7-53



SI 14-36



SI 18-9



遺構外11



SI 7-54



SI 14-37



SI 4-12



SI 14-34



SI 15-5



SI 9-24



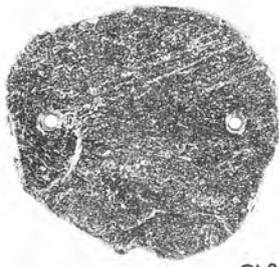
SI 37-15



SI 22-26



SI 9-20



SI 8-8



SI 7-55



SI 3-9



SI 38-1



SK 28-1



遺構外-19



SI 38-2

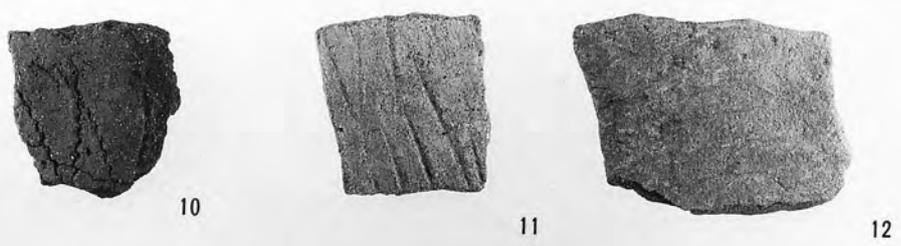


SI 38-3



遺構外-18

各遺構出土遺物(土器・石器・石製模造品)



茨城県教育財団文化財調査報告第98集  
主要地方道水戸鉾田佐原線道路改良  
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平出久保遺跡

平成6 (1994) 年9月25日 印刷

平成6 (1994) 年9月30日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310 水戸市見和1丁目356番地2号  
茨城県生涯学習センター内  
TEL 0292-25-6587

印刷 株式会社きど印刷所  
〒310 水戸市見川町2558-21  
TEL 0292-41-2525

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第98集

平出久保遺跡



